

愛媛縣城邊尋常小學校長  
南宇和郡

菊澤友端氏

訓練を主とし知育を其の次とす、此主義によりて導き、此主義によりて教ゆ、稟性温良恭儉以て己を持し、熱心篤實にして恪勤、内同僚及兒童の親愛と敬服とを受け、外父兄の信頼と村民の輿望を擔ひ、眞に教育者の模範として名聲縣下に噴々たる者、之を菊澤友端氏其人なりとす。

氏は本縣北宇和郡吉田町の人、安政五年十一月を以て生る、幼にして伊豫吉田藩立文武館に學を修め、明治十年初めて教壇上の人と爲る、各地に職を轉じ同十八年訓導に任じ、後二十四年本縣北宇和郡吉田尋常小學校訓導を拜す、同三十一年南宇和郡城邊尋常小學校長に任じ、同四十五年現校長に就き、城邊農業補習學校訓導を兼任す、氏明治十年身を教育界に起して茲に三十有餘年、其間各地に轉勤して到る處好結果を收め、斯界に貢獻せるもの頗る多し、其今日在る偶然にあらざるなり。

殊に前任地に於ては、夙夜勵精其の校の改善進歩を圖り大に其面目を改むると共に、常に村青年會を指導誘掖して成績甚だ擧る、特に教授法は當時漸く唱導せられたる、ヘルバルト派を活用して著しき發達を示し人をして卷舌せしめたり、本縣賞するに四十金を以てし、日露戰役の功を以て更に三十金を賜はる縣教員會長よりは功勞表彰狀並記念品を贈られ、尙一村指導の爲に全力を注ぎしは勿論、特種部落の改善に關する功多大なるを以て内務省より書籍を頒附せらる、豈榮譽ならずや、氏亦忙閑書畫に親しみ、鑑識頗る高く、書は最も好む處なりとす、氏夫れ偉なる哉。



熊本縣阿蘇北部高等小學校長  
阿蘇郡

北里直樹氏

孟子曰く、苟も本無を爲せば、七八月の間雨集る時は溝澮皆盈つ、其の潤るゝや立るにして待つべし、故に聲聞情に過ぐるは君子之を耻づと、君子小人の別何を以てか之を爲す、曰く君子は虚名を避け小人は聞達を求む、現任阿蘇北部高等小學校長北里直樹氏は温厚寡黙の士、唯歌文に高懐を遣りて、世俗の汝々に交らず、職に忠にして人の知ると知らざるとに拘らず、汝々として斯界に努め、盡瘁の功や大なり。



氏は元治元年八月を以て本郡北小國村に生る、小學校卒業後私立小國中學校に入學し、第八級より第五級まで修學し後授業生となりて宮原校及び大原校等に奉職し、明治十四年縣師範學校卒業後は宮原尋常小學校訓導を拜命し、同二十八年六月北小國村農業補習學校訓導に任ぜらる、同二十九年十二月阿蘇北部高等小學校訓導を拜命し、同三十二年十月同校長に進み、同四十年十月普通免許狀を受領し、勤績今日に至る、汝々營々教へて倦むを知らず。

氏は教育勅語戊申詔書の御趣旨を奉體し、道德教育國民教育の基礎を鞏固ならしめ、又二宮尊徳を尊崇して模範人物とし、以て至誠勤勞質素儉約親切報恩自立自營の諸徳を教へ、毎日朝禮夕拜に於て生徒心得大綱竝に遇發事件に付きて懇切に訓話し、斯くして新時代の要求する自營なる國民を育生せんとせらる、尙部下に對しては教育事業の神聖なるを自覺せしめ樂んで其の職務に服し餘力を研鑽に用ひ以て教授の充實を期せしむ、氏徳望益々高く令聲一郷に洽ねき所以理ある哉。



千葉縣 印旛郡 佐倉高等小學校長

木村 康哉氏

古語に曰く、天の時は地の利に若かず、地の利は人の和に若かずと、宜なる哉一矢は折れ易く、十矢を束ぬれば折れ難し、其個々に於て如何に卓越せる人才一集すと雖も之れを統御するの一器なくんば何の効か是れあらんや、木村康哉氏天稟摯實にして、識見卓庸、度量宏碩、恒に部下に對し恩威節度に適し各職員畏敬相提携し、相補翼す、衆心一致すれば則ち大事成ると、實に氏の如き人格的教育者は稀なりと謂つべし。



氏は明治十二年千葉縣長生郡八積村字金田に生る、明治三十四年三月千葉縣師範學校を卒業し、同年同月同縣市原郡姉崎尋常高等小學校訓導と爲り、同三十六年九月現任地の前身たる佐倉西尋常小學校訓導に轉じ、同三十八年七月同校長を兼任す、同四十三年六月同校に高等科を併置せるを以て、現任校長と爲れり、同四十三年六月町立佐倉實踐女學校及び町立佐倉實業補習學校訓導兼校長と爲る、尙大正二年十月より町立幼稚園長を兼任せり。

木村氏、至誠、力行、克己、進取、自立の五綱目を以て校の訓育要旨と爲し、經路に於て熱誠、到達に於て實力の二項を以て教授方針と定め、加ふるに周到なる管理法を以て、完全なる一校風を築き、殊に其部下職員を統御すること、形式上より又精神上より、すべて宜しきを得、所屬郷人に對する方針の如きも其郷情を考察し、風教を觀取し、その郷に適應せるの法を執り、家庭、青年社會教育に於ても殷なる實績を得つゝあり、眞に斯界の一英才、敬仰すべき哉。』

朝鮮 平安北道 義州公立普通學校長

木佐貫 喜代助氏

文華の隆盛、動もすれば優柔不斷の弊風を誘ふや、因循姑息、宛然婦女子の如きのみ天下に滿ちつゝある現時に於て、茲に木佐貫喜代助氏、果斷、明裁而して敢行、實踐の氣魄を藏し、事を處するに敏捷、育英の業に恪勤息む處を知らざるを見る、眞に得易からざる好教育者にして、氏又機に臨み、變に應ずるの辣腕眞に儕輩を擡づものあり、彼の柱に膠して琴を彈ずる的人士、我教育界に多きの時、眞に氏の若きは異數と謂ふべきなり。



鹿兒島縣薩摩郡永利村の地、明治九年五月を以て氏を生む、氏や同三十二年、鹿兒島縣師範學校卒業後、其郷里なる永利高等小學校訓導兼尋常小學校長に任ぜられ、同三十四年、同高等小學校長に進み、同三十五年、鹿兒島郡壬辰尋常高等小學校長に轉じ、同三十七年、同郡壬辰女子實業補習學校長を兼任し、同四十年、同郡中山尋常高等小學校長に、同四十二年、韓國黃海道長淵郡普通學校訓導兼教監に、同四十四年、平安北道寧邊公立普通學校訓導兼校長に

歴任し、大正三年、現任に移り以て今日に及び、氏の名愈々藉甚たるに至れり。氏や該地方の弊風、陋習に深く鑑み、規律、勤勞、誠實の三大綱目を撰んで校訓とす總合的徳行の徹底を期し、日常必須の禮儀作法洒掃應對等に注意す、氏又國語普及に力を盡し、特に日用國語彙集を著して所定學科外に配し以て訓化の完成を圖る、尙圖書俱樂部を設けて社會教育に資す、氏の功績や眞に擧ぐるに遑あらず偉なる哉。』



秋田縣飯田川尋常小學校長  
南秋田郡

菊地總四郎氏

彼のウキリアム、テールが瑞西の山川に對し、此の英靈清爽の郷、豈に焉んを異邦人の鐵趾を着るに忍んやと大呼して臂を揮ひたるは何ぞや、我菊地總四郎氏が郷閭の諸方面に於て改善發達を要するもの多きを見、慨然として自ら其任に當らんことを期し、躍如として教育界に身を投じたるは、蓋し幾許の差ある、詮ずるに愛國の念、愛郷の念進るあるを以てに非ずや。

氏は明治四年十二月を以て南秋田郡下井河村今戸に生る本姓遠藤氏、明治十九年先代總四郎の養嗣子と爲る、同廿二年縣師範學校に入り、學成るや、土崎、北磯の訓導を経て、同二十八年郷里飯田川に歸り其訓導たり、同三十二年校長に進み、勤績今日至る。

氏は人となり明敏潤達、才氣縱橫、善く部下を統御す、最も義俠心と公共心とに富む、職員各自の特長を發揮せしめ協同一致至誠奉公を念とし、勤勉、規律、禮儀の三綱目を擧げ、至誠を以て一貫し訓練の効を完ふせんとす、毎月一回學校通信を印刷して家庭への希望、學校の内容、修養訓話、農家行事其他村治兵事に關する注意日露戰役記念事業として職員生徒協力し六百餘坪の屋外運動場を完成し、明治四十五年私費を投じて御眞影奉安所を構内に新築之を寄附し、寄附金を募集して農工銀行の株券を買入れ基本財産を造成する等其竭す所頗る大なり、爾來此地の面目を一新し風教肅然たる宜なる哉。」



愛知縣一色尋常小學校長  
幡豆郡

木村重正氏

左傳に曰ふ、義ならざれば匿なしと、然り諛辭百行中心義なくば終に衆の來り附くなけん、苟も義なる所、威色あるもよし、厲言あるもよし、衆の來從する蟻の甘きに付くが如し、現任愛知縣幡豆郡一色尋常高等小學校訓導兼校長木村重正氏は温厚の長者、而して苟も義のある所勇往邁進毫も躊躇するなし、其の事を決する何等凝滞なく正に非ざれば爲さず、義に非ざれば行かず、只是のみ以て人を教ふべし、以て衆に先つべし。

氏は本縣愛知郡常磐村の人、明治十六年八月を以て生る明治三十六年十月愛知縣第一師範學校を卒業し、直に第二師範學校訓導の職を奉じ、居る事七年、同四十二年五月現任一色尋常高等小學校訓導兼校長と爲り、勤績今に至りて七年を算す、本校は其の設備の佳良なる郡内の屈指に居り學級數十四、學童數七百五十五の大校にして、之が統轄の任や輕しとせず、氏の徳望と氏の才幹とあり、以て統理の圓滿をいたす、蓋し偶然にあらざる也。

氏は管理訓練又は實行主義を執り、兒童の活動に訴へて其の意志を鍛練し、以て圓滿なる人格を涵養せんとす、其の教授は練習主義を取り、確實に少しく教へて多く練らしめ、以て他日社會に出て實際に當り有用なる智能を收得するの素地を養はしむ、氏は又青年教育を以て活動の教育なりとし、勤勞の習慣を得しむるを以て要旨と爲し、併せて正義の觀念を鼓吹し、以て自治と協同との精神を養成す、氏令名高く所屬民の敬慕厚く信頼重き宜べなる哉。」





宮崎縣高岡尋常小學校長  
東諸縣郡高等

木島 賴 正氏

温良なるの人偶々因循に陥り易く、圓滿なるの人偶々姑息に終るの弊、天下皆然り、殊に我育英界に於て温良圓滿の人士、多く因循姑息に陥れる者夥し、茲に木島賴正氏は然らず、正義を經とし誠實を緯とし、加ふるに資性快活にして、洋々海の如き度量を存し、又頭腦明晰にして事を處する敏捷、些の遲滯あるなし、蓋し斯界に於て稀に見るの人材、又仰ぐべきかな。



宮崎縣南那珂郡福島村の地、明治十年二月を以て氏を生む、氏や同三十一年同縣師範學校を卒業し、爾來宮崎縣師範學校訓導、縣内南那珂郡北郷尋常小學校訓導兼校長、同郡福島高等小學校訓導に歴任、再び宮崎縣師範學校訓導に轉じ、同三十八年十月現任と爲り以て今日に及べり、其間教鞭を振ふ事、極めて熱心、全力を擧げて其職に執掌し斯界のため貢献せし所や眞に多大と謂ふべき也。  
氏や銳意教育勸語の聖旨を貫徹せん事を努め、教育勸語取扱方針を制定し、各科教授上常に勸語の聖旨に副はん事を期し又毎月勸語奉讀會を開き、職員並に兒童各自の行爲を反省せしめ、實踐躬行を奨め大いに校紀を振肅せり、氏又兒童の體育に注意する事深く、之れを奨勵し兼ねて精神教育に資するを以て主義とせり、夫れ健全なる思想は健全なる身體に宿ると、宜なる哉校風皎として輝き、實績着々として擧る、氏や更に家庭の連絡、青年の修養、社會教育に盡瘁する所多大、共に堅實なる方針を以て實踐を主義とし之れに勵む、又得易からざるの好育英家と謂ふべきなり。』

鑑 銘 家 育 教

大阪市桃園第二尋常小學校長

岸 厚 四 郎 氏

君子に三樂あり育英のこと其の一、とは、古賢の金言なり、氏は大阪師範卒業後、滿二十五年間恰も一日の如く、終始同一學校に勤績し、一身を教育の事業に委ね、今や其門下たりし者より多くの俊髦を出し、而して此等の成功者が、昔を忘れず寒暑訪問の禮を盡すに至つては、眞に教育家一生の面目にして、氏が満足や思ふべきなり。



氏は慶應二年九月丹波篠山に生る、舊篠山藩士にて祖父は與三右衛門と稱し郡奉行を勤めし家門なり。氏幼にして漢學に志し長じて大阪師範學校に入り、明治十九年業を卒へ直に同市育英小學校に任用せられ、同卅四年五月同校の分立に依りて育英高等小學校長と爲り、同四十四年三月同校の廢校と共に現任校長に轉ず、氏は幼より苦學の功空しからず教育上に關しては道義上の問題を熱心に研究し、資性温厚にして終始一貫至誠を以て立ち毫も虚飾なく、其の天真爛漫たる人格には衆人の敬服措ざる處なり。

明治三十七年文部省よりの普通免許狀受領同四十年三月、多年小學教育に従事し功勞不尠を以て大阪府より選奨せらる、氏が手腕と徳望は前任校に附設せる高等商工補習學校の成績にて明かなり、即ち氏の經營時代は其熱誠と人格を敬慕し通學者常に三百名を下らず其成績關西第一たり。  
區會は氏の功績顯著を認め特別慰勞金を贈り、且氏が勳陶の下に卒業せし二千餘名の同窓生は盛大なる送別會を開き鄭重なる記念品を贈り謝恩の意を表す、氏の如き實に近世稀に見る教育家。』

鑑 銘 家 育 教



山口縣 大田 尋常 小學校長  
美禰郡 大田 高等 小學校長

### 木村 信 作 氏

崇高なる理想の下剛健なる氣力と慎重周匠なる考慮と百折不撓の活力を以て人生の實務に鞅掌し、其天分に應じ喜び樂んで奮闘努力すべき人物の養成を方針とし、積極的不斷の活動に努め、確實なる知識技能の習得練習を奨め、正直忍耐勤勉等適切卑近の實踐により徳本を培養し、漸次他力より自力に進み、忠良なる國民たらしむべく孜々營々たる人、之を木村信作氏と爲す。



氏は山口縣美禰郡岩永村の人、明治六年六月を以て生る資性温良恭儉人に師たる素質あり、其の綿密なる頭腦其の不撓の精神は、圓熟せる行動と相俟つて克く當路者との協同を完ふし、父兄の信頼を厚からしめつゝあり、明治三十年山口尋常師範學校を卒業して本校訓導に就任、後下郷尋常高等小學校訓導より校長に進み、同三十八年現職に就き今や大田實業補習學校長、大田圖書館長を兼ね壯なる哉。

氏は特に職員間の融和を計り、一視同仁主義を以て部下に臨み、努めて實社會に觸接せしめる方針を持す、加かも人格を崇高ならしめ、所屬民をして教員を信頼するの念を起さしめんとす、又家庭の改良青年風儀の矯正、何れも社會教育の一部にして學校は社會教化の中心たらざる可からず、就中家庭教育は學校に影響を及ぼす事至大なるが故に、父兄會母姉會を設けて其の缺陷を補ひ、家庭訪問を勵行して家庭の状況を悉知し、相互矛盾なからしめんとす、青年は補習教育を勵まし、擊劍柔道角力等元氣を鼓舞すべき施設を爲し、青年會を設けて風紀の取締を爲す、一般の尊信今や頗る厚し宜哉。」

### 鑑 銘 家 育 教

岩手縣 花城 尋常 小學校長  
稗貫郡 花城 高等 小學校長

### 菊池 竹次郎 氏

轉々任を移して口猶教育の意義を説き、其の効果を云々す、而かも自から霸氣ありと爲し氣概ありと爲す者、現時教育界に往々之れあり、吾人は之等の輩を稱して似而否的教育者と呼ばん、現任岩手縣稗貫郡花城尋常高等小學校長菊池竹次郎氏の如きは然らず、適く所必ずや効を奏し、教化眞に擧がる、過去二十有餘年間、僅かに三校に歴任せる而已、顯著の效果當然なりとす。



氏は明治五年一月を以て本縣稗貫郡花巻川口町に生る、夙に教育者たらん志あり、其の小學校を卒はるや、縣師範學校に學び、明治二十六年を以て其の教科を卒業し、爾來本郡内二小學校長を経て、同三十五年六月現校長に轉じ、勤績以て今日に至る、就任以來孜々努力を施設經營に致し今や設備全く整ひ、現在十九學級に一千有餘の學童を收め二十餘名の職員を統督す。

氏資性篤實にして温厚、思慮綿密にして用意周到、操志頗強固にして部下統御の才に長ず、人と接するに城壁なく襟度宏大にして雅量あり、爰を以て部下悦服其の職に勵み、學區民の信用厚く兒童尊敬す、特に訓練に重きを置き、兒童に自治の精神を涵養する事は氏の最も意を注ぐ所にして成績亦佳良なり、教授は内容の充實を企て、今や良好の域に近づかんとす、復習豫習を以て家庭教育の要素と爲し、青年教育には直接關係せずと雖も、町内三ヶの青年團あるを以て間接指導に努むる事は亦大なり、故に一般風紀の改善を遂げ、同縣下教育界に貢獻する所多し、偉なる哉。」

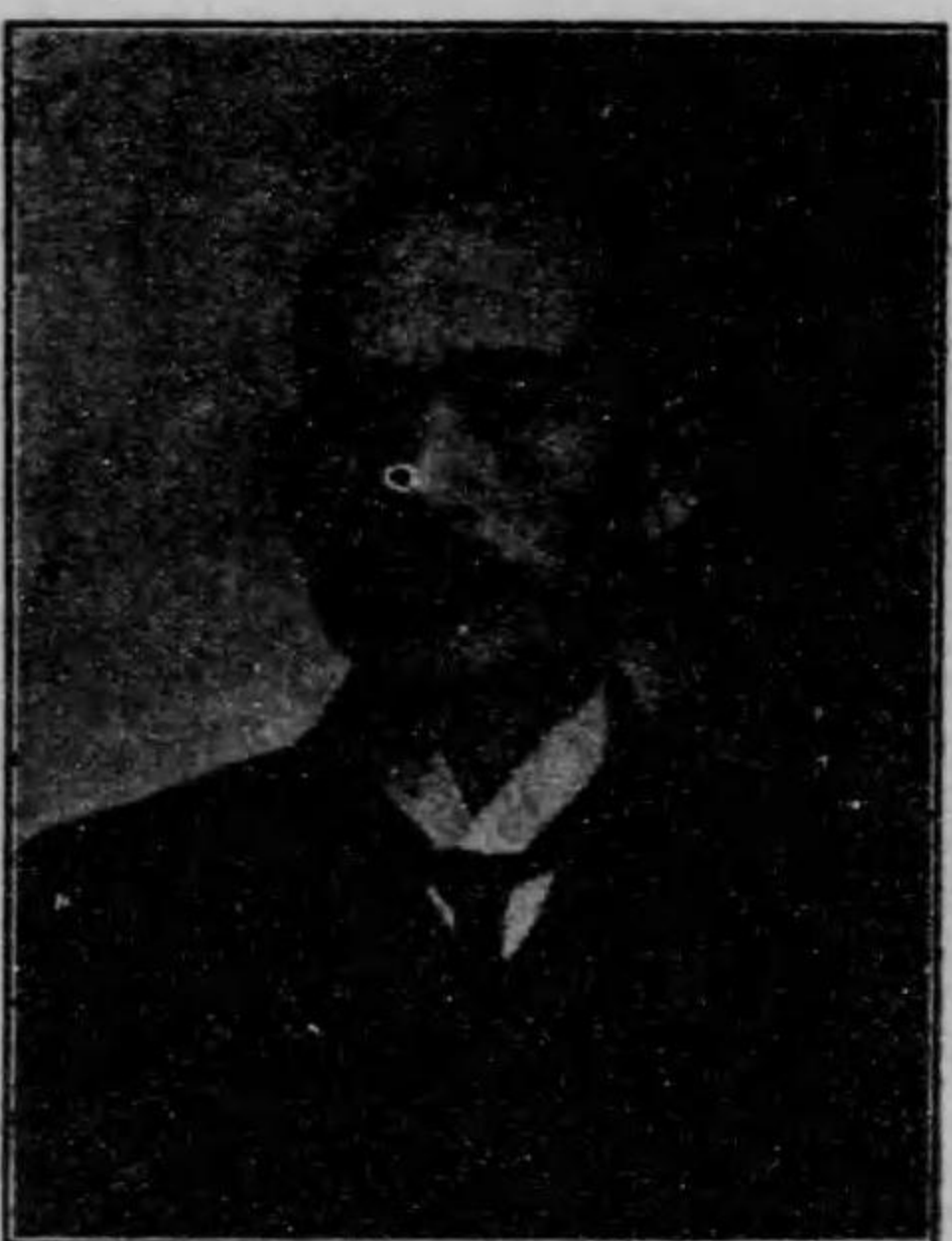
### 鑑 銘 家 育 教



山梨縣  
甲府市相生尋常小學校長

北原爲十郎氏

世は物質的文化に眩惑せられ、稍もすれば文弱に陥り、浮華の風益々甚だしきを加ふるの傾あるを慨き、之が防遏と救済とは偏に第二國民の教養に俟つ、果して然らば家庭並に小學校に於ける教育の改善に留意するを要す、此に於てか戊申詔書の聖旨は實に、國民教育の一大指針たるを論じ、猶ほ子守學校を併置して銳意之が教導に努むる者、之を北原爲十郎氏と爲す。



氏は慶應元年正月を以て甲府に生る、人と爲り剛直にして眞摯敢て邊幅を修せず、恭儉身を持し、權門に諂せず權貴に諛らず、俊氣英發所措劃然たり、夙に漢學を修め詩文に長ず、明治十六年山梨縣徵典館に於て高等小學師範學科を卒業し、此年西山梨郡里垣小學校長に就任、爾後北巨摩郡甘利尋常高等小學校長より、甲府市湯田、穴切の校長を経て同四十一年現校長に轉じ、孜々教務の發展に努む。身體を強壯にせよ、誠實事に當れ、學業に精勵なれ、規律を嚴守せよ、との四箇條を校訓とし、別に訓育表解なるものを編製し、其の標準を示すも、氏は常に職員に諭すらく、訓練の實果は教師其人の徳化に俟つ宜しく一言一行に留意し以て其の範を示せと、猶世態日に輕佻情弱に趨るの風あり、躬行實踐努力の範を垂れ職員之に倣ひ校風従つて作る、殊に愛情深く部下の爲めに公私力を竭し、奔走の勞を辭せざるは皆人の敬服する所なり、部民亦氏は景仰し信賴殊に厚きを見る、明治四十二年文部省は普通教育普及の趣旨に依り設備費若干を子守學校に交付す、豈に榮譽ならずや。」

教育家銘鑑

長野  
縣立飯田高等女學校長

湯本政治氏



家を重んずる事は之を大にしては國を重んずる事と爲り、之を小にしては身を重んずる事と爲る家門を辱かしめず、家聲を墜さず、家道を興し、家風を旺んにせんとするは、志を立つるに於て第一の刺戟なり、然も若し其の一家の歴史に就て、漠然知る所なくんば、焉んぞ此の刺戟を來たすの道あらんや、殊に女子の如く嫁して他の姓を冒し、根本家風を異にする者に在ては、猶更其の一家の歴史に就て究むる所なくんばならず、教育者は宜しく此點に注意し、天晴れ子女の教育主任たる婦徳を涵養する事に努力せざる可からず、飯田高等女學校は今や名聲縣下に噴々たる湯本氏を校長に仰ぐ、蓋し生徒の至大至幸。

氏は舊姓山崎慶應元年三月を以て信濃國更級郡御厨村に生る、明治二十二年縣師範學校を卒業して、埴科、更級の訓導を経て更級校長に進み、同二十九年西筑摩郡視學に擢せられ、下伊那郡視學、上水内郡視學、東筑摩郡視學等に歴任す、到る所成績を挙げざるなく、官屢氏を賞す、同四十年文部省全國優良教育者選奨の事あり氏之に名を列す、同四十四年現校長に就き、大に内外の刷新を斷行して校風を興し、當局更に其功を賞せり、大正二年奏任を以て待遇せらる。氏資性濃厚篤實、高潔なる品性と倅々たる高風とは普く部下の推服する所と爲り、部下親の如く尊び、一校常に和氣霽々として一家族の如し、虚飾銜氣は其最も嫌ふ所にして、校庭に於てのみにあらず、家庭に於て殊に正直を守らしめ、他日の覺悟を爲さしめんとす、豈偉ならずや。」

教育家銘鑑



朝鮮忠清南道 溫陽公立普通學校長

湯本 勵氏

明月高く中天に懸りて、輕風徐ろに至り、窓前の琅玕、鏘然として聲あり、之れを以て我湯本勵氏資性の表象と爲すべき乎、氏や人と爲り眞摯にして率直、淡泊して眞に高品、實に得易からざるの人格者たり、夫れ博學は素より教育家に必須なる條件にして英才又然り、然りと雖も之れを統ぶるに一の人格なくんば佛體ありて眼なきに等し、湯本氏の高韻にして博識なる、仰ぐ可き哉。

福岡縣那珂郡住吉村の地、明治五年三月を以て氏を生じ、氏や同二十六年東京府尋常師範學校を卒業し、爾後同府下南多摩郡横山尋常高等小學校長、東京市日本橋區濱町小學校等に歴任し、其至誠を盡して恪勤し、大いに努むる所あり、同四十年渡鮮、義州地方に三年、江景地方に三年熱烈なる教鞭を振ひ、現校に赴任、其校長として、斯業に自己が天職を自覺し、經營孜々勞を知らず。



氏は深く二宮尊徳翁に私淑し、其兒童訓練方針總べて之れに則とり、不言實行を以て其主義と爲し、實踐躬行範を兒童に垂れん事を期せり、夫れ至誠は天を撼かし、丹心は日を貫くべし、氏が至情如何ぞ功績なくして止まんや、現に校風煌々として舉り、部下職員氏を畏敬し、鞭下兒童齊しく氏を敬慕し、嚴父慈母の如く懐づくに至れる又所以なきに非ずと謂ふべきなり、氏また鮮語に熟達し、鮮土の事業に通曉す、該校長として又得易からざるの好人材たり、如斯校長を得たる溫陽校の至幸は勿論朝鮮地方の教育上多幸なる哉、嗚呼。」

教 育 家 銘 鑑

教 育 家 銘 鑑

私立眞言宗聯合高野大學總理 兼眞言宗聯合高野中學林學長

大僧正 密門 宥 範氏

密教の粹を新らしき器に盛りて以て新時代に於ける靈界の指針たるべき密教僧侶を養成すべく、南紀高野の山上に孜々努力を致すと二十有餘年、學校の發展と人物の教養とは蓋し密門大僧正畢生を期せられたるもの、遂に今日の隆盛に至り、従つて本宗々徒にして師の教を受け、宗内各地に頭角を顯はせるもの其多くは師が董陶の賜として一門に信望歸依の普き偶然ならざるなり。



氏は天保十四年五月を以て大和國十市郡田原本町に生る十一歳高市郡久米寺に入り、翌年住職宛範大徳に就き剃髮し、十五歳より同郡八木町の鴻儒三山谷操先生の門に儒學を學ぶ、十八歳高野山に登り、良基、榮秀、道雄、隆僊、宥圭、寶幢の諸學匠に自他宗の教相及事相其他同山嫡流の學說を相續し、廿三歳能化の位に進み、明治十一年大講義に任じ大學林教育課主任と爲り、同廿七年學頭に上り、翌年大學林常任教授兼監督に任ず、同卅年中僧正に補し次で一等教授となり後古義大學林總理代たり、同三十四年準大本山無量壽院門主に進み權大僧正に陞補、又聯合大學總理代兼中學林學頭に任ず、同三十八年高野山金剛峯寺第三百八十五世座主に晉み、同時に眞言宗高野派管長に公選、大僧正に進み、現職を襲ふ。

氏資性濃厚篤實、識徳一世に冠絶し、眞に一宗の師表として末徒の尊信措かざる所、近來教界徳道乏しきの時、師を得たるは實に本校の誇りたる而已ならず、實に密教の光榮たり、「講堂に臨み學生に接すれば忽ち前日の疲勞を忘る」と、以て其懇切の教養を察するに難からず、豈偉ならずや。」



兵庫伊丹中學校長  
縣立

三澤力太郎氏

多方不偏の興味とは、經驗的、推究的、審美的、同情的、社交的、宗教的興味の六種をいふ、此の六興味は實に科學的教育の根本概念にして、教育方法の神髓亦實に此所に存す、然れども現時教育の缺陷多き、果して此の根本概念を包含して、此の神髓の貫徹を期し得るとするか、吾人は其の實に望み少きを悲まざるを得ず、只獨り現任兵庫縣立伊丹中學校長三澤力太郎氏のあるあり、吾人の渴少しく醫さる。

氏は長野縣安曇郡明盛村の人、明治三年十月の生、其の心地寛宏にして性剛なるは巨軀坦腹の姿容と相匹し、其の博學多識と、快論熱辯とは亦氏の教育的權威の矛たり、明治廿六年長野師範學校を卒業し、其の翌年東京高等師範學校に入り、三十一年其の理化科を卒ふ、直に出て、岐阜師範學校に教鞭を執ること二年、高等師範學校研究科に在ること一年、去つて大阪天王寺中學校に奉職す、時偶高等師範學校長嘉納氏の依頼により、再び東京に歸り弘文學院の教授と爲り同幹事を兼ね、清人教育に干與せらる、次で清國湖廣總督張之洞の聘に應じ、兩湖高等師範學堂總教習と爲りたること一年而して現任に就きしは、明治四十五年四月なり。

學界教導方面に於ける氏の功績は、夙に其の著「自然界の現象」「自然物之利用」「自然力の利用」「天界の現象」漢文「高等物理學教科書」等克く之を語るべく、雜誌「理學界」の創設は理學思想普及に對する識見の凡ならざる證左たり、今や英氣は益旺盛に抱負倍加はる偉なる哉氏の精力。」



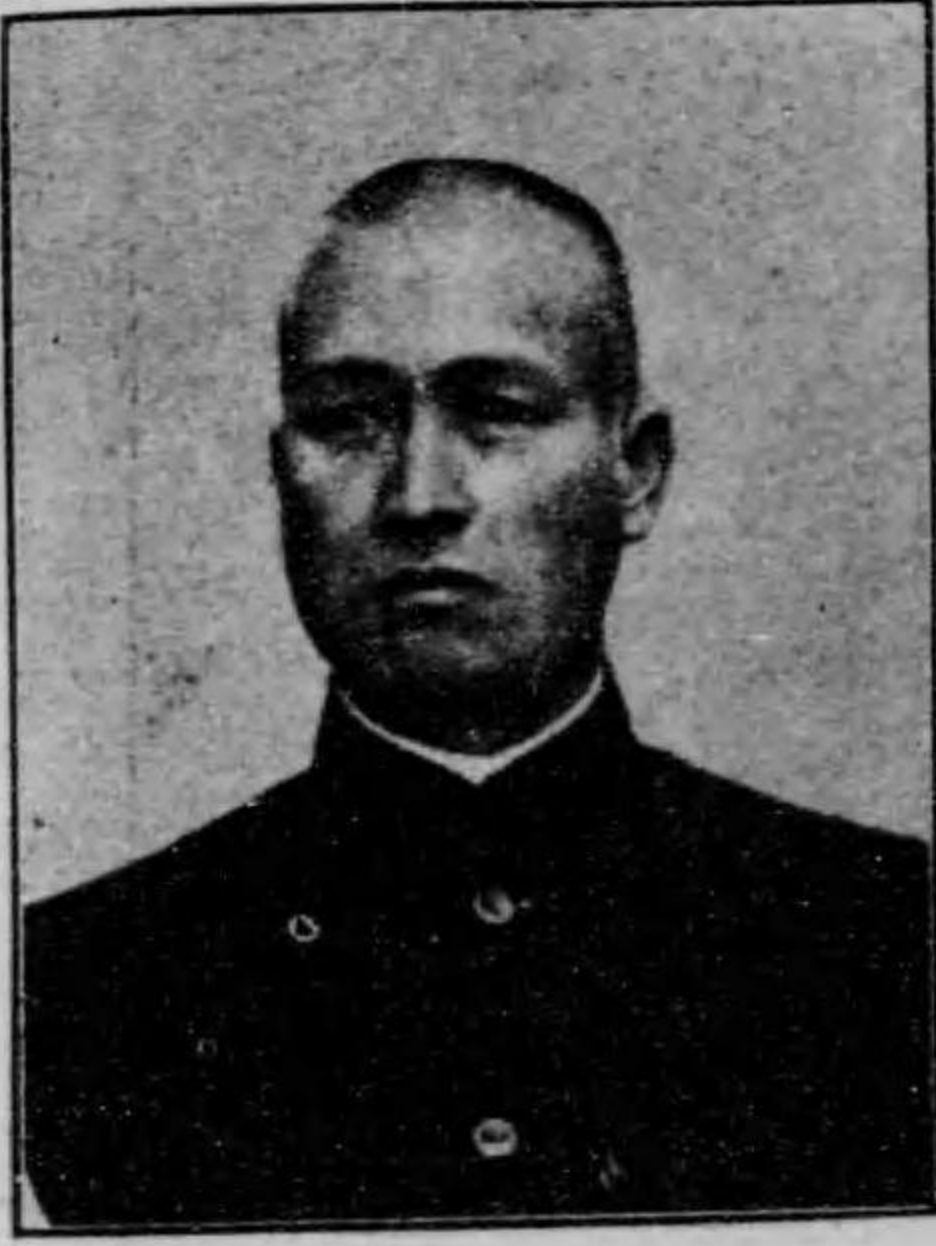
教育家銘鑑

熊本八代中學校長  
縣立

正七位 水上浩然氏

兵に將たるは易く、將に將たるは最も難しとする所、然り而して部下職員一同肅然、其職を樂み引て生徒をして孜々奮勉せしむるを得る者、是れ校長の統率宜しきを得たるが爲めにして、正に將に將たるの器たるを失はず、今水上浩然氏に於て眞に痛切此感を深からしむ。

氏は明治元年四月、熊本縣飽託郡西里村に於て生る、體軀偉大、度量寛厚、人に接して城府を設けず、趣味高尚にして詩文に長ず、明治三十四年東京高等師範學校を出て、翌年同校研究科を卒業す、直ちに任を福井中學校に奉じ、山形縣鶴岡高等女學校教諭、熊本縣師範學校教諭、鹿本中學校長を経て、同四十二年現任校長と爲る。



氏職に在るや、勅語及詔書の趣旨を服膺し、自奮自勵、知れば直ちに行ふの品性確立を期し、各科聯絡の徹底を謀り、校外監督を置きて家庭下宿を訪問し、父兄と協力して寄席劇場を取締り、校内監督をして起居動作を規律嚴正ならしむ、其職員規箴に(一、各自の職責を嚴守すると同時に常に本校教育の要旨に着目し協力一致至誠を以て徹底すべし、二、生徒に接するには慈愛親切を旨とし兼ねて敢爲力行の範を垂るべし、三、教授訓練管理は常に密接なる聯絡を保つべし)及び生徒訓條(一、廉耻を重んじ禮節を正ふすべし、二、規律を守り學業を勵むべし、三、堅忍を励め氣力を練るべし、四、質素を體し儉約を行ふべし、五、勤勞を貴び健康を進むべし)と制定して其の主義方針を宣明し且つ郡教育會長を兼ね、傍ら青年會父兄會通俗講演會等に盡力し輿望翕然一身に集る。」

教育家銘鑑



三重工業學校長

正七位 三上虎太郎氏

朱熹曰く『書を讀むは家を起すの本、勤儉は家を治むるの本、和順は家を齊ふるの本、理に循ふは家を保つの本』と、今之を我三上虎太郎氏に見る、身治まれば家齊ひ、家齊ふて國治まり天下太平なるの理なり、澆季の世、奢侈淫靡の民多く、怠惰以て身を誤る者、滔々然らざるはなし、危ひ哉國家、産業は衰へ、工業は萎靡す、其之を覺醒し、又之を獎勵するは眞に氏の如き人に非ざる

よりは奈何ぞ克く完きを致さん。

氏は加賀大聖寺藩士なり、明治三年九月を以て生る、人と爲り英邁學を好み、拮据黽勉息ひなし、明治二十二年東京市富士見高等小學校英語科訓導と爲り、同廿五年石川縣農學校助教諭に任ず、同三十二年工業教員養成所を卒業し任を静岡市立静岡商業學校教諭に奉じ、同三十四年静岡漆工學校教授を囑託せらる、同三十五年三重縣立工業學校教諭に轉じ、校長心得を命ぜられ、奏任の待遇を受く、同三十八年正八位に叙し、同四十一年三重縣工業技師と爲る、此年長野縣主催一府十縣聯合共進會審査官を委嘱せられ、同四十二年現職に就き、縣工業試験場技師を兼ね、同四十三年福岡縣主催第十三回九州沖繩八縣聯合共進會審査官を囑せらる、又以て氏が如何に實業界に重視せらるゝかを知るに足らん、今や果進して正七位に叙せらる。

資性温厚篤實、言行を慎み恭儉己を奉ず、至誠職務に盡し、熱精工業の改良發展を劃す、職員を遇する事厚く子弟を訓ゆる事叮嚀、最も怠慢を憎み放縱を誡む、其德四隣に鳴る、宜なる哉。』



鑑銘家育教

廣島縣立商業學校長

從七位 宮田千年氏

沈靜錄に言はずや、『誠を積みて人の感ぜざる者は未だこれあらざるなり』と、何ぞ人のみに限らん、天に通じ鬼神爲めに泣くは必せり、吾人の此世に處する只一片至誠を以て一貫するを要す、成功は至誠に發し、富貴亦至誠ありて貴ぶ可し、殊に近來道義の念退き、商界は掛引を以て満たされ阿附を以て飾られ、只自己あるを知りて他を顧みざるは何ぞや、此時に當り宮田千年氏ありて商業教育に従事す、至誠の人其感化蓋し大なるものあらん。

氏は明治八年十二月を以て、福岡縣京都郡豊津に生る、明治三十一年東京高等商業學校を卒業し、任を長崎縣商業學校教諭に受け、同三十三年教職を退きて三井物産合名會社に入り専ら其實務に従ふ、翌年清國天津支店詰と爲り、同三十四年更に上海支店詰と爲りて大に貿易の實際を味ふ、此年歸りて京都商業學校教諭に就き、同三十六年富山縣高岡市立高岡商業學校教諭に轉じ、商業補習學校教授を囑託せらる、同三十八年合衆國エキテブル生命保險會社理事に聘せられ、具さに保險事業の内容を窺へり、同四十年市立甲府商業學校教諭に任じ、翌年奏任待遇と爲る、同四十三年栃木縣立商業學校長に、四十五年從七位に、大正三年現任となる。



人と爲り聰慧にして機を見る事敏捷、商業の實地に經驗を有し、其蘊蓄と相俟ちて光彩頗る發揮せるを見る、自ら至誠に坐し終始一貫す、實業家に接觸し、自ら地方商業家の中心を以て任し、内容に外形に其誘掖指導を絶たず、聲望年と共に加はり、徳化日に洽然たる亦宜なりと謂つべし。』

鑑銘家育教



香川 縣立商業學校長

從六位 三戸 得三氏 勳六等

我國輸出商品の不評判は十數年來の事にして、爲に常に正貨の流出と爲り國家發展上の妨害たる是より大なるものあらんや、是れ皆商業道德の缺乏、商品取扱者の商品に對する智識と周到なる注意の缺損、大工場の未發達なるが爲め物品の整齊を缺如すると、一時的個人的主義の爲め國家的思想の欠缺せる所以、世界的趨勢に留意する研究心の不足に歸する諸點ならんと雖も、商業教育に従事する諸士は皆之等補習に留意するにあるも、其效果の甚だ乏しきは識者の以て憂と爲す所たり、爰に香川縣立商業學校長三戸得三氏慨嘆之が矯正を以て商業教育の責務と爲し、我商業教育の基礎を士人的人格の道德教育にあるを認め、大に斯業教育界の實踐的改善に努力し、専ら心的品性を陶冶し、精神的道德を養成し、以て我が商業界の缺陷補修に盡瘁す偉なりと謂つべし矣。

文久三年十一月山口縣此人を産む、明治十七年東京高等商業學校を卒業し、暫時貿易港たる横濱に於て生糸直輸出賣込業を營み其實験を積みたり、幾何もなく身を教育界に投じ商界の救済を圖らんとするに意を留め、巖手縣中學校教諭を初めとして同縣商業講習所講師並に縣技手等を兼掌し、次て茨城縣技手同縣中學校教員と爲り、後ち山口縣赤間商業學校校長兼簡易商業補習學校長に轉じ在職七年當時已に成績頗る舉り從七位に叙せらる、同三十四年京都市立商業學校長に移り高等教育會議員に擧げらる、更に同三十八年高等教育會議員に再選せられ、我國實業教育の樞機を輔くる事頗る多し、文部省は氏の成績多大を認めて選奨し表彰す、同四十五年現職に就く。

氏資性剛毅深沈、大度にして欽仰すべき人格者なり、職員統督上干渉なく天真爛漫の状態に於て手腕力量を磨かしむ、生徒及同窓に對しては常に忠實なる士人的道義の涵養に怠らず、是を以て生徒父兄の信頼愈厚く、錚々たる名聲は我國實業教育界に止まらず、天下斯界の嘖々宜なる哉。」

鑑銘家育教

鑑銘家育教

廣島縣 廣島市竹屋村私修道中學校長

正六位 水山 烈氏 勳四等



元治慶應の間勤王論を唱へ、同志五十八人と共に脱藩上阪して國事を議し、後歸りて發機隊を組織し、伏見の役起るや出て、禁闕御警衛の任を完ふし、鎮臺兵創設の際陸軍少尉と爲り、後陸軍理事に移り、各地法官部長の職を奉じ、今や修道中學校長として名聲天下に嘖々たるを水山烈氏とす。氏は廣島の人、嘉永二年十月の産、資性温厚和平、處事周密、深思熟慮能く察を失はず、幼にして漢學を修め藩費に研鑽を積み、十六歳既に句讀師たり、

次て授義補として青年教養に従ひ、後軍籍に入り上京兵學を研め陸軍幼年學校生徒指揮官、學生監督の任に當る、明治三十三年病あり職を辭して廣島に歸り、先師山田十竹の修道學舎に斡旋し、翌年山田師病革まるや後事を託せらる、同三十八年中學校の組織に改め、直ちに財團法人の許可を得、後徵兵猶豫の特典を受く、本校は遠く享保十年舊藩諸藝稽古場の創立に發し、天明年中更に學問所を設け爾後變遷修道館と改稱し、明治四年朝命に依り一旦廢止、同十一年舊藩主淺野侯爵一校を起して修道學校と名け、同十九年十竹山田氏の家塾と爲り、尙修道學校の名を存し、後更に轉じて有志家の共同經營に移り以て今日に至る、其間實に百九十年を経たり。

氏や常に育英に心を注ぎ、其教育に經驗あること既に久しく、明治四十三年祝融に罹るや日宵復舊に勵み、有志の同情を乞ひ、舊藩主の寄金を受け、立ちに竣工す、性歴史の學を好み、文筆に異才あり、曾て舊藩侯の囑を受け藩史編纂に従ふ、勤儉質素、後進の指導に寧日なし、偉なる哉。」



京都府 船井郡 郡立高等女學校長

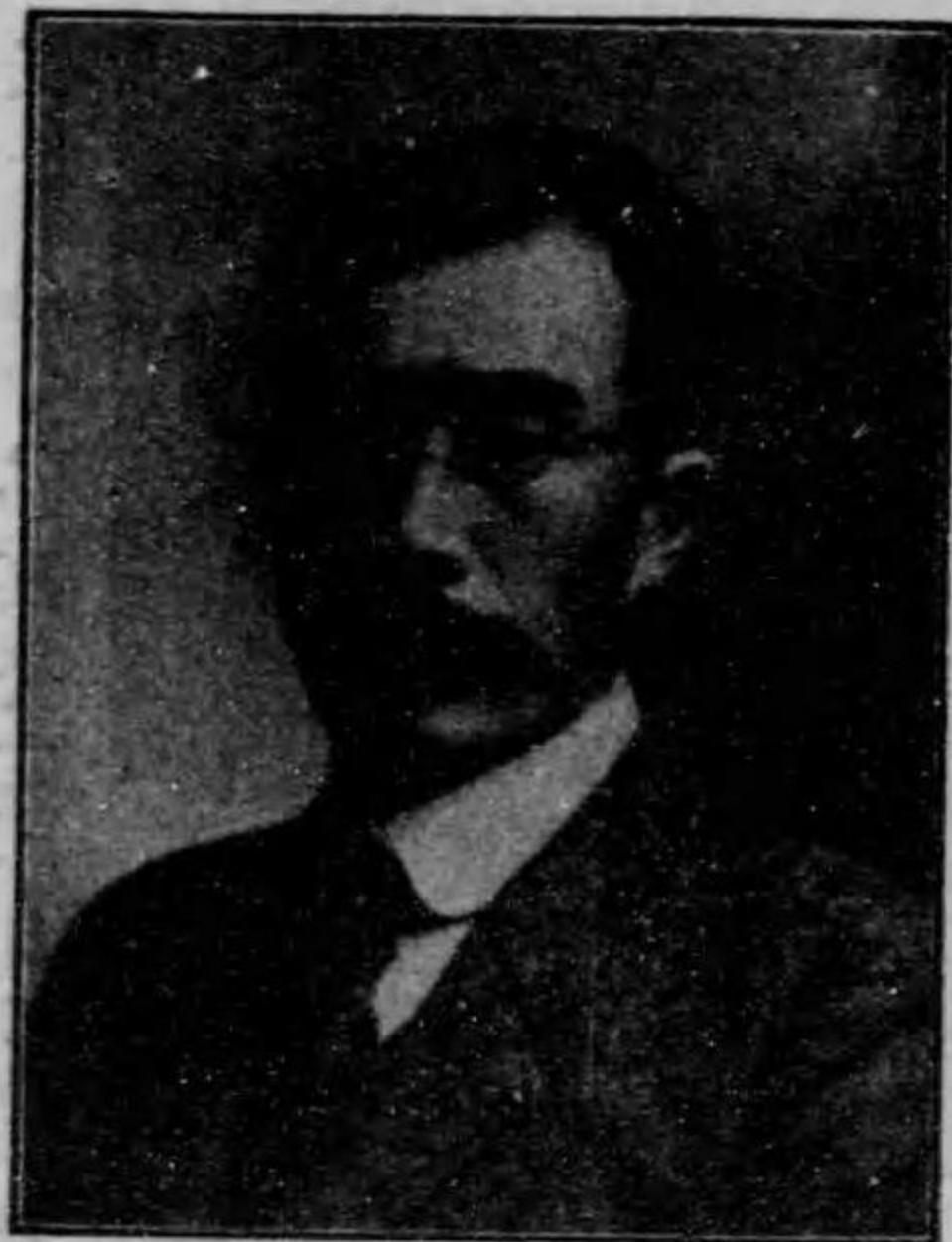
### 三宅 覺 二氏

彼の月球引力の、潮汐の乾満に關係あるを見ずや、月の上るは潮の満るを示す也、月の落るは潮の乾くを顯はす也、清高の理想界に住する者は其の思想も亦清高なり、よし未だ清廉ならざるも亦必ず清廉の蓓蕾を含む也、汚濁なる理想を懐く人は其の現實界は更に汚濁なり、今や甚だ汚濁ならざるも、竟に汚濁たらずんば休せざる也、我三宅覺二氏は理想界の清高なる人、現任未だ效果の完

きを見ず、女子教育上に經驗豊富ならざるも、亦清高の蓓蕾を含むと一般、必ずや有終の美を儆さずして止む可けんや、吾人は此點に於て囑望しつゝあり。

氏は兵庫縣の人、明治五年二月を以て生る、明治三十五年度東京帝國大學法科大學政治科の出身にして、大阪生命保險株式會社員たる事一歳、呼ばれて私立大阪商業學校長と爲り、翌年内務省警保局に出仕し、同四十年特許辨理士の登録を受け東京に事務所を設けしも、歳餘にして之を閉ぢ、豊橋商業學校講師と爲り、第十五師團將校外國語教授の囑託を命ぜらる、同四十四年清國兩江法政學堂教習に聘せられしが、革命事變に際會し、幾許もなく歸朝す、同四十五年現校に召されて校長たり、以て今日に至る。

氏資性聰慧、事を處する綿密、深く虚榮虚飾を嫌ひ、又大に疎暴亂蕪を厭ふ、其教育方針極めて着實、諄々意志教育を説き、堅實貞淑の良妻賢母を得るに努め、躬行以て其範を示し、校内外の信望漸く揚がるを見る、源泉清ふして始めて末流澄むを得べしと氏に於て然る乎。』



### 鑑 銘 家 育 教

大阪府 北河内郡 立河北高等女學校長

### 從七位 三宅 由 太 郎 氏

女子教育の興隆は、國家進展上の一大福祉たるは論なしと雖も、時代は頻りに輕佻浮華を招ぎ、滔々として暗流を防止する事なく、世の思潮に之れ委するが如きは、眞に慨嘆に堪えざるなり、此時に當り我三宅由太郎氏あり、遙かに時流を超越ゆるの思想を以て、今や河北高等女學校長たり、校風の作興と女徳の涵養とは、蓋し氏獨特の妙技たる感なくんばあらざるなり。

氏は島根縣の人なり、明治六年一月を以て生る、明治廿六年島根縣師範學校を卒業し、出雲郡直江村尋常小學校長に任ぜられ、同廿九年直江高等小學校訓導に轉ず、勤勉なる氏は常に餘暇を研鑽自修に充て、同三十一年遂に地誌科中等教員試験に合格す、翌年埼玉縣第一尋常中學校助教諭兼舎監に任じ次で教諭に進む、其翌年埼玉縣地方氣象觀測事務取扱を命ぜられ、且つ復た地文科中等免許狀を受得す此年鳥取縣第二中學校教諭に轉じ、更に舎監を兼ね、同三十九年米子女學校地理歴史教授を囑託せられ、翌年文部省



より教科書調査を囑託せらる、同四十三年現校長に任じ、大正二年從七位に叙せらる。

氏や濃厚篤實、元氣旺盛物に屈托せず、悠々事に當る、頭腦明晰用意周到細大遺算なし炯眼よく時勢を洞察し詳かに女子の個性を究め以て女徳の涵養に盡し又學校と家庭並に社會との聯絡につとめ、或は講演に或は誌上に地方人心を指導開發して詢々倦ひなし、以爰部下親睦其職に勵み、學徒咸畏敬し、部民亦均しく欽慕し、敦厚の風儀四周に延ぶ氏夫れ偉哉。』

### 鑑 銘 家 育 教



福岡市 私立筑紫高等女學校長

水月 哲英氏

校は福岡市の南端下警固の地に在り、三面小岳を以て圍まれたる静閑の一小天地、四時縁にして仰げば老樹軒を歴し、松籟耳を洗つて、市塵の逼るを許さず、鬱畝の田圃連り、野老の聲に和して時に舞鶴城頭の號音を聞くべし、此校に長たるの人を水月哲英氏と爲す、性敬虔にして敦厚、温容以て人に接し、春風駘蕩の裡、自ら畏敬の念を禁ずる能はざらしむ、居常身を奉ずる事頗る質素眞に君子の風あり、地の勝、人の秀併せ得て又妙也。



明治元年二月福岡縣絲島郡雷山村の地、氏を生む、同三十一年東京帝國大學文科大學漢文科を卒業進んで、大學院に研學大に勉むる所あり、同三十二年新潟縣北蒲原中學校教諭に任せられ、同三十三年本派本願寺北米合衆國桑港出張所長として渡米し、開教に従事すること一ヶ年偶々病を得て歸朝、同三十五年第四佛敎中學福岡分校に其教鞭を振ひしが、同四十三年該校閉鎖の悲運に際し、慨然起つて、氏が多年の宿志たる女子教育に貢献する處あらんとし、即ち請ふて其校舍を譲り受け、同年四月現校を設立し、校長として今日に及べり。  
混沌たる女子教育界の潮流に棹して、よく其功を收めん事、蓋し至難の業にして又刻下の急務に屬す、氏が崇高なる信念と、高潔なる徳風とは、此間に在りて能く薫化の實を擧ぐるに適し、設立以後八ヶ年着々として、斯界のため貢献すること既に大なり、女子が人格の向上、天職自覺の如きは眞に氏の如き人格者に據りて功果始めて期し得べく、吾人は女子教育刷新上氏に期待するや切。」

教育家銘鑑

廣島縣 私立日彰館實科高等女學校長

宮澤 順定氏

氏は長野縣の人、明治三年五月を以て生る、至誠熱心職務に服す、明治二十六年慶應義塾大學文學科を卒業し、直ちに本校教頭として來任し、同三十五年校長と爲る、而して創立以來二十年間設立者故奥氏と共同し、古倉庫の一私塾より興り七萬圓の基本財産を有し、財團法人として基礎を確立したる者、蓋し偉なる哉、今氏の制定せる校訓を叙して以て氏の半面を窺はん。曰く、



『熟々惟ふに本校創立の由來深遠にして理想高大なり校運日に月に隆盛に赴く所以の者専ら此理想の發展と主義の擴充とに因る誠に維新以來我國の情勢を顧れば外觀を貴び形式に流れ道義廢れ人情薄く懦弱華奢輕佻粗野の風潮滔々として國家の前途傍觀するに忍びざるものあり、是於乎本校は私學主義を擁して立ち山水秀美の地風俗純朴の郷に位し師弟同窓骨肉の情誼を以て交り秩序ある家庭の如き學舎に於て至誠と同情とに因る精神教育を施し以て勤儉質實剛毅敢爲の氣象ある獨立自治有爲高尚の人格を作らんとす、斯主義は本校創立以來逆境に臨みて易へず苦節を守りて屈せず多年一日の如く校内に充滿し以心傳心以て校風となれり此校風に陶冶せられたる品性を名づけて日彰館魂と謂ふ(中略)抑々國民教育の主旨たる凜乎として勅語に昭々たり(中略)我國建國以來君臣の分嚴乎として犯すべからず(中略)本校が獨特の旗幟を立て斯界に活動せんとするもの此意に外ならず(中略)嘗に之を躬行實踐するのみならず更に進て社會に及ぼし世道人心に益せん事を期すべし』と嗚呼是れ教育眞髓なる哉。』

教育家銘鑑



宮城縣加美蠶業學校長  
加美郡立

從七位 宮川 潛藏氏

斧を磨して針と爲し、山を啣んで海を填むるは爲すべし、然れども世往々にして萬事に通じて一事をも爲さず、百能ありて一藝を試みざる者あり、夫れ人は精神一到何事か成らざらんかの邁往の志なかる可からず、我宮川潛藏氏の採る處は亦之に外ならず。



明治三年正月巖手縣和賀郡中内村氏を産む、明治二十四年宮城縣農學校を卒業し、同廿七年農商務省蠶業傳習所を了へ、蠶種検査員たり、後遠田郡植物試驗技手、志田郡農會米作改良教師と爲り、同三十年山形縣北村山郡簡易農學校助教諭に任じ、翌年同校舎監兼山形縣尋常中學校舎監を兼ね、農業專脩科に勤績す、同三十二年同郡立農業學校教諭に任じ、中學校助教諭を兼ね、此年轉じて青森縣農學校教諭と爲り、翌年宮城縣伊具郡農事巡廻教師に轉じ、農蠶業講習會講師を囑せられ、同三十六年奏任待遇を以て現職に就く。

氏は資性俊敏英智、遙かに時流を抜き、能く人と交はり能く人を容る、切瑳琢磨の精神に富み、常に新進の學說を研めて咀嚼し、取つて以て地方啓發の資料と爲す、其の崇高なる人格は適く所一般民衆に尊敬せられ、着々として其の理想に赴くを見る、其の現職に就くや、營々施設經營を完成し、致々蠶業の改良發展に努力し、殊に女子蠶業教育の急務に着眼、明治四十三年女子部を増設す、其卒業生は質朴勤勉學力亦他に超越地方に重用せられ、常に地方發展の中心となる同校の聲價と共に氏の令名縣下に噴々たり今や累進從七位たり偉なる哉。」

鑑銘家育教

鑑銘家育教

山口縣柳井高等女學校長  
玖珂郡立

宮井 鑒氏

人の職分は勞作にあり、進歩にあり、今日よりも明日は進歩するの義務を有す、然れども今日の快樂の爲めに明日の希望を忘れず、明日の希望の爲めに今日の快樂を欲せず、蓋し今日爲したる事は今日の義務を了したればなり、既に此心を以て職責に盡す、俯仰天地に忤るなけん、吾人は今之を宮井鑒氏に見る、如何に氏が過去四十年來の天職を偉大ならしめたるかを知り得べし。



氏は和歌山縣の人、安政四年十月を以て生る、明治八年和歌山師範學校小學師範學科を卒へ、和歌山縣小學校教員傳習所教師と爲り、後督學訓導として日高郡に駐在す、同十三年縣立中學校並師範學校の助教諭に任じ、翌年監獄署教誨師を兼ねて同十九年に及ぶ、尋て長野縣に到り北佐久郡岩村田小學校長より郡立高等小學校長に就き、同二十四年辭して東京に遊び研學電勉、同廿六年英文科並地理地誌科中等免許狀を得て東京府立第一尋常中學校に教諭となり同二十九年和歌山第一中學校教諭兼舎監に轉じ、後大阪府

岸和田中學校教諭兼舎監、愛媛縣松山中學校教諭を経て、同四十五年現職に就き奏任待遇たり。  
氏資性眞摯溫良、最も慈愛の心に富み、其の諄々たる教訓は皆肺腑に發し、期せずして聽者を泣かしむ、其の明晰なる頭腦は進歩的精神に和して行ふ所着々効を收めざるなし、加かも教育事業に畢生を期し、嘗て名利に駢せず、殊に女子教育に對しては今日の義務、明日の希望と相聯接して世に耻る勿らん事を望み、致々として教化の完からん事を希ふ、氏や夫れ大なる哉。」



高知縣 土佐郡 朝倉高等小學校校長兼朝倉實業女學校校長

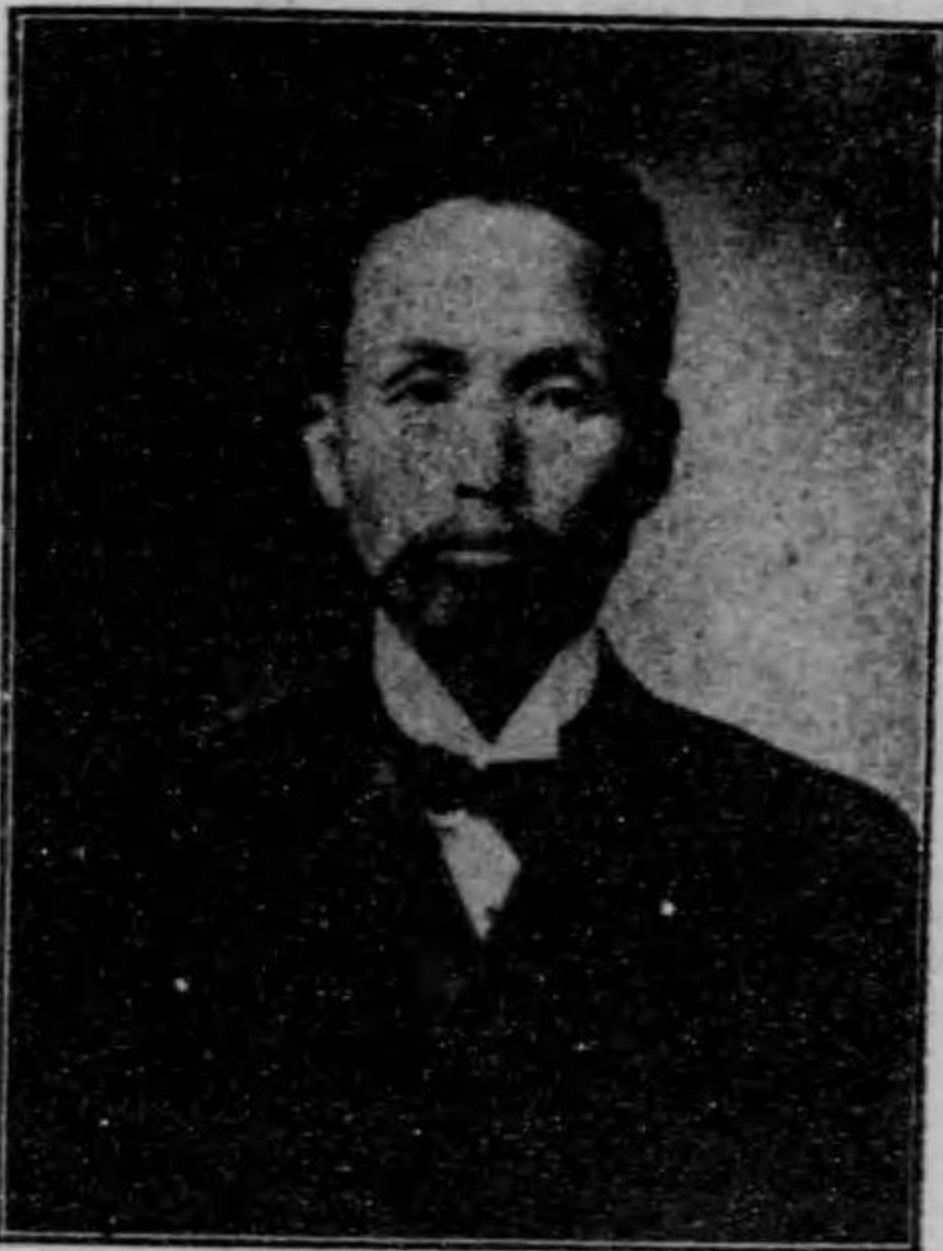
南 德太郎氏

現任高知縣土佐郡朝倉尋常高等小學校長南德太郎氏は、思想最も高邁にして裁斷に富み、又能く人を容るゝの量あり、常に修養を懈らず好んで書を讀み、蘊蓄する所頗多し、今や海南の地初等教育界多士濟々、就中氏は其色彩を放ち、地方斯界の重鎮として一般に認めらる。

氏は本縣の人、明治五年四月を以て香美郡佐古村の産む所なり、明治二十七年高知縣師範學校を卒業し、直ちに香美郡城山高等小學校訓導と爲り、後同郡

菲生高等小學校長に轉じ、勤務數年にして更に同郡鏡野尋常小學校長に榮轉す、明治四十四年移りて現校長に就き、附設實業女學校長を兼攝す、歷任する處統理の任を盡し、聲譽縣下に高く、教科亦大に擧がる。

氏は自ら教授を擔任して職員を指導し、至誠人に接するを以て能く人の推服する所となる、一校紀律あり學習の成績亦優良なり、且つ實地研究教授、縣内外學事の視察等を勵行して適切なる教育を施さん事に努力す、校下に細民部落ありて民戸少からず、其の就學及出席の獎勵に腐心し、學用品衣服雨具等給與の方法を設けて利便を圖り、以て其施設を完備す、又校下に青年團あり、求善會と稱す、創設最も古く郡内青年會中の優良なるものなり、其會同に臨みて講話を爲し、扶導修養に努め、又農隙職員を率ゐて教育講話會を開催し、家庭との連鎖に努むる等、餘力を校下民人の啓發に盡す事尠ならず、宜なる哉職員の統御能く行はれ一般の信頼亦厚し、嗚呼氏の努力亦大ならずや。」



教育家銘鑑

山梨縣 東八代郡 一宮尋常小學校校長兼一宮農業補習學校校長 水上文淵氏

韓文公孟東野を送る序に曰く、周之衰、孔子之徒鳴之、其聲大而遠、傳曰、天將以夫子爲木鐸、威風あり氣骨あり識見あり學殖あり、慧聰にして溫厚、而も名聞を求めざる氏は、其求めざるが故に益鳴る、其聲や高し、吾人の氏を傳するもの、以て木鐸を叩て警告するあらんとすればなり。氏は文久元年六月十三日を以て同郡御代咲村に生る、明治十五年九月對策甲科を得、翌年六月北巨摩郡龍岡小學校々長心得となり、後ち甘利小學校、東八代郡立高等小學校、北巨摩郡上手尋常小學校等に歴任し、同三



十一年八月北巨摩郡視學となり、爾來東山梨、北都留等の郡視學を経て、同四十二年八月現校に轉じ、勤續今に至る、郡視學としての氏は、其名聲籍甚、縣下其能を稱し、郡下教職員今に至る其徳を讃して止まず、宜なるかな同四十年十月、文部省は氏に金百圓を賜ふて視學の勤勞を賞せり。氏現校に就くや、一本校三教場に分れ、教授訓練等の統一を缺くを憂へ、先づ校舎の新築を企畫し、普く有志に説き當局に談し、期年ならずして宏壯なる校舎の落成を告げ、教具諸器械の整頓之れに適し、學級十四を教へ、學童八百餘を算す、而して部下十四の職員能く其指命を奉し、共心同力事に膺り、互に易を譲りて難を取り、推讓の美德更に進んで學童に及ぼせり、明治四十四年政府始めて全國小學校教員中三名を選抜して、勳八等瑞寶章を賜ふ、氏は實に其一人なり、一宮小學校の該縣内に錚々たる名聲を博しつゝある所以、亦以て偶然にあらざるなり。」

教育家銘鑑



朝鮮平壤第一公立普通學校長  
兼平壤公立簡易商業學校長

### 宮本作之丞氏

凡そ吾地球上の萬物皆悉く瞬秒の靜なし、蓋し自轉公運の遂に止む事なきを以てなり、況んや萬物の靈長たる人類に於てをや、其の日進月歩の社會を左右すべき人類にして虚手呆然たるに於ては木石と何の擇ぶ處ぞ、畢竟活動に生存し、活動に終焉するは其の天命なり、殊に身を育英界に置く者は、少なくとも教導感化の績を得るなくんば能はず、我宮本氏は眞個活動の人なりとす。



氏は香川縣の人、明治九年六月を以て綾歌郡飯野村に生る、明治二十九年小學校訓導に任じ、勤績僅かに三歳にして校長と爲り、同四十二年香川縣綾歌郡視學に拔擢せられ同四十四年現職に轉ず、由來氏は中學師範に學生たる時代其の成績常に第一位を占め、卒業後縣下第一の青年校長たり、噴々の令聲當時已に縣下に馳せ、郡視學に轉ぜし後、平壤普通學校は内外多事の學校なりと聞き、以て應聘の任に就きたりと云ふ、以て其意氣を窺ふ可し。

學校は平壤大同門練光亭と僅かに一町を離れ相對し、後丘眺望の地に快哉亭あり、即校長の官舎也、其内地に在りては公私教育事業に貢獻頗る多く、文部省より其の効績を賞せらる、渡鮮當時生徒僅かに三百なりしが、今は其數を増加して一千餘名を收容し、隆々たる盛況を呈するに至る、年々私立學校及書堂教員を養成講習して附近六十餘校中氏の薫陶に浴せざるもの殆ど之れなし、其他書記を養成して地方行政に資し、平壤の富豪及上流者を集めて國語の講習會を開き、社會教育に盡す等、其の採る所眞に可なるものあり、偉なる哉。」

### 鑛銘家育教

### 鑛銘家育教

熊本縣  
飽託郡 飽田北部高等小學校長

### 蓑田猛雄氏

夫れ中は法を立つるの本、信は法を行ふの要、誠意を竭せば胡越も一體と爲るの理なり、蓑田猛雄氏天資濃厚、其己れを處するや極めて厚く其名を取るや至つて廉し、而して燃ゆるが如き熱誠を以て其の職に盡し、朝夕恪勤、身を擲つて育英の好果を期す、氏の如き熱誠氏の如き勤勉なるの士に於て始めて有爲なる第二國民は養成され、完全なる教化至るを期し得べきと謂ふべきなり。



蓑田氏は熊本縣の人、明治元年四月を以て飽託郡油田村岩立に生る、同二十二年四月熊本縣尋常師範學校を卒業し、直ちに同縣飽田北部高等小學校訓導に任ぜられ、同三十二年四月同縣上益城郡甲佐尋常高等小學校長に轉じ、同三十五年十一月現任校長に任ぜられぬ、實に同一校に職を盡す事二十有二星霜、寒威凜々膚を劈くの日も、炎熱赫々流汗珠下するの時も、鞠躬業を勵み粉骨經營一日の如し以て氏の人と爲りを知り得べく、如斯士を以て子女育英の學校長として有せる飽田一郷の至幸夫れ大なりと謂つべし。

氏や管に校裡に於て兒童を訓育するに止まらず、飽託郡北部教育會を主宰し郡教育の發展上進に留意し、進んで其家庭の進歩向上を促し、盛んに父兄會母姉會、戸主會、主婦會等の機を利用して指導誘掖を圖り、更に一郷青年に對して、實習、講話、共同娛樂等の法を以て是れが啓發進歩を圖る、其熱誠や常に氏が眉間に顯然たり、一度氏の聲咳に接する者、兒童、青年、郷閭の別なく擧げて其至誠に感動すと云ふ、氏の令聲噴々四方に馳せ徳望愈々厚きを加ふ宜なる哉。」



茨城縣下館男子尋常小學校長  
眞壁郡

### 三好太郎氏

鳥は林に棲むも、尙ほ其高からざるを恐れて、復た木末に巢す、魚は水に藏るも、獨ほ其深からざるを慮ふて、復た窟下に穴す、三好太郎氏聰敏英悟、其博識あるに加へ、常に自ら修養する事を忘れず、佗々焉として一日も寧處せず、寸時も浪費するなし、則ち聰敏愈々聰敏に、博識益々博識に至る、世の輕浮淺學の徒の自ら偉とし、放言漫語、晏然として居臥せるの輩と全く其撰を異にす、氏や自ら修むる汲々として、子女の教育に資す、則ち好果燦然として輝く、眞に自然の理と云ふべき也。



文久二年三月茨城縣西茨城郡笠間町の地、氏を生む、明治十五年七月茨城縣師範學校を卒業し、同十六年六月同縣眞壁郡官後小學校訓導に任ぜられ、同二十年四月同縣同郡眞壁尋常小學校訓導に、同年十一月同校訓導兼校長に、同二十六年四月同縣同郡下館高等小學校訓導兼校長に轉任し、同四十三年三月現任となれり。

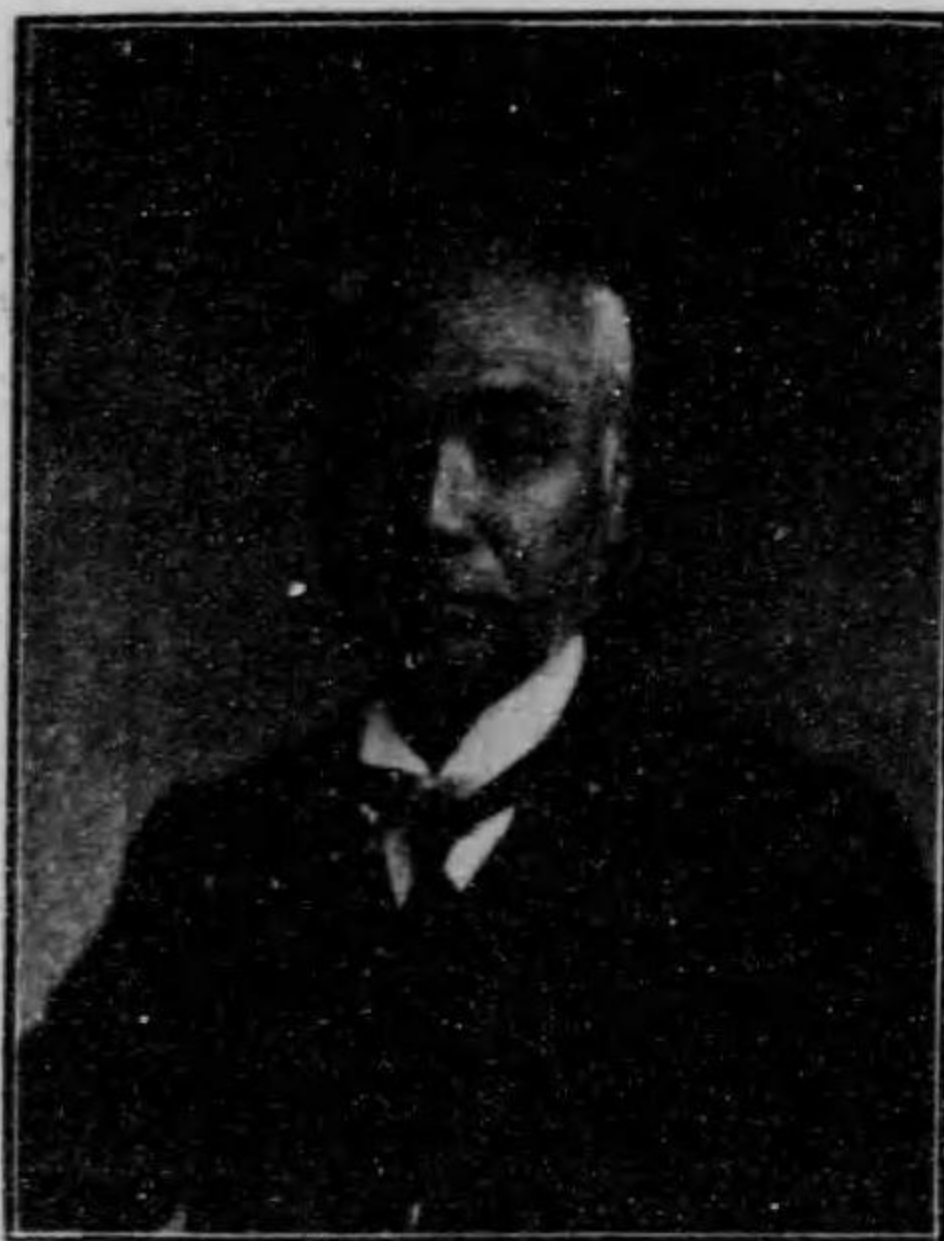
氏は兒童訓練上に教育勅語の旨を奉戴せしめ、特に勤勞を貴び、公德を重んじ、忠實に進取的に活動的人物を養成せん事を期し、規律整頓を尙び、部下職員に接する極めて懇切、和衷共同其統一を失するなく、校内宛然一大家庭の如き觀を呈し、東風靄胎たるの裡に卒直なる教鞭を執る、兒童一般に教師を敬慕するの念深く、氏を嚴父として敬仰し、慈母として懐親す、所屬民の信頼愈篤く、本年一月卒業生相圖り頌德碑を建て記念品を贈呈し、以て其恩に報ふる所ありたるもの偶然にあらざるなり。』

### 鑑銘家育教

東京市柳北尋常小學校長

### 三田利徳氏

明治三十六年帝國教育會長辻新次氏は、滿三十ヶ年初等教育に従事し、功績顯著の故を以て功牌を送り、以て其の表彰と爲せり、然るに事既に十有餘年の過去に屬し、今猶鏗鏘として其の職に勵み、帝都幾千教育者の先輩として推稱せらるゝ者、之を柳北尋常小學校長三田利徳氏其人なりと爲す、蓋し利を追ひ名に走り席暖ならざる教育者の頻々たる現代に當り此人あるは、眞に鐵中の錚、綠中の紅一點として吾人の推稱措かざる所なり。



氏は嘉永元年九月を以て江戸小石川牛天神下に呱呱を舉ぐ、明治四年小學第五校句讀授を命ぜられ、翌年授業生と爲り、同七年松前小學校訓導、深川小學校訓導等に就き、同十一年柳北女子小學校訓導に任じ、同十五年其校長に進みて以來、學校の組織に幾度か變遷せりと雖も、氏常に其職に在り、以て現今に至る實に四十有餘年、柳北に勤続する事三十有六閱星霜、此間新堀尋常小學校長を兼掌する事二歳、明治十六年教育上勤勞不尠の廉により、文部省より

四等賞として康觀字典一部並硯函一個を賞與せられ、同三十五年普通教育獎勵規程に依り東京府より金員を下附せられ、其他當局並諸團體より表彰せらるゝ事數次、榮譽の至りなる哉。氏や資性濃厚篤實、思慮綿密にして用意頗る周到、常に細心なる注意を以て事に當り小心翼翼として只管過失なからん事を思ひ、慈愛以て兒童を導き誠實以て事を處す、溢るゝが如き親切を以て部下に對し父兄に見ゆる所、通常人の企及す可からざる所たり、嗚呼偉なる哉此人。』

### 鑑銘家育教



大阪府岸和田尋常小學校長  
泉南郡

### 三宅春馬氏

古語に是れ有り、弟子七尺去つて師の影を踏まずと、噫乎先哲の教夫れ美なるかな、方今此の禮容あるもの果して幾人かある、弟子の爲さざるは過弟子にありと雖も其の責の半は是れを師長に求めざるべからず、唯吾が三宅春馬氏あり、其の人格は高く其の教や嚴なり、岸和田小學校を訪ふものは、必ず其所に一道の光流師弟の禮嚴乎たるものあるを見ん。



氏は明治十五年三月を以て本郡西葛城村に生る、資性塾實、部下に對する恭謙を極むと雖も犯すべからざる威嚴亦自在り、明治卅八年三月大阪府師範學校を卒業し、其の四月本郡木積尋常小學校訓導に任じ、同年九月西葛城高等小學校訓導兼校長に榮轉し、同四十一年四月西葛城尋常高等小學校訓導兼校長と爲り、同四十三年七月遂に現任に移り、今に至りて四年を數ふ、其の間各般の教育事業に軼堂し、郡縣教育會のため貢獻する所少からず、常に本郡教員中の首班を以て目せらる偶然にあらざる也。

氏の訓育の方法は多岐に流れしめず、其の精神行爲共に徹底的たらんことを期し、其の要目を誠實勤勉規律の三項とし、之に主力を注ぎ、鞏固たる校風をなすに至れり、職員統御に就きては、自己を犠牲にして職員の過失を他に洩さざるの一事あるのみ、施設の方針は其の大綱を示し職員の見を尊重し、職員をして其の手腕を振ふに便ならしむると同時に、自發的なるが故に若し其所定の方針を遵守せざる時は嚴責忽ち下る秩序整然統一以て範と爲すべし矣。

### 鑑銘家育教

滋賀縣葉山尋常小學校長  
栗太郡

### 三上成章氏

神速敏活なる果斷は恰かも快刀を以て、亂麻を截つが如く、資性剛健、之れを以て三上成章氏の人と爲りとす、加ふるに圓滿豐饒なる常識を存し、殊に座談に於ては獨得の技を有し、渾々として盡さず、接する人をして皆親愛敬慕の念を生ぜしむ、斯の如き天稟を有し、誠心誠意、育英の業に身を屠し、敢て他を顧みることなし、其効績顯然たる由なきに非ざるなり。



氏は滋賀縣神崎郡の人、明治四年十月を以て南五個莊村に生る、同二十五年三月同縣尋常師範學校の業を卒へ、爾後同縣神崎郡能登川同縣愛知郡豐原同縣栗太郡大石、同郡上田上、同郡金勝に小學校訓導及校長として歴任し、同三十八年六月栗太郡視學に拔擢せられ、同四十年四月東淺井郡視學に轉じ、同四十一年二月現校に赴任し、其訓導兼校長と爲り孜々教へて倦むを知らず。

此間に於ける氏の恪勤や實に敬仰に價すべきものにして氏は常に率先校務を執り、毎朝の出勤の如き概ね定刻前一時より遅るゝ事なし、而して自ら校の内外に於ける整頓並に教授準備如何の注意を以て檢し、教授をして系統豫備あらしむ、而かも部下の職務監督は最も嚴にして、一度失敗せるあるや叱責頗る峻烈、此時に於て一つの私情を挾まず、然れども一面之れに接する極めて懇切、親愛の念を失せず、所謂寬嚴度を得、程に中る、故に部下各員自ら氏に服し、氏を敬畏するに至り、學徒亦齊しく氏を仰ぎ、氏に信頼し、快心其學に勵む、眞に氏の如きは得易からざるの教育者と謂つべき也。』

### 鑑銘家育教



熊本縣 滑石高等小學校長  
玉名郡

### 三池弘氏

黜陟褒貶の境を去りて、遠く恬淡高雅の域に就き、俗塵を去る真に三千里外、三池弘氏の若く清  
爽なる士は甚だ少なし、氏や氣宇曠大にして、能く人を容るゝの雅量あり、而して専心育英の業  
に精勵し、利を忘れ、寡欲にして而かも心胸より湧き出づる、敦厚溫藉なる和風は以て人を動かし  
人を感じしめ、一度氏の風姿に見え、聲咳に接する時は、兇漢黠奴も之に服するの風あり、真に得  
易からざるの人格者にして又稀なる教育家なる哉。



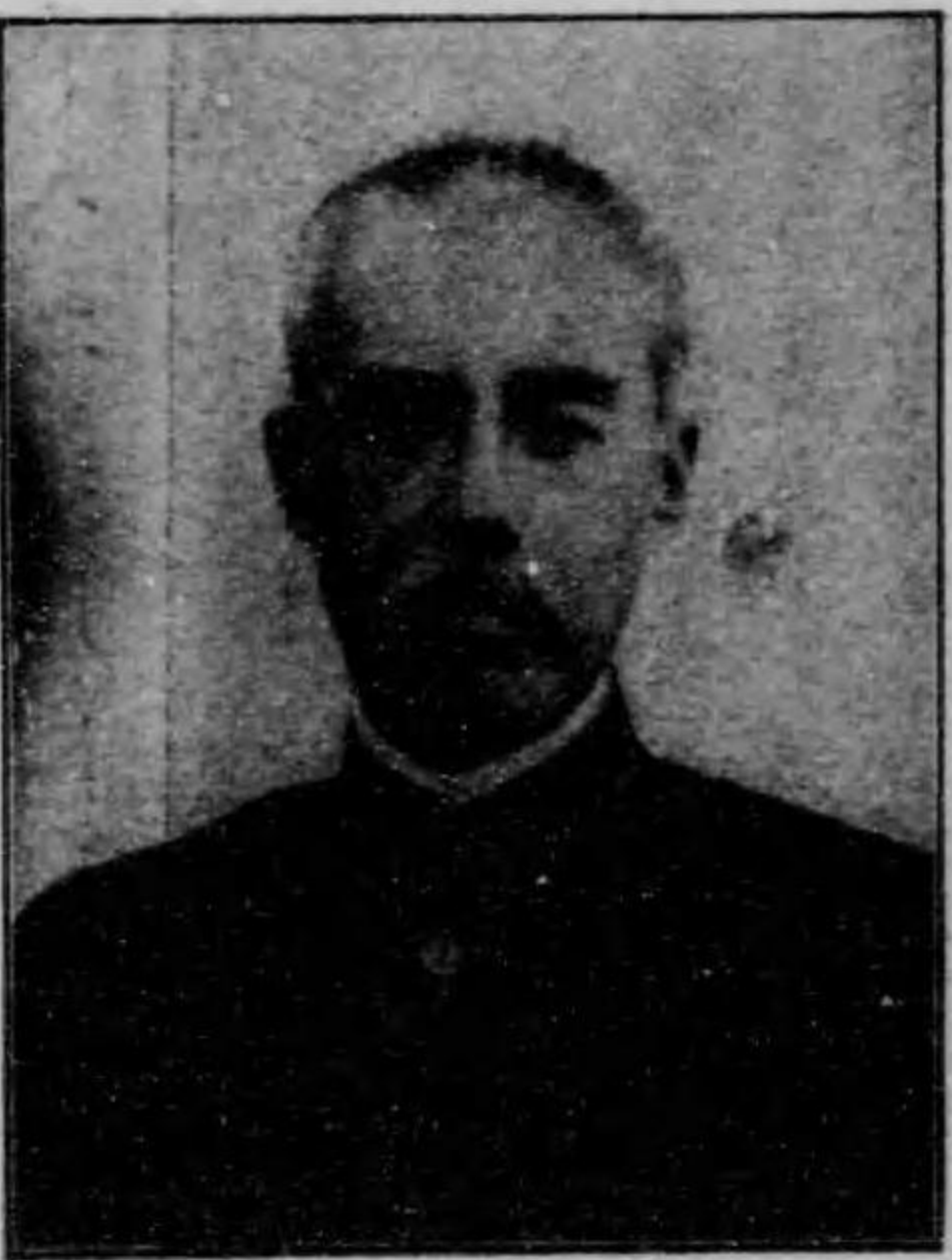
明治八年三月熊本縣玉名郡月瀬村の地、氏を生む、同三  
十年同縣尋常師範學校卒業、同縣玉名郡玉名高等小學校訓  
導に任ぜられ、同三十五年同郡山北尋常高等小學校長に榮  
轉、同四十一年大濱尋常高等小學校長と爲り、大正二年現  
任と爲れり、此間郡設教員養成講習會講師を囑托されし事  
前後五回、各科の講習證明を得たる二十三回職務勉勵及び  
成績佳良の賞與を享けし事十有二回、郡教育會より功績頌  
状を受けしこと七回に及ぶ、履歴は自ら其の人を語る、以  
て如何に氏が熱誠にして匪勉なる偉材かを窺ひ知るべきなり。  
氏や至誠と、力行との二徳目を以て信條とし、之れを以て兒童訓育の根源と爲す、部下職員をし  
て此精神の涵養を促し、以て兒童のため生きたる模範を示すべきを期す、別に漢籍研究、武道獎勵  
を圖り、殊に春秋二季に於て職員旅行を奨む、或は草芳ばしき春の野邊、互に親善を盡し、互に修  
養の道を談ず、校裡和氣に満ち、實績駁々として擧る亦偶然に非ざる也。』

### 鑑銘家育教

宮城縣 築館尋常小學校長  
栗原郡

### 三好昌直氏

徒らに運命の奴隸と爲り、無氣無力にして自ら振ふ所以を知らざるが如きは、直言すれば懦夫た  
るを免かれず、然れども赫々の名を求めず、過大の富を貪らず、幽溪の草花、人の見るなきに芳芬  
自から持せざる、平和にして健全に而して且つ有益なる生活に到りては、真に偉大なりと謂はざる  
可からず、現任宮城縣栗原郡築館小學校長三好昌直氏の如きは蓋し之れなり。



氏や江戸の人、安政四年正月を以て麻布六本木大久保藩  
邸に生る、明治十一年二月官立東京師範學校小學校師範學科  
を卒業し、爾來岡山、東京、群馬、福島、神奈川、富山、  
滋賀、秋田等の各縣下初等教育並中等教育に従事し、適く  
所効果を收めざるなく、一般の信頼を受けざるなし、此等  
幾多の經歷は將に國家教育界の效績者として推稱するに足  
る、吾人請ふて銘鑑の一頁を彩する所以なりとす、大正二  
年十二月遂に現職を襲ひ孜々刷新を圖りて止まず。

職を勵みて所信を貫徹し、敢て安逸に時を浪費するなし、部下に接するに頗る嚴正に、苟も私情を  
以て公事を曲ぐるの行爲あらしめず、公平以て學徒に接し、無私以て父兄校下に對し、條理を枉ぐ  
る者あれば諫言以て反省を促がし、時に或は人に疑はるゝと雖も、只正道に努めて怖るゝなし、然  
れども一面慈情に富み、後進の指導誘掖に全力を傾倒するあるを以て又能く人に愛せらるゝ、今や老  
齡耳順に近しと雖も鏗鏘として益々奮勵を増す、氏を得たる本校は勿論縣教育界夫れ多幸なる哉。』

### 鑑銘家育教



廣島縣刈田尋常小學校長  
高田郡

### 水無瀬徳太郎氏

常に兒童中心主義を持ち、忠孝の道義、人格の修養に重きを置き、堅實なる國民の養成を理想とし、適く所效績を挙げ、令聲を謳はれ、高田郡教育會の如きは有效章を贈りて表彰し、且つ教員練習會、講習會等に幹事或は副會長若くは會長に選任せられ、郡内の重鎮として教育者間に推稱せらるゝ人、之を現任廣島縣高田郡刈田尋常高等小學校長水無瀬徳太郎氏と爲す。



氏は本郡刈田村の人、明治七年二月の誕なり、資性温厚篤實にして忠孝の心深く、熱心以て職務に服し、圓滿能く人と交はる、和歌に長じ詩文に巧みなり、明治廿八年廣島縣師範學校を卒業し、土師尋常小學校、高田郡第二高等小學校等の訓導を経て高田郡書記に移り、次て同郡篠川高等小學校訓導に轉じ、後同郡吉田尋常小學校長に榮轉し、同四十三年現校長に就き以て現今に至る。

氏の吉田に在るや學校の改善に努め、職員兒童の智徳を進め、風儀を矯正し就學を督勵し、父兄會母姉會青年會を組織し、且つ青年會殖林、學校基本財産積立を創設して一般の信賴を蒐め、現校に入るや、忠孝勇敢親切勤勉禮讓を基本とし校訓を制定して忠孝努力の範を示し、職員兒童の風儀は勿論一般村民の風教を改善し、内は清潔に勵み事務の敏捷を計り、學校及地方をして一變せしむるに至る、其他夜學會の勵行、學校の改築、圖書器械の充實、學園農園の完備等、其の施設經營する所極めて多く、職員兒童は心服し、校下父兄は尊敬す、眞に教育的人格高き人と謂つべし矣。」

### 鑑銘家育教

愛知縣紅葉尋常小學校長  
名古屋市

### 水谷清氏

男子志を立つる須らく大なるを要す、山鹿素行の所謂「志氣といふは大丈夫の志す所の氣節を云へり、大丈夫たらんもの一度志を建つるや、其の爲す所學ぶ所皆至て徹にして、大なる器にあらざるなり」とは、夫れ之を語るか、教育者が子弟を教ゆる、將に大丈夫たるを以てすべし、水器は用を便ずること尠なくして却て身を誤まるの基たるべし、説苑に言ふ「寸にして之を度れば丈に至つて必ず差ふ、銖にして之を稱る石に至つて必ず過る」と、



宜なる哉、我水谷清氏は能く言ひ能く行ふの人、然れども理想を決行するに猶幾多之に伴はざるものあるを怨むと雖も、體備はりて理想なきに勝る事數段。

氏は本縣の人、明治六年を以て西春日井郡に生る、明治二十七年縣師範學校を卒業し、以來郡に市に、數校を経て同四十二年現校長に就き以て今日に至る、此間或は校長を輔けて校風の振作に努め、或は職員を督して刷新を謀り、到る所令聲を博するもの、至誠勤勉の徳に由らざるなし。

氏や頭腦明晰にして學に篤く、能く内外の書を涉獵して蘊蓄殊に深し、事務を處理する事亦綿密を極め整然たるものあり、氏亦辯舌を能くし、風發の論人をして傾聽せしむ、其説く所條理に適ひ、論ずる所極めて高遠なり、文筆を嗜み、現に市教育會雜誌編纂委員として、正確の論説亦斯界稀に見る所なり、先年「大日本神典釋義」を著はして世に公にせり、蓋し鐵中の錚、綠中の紅、今之を氏に見る、要するに氏は勢力の人、手腕の人といふを得べし、氏夫れ壯なる哉。」

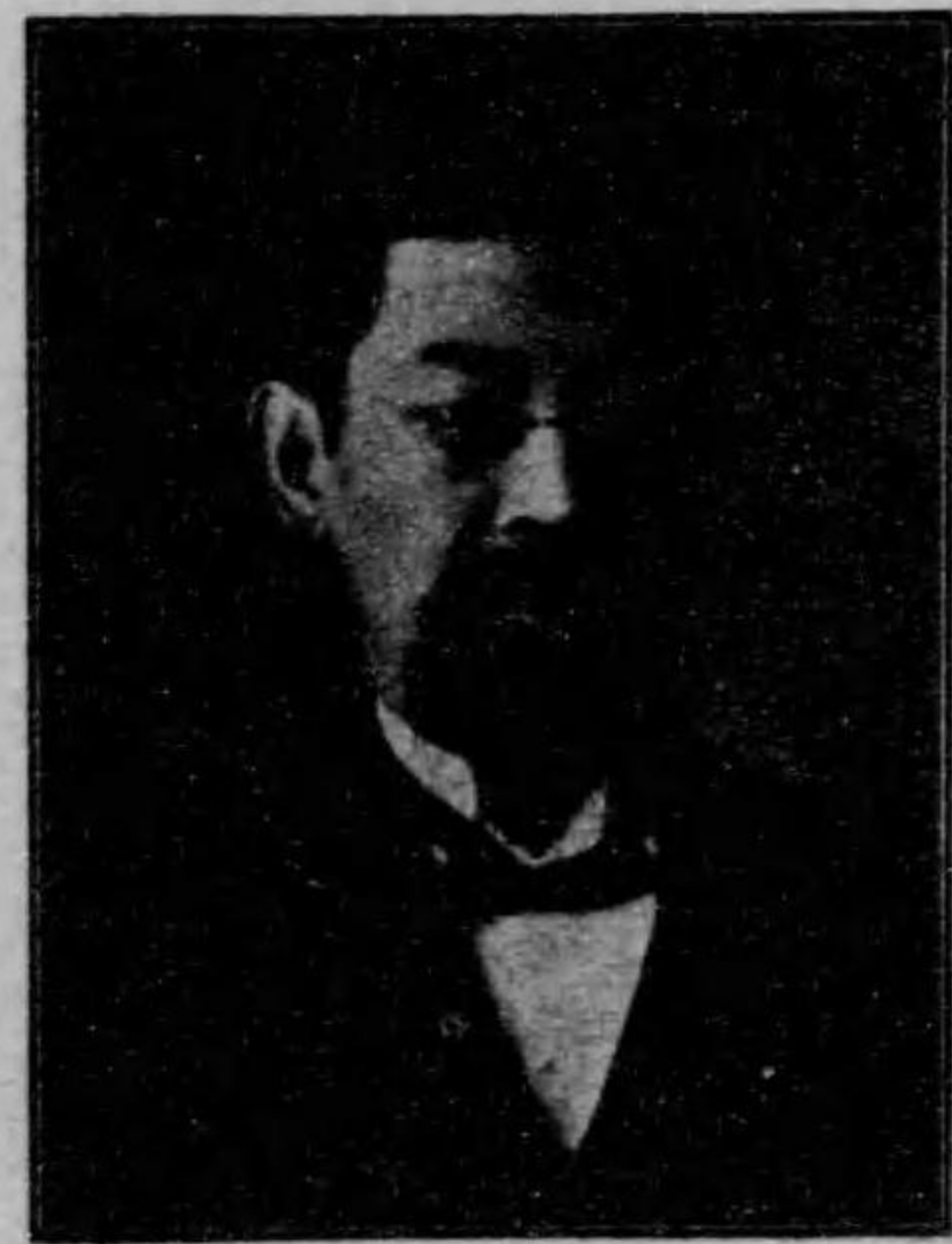
### 鑑銘家育教



長野縣 福島尋常小學校長  
西筑摩郡 高等小學校長

### 三村 傳氏

沈着剛毅の素質を具へて、而かも温厚篤實の性を加味し、事を處すること苟且渝安の態なく、一旦決するあらば斷々乎として其素志を貫徹し、利害を以て事を回避せざるもの、長野縣福島尋常高等小學校長三村傳氏と爲す、氏は文久三年十月本縣下伊那郡清内路村に生れ、後ち福島町三村家の養子となる、實踐躬行は氏の常に主張する所、温容なること實に古君子の風あり。



氏は明治十四年三月長野縣師範學校を卒業し、縣下、山本、神坂、福島、大島の諸校に奉職し、同二十三年十月再び福島高等小學校訓導と爲り、同二十六年四月兼任校長と爲れり、爾來同校に在ること茲に二十四年、同三十七年三月教育基金令第八條により金牌を授與せられ、同四十年三月日露戰役中職務勉勵の廉を以て文部省より賞金を授與せられ、大正三年二月多年小學校教育に従事し勵精其職に盡し教導感化の效視るべきものありとし、文部省の選奨を受け、本縣より金百五十圓を授與せらる。

訓練要綱を作り、諸種の施設を爲し、或は父兄會、母姉會等を催し、職員の家訪問、講堂訓話等を勵行し、各教科研究主任を設けて一回其發表研究を爲し、毎月實地授業を爲さしめ其批評會を開く等専ら其改善に努力しつゝあり、職員統御に關しては自己中心主義を採り人格の涵養に力ひ、中央線全通後は其淳朴の風を破らるゝを憂ひ、盛に質朴の良風保守を圖り、一面偏狭の氣風を打破せんことに腐心しつゝあり、感化の實益顯著なる、氏の令聲斯界に噴々たる宜べなる哉。」

## 鑑銘家育教

## 鑑銘家育教

佐賀縣 神埼尋常小學校長  
神埼郡 高等小學校長

### 溝田 芳一氏

我國文明は近時長大の進歩を來し、方に歐米を凌駕すべき勢を示しつゝありと雖も、道義の觀念は之れと逆比例をなし減退を示し、識者其前途を憂ふるに至るは何ぞや、徒らに歐米に心酔し、國體國性を顧みず、咀嚼せず、取捨撰擇を爲さず、直ちに取つて高襟風を爲すの結果に外ならず、我溝田芳一氏爰に見る處あり、先づ郷土を研究し、其の風俗、其の人情、其生業に鑑み、一定の主義



綱領を以て、國家教育の完きを期す、蓋し當然而已。

氏は本郡仁比山村の人、明治十二年一月に生る、同三十三年縣師範學校を卒業し、直ちに神埼高等小學校訓導に任じ、同三十八年三田川尋常小學校長と爲り、同四十年東脊振尋常、同四十一年東脊振尋常高等各小學校長を経て、同四十二年現職に就く、此間或は各府縣へ出張して教育施設の調査を遂げ、或は帝國教育會夏季講習會に於て教育化學及歐米教育制度の講習を了する等其修養する所多し、當局者の旌表を受くるに至る、宜なる哉。

資性率直、誠實にして頭腦明晰、知識該博頗る經驗に富む、其職を奉ずると忠實熱心、部下を御する寛嚴宜しを得、能く職員兒童の信頼を受け、歴任の學校に於て、常に好成績を贏ち得たるもの、豈偶然ならんや、鍛鍊實行を主義とし、土地の狀況に鑑み、誠實、協同、進取の三要目を特選し之が精神の涵養習慣の作成を方針とす、職員に對し家族主義を取り、一般村民、家庭、青年、社會の各方面には學校中心主義を鼓吹し、衆人の欽仰今や全く氏に集まる、亦人傑なる哉。」



鑑銘家育教

宮川富次郎氏  
大阪市高津尋常小學校長

110110  
宮川富次郎氏

國體を尊重し、歐米の文明を同化して、立憲治下の良國民を養成するは教育者の任務なり、故に世の流行に附和雷同するが如き薄志の徒を造出すべからざるは勿論なり、智や高く、徳や廣く、體や健にして始めて教育の効果を收め得たるものと謂つ可し、我宮川富次郎氏の抱負や蓋し是れ。

氏は愛知縣の人、明治十六年十一月を以て渥美郡福江町に呱聲を擧ぐ、明治三十七年愛知縣第一師範學校を卒業して郷里福江町及名古屋市に於て小學校訓導の職に在りし事二年有半、後東京高等師範學校に入り、同四十四年三月其の本科博物學科を卒はり、直ちに大阪市難波尋常小學校訓導に任じ、翌四十五年現校長に榮轉す、中等教育を避けて兒童に接す、樂み此中に在る乎。



氏人と爲り深慮果斷、事に當りて動せず、動中靜在り靜中動あり、大事に明にして而も細事に詳なり、氏に特長とする所四あり、曰く學殖富贍、曰く識見高卓、曰く着實熱誠、曰く敢行實踐、蓋し偉材たるを失はず、其の現職に臨むや、孜々として内容の充實に力を用ひ、先づ職員のお朽淺慮の輩を整理せり、然りと雖も私人として且つは社會政策上よりして多大の同情を有しつゝも良教育を施さんと欲せば教育者を選択せざる可からず、爰を以て國家の憂を先途として一大革新を斷行したるなり、今や眞に優良の優を蒐め國民教育の衝に當らしむ、然れとも教育の事其の效や永遠に期せざる可からず、且つ人は怠眠を貪り易きが故に益々奮勵部下の指導に努力す、氏春秋に富む前途の有望量る可からず焉。」

鑑銘家育教

鹿兒島縣岩川尋常小學校長  
峰守利親氏

110111  
峰守利親氏

兒童教育の手段は區々にして全國歸一する處なし、蓋し風土人情の相違亦止むを得ざるなり、現任鹿兒島縣贈嶮郡岩川尋常高等小學校長峰守利親氏の採る所亦他と趣きを異すと雖も、畢竟兒童教化の上に且つ地方風教の上に多大の效顯あるは信じて疑はざる所なり。



氏は明治九年十一月を以て薩摩郡東水引村に呱々の聲を擧ぐ、人と爲り温厚着實にして同情に富み、常識圓滿にして人に交はるに上下の別なし、明治三十三年鹿兒島縣師範學校を卒業し、直ちに任ぜられて樋脇尋常高等小學校訓導と爲り、克く校長を佐けて教導の任を盡し頗る令名あり、越えて同三十七年西方尋常高等小學校長に拔擢せられて任に赴くや、幾多弊習の潜伏に根本的斧鉞を加へて廓清の實を擧げ、同四十年選ばれて縣師範學校訓導に轉じ、教生の指導誘掖最も力む、同四十二年遂に移りて現職に就き、以て今日に至れり。

氏校訓を定めて、「いつも正直にあれ、たれにも親切にせよ、何事にも勇敢なれ」と教ゆ、而かも體操を中心にして職員兒童の元氣を鼓吹す、研究教科を職員に分擔せしめ、且つ二部に分ち各部長をして總理せしむ、毎學期一回以上學級の成績を調査して職員兒童の奮勵を促し、教育組合の組織活動能く行はれ、就學出席基本金蓄積の成績頗る良好なり、毎年三回教育召集を行ひ卒業生の知徳修養、風紀の振肅、衛生思想の普及農事の改良等に努む氏亦事務整理の能力に富み、整然群を抜くものあり、今や聲望縣下に噴々たり、宜なる哉。」



愛知縣高岳尋常小學校長  
名古屋市

### 宮田順治郎氏

人格の卑き人固より教育者に伍せしむべからずと雖も、氏は又特に高尚の人格を有し、同情心篤く、常識圓滿豊富にして、部下職員の長所短所を視るの明あり。事物の研究に熱心にして頗る篤學の人なり、加ふるに元氣旺盛にして萬難に屈せざるの氣概あり。然も至つて謙遜能く人の説を容れ校の内外を改善するの資と爲す、宜へなり教務駁々として舉り所屬民の信賴篤き。



氏は明治二十六年三月愛知縣尋常師範學校を卒業し、同縣中島郡吉田尋常小學校訓導と爲り、同二十七年四月西春日井郡北部高等小學校訓導に轉じ、同二十九年六月中島郡稻澤高等小學校訓導に再轉し、同三十二年四月名古屋市第四高等小學校訓導と爲り、同三十三年七月同市榎尋常小學校長に榮進し、同三十六年四月同市高岳尋常小學校長に轉じ、爾來十有餘年孜々營々として斯道の開發に盡瘁せらる。されば明治四十三年三月本縣小學校教員の職にありて職務に精勵し、功績顯著の廉により、金若干圓を支給せられ、

同四十五年紀元の佳節に際し本縣小學校教員の職にあり、職務に勉勵顯著なるにより、明治三十三年縣令第五十六號第九條により銀側時計一個を授けらる。氏は校内改善の方針として、九項の細目を定めて其進歩發展を計り、教員、教授案、訓練、成績家庭との連絡等を計り、又卒業生の前途にも注意す。徳望校の内外に洽く部下職員の一統、生徒の教師を敬慕する深き稀に見る所、蓋し中京の一大教育家たり焉。』

## 鑑銘家育教

沖繩縣宜野灣尋常小學校長  
中頭郡

### 宮原一朗氏

氏資性穎敏、進取の氣象に富み、百折不撓效を見ずんば止まざるの概あり、讀書を好み心理教育倫理生理の諸學說に精通し兼ねて數學の研究に努め、餘暇社會教育青年教育に力を致し、往年宜野灣村の優良村に列したる、固より村當局者の所置宜しきに依るは勿論なれども亦以て宮原一朗氏の教化徳風の偉大なるに起因せずんばならず、教育者の任務亦爰に至りて完き乎。



氏は鹿兒島縣鹿兒島郡伊敷村の士族、文久元年六月能本に生る、明治十五年試験を経て教員資格を受得し、沖繩縣師範學校雇と爲り、爾來國頭、座間味、那覇泉崎、那覇、王城各校の訓導に歴任し、同二十六年玉頭尋常小學校長に轉じ、同三十一年王城尋常小學校長に、同三十四年文喜高等小學校長兼眞壁尋常小學校長に、尋て北谷尋常高等小學校に轉じ、同三十九年現校長に就く。

氏の沖繩教育に従事せし初時は廢藩後日向淺く、諸種の施設經營上に於ける慘憺たる苦心は實に名狀すべからず、奮勵努力校務漸く其緒に就くを得たり、玉城奉職の際は本縣下教育の激烈なる變遷時代なりしが、能く管理者を助け父兄を導き、企畫經營宜しく就學兒童の激増を來し、校舍新築の完成學校の基礎確立し得て、縣より一等賞金に預り、次で眞壁校亦一等賞を贈る、其の現校に來るや本村比較的富裕なるにも拘はらず、教育の進歩遅々振はず、氏熱誠村民を説き誘導を怠らず、遂に現今の成績を見るに至る、文部省始め縣郡其他の旌表四十五回、大正三年文部省更に選奨す、榮譽なる哉。』

## 鑑銘家育教



鑑銘家育教

之部

新潟縣南蒲一ノ木戸尋常小學校長  
原郡三條町

三 上 春 行 君

溫潤真摯玉の如き性格を有し、己を持する恭敬恪勤、自ら攻めて他を問はず、寛容部下に接し、聊も城壁を設けず、待つに家族を以てし、「當校職員間は家族的なり」とは新任者に對する言の一端なり、多年部下に在るも未だ其の叱聲を聽き聲色の動くを見ざるとは異口同音の讚辭たり、學區民亦等しく師表と仰ぎ尊崇措かざるもの之を一ノ木戸小學校長三上春行氏と爲す。



氏舊高崎藩士、嘉永五年七月に生る、濃厚篤實にして謙讓の徳に富み、躬行實踐範を校の内外に垂る、明治六年本校授業生の職を奉じ、同十年訓導と爲り、同二十年校長に進み、爾來今日に至る四十有二年、現に其職に孜孜として甞め、諄々として説き、永年替らざる眞に一日の如く、郷貫三代相傳へて師と仰ぐ、出ては郡教育會の創設發展に盡瘁して之が會長たり、入つては帝國修身書を編纂すべく操觚の勞を採り、以て風俗の改善、人心の作興に努む。訓練は必ず實行し得らる可き事項を取り、師の命令は如何なる場合と雖も絶對的實踐の心事を養ふを先務とし、正直、節儉、公德を其要目とす、指導は自發に如かず、自發は感化に及ばず、而して感化は教師の人格に基づく、故に人格修養は教育上最善方法なるの信念を有す、學區内鍛工及染色の徒弟多く、風俗を紊し、素行治らず其惡果大なるを慨し、夜學校を開きて道徳的訓練を與へ、文武會、進正會、立身會、共學會を設け、卒業生の教科補充と共に剛健思想の養成に力む、又徒弟談話會、教育點呼等地方風教に資する大なり、嗚呼老師壯なる哉。」

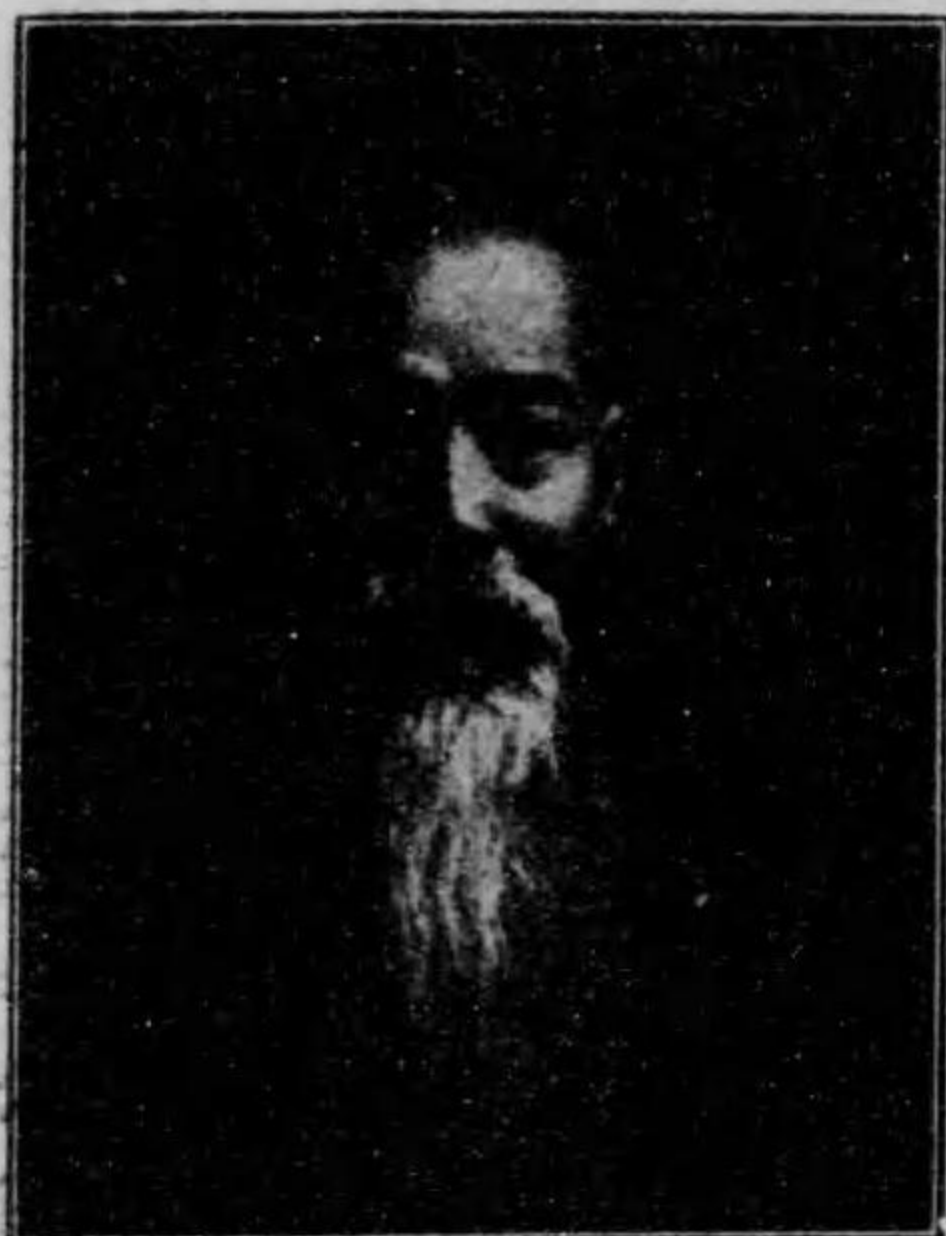
10114

鑑銘家育教

兵庫縣  
姫路市野里尋常小學校長

三 森 元 良 氏

清廉なる氣品、宛も一輪の水仙華の如く、至醇なる感情、宛も爛漫たる櫻花の如き人、之れを三森元良氏と爲す、氏や加ふるに教育的信念頗る深く、此聖業を以て自己の生命とし、未だ嘗て他を顧念せし事なく、専心其職に盡瘁し、眞に一日も寧處せざるなり、人格者の徳化、四隣に及ぶは、風、風に乗るよりも疾し、校風燦然として擧り、實果大いに見はる、又宜なりと謂ふべし。



氏は萬延元年九月、姫路市五軒邸に生る、長ずるに及び神戸師範學校に學び、螢雪の功空しからず、明治十二年、同校の業を終へ、縣内美囊郡三樹小學校に其熱誠なる教鞭を振ふに至り、翌年、可恨二豎の來り犯す所と爲り、退職大いに靜養に盡し、病漸く癒えて、姫路市小學校教員に任ぜられ、同二十六年七月、同市内城東尋常小學校長を兼任するに至り、大正二年、現任に轉ぜり。

實踐躬行を主として、善良なる國民性を陶冶し、時勢の進歩に従ひ、之れと並行を保ち、以て時代及國家の要求せる第二國民を養成せん事を期し、體育を重んじて、德育、智育の完成を圖るを主張し、氏自ら之を實踐し以て學童の範なるを期す、又部下職員に對する極めて懇切にして、敢て一つの障壁を設くるなく、全然意志疏通し、恰も一心同體の如く、各職員皆、氏が人格を畏敬して自ら其職に勵むに至る、夫れ人の和成りて、事遂げざるなし、校風整然、成績優良、以て四隣の範たるに足る、惟ふに朴直、寡言の士は功を修むる、極めて確たり、氏の若きは又其人と稱す可き乎。」

之部

10115



島根縣海士郡尋常小學校長

宮田澤四郎氏

至誠と云ひ、勤勉と云ひ、又剛毅と云ふ、何れも道德的國民の養成に到達する一手段に過ぎず、要は忠良なる國民たらしむるを以て教育の目的とせざる可からず、宮田校長は訓育を中心として大に忠君愛國の思想を鼓吹すと、蓋し肇國の根本道義にして、勅詔の趣旨亦爰に在りと謂つべし。

氏は島根縣能義郡井尻村の人、明治九年一月を以て生る、明治二十九年縣師範學校を卒業し、能



義郡廣瀬町小學校訓導に任ぜられ、翌年荒島小學校長に轉ず、同三十六年赤江村組合立高等小學校長に任じ同四十一年現職に就く、資性快活敏捷にして頭腦明晰頗る進歩向上の思想を有す、然も思慮深甚、事に處して英斷、事務の整理、部下の統督、青年、社會の指揮誘導に一種妙絶の手腕を有し、一に校内部の經營施設而已ならず、一般社會の改善に奮闘努力する決して尠少ならざるなり、大正三年優良小學校の賞詞を知事に受け且五十金を賞せらる。

由來海士村は後鳥羽上皇御火葬所のあるあり、且つ當國に後醍醐天皇の古事ありて歴史上の事蹟に富むが故に、是等を教授訓練に引用し、忠君愛國の精神涵養に資す、熱心、温情、權威は職員統御の方針、特に協同一致に重を置き、恰も一家族の感ありしむ、所屬民に對しては叮嚀懇切を以てし、地方改良發達の爲めに、諸般の施設を爲し、産業組合等の指揮に任ず、巡迴文庫、圖書閱覽所等を設け、大に青年社會の風紀振肅矯正に努む、青年會戶主會長、婦人會の顧問、何れも教化の指導に出てざるなし、一般の欽慕宜なる哉。」

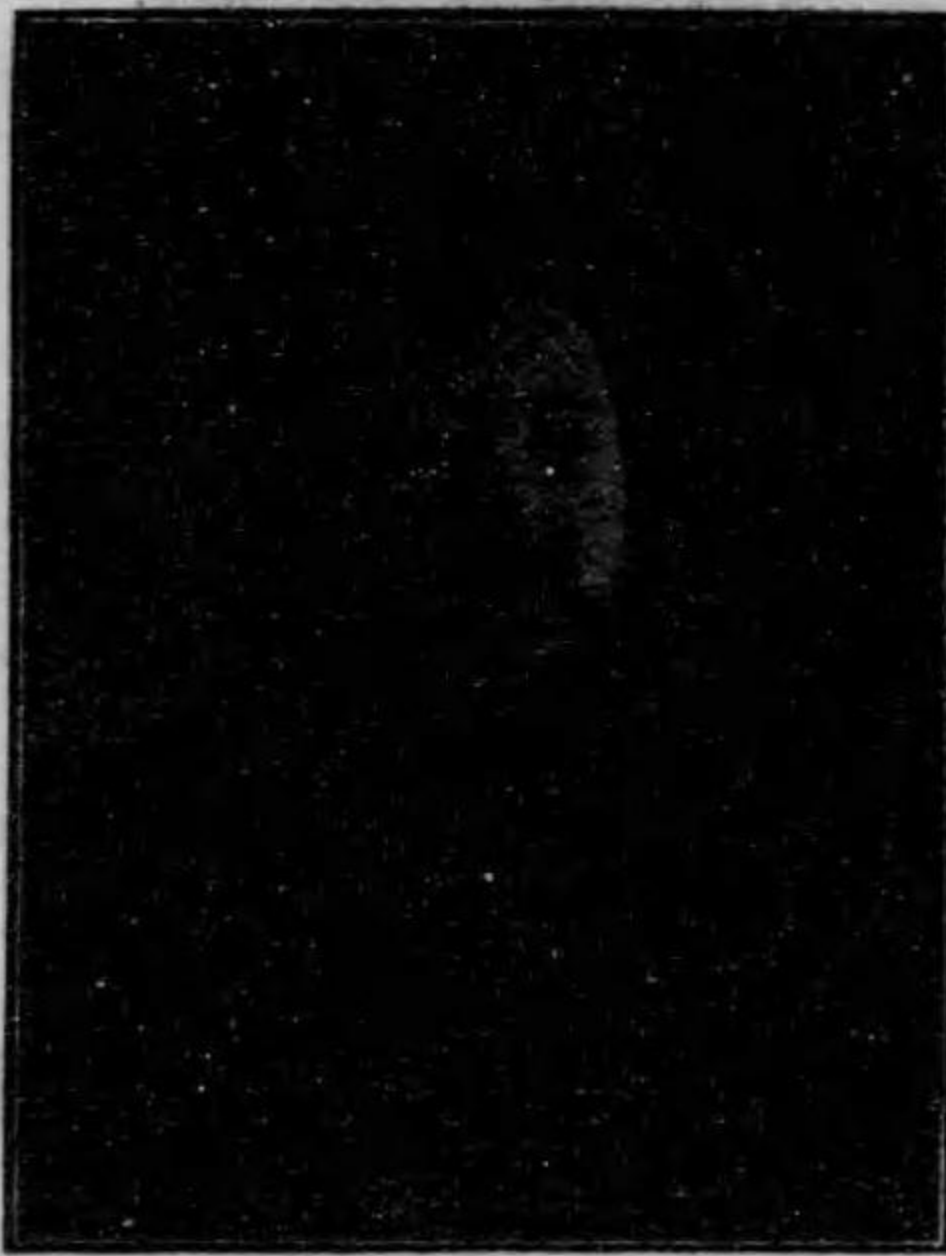
教育家銘鑑

教育家銘鑑

香川縣坂出尋常小學校長

宮崎熊三郎氏

世は頻りに日進月歩し、時勢の推移は遂に停止するなし。任に教育にあるもの常に研鑽自修して時代の思潮を洞察し苟くも社會の變遷に伴はざるの教化を施すべからず、今や歐米との交際は封建的思想を容れず、隆々たる國運を發揮して止まず、我が宮崎熊三郎氏が毎歲各種講習會に出席或は新刊書を讀破して新學說を味はひ、長短得失を咀嚼して進取潑瀾たる國民の養成に努む。



明治二年二月香川縣綾歌郡坂出町の地氏を産む、明治廿三年縣立師範學校を卒へ任を坂出小學校に奉じ、次て飯南小學校に轉じ、更に坂出に還り、同卅一年復飯南に校長たり後飯山小學校長となり附設實業補習學校長を兼ね、同四十年三度坂出に入り以て今日に至る、氏や資性溫良、英邁緻密にして熱心、其の非凡なる識徳は適く所校風を興し、聲望他に類例を見ず、以爰縣教育會、其他公私の旌表算なし就中飯山校をして縣下の模範學校たらしめ分校を設けて兒童就學の普及を圖り實業補習學校を附設して地方實業の改良を促がし勤勉職に服せり、當時補習學校は先づ飯山校を推獎せらる。

其の去らんとするや、里民は敬慕の情禁ずる能はず、金品を贈りて別離を惜む其德風察すべし、同四十二年坂出高等小學校が優良小學校の班に列するや、郡教員組合會は其の効績を表彰して銀盃を贈り、其の他日露の功勞賞、文部の選獎、縣の表彰更に又奏任の優遇を受く、嗚呼初等教育者中稀有の人格者たり功績者たり、縣民の氏を仰慕して斯界の柱石と爲す偶然にあらざるなり。」



愛知縣 額田郡 投尋常小學校長

勳八等 三宅健吉氏

船は風潮に支配せられ、人は運命に支配せらる、然れども善良なる舟子は能く風潮を支配して航海の便宜に使役し、猛志堅行の士は能く運命を左右して好運順命たらしむ、爰に於て吾人は立身之道あるを知る、而して未だ甚だ其の難きを見ず、我三宅健吉氏は自から運命を支配して遂に今日の赫々錚々の功名を得たるの人、氏を我が教育界に得たるを喜ぶと共に、氏の薰陶指導に浴する子弟の幸福や真に大なるを賀せざるを得ず。



三年従來の効績を思召され、特に擢んで、勳八等に叙し瑞寶章を下賜せらる。氏は温厚醇朴なれども操志最も強く、卓然時流を抜くの見識を有し、拮据黽勉能く自からの修養を怠らず、以爰頭腦常に他に一步を先んじ、亦能く運命を自から指揮す、職員は喜んで其部下に働けり、學徒亦均しく其の訓諭教導に従ふ、校風の振作する事る當然の數なり、氏亦社會の改善に意を注ぎ、青年其他の指導誘掖に竭す事最も大なり、嗚呼氏や真に偉なる哉。」

鑑銘家育教

山形縣 米澤中學校長

從五位 勳五等 下平忠良氏

近來物質的科學の進歩著るしく、人心益名譽利録に狂奔し、人として生存する利を得るにあらざれば名あるのみと、不知我國固有之日本魂に於て毀傷する所鮮少なからざるを、今や我高等學府たる帝國大學卒業業者中、一般に自己の售口を探すに汲々たり、其間富家の入夫と爲り嗣養子と爲る者多きは敢て咎むる所にあらずと雖も、勉めて利祿名譽を探求し、之が爲め自己が多年螢雪の功を水泡に歸するも顧慮する所なく、得々之を以て誇りとし競つて以て唯一の名譽と爲し、寧ろ就職を賣錢奴に求めて使役せらるるを甘ずる者尠しとせず澆季の世なる哉、利祿に淡如たる我下平忠良氏大に愛に見る所あり、慨然身を教育に投じ専ら忠良なる我國民性の涵養に盡して勞を知らず。

鑑銘家育教

明治元年正月山形縣此君子人を産む、明治十六年帝國大學法政政治學科の學業を卒へ、最初内務省屬官と爲り、同二十八年會計検査院検査官補に任ぜられ從七位高等官六等に叙せらる、同三十四年内閣恩給局審査官に同三十九年日露平和克復に當り戰役中の功勞を以て勳五等に叙し、雙光旭日章及金千圓を下賜せらる、同四十五年高等官四等に陞り名聲赫々大に將來に颯望せられしも疾を得て退職す、特旨を以て從五位に陞叙せられ専ら療養に力めたるを以て忽ち健康舊に復したるも復た出でず、身を教育界に投じ將來邦家有用の人物養成に趣味深きを信じ大正元年現職に就く。氏人と爲り率直毅朴其大學を出て官界に在る多年、而も氏の人格は教育的態度にして寧ろ教育界の模範人格者たるに恥ぢず、軍人界より出て、學習院長と爲り其效績顯著に教育界の目を驚したる乃木將軍に類似したる歟の批評縣下斯界に噴々たり、吾人氏に望む氏の將來は只管我國忠良の日本國民養成を盡瘁し益々斯界に改善的模範を垂示せん事を、氏の如き學識高く徳望縣下に洽ねき人格者を得たる山形縣教育界多幸なるは勿論、天下教育界の至幸と謂はざるべからず氏努めよ。」



長崎中學玖島學館長  
縣立

澁江小摩策氏

世界は智徳の戰場なりとの立言は近時益々深酷に感ずる所、此の戰場に於て、完全なる智識を磨き、高潔なる徳操を具へ、且つ強健なる體軀と、不撓不屈の奮闘的精神とを有する國民は、所謂優者にして、常に勝利を得、智識の發達不完全にして、徳操低く、所謂野蠻の状態に近き國民は、常に劣者の地位を離るゝこと能はずして敗を取る、ア、教育や夫れ努めざるべからず、現任長崎縣立



中學玖島學館長澁江小摩策氏終始健闘的態度を以て育英に當らるゝもの、實に吾人の感喜措く能はざる所とす。』

氏は長崎縣東彼杵郡大村の人、明治四年十二月を以て生る、人と爲り頭腦明敏にして度量濶大、外觀甚だ濃漠たるが如くにして實は最も要領の緊如たる人、平素質素にして炎天に洋傘を用ゐず、寒風に外套を着けず、躍々の氣自ら然らしむるか、明治二十九年七月東京帝國大學文科大學を卒業し、群馬縣尋常中學校教諭、愛知縣第一中學校教諭、埼玉縣熊谷中學校長、長崎縣立中學猶興館々長等を経て、同四十四年六月現任中學玖島學館長と爲る爾來孜々營々教務の刷新を圖る。

山口德基高等女學校長  
縣立

正七位  
勳六等

清水猪六氏

凡庸は一事に成功して之れに安んず、然れども大なる人物は更に進取の氣を斷たず、現任山口縣立德基高等女學校長清水猪六氏の如きは眞に大器なり、世の小成に安んずる小人輩の思ひ及ばざる所なりとす、我國幾十萬の教育者中獨り氏あるのみと斷言して憚からず、乞ふ氏の經歷に見よ。



氏は山口縣の人、文久三年九月を以て生る、幼にして同人社に英語を學び、明治十五年東京師範學校小學師範科を卒業し、長崎縣師範學校教諭に任じ、附屬小學校主事たり、後小學校教員學力檢定委員たる事四回、又小學校教則取調委員を命ぜられ、同十九年縣第一高等小學校外三校の校長を兼掌し頗る令名あり、翌年高等師範學校訓導に拔擢せられしが、其翌年志更に一步を進め高等師範學校生徒と爲り、研鑽四星霜、同二十四年其文科を卒業し、直ちに母校助教諭に任ず、同二十八年奏任教諭に進み從八位に叙し高等官八等たり又正八位に陞る、同三十一年教授に擧げられ、同三十四年山口縣師範學校教諭に轉じ、

次で從七位に陞叙、同三十八年現校長に就き、同四十二年正七位に叙せらる。

資性濃厚敏達、意志堅硬、思慮周密にして交誼圓滿、嘗て人と争はず、部下を信任して細事を委し自ら其大綱を把る、常に淑徳貞操の婦徳を涵養せんとし女教員には殊に直接の示範者たらしめ和氣霽々一家庭の觀を以て校務に従はしむ、今や遠近氏を欣慕し慈父を見るが如くす、而して曩に官氏の功績を賞して勳六等に叙し、更に二百金を賜ひて多年の勞を選奨さる名譽なる哉。』



鑑銘家育教

シ之部

一〇四二

鳥取縣立米子高等女學校長

從七位 島雄益造氏

左は内海を抱き、右は大海に臨み、清砂綠松、遠く丘岳を煙霧の中に眺め、白帆其間に點在し、風光明媚所謂山紫水明の地、之を米子港と爲す、蓋し山陰有數の商業地なり、縣當局者此地に高等女學校を設けて、女子教育の中樞たらしむ、今や島雄益造氏を其校長に聘して教化を委す、學校の所在と謂ひ、校長其人の人格と謂ひ、他の羨望する所なるも宜なりとす。



氏は資性温厚着實、至誠奉公の志厚く、拮据黽勉、能く新刊の書に親しみ、研鑽正確遂に試験を経て中等教員の資格を得、猶益々智識の啓發に努む、其の穩健なる教育思想は常に着々として効果を擧げ、機運作振に預かる所多し、着任以來頻りに家庭との聯絡を圖り、婦人會、父兄會、其他機會毎に校下民衆に接觸して學校教育の精神を會得せしむ、由來米子の地風俗醇朴にして儉素の心に富む、其長を支へ短を矯めて以て他日の良妻賢母たらしめん事を期す、効績蓋し將來に俟つ矣。」

氏は鳥取縣の人、明治三年三月を以て其郷に生る、明治二十一年鳥取縣師範學校を卒業し、任を弓濱高等小學校訓導に奉じ、同廿六年普通免許狀を授けらる、同廿七年河村郡高等小學校訓導と爲り翌年同校長に進み、同三十年東伯郡河北高等小學校長に榮轉し、更に西伯郡視學に擢んでらる同三十二年辭して巖手縣師範學校教諭心得と爲り、翌年修身科中等教員免許狀を受領す、此年舍監を兼ね、同三十五年教育科免許狀を受領す、同三十七年鳥取縣立高等女學校教諭に轉じ從七位に叙せられ大正二年現職就任。

鑑銘家育教

シ之部

一〇四三

大分縣立農林學校長

正七位勳六等功五級

篠崎眞秀氏

冬期は萬物枯落し、一陽來復の下地を爲すの季節、單り其の眞率、嚴肅、慘愴、能く駘蕩の春光と反襯するが爲めに愛す可し、蓋看よ滿眼の生意は、層氷積雪の裡に隱約として發動するの機を待ちつつあるを、冬期は萬有が内部の生活となすの時にして、萬有の一なる、或は萬有の長たる人間に於ても亦然らざるを得ざる也、今や篠崎氏來りて本校を見る、發動の機更に將來に潜む。



大分縣立農學校教諭に任じ、次て正七位に陞叙、大正二年現職に就く。

氏は資性英邁にして謹直、嚴然たる信念は人格を崇高にし、富贍なる學殖は總て學理と實際とに符合し、慈愛ある誘導は學徒部民の信賴を受く、氏は亦部下に接するに温情を以てし、能く其の人格を信任す、現任日尙淺さも、冬期の春に對するが如く躑躅て潑瀾たる生意を顯はし、農林業の改良發展より、地方風教上の諸問題に至る迄、成果顯然たるに至るや必せり、氏夫れ努めよ。」

明治三年八月鹿兒島市西千石町氏を産む、夙に笈を北海道に負ひ、層氷積雪の裡に研鑽數年、明治三十一年札幌農學校を卒業す、直に一年志願兵役に服し、同三十三年鹿兒島縣師範學校に教鞭を執り、翌年陸軍歩兵少尉に任ず、轉じて鹿兒島縣大島農學校教諭と爲り奏任待遇を受け正八位に叙せられ、同三十五年校長事務取扱を命ぜらる、日露國交斷絶するや動員に應じ、戰闘に参加し、其年九月中尉に進み十一月從七位に陞り、滿洲各地に轉戰功あり、同三十九年功五級金鷄勳章を授けられ、勳六等に叙せらる、此年



愛知縣立工業學校長

柴田才一郎氏

賢を見て擧ぐる能はず、擧げて先にする能はざるは命なり、不善を見て退くる能はず、退けて遠くる能はざるは過なり、此の如きは愛惡する所を知りて而して未だ愛惡の道を盡す能はず、君子にして未だ仁ならざるものなり、賢を見て之を擧げ、擧げて之を先にし、不善を見て退け、退けて遠くるは、英明の資と果敢の意氣とに由らざるべからず、要は私情を捨て、公益に捧ぐるにあり、唯

至誠一毫の私なき者之を能くするを得、現任愛知縣立工業學校長柴田才一郎氏即ち之れなり。



氏は元治元年三月を以て長野縣東筑摩郡松本町に生る、明治十九年七月東京職工學校、即ち今の東京高等工業學校を卒業し、和歌山色染講習所、足利織物講習所等に勤務し同二十五年東京工業學校助教を命ぜられ、同二十八年文部省より、機械工科研究の爲め滿二ヶ年間獨逸留學を命ぜられ、同三十年歸朝、東京工業學校教授に任ぜらる、同三十四年愛知縣技師、愛知縣立工業學校校長心得を命ぜられ、同三十六年四月同校長兼教諭と爲る、同三十八年名古屋高等工業學校講師を囑托せらる、同四十四年十二月、多年實業教育に従事し、勤勞尠からざる廉に依り、文部省より金二百五十圓を給與せらる、物資の給以て積年の勤勞に酬ゆるに足らざるも以て官廳の信任を知るべし。

氏の部下職員に臨むや専ら家族的に毫も間諒なく、其の不善を見るや嚴命立るに來り、毒草を芟除して餘毒なからしむ、而て寬嚴宜しきを得る人格者にあらざるよりは、焉ぞ能く此に到るを得ん。」

教育家銘鑑

長崎縣三菱工業豫備學校長

勳六等 鹽田泰介氏

私立三菱工業豫備學校は彼の有名なる長崎三菱造船所の經營者たる岩崎男爵が時勢に鑑みる所ありて去る明治三十二年十月同所長に命じ創設せしものなり、其の當時の校長に致せる左の創立趣意書を以て本校の主義を窺ひ精神を察すべし、氏は之に遵據し熱心子弟の教養に従ふ。

「現今吾邦造船事業の盛衰が獨り當業者自家の損益に關するのみならず、直に國勢の消長に影響すべきは今更に言を費すを須ひざるべし、特に吾が長崎造船所の如き本邦造船の歴史上斯業の率先者として、夙に中外の認識を負ふものに在りては深く茲に鑑みる所なかる可からず、是を以て近時吾が造船所の事業逐次發達の運に向ひ、多年の經營に係る擴張工事亦將に成を告げんとするに當り、益々其基礎を鞏固にし前途業務の改良を企圖すること亦已むを得ざるに出づ。

抑も斯業の發達に付企圖すべきもの固より一にして足らずと雖も、就中其最も急務なるは熟練の手腕を有し、學術の素養に富める技士技工の養成に在りと思惟せらるゝを以て、茲に三菱工業豫備學校を設置し以て吾が造船所職員從業者の子弟を收容し、併せて一般少年の就學に便せんとす、要するに工學應用の智識を開發し將來斯業修熟の根柢を培養せんと欲するに外ならず、而して之が教導の任は造船所々屬技師技工等諸子の負擔として之に當るべく、其設備を完成し百般の要務を總轄するは之を造船所當局の主任に望まざるを得ず、希くは當局の主任深く此の意を體して努力其實効を擧げ、一は吾が事業の發達に資し併せて國家公益の一助たり」と善い哉。

氏は備前岡山の人、慶應三年十一月の産、明治二十三年東京帝國大學工科大学造船科を卒業し三菱造船所に入り造船主任たり爾後累進所長と爲り遂に校長を兼ね、日露戰役の際功勞に依り勳六等に叙す、資性聰明英智職に忠に學に篤し、克く本校旨趣の徹底を期す、今や社會の期待益加はる嗚。」

教育家銘鑑



鑑銘家育教

シ之部

一〇四六

名古屋市私立金城女學校長

シャールロット、タムソン師

確乎たる信念と、愛すべき同情心とを以て、遠く異郷の教育界に身を投じ、悠優其天職を樂しむ者尠なしとせず、然れども克く其功績を大ならしめ、一般の信頼と尊敬とを受け得たる者、シャールロット、タムソン師の如き君子人は蓋し稀なりとす、吾人の深く感謝する所なり。

師は米國の人、西曆千八百八十二年十二月を以て南カロリナ州リバイヒルに生る、千九百四年南カロリナ州ロツクヒル市ウヰンズロープ高等師範手藝學校を卒業してエビの學位を受け、又ニューヨーク府聖書教員養成所選科を卒業し、明治四十二年日本政府より高等女學校英語科教員免許狀を受得す、本國に於て教職に在る事數年、明治四十一年日本に渡來し、職を本校に奉じ、前校長エラヒューストン氏を助けて大に効あり。



師資性快活にして頭腦極めて明晰、溫容克く人を信任し、部下職員生徒悦服し敬愛して其義務の爲めに全力を竭す、敬神の念深く聖書を愛讀し、又同情心強し、其校長に就くや、献身的熱誠を捧げて校務に従ひ、早出晚退學徒の感化に力む、故に校規振肅し、校風大に揚る、師は殊に後進者の誘掖に力を盡し、之が爲には私財を蕩盡して敢て意とせず、極めて溫厚融和の精神に富み、我日本國の風俗習慣を尊重し、家事割烹の如きも、日本の中等社會の家庭を標準とす、亦能く教育勅語の精神を奉戴し、宗教と道德との調和を計り、穩健なる教育方針に依り我國女子教育に盡すを樂みとす、體育を重んじ率先運動の範を垂れ、勢力家にして自ら會計事務に當る、偉なる哉師。

鑑銘家育教

カ之部

一〇四七

山口縣下關高等女學校長

從七位 神代増作氏

墨挾み黒草紙を使用し、『凡そ地球上の人種は』を讀み、鍛心力行の教育を強制せられたる時代は既に已に過去に屬し、華燦の學制教課に教育を受くる現代は、益々光輝ある我國個有の精神を涵養せらる可き筈なるに、事實は之に反し、形式的教育に傾き來るは識者の常に憂ふる處なり、殊に近時女子の華麗を競ひ、心的薰陶の忽せなるは一般の通弊たるに非ずや、我神代氏は堅實なる意志を抱いて女子教育に任ず、吾人意を堵んじて可なり。



氏は文久三年正月を以て本縣に生る、人と爲り溫厚篤實思慮周密にして意志頗る強固なり、東京帝國大學豫備門及慶應義塾に學び、明治十八年を以て山口中學校助教諭試補を拜す、翌年縣師範學校助教諭試補を兼務し、爾來同四十二年現職に轉ずる迄二十有餘年、同廿六年英語科免許狀を下附せられて、助教、教諭に累進し、常に舍監として終始同校生徒の訓練に貢献する所大なりき、同四十四年從七位に叙せられ、爾來經營孜々其勞を忘る。

氏は恭謙の天賦を得て道義に醇く、禮節を貴び秩序を重んじ、事を處するや眞摯、畫策穩健にして中庸を得、持久堅忍にして能く終りある所謂理想的教育家にして、部下は家族的に率ひ、生徒の短所を知悉して之が矯正に腐心す、外形の美を衒ふを誠しめ、儉素力行鍛心の教化を標榜す、由來下の關の地商賈相接ぎ、華奢の風を生じ、學校教育の精神と悖る事多く、父兄亦家業に忙殺家庭教育を顧みざるの傾向を有す、然れども氏の熱誠遂に今日の美風を爲す偉なる哉。』



福岡縣 朝倉郡立朝倉女子實業學校長

島田寅次郎氏

殖産業の事は男子の専有にあらず、女子の實業的智識を涵養するは實に現下地方産業發展上の一大急務なり、蓋し社會は亦男子の舞臺にあらず一家亦然り、我當局者の女子實業教育を要望する實に爰に在り、福岡縣盛んに此種の學校を獎勵して女子の頭腦開發に力む、今や朝倉郡島田寅次郎氏を聘して女子實業學校を委ぬ、氏の人格氏の抱負あり蓋し亦適任なる哉。



氏は福岡縣の人、慶應元年十月を以て其郷里に生る、明治十七年福岡縣師範學校を卒業し、直ちに同校助教諭を拜し、同十九年企救郡小倉高等小學校長に任じ、翌年早良郡西新高等小學校長に轉じ、更に志摩郡前原高等小學校長と爲り、同二十七年普通免許狀を下附せらる、同三十年擧げられて糸島郡視學に就きしが、轉じて福岡高等小學校長と爲り、兼て市立福岡高等女學校長たり、同三十三年兼職を罷め、同四十三年現職に就き、翌年奏任待遇と爲る。

氏や幼にして聰明、遙かに群童を抜き、郷黨夙に將來に囑望せり、宜なる哉長ずるに及んで學徳愈高く、常に優良の成績を占む、資性濃厚篤實、思慮綿密用意周到にして施設經營皆能く功を奏し、他校の範を爲すもの多し、明治三十九年文部省は教育功績者として金百五十圓を賞與し、翌年日露戰役の功を以て三十金を下賜せらる、氏や普通教育に多大の貢献を爲したるのみならず、實業教育にも深き趣味と抱負とを有し、田園趣味、農村經營の智能を女子に教へつゝあり、以て地方の改良發展に努力す、令名今や縣下を壓せんとす偉なる哉。

鑑銘家育教

兵庫縣 神戸市私立神戸育英義塾長

從七位 勳五等 庄野一英氏

砲煙濛々として、天日光りを隠し、彈丸雨注して地軸爲めに撼くの裡、駿馬に鞭ち、劍を揮ひ、叱咤咆哮、遂に偉功を修め、名聲大いに擧れるの勇者、今や私立神戸育英義塾長として、燃ゆるが如き熱誠を以て、青年を薰陶し、諄々として倦む事を知らざるの人、之れを我庄野一英氏と爲す、一度劍戟を閃かせし氏が赤心は今や教鞭を振へる血誠と成れり、育英の實著々と擧る又宜なる哉。



慶應二年三月徳島市の地、氏を生む、長ずるに及び、徳島縣師範學校、徳島文學講習所、私立篤行學校等に學び、明治二十年陸軍教導團を出づ、同三十年兵庫縣立神戸商業學校に職を奉じ、同三十二年感ずる所あり、同志と謀り商業學校入學志望者の爲め數英漢學會を設立し、大いに指導誘掖する處あり、同三十五年珠算科を新設し、神戸實業界に貢献する甚だ大なり、同四十一年文部大臣の認可を得て、塾則を改め、中學程度の本科を新設し、其塾長として今日に至る、其間經營慘澹たるものありたり。

氏や資性明敏にして豪宕、意氣凜然、其炯々たる眼光は人の肺肝を貫くが如し、而かも細心寛宏よく人を容れ、部下を親愛す、眞に多からざるの人格者、殊に數理、哲學、氣象學に造詣深く、併せて事業家の材を有し、社交頗る巧みなり、日清及び日露の戰役に功ありて從七位勳五等陸軍後備歩兵中尉たるの氏は、則ち武士道の精神を其信條と爲し、質實剛健の氣風を養成するを以て其訓育方針と爲す、併せて實用的智識を授けん事を圖る、誠に稀有の偉材なるかな。

鑑銘家育教



鑑銘家育教

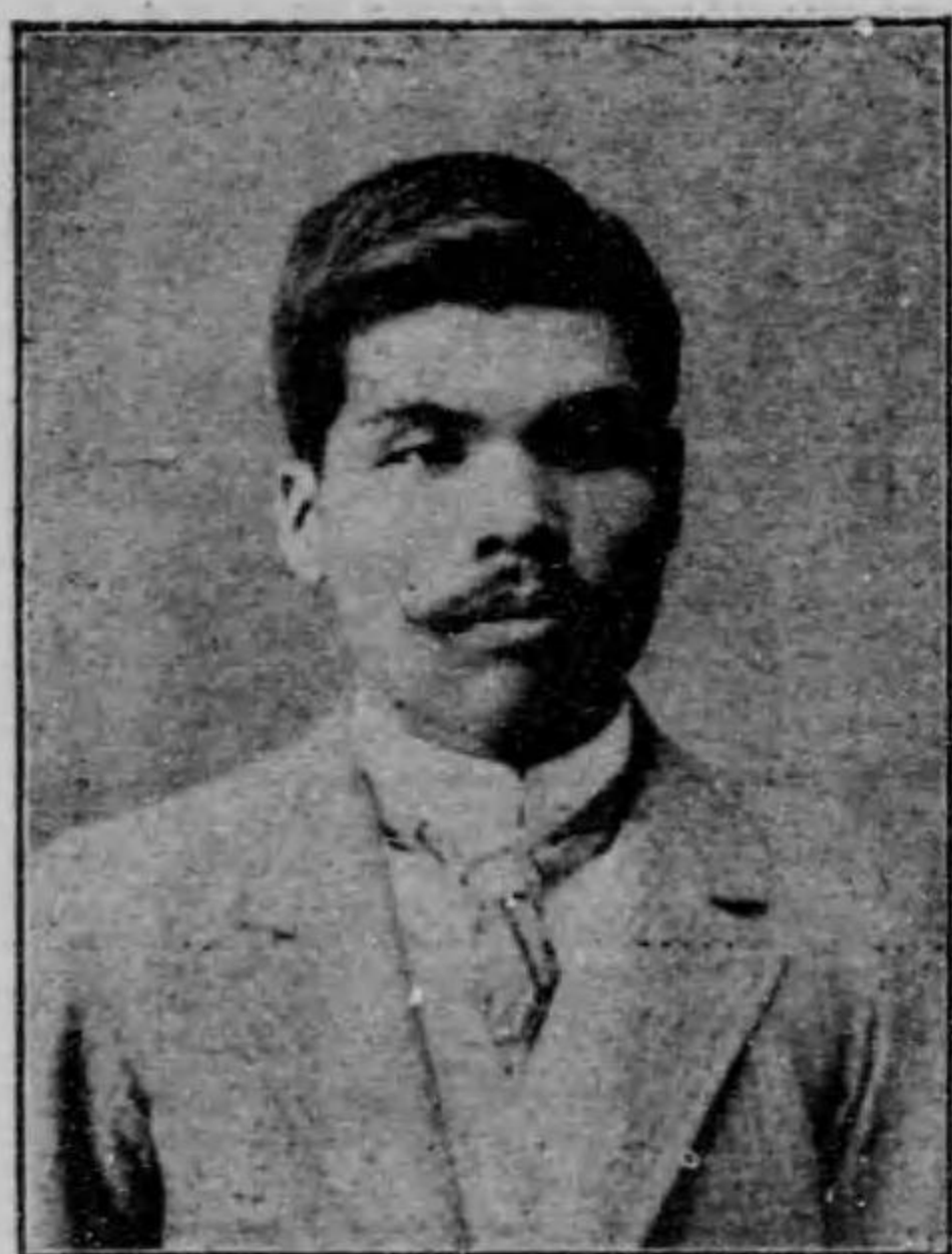
シ之部

一〇五〇

長崎縣 南高來郡 私立島原實科高等女學校主

清水作兵衛氏

烈女子を孕むや嚴正を持す、其生兒容姿端正才人に過ぐとは古賢の教也、座作凜然犯すべからず而も淑德極めて順に慈愛溢れ、家政を整へ良人をして内顧の憂なからしむるは、之良妻たり賢母たる者也、然るに一度思を我國現代の思潮に馳せんか、竦然として肌粟を押へ難し、清水作兵衛氏愛に見るあり、亡父の遺志を繼ぎ、孜々勉勵専ら婦徳を教ゆ、豈に偉ならずや。



氏は明治十八年を以て島原町に生る、同三十八年長崎縣立島原中學校を卒業し、後東京府私立高等農學校に學びしが家事の許るざるものあり退いて郷に歸る、之より先き嚴父故作次郎氏は、當時女子教育の衰微を憂へ、且つ縣下猶高等女學校の設備なきを慨し、猛然私財を投じて、女子手藝學校を興す、實に明治三十四年五月なりき、爾來社會の進運に伴ひ、校運漸次隆昌を來し、生徒の増加は校舍狹隘を告げ、同三十九年増築の計あり、天命を假さず早く病歿せり、氏乃ち銳意其計畫を踏襲せり。

氏之が振興に盡瘁し、設備を完成すると共に内容の充實に力め時代の趨勢を鑑み之を實科高等女學校に改む、而して卒業生を出すこと實に百廿三人に及べり、之が卒業後の状況を見るに、修得せる技能は巧に應用せられ、傍ら智徳の修養を怠らず、近時浮薄輕佻徒らに流行を逐ひ、奢侈虚榮を事とするの時に當り、質素勤勉品性圓滿の良婦を養成せるは、真に本校の特色にして、偏に氏の實踐躬行動儉質實、至誠努力の感化ならざるなし、氏の至孝至忠、蓋斯界の範典なり。」

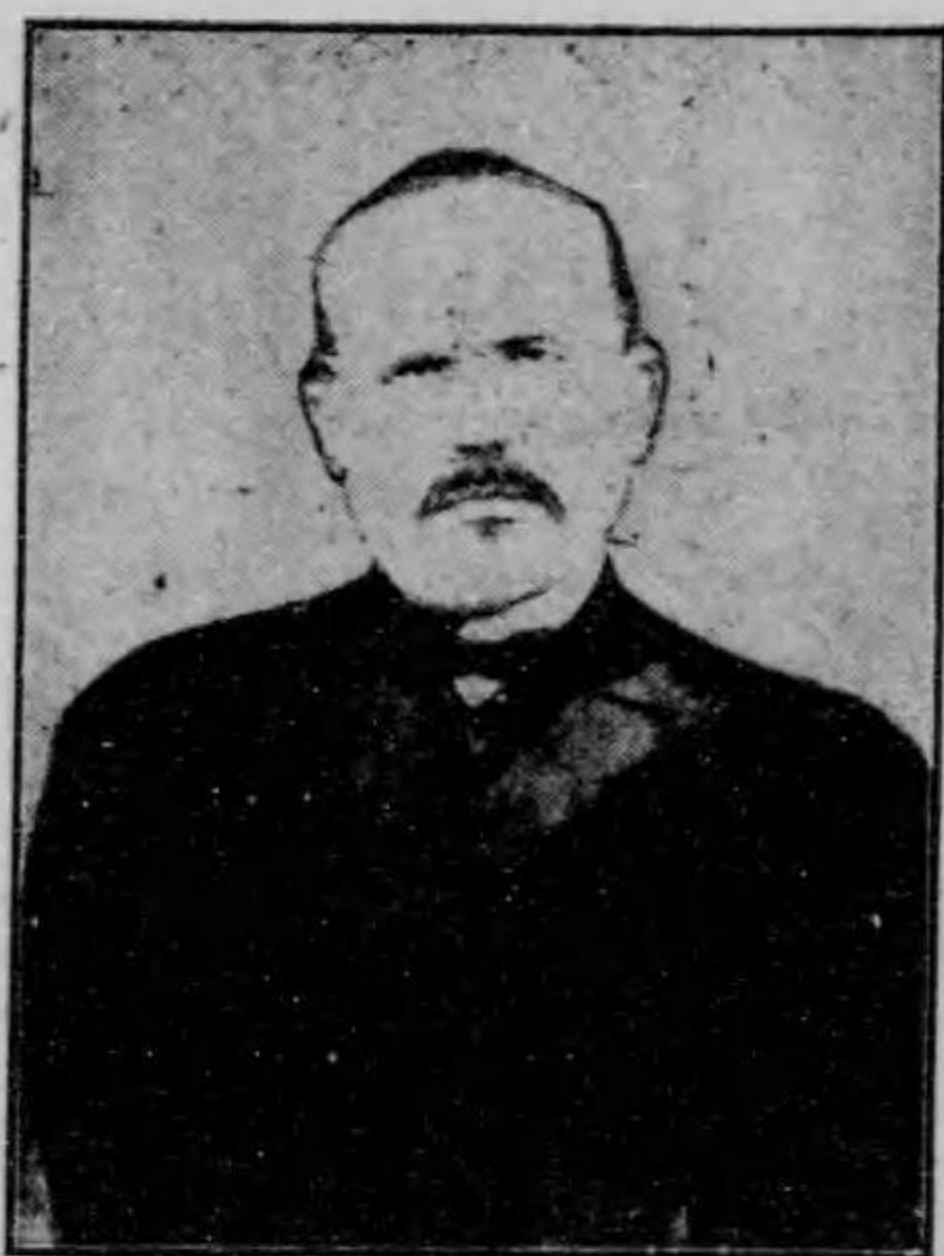
鑑銘家育教

ウ之部

一〇五一

大阪市西區江戶堀 私立明星商業學校長 Joseph Wolff ジョセフ、ウォルフ氏

大阪市西區江戶堀に私立明星外國語學校を起して以來既に十有五餘の歳月を経たり、後商業科を加へ、同市南區に移り、更に東區眞田山の高燥閑雅なる地を撰びて、三層宏麗の一大校舍を建築し甲種程度に準據し、本邦の子弟を教育して倦むなく、今や七百の學徒を收め、六百の校友を有して我國商業界に貢献しつゝある者、之をジョセフ、ウォルフ氏其人なりと爲す。



氏が佛國の温き家庭の一人に加はりたるは西曆千八百五十二年の初夏、以來十二歳迄家庭の寵愛を享く、會々教育事業の重大にして緊急なるを悟るに至り、驟然萬國教育會員たる可くマリヤ會(天主公教修道會)に入り、父母の膝下を去りて身を會長に托し、専心會則に遵ひ、貞徳、清貧、從順の徳を養ふに力め、傍ら修學智徳の補充に勵み、遂に佛國中學校教員適任證並數學獨逸語文學の教員免狀を受得して、首府巴里、白耳義、瑞西各所に教員又は校長として其の職を完ふし、千八百九十八年三月會命を以て日本に派

遣せられ、東京私立曉星中學校に教鞭を執る事少時、遂に大阪に明星校を創設して今日に及ぶ。氏は職務を重んじ、心身の淨潔を保ち、徳に逆はず清貧に甘んじ、長上に對して從順を全ふし、下に對して愛情の溢るゝを見る、資性敏智果斷に富み、苟も思考熟慮を要するものゝ外一として翌日に延べず、常に「惡」の外何物も恐れず從容たり、且つ心情を悟るに長け時に生徒の父兄智友の來訪あるや喜樂應對談笑時の遷るを知らず、今や校名と共に聲望洽宛たるもの故なきに非ざる也。」



岐阜縣 溫和高等小學校長  
捐保郡

小森秀三郎氏

規律の整頓は恭虔の意ある所、禮讓儀遜のある所なるのみならず精神の修養亦茲に存する所以故に容姿の端正に言語の方正なるは古人の教訓として重視せる所なり、今や一般に教育的國民教育學校たる初等教育學校の規律調然たる、何れの學校も然り美容と謂つべし、而も特記すべき一校あり、號鐘一度校内に響くや一千の學童直ちに定位に就き、肅然列を整へ容姿齊々歩調堂々一人の私語する者なく、一童の列外に逸する者なく肅々として教室に導かる、其様以て範たるべく以て平素の訓練如何を窮ふべく、以て校長其人の人格如何を察すべし、之を岐阜縣揖斐郡溫和小學校長小森秀三郎氏の薰陶教化に見る、蓋し其内容之に伴ふ必然たるを知る。

明治二年二月岐阜縣本巢郡北方町の地此人を産む、氏人と爲り義侠に富み、磊落にして能く人を容る以て論評に巧みなり、同二十五年縣師範學校を出て郷里北方尋常高等小學校訓導を拜し、能く其校長を輔佐し兒童の教化に盡し、其施設經營に於て輔弼の任を完ふす、居る事五年擢てられて師範學校助教諭と爲り、當時已に成績顯著に氏の錚々たる名聲は縣下教育界の推稱する所と爲り氏の教育的態度に於ける氏の人格は斯界の範と爲りたり、同三十二年迎へられて現任校長と爲る爾來勤績十有六年の久しき孜々諄々訓導教化の實を擧たる甚大なり。

氏の人格崇高、部下職員生徒は勿論、校下所屬民の信賴厚く、從て言ふ所行ふ所遺憾なく徹底して實行せらる、共和自治の方針を以て職員を統御し、總ての學科に涉りて克く其研究修養を怠らず教授術に長じ特に美術教授に於て得意とする所、各家庭に連絡を怠らず常に兒童の家庭に受くる教育に留意し、其缺陷を補ふ事多く學校教育の方針を具體的に示すを努む、尙常に青年教育社會教育の狀態に意を注ぎ、種々なる講演會其地集會を開催して以て指導を怠らず、令名噴々宜哉。」

鑑銘家育教

鑑銘家育教

愛媛縣視學

白石易太郎氏



現代文教は徒らに形式皮想に走り、内容充實を忽にす、從て五常五倫の道義を顧みざるもの滔々世を擧げて然り、恭謙讓の美は文明と逆比例の趨勢に在るは、吾人の憂ふる所、人の美點長所を賞揚し、己を空うして誇らざる資質と、頭腦明晰事務に明く、事を裁する公正、加も謹嚴にして磊落圓滿にして氣骨を存し、細心にして雅量あり、意志頗る強固にして只職務に奮闘するを知りて他を顧みず、又敢て自ら求めざるの徳を有し、任を縣視學に奉する者、之を白石易太郎氏と爲す。

氏は愛媛縣の人、明治五年九月を以て越智郡今治町に生る、明治二十七年縣師範學校を卒へ任を縣下小學校訓導に奉じ、又校長として専ら兒童化育の業に服す、同情部下を御し慈愛學徒を教へ、忽ちにして校紀張り校風興り、内外の聲望亦一身に蒐まる、氏名利に淡く常に榮達を人に譲りたるも、同三十九年擢てられて南宇和郡視學と爲り、翌年宇摩郡視學に轉じ、後愛媛縣屬に移り、同四十四年現職に就き以て今日に至る、管下教育當事者の指揮誘導總て肺肝に發し、論議亦至誠に出づ、而も自ら低きに居り、克く他人の名譽善行を慫慂す、蓋し衆の心服する所にして益々價値を増すの所以か。氏は實に小學教育に功績の大なるものあるに止まらず、教育行政の帷幄に參して大に刷新の實を擧げ、今や縣下學事の監督誘導に努む、聲望縣内斯界に噴々として一般の敬服する所、氏の徳化や實に現代の教育的模範なり、而して猶不惑の齒、春秋に富む、嗚呼夫れ偉なる哉此人や。」



長野縣西筑摩郡視學

清水菊太氏

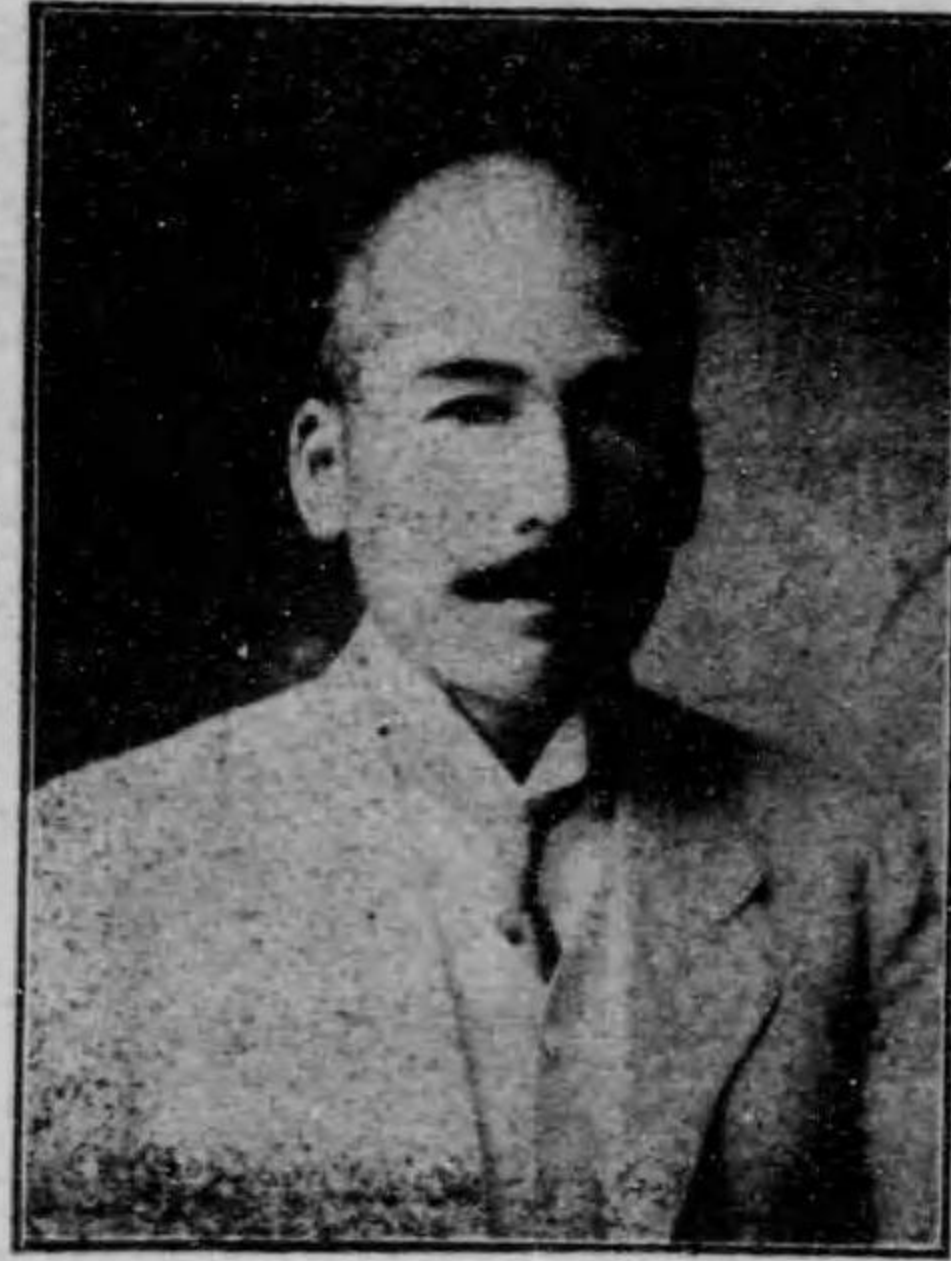


常に研鑽の良習を作り、時々刻々の時勢の推移に應ずるは、教育者の殊に意を用ゆべき所なりとす、然るに我國教育界の大勢を見るに、學問修養は單に免許状を受くるの手段に過ぎずして、一度免許状を受得すれば、既に吾事了れり焉たるの態度を以て、教科書以外、何等新智識を吸収すべき方法を講せず、得々として教壇に立ち、吾こそ教育家なり、本科正教員なりと何等修養に意を注がざるもの滔々皆然り、然るに我清水菊太氏に至りては、常に讀書を怠らず、研究を止めず、只管缺陷補足の途を講ず、其精力の偉大は以て吾人の模範と爲すに足れり。

氏は本縣小縣郡長久保新町の人、明治六年十月を以て生る、資性濃厚宏量なるも、自己の所信に對しては、一步も貸さず、勇往邁進の狀別人の如き觀あり、又極めて恪勤にして、明治二十九年以來缺勤僅かに七日に不過、明治二十九年長野縣師範學校を卒業し、直に郷里落合高等小學校訓導たること五年、此間小學校書き方手本の無系統なるを憂ひ、『尋常小學習字帖』を著し、又歴史教授上年代記憶の困難を救はん爲め、『六角形年代圖』を著せり、同三十四年上高井郡高井尋常高等小學校長に轉じ、間もなく『書き方教授指針』、『農村女子補習讀本』、『兒童瑕疵檢索表』等の著あり、兒童の農業實習、農事研究會、農業補習學校、婦人會及學林の創始等、功績大なり、大日本農會より名譽賞狀の下附ある、豈偶然ならんや、此人今や下水内郡視學より、西筑摩郡視學に轉じ、現に其職に在り、本縣教育界の爲め慶賀に堪ざるなり。

德島縣名東郡視學

鹽川久太郎氏



各種の業を執り、諸種の職に就き、以て種々の經驗を積みし人に非ずんば、人に長と爲りて充分に其效を奏すること難し、名東郡視學鹽川久太郎氏は、德島師範學校卒業の後、或は小學校に鞭を執り、或は郡役所に筆を持ち、師範學校訓導と爲り、縣屬と爲り、明治四十三年視學と爲り、同十四年四月遂に現視學と爲る、其一郡教育の首腦として、能く其事務を處理し郡内の教職員を統御監督、指導誘掖宜しきを得る知るべきなり。

乃氏が教育の方針一班を示さんには、兒童訓練に就きては事に研究を怠らず、學校を巡視する際の如き、模範的訓練教授を爲し、郡内職員をして不斷の發奮と注意を喚起せしめ、其適否を稽査し、町村の負擔能力に考察して遺憾なからしめんことを努めつゝあり。

郡内職員の勤務狀態に就きては、是を以て精細なる注意を以て公平無私の態度を失はず、嚴正なる監督を爲し、精勵の者には破格的進級の途を圖り、部民に對しては學校との連鎖に努め、學校教育の效果をして偉大ならしめんことに盡瘁し、部民の主權に係る公私の集會には務めて列席し、懇談諭示に盡力し、各學校職員及び各村落の民衆に至るまで、氏を信用し敬服して、喜悅其職に久しきを希ふ、氏は家を人生の樂園とし、家庭の團樂を鼓吹し、特に青年教育に對しては、補習教育を旺ならしめ、勤勞主義を喚起して止まず、蓋し青年は國家の中堅にして社會の元氣たり發展たる青年にあるを以てなり。



教 育 家 銘 鑑

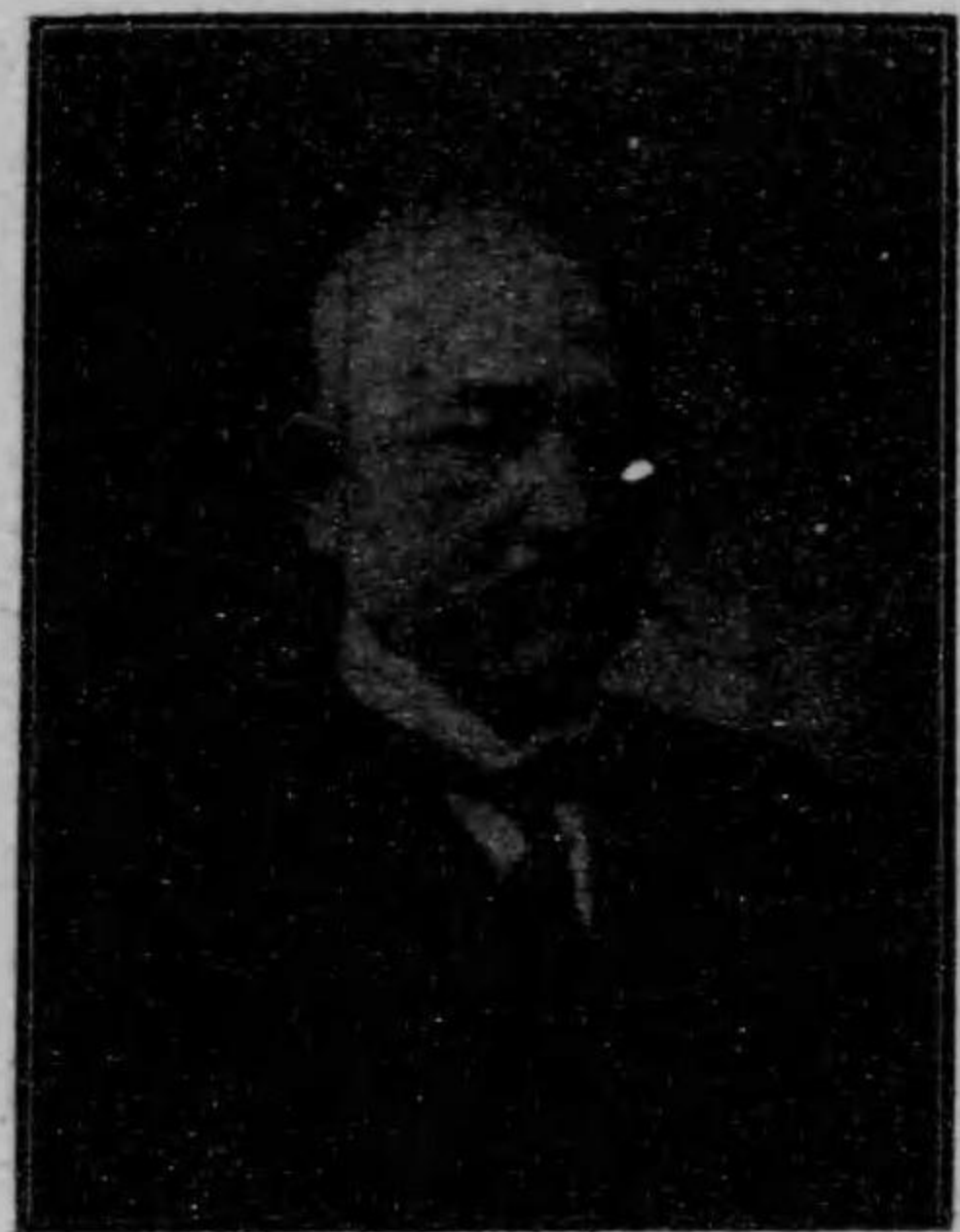
シ之部

廣島市廣島女子高等小學校長

島 勳八等 立次郎氏

一〇五六

凡そ道徳的教訓は目より入る事最も手近く、耳より入るは稀なり、殊に幼弱の兒童教育に於て然りとす、吾人は常に女子教育に對して痛切に之を感じつゝあり、夫れ女子の個有性は外界の刺激に感じ易く、模倣的性情を有するが故に、或は家庭に或は學校に、若くは社會一般の習俗に感化せらるゝ事多し、蓋し女子教育に預かる教育者の心す可き處、眞に此一點に在りとす、現任廣島女子高等小學校長島玄次郎氏は、今や此任に當る適者たる哉。



氏は廣島縣の士族なり、慶應二年五月を以て嚴格なる武家に生る、明治二十二年廣島縣尋常師範學校を卒業し、廣島高等小學校訓導を拜し、同三十一年廣島市中島尋常小學校長に榮轉す、此間小學校圖書審査委員として貢獻する所多し、同三十三年抽んでられて豊田郡視學に任じ、同三十九年雙三郡視學に轉じ、同四十二年文部省は氏が多年視學の職に在りて効績の偉大なるを選奨し金百圓を交附す、此年轉じて賀茂郡視學と爲り、令名縣下に噴々たりき、越て同四十四年現校長に就き、大正三年勳八等に叙し瑞寶章を賜はりたり。

氏は英邁謹嚴、端容寡言、頗る實踐躬行の徳を備へ、而かも躬ら邊幅を飾らず、其の施す所秩序整然、事務亦紊れず、尊長助幼の心厚く、其家庭の圓滿亦他の範を爲す、華奢の風に染み易き女子の教育者としては眞に其の人を得たる可く、廣島市民均しく氏に倚賴して今や敬慕措かず、由來該市女子の風儀醇良を缺くの時、氏を聘して婦徳の教養を委す、市民の至幸夫れ大なる哉。」

教 育 家 銘 鑑

シ之部

山形縣 大谷尋常小學校長  
西村山郡 高 等

清水多美彌氏

氏部下を率ゆる頗る寛大なれども學徳高く方正勤勉、職を執る終始一貫、以て範を垂るゝが故に不言の中皆高風に倣ふ、常に溫情に充ち校内外恰も一家團欒の如し、其の精力の絶倫にして身を持するに謹嚴なる實に現今稀に見る所、氏が今日の名聲は全く此所に出て、彼の一時を銜ひ策略を弄して名利を攫まんとする野心の如きは氏の人格に於て毫末も見ざるべからず。



氏は本郡本郷村の人、慶應三年八月の生、家累代育英を事とす、故に氏は生れながらにして斯界の人たる使命を負ひ十二三才已に助手として小學校教育に従事す、明治十九年縣師範學校に入り、同二十三年卒業、直に本郷東部尋常小學校訓導を拜命し、越えて同廿八年五月同校長を兼ね同校に勤續する十二年、同卅五年二月現任に轉じ今に至つて勤續十二年、同卅八年八月文部省より小學校教員全國普通免許狀を受け、同卅九年三月普通教育獎勵規程に由り縣郡の賞金を受くる數次、名譽なるかな。

本村は山間陬僻の一農村なるが、近時奢侈の風漸く盛にして、學區民中收支の大本を誤り倒産者頻々として現れ、風教亦漸く頹廢せるを慨し、道徳と經濟の調和を計るを以て急務とし、戊申詔書の御主旨を奉體し専ら報徳教の鼓吹に努め、學童には校庭に菜園を設け、好んで勤勞に就く習慣を養成し、青年には専ら實業と農村經濟とを説き狂瀾を已倒に防がんと努めつゝあり、氏の精力主義は大に所屬民の歡迎する所と爲り盡す所は兒童の敬慕と爲る、人望の厚き偶然ならざる也。」

一〇五七



島根縣平田町尋常小學校長  
籾川郡

鹿田熊八氏

温乎たる其容、靄然たる其言、遠近風を望んで欣慕し、其豁然たる胸襟自ら他をして親密の情を起さしめ、其高廉なる行爲自ら人をして敬仰の念を生ぜしむ、實に鹿田熊八氏の如きは多くを見ず、氏や資性温良そのもの、如く、圓滿そのもの、如く、苟も人と争はず、部下統御頗る巧妙、従つて校下一般の民心を收攬する甚だ宜しく、衆庶其徳に感じ、其情に服し敬仰措く能はざるなり。



氏は慶應元年二月、島根縣籾川郡四纏村に生る、明治十四年、島根縣松江師範學校小學師範科卒業、同十五年東京體操傳習所に於て體操科卒業、同二十六年師範外二校體操科免許狀を受く、同二十七年小學校教員普通免許狀を得、同十六年島根縣濱田中學校助教諭に任ぜられ、同十八年同縣濱田東小學校校長兼任、同十九年同縣師範學校訓導と爲り、同二十一年同縣松江高等小學校訓導に、同二十一年兵庫縣師範學校助教諭に同二十九年同縣加東郡視學に、同三十一年島根縣籾川郡視學に、同三十七年東京京華中學校講師兼

京華商業學校講師に轉じ、四十二年四月現職に任ぜらる。  
該校たるや其兒童數に於て、地方稀に見るの大校にして、職員統御其宜しきを得、常に同情と慈愛を以て接し、苟も言はんと欲する所は之れを直言して腹中に蟠り無からしめ、胸裡光風霽月を存せしむ、自然其訓育效果昭乎として擧り、別に幼稚園を新設し自ら園長と爲り、青年會を起して之れが總理と爲り、兒童、青年、社會教育各方面に涉り、大に精力の發展を圖りつゝあり。』

鑑銘家育教

滋賀縣神照尋常小學校長  
坂田郡

志水幸之助氏

學校の施設經營を完成し、豫定の教科を教授したるを以て其目的を達し得たるが如くに心得、効を永遠に期せざる者往々之れあり、蓋し人物の養成を忘却せるの致す所なりとす、又實業的智識を輕視し職業に貴賤の別を生ぜしむる者決して尠なしとせず、現任神照尋常高等小學校長志水幸之助氏の如きは、自から實業上の智識を修得して以て之を兒童教育に用ゐんとす、亦可からずや。



氏は滋賀縣淺井郡の人、明治元年十二月を以て田根村に呱聲を擧げ、同二十六年其縣師範學校を卒業し、直に東淺井郡湯田尋常小學校訓導に任ぜられ、次で高等科を併置し其訓導たり、居る事六ヶ年にして其の校長に進み、勤続十五閱年、此間學藝獎勵會審査委員、小學校教授細目編纂委員、音韻口語法取調委員等を依囑せられ、同四十一年伊賀郡視學に擢んでらる、在職一年にして坂田郡入江東尋常高等小學校長に轉じ附屬裁縫學校長を兼ね、後裁縫學校を廢し實業補習學校を附設して其校長を兼ね、大正二年現校長

に歸り實業補習學校長を兼攝す、適く所貢獻の隆々たるを所以、専ら手腕の大なるに因る。  
氏は資性英敏活達、思慮圓滿綿密にして施設經營に努む、其湯田に在るや専心同校の改善に盡くし、優良の成績を表はす、今や熱心校紀の振興に努力し、着々効果を收めつゝあり、曩に帝國教育會開催の英語科講習、文部省開催の農業教授法耕種園藝講習等を了せり、後縣より成績の優を賞せらる、氏の所屬民に信頼厚く、兒童の敬慕益深きを加ふ所以偶然にあらざる也。』

鑑銘家育教



朝鮮 京城府 漢洞公立普通學校長

### 清水 善左衛門氏

アカシヤの緑り、雨過ぎて愈々氣爽やか、白楊の影地に印する濃にして、心自ら清し、茲に天真  
曉々たる咄晤の聲を聞く又すがくしき哉、此校に長たる人を清水善左衛門氏と爲す、氏人と爲  
り温籍にして質實、其胸次より溢るゝ慈心は眞に児童をして、敬慕止まざるに至らしむ蓋し如斯教  
育者は現代に於て得易からず、此校に學べる児童の至幸又何にか譬へんや。



宮崎縣北諸縣郡庄内村の地、明治九年十月を以て氏を生  
む、氏や同三十一年同縣師範學校を卒業し、直ちに同校附  
屬小學校訓導に任せられ、尋常科第一學年を擔任し、同生  
徒高等科を卒業するに至るまで八ヶ年間之れを擔任し、小  
學校各學年に就て大いに研究、經驗を重ねるに至れり、其  
後修身、教育、法制經濟の中等學校教員免許狀を得、同三  
十九年宮崎縣東白杵郡尋常高等小學校長に轉じ、延岡幼稚  
園長を兼ね、同郡教育會より表彰せらるゝの榮を擔ひ同四  
十二年韓國政府の招聘に應じ、京畿道驪州郡驪州公立普通  
學校教監と爲り、日韓併合に際し其校長となり、大正元年現任に移り以て今日に及べり。  
氏や勤勞主義の鼓吹に努め、身體の鍛鍊を以て教育の第一要項とし、氏は口の人たるより手の人  
と爲るべきを訓へ、自ら之れを實踐し、以て其範を垂れん事を期し、夙夜其職の爲めに執掌し、思  
慮行事、育英に關せざるなく、専心執掌天職の犠牲を甘んず、氏が電勉如斯、何の業か成就せざる  
あらんや、氏が努力以て國民同化に奏功しつゝあるや眞に大なりと謂ふべき也。』

### 鑑銘家育教

長崎縣 平戸尋常小學校長  
北松浦郡

### 白川 富太郎氏



炎熱赫々、流汗珠を下すの日も、寒風凜々骨に徹し、膚を劈くの日も、之れを凌ぎ之れに耐え、  
數十年間一日の如く勤勉し一里に餘る惡路を歩み、以て拮据、育英の職に身を擲ち、未だ嘗て他を  
顧みず、眞に壯なりと謂つべく、眞に美なりと云ふべし、白川富太郎氏を以て其人とす、氏や天資  
敦厚にして又堅實而かも執務に公平、胸中常に綽々として餘裕を存し、悠揚迫らず、如上の勤勉を  
以てす、何れの業か成らざるあらんや、宜なる哉、児童氏  
を敬慕し、職員氏を尊重し、郷人氏を信頼する厚き。

白川氏、長崎縣北松浦郡の人、明治三年十二月平戸村鏡  
川免に生る、同二十四年同縣尋常師範學校を卒業し同時に、  
同縣第十三高等小學校訓導に任せられ、同二十六年口石高  
等小學校訓導に轉じ、同二十八年郷里なる平戸高等小學校  
訓導に、同三十三年六月同校長を兼任し、同三十七年現任  
校に轉じ孜孜教務の發展を圖りて息まず。

其訓育方針たるや學童をして自發的、精神的に修學せし  
め禮節を重んじ、勤勞を好み公平の徳は氏の特長にして部下皆之に信服す、尙兒童各自の家庭にあ  
るや、勉めて家事の補助をなさしむ、如斯は夫れ言論のみ般んにして、氣焔を盛に爲す空言教育者  
のよく爲し能はざる處にして、如何に氏が實着なる訓育を施しつゝあるかを知るべきなり、氏や傍  
ら新智識を收得するを以て自己の義務の如く感じ、常に新刊書に親しみ、多數の月刊雜誌を涉獵す、  
眞に仰ぐ可きの人格者を得たる平戸校夫れ多幸なる哉。』

### 鑑銘家育教



兵庫縣生野尋常小學校長  
朝來郡生野高等小學校長

### 下野 龜 治 氏

毅然として動かず、泰然として撓まざる豪邁の士、加ふるに機略に富み才識に秀づ、下野龜治氏を以て其人と爲す、氏や猶意氣横溢、少壯者と伍し、野球に、相摸に其勇氣を鼓舞し、凜々たるものあり、尙辯論は其最も長ぜる所にして、頭腦明晰なるに加へ、雄辯叱咤、實に雲を呼び、風を起すの感あり、郷黨嘗て氏を教育界の星亨と推賞す、蓋し中れるの月旦乎。

兵庫縣氷上郡神樂村の地、明治九年一月を以て氏を生む同三十年兵庫縣尋常師範學校卒業、郷里氷上郡小學校教育に従事すること四年、後御影師範學校附屬小學校訓導に任せられ、各科統合教授を獨創す、同三十七年神戸市に轉じ、其の特得の教授法を發揮し、教授訓練の改善、二部教授の研究等、大いに視るべきものあり、同四十年現任に就き以て今日に及び、氏が饒名縣下斯界に洽し。

訓練の秘訣は部下職員及び生徒の人格を尊重し、其活力を善導す、全然無義の拘束を排し、一言一行時代の推移と、教育本來の目的とに顧み、活きたる訓練を施さん事を期し、自己特有の教授の鋒は藏して之を顯さず、各教師の人格に應じ、各其特色を發揮せしめ、而かも之れが統一を失はず、談論高笑の裡、融合し盡すの風、之れ嵩高なる人格と、優秀なる才識を有せる、氏の若きにあらずんば、よく爲し能はざる處たり、氏や更に、現行學制の不備を歎して町立商工學校實科女學校を創立之を兼攝す、家庭青年、社會教育に關し、大なる抱負と、燃ゆるが如き熱情を有す、偉なる哉。」



### 鑑 銘 家 育 教

京都府加佐明倫尋常小學校長  
郡舞鶴町立明倫高等小學校長

### 清 水 康 五 郎 氏

孟子に之れ有り、吾未だ己を枉げて人を正す者を聞かず、況や己を辱めて以て天下を正すものをや、聖人の行同じからず、或は遠く或は近く或は去り或は去らず、其の身を潔くするに歸するのみと、趨舍行住唯其の節に當るを以て宜しと爲し、身を潔くするを以て宜しと爲す、現任明倫尋常高等小學校長清水康五郎氏は昭々の資、毅然たる大丈夫、其の進退や正明を極め、其の言動や博大ならざるなし、以て萬民を教ゆべし。



氏は慶應元年一月を以て舞鶴町に生る、明治廿四年四月京都府尋常師範學校を卒業し、直に加佐郡組合立尋常小學校訓導と爲り、廿八年五月大浦高等小學校創立の際轉じて同校長と爲り、三十五年十月本郡新舞鶴小學校に轉じ、大正二年十一月現任となり、教職に在る前後通じて廿四年、今尙孜孜として其の業に勵む、其の教授訓練に對する考案は積年の經驗能く眞乎良方針を設立し、他の範として仰がるゝもの多き由なきにあらざるなり。

職員統御に付いては校長と教員と一心同體の良法に立て、教務上責任を分擔せしむるも其の全責任は校長の双肩に歸し、假令部下に過失ありとするも是を譴責する事曾てなし、常に曰ふ過を知らばよし、譴責に由りて過を慎むが如きは奴隸のこと、教職員は與からずと、されば各部下は一方に於て安んじて教務に就くと同時に他面各其實績を期し、互に補佐提携全美の域に達せんと爲す、その執務の活氣ある、府下稀に見る所兒童敬慕の深き所屬民の信頼深き處として得ざるなき宜べなる哉。」

### 鑑 銘 家 育 教



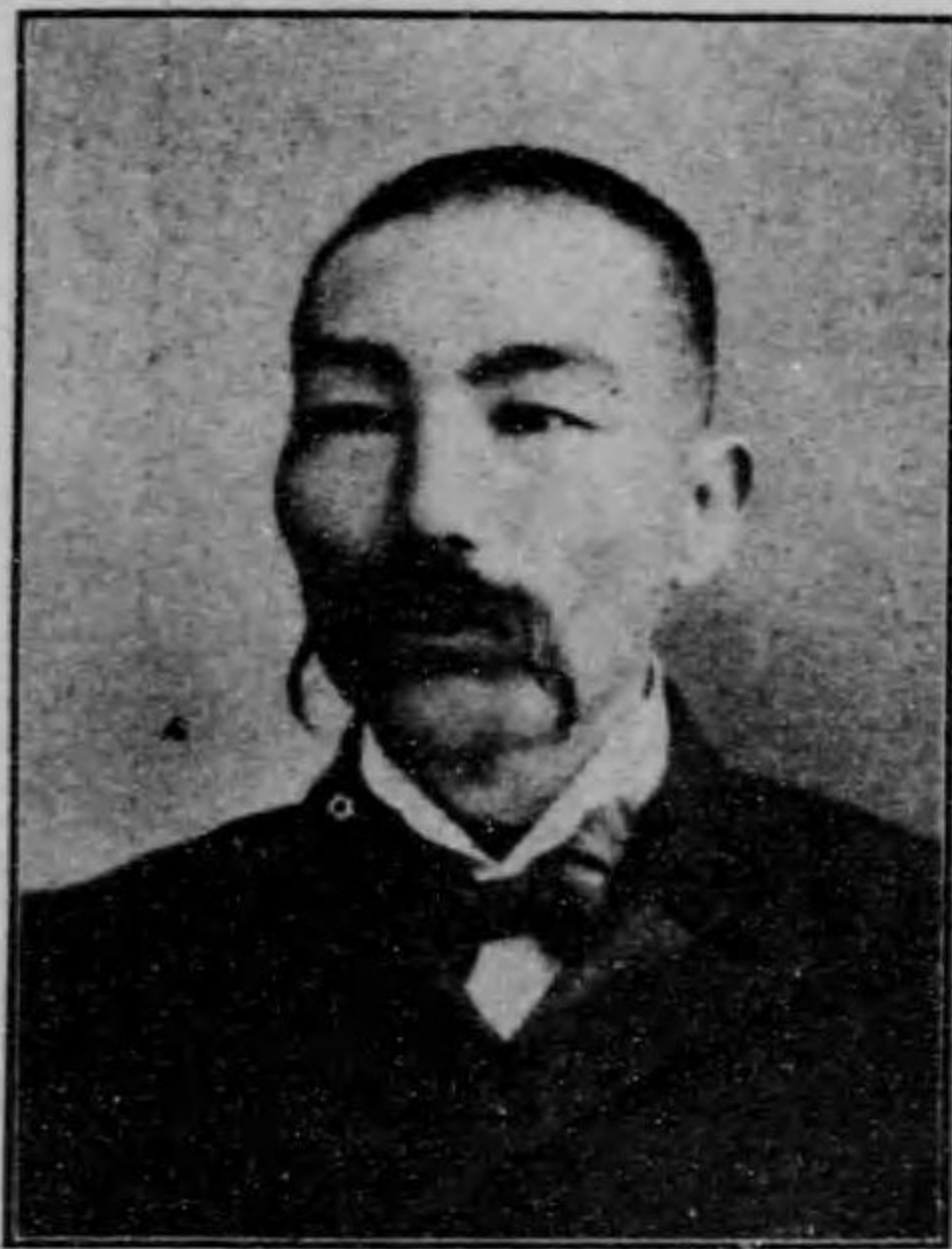
岡山縣精練尋常小學校長  
眞庭郡

### 穴戸定十郎氏

我國憲政の美、遠く肇國に發り、御施政の方針亦肇國に定まり、忠孝の道亦此間に生ず、吾人生を大日本帝國に享く、至誠以て皇恩の萬分一を報ずるの覺悟なかる可からず、殊に身を教育界に投ずる者亦此心を以て兒童を導くを要す、穴戸定十郎氏の教育方針一つに爰に在り。

氏は應慶二年十月を以て本縣に生る、夙に英育に従はんとし、明治十七年岡山縣眞島郡立眞島教員養成所に學び、同二十六年岡山縣師範學校講習科を出づ而して同廿八年現校訓導に任じ、以來勤績今日に及ぶ、此間實に二十年の久しき、孜々營々教へて倦まず、導きて怠らざるもの蓋し此人の如きは稀なり。

資性濃厚、篤實にして同情の念に富み、勤勉力行能く其徳を以て人を感化す、頭腦明晰、思慮緻密にして事を處して毫も違算なし、兒童訓育に關しては三種の神器に型り鏡の如き正直なる智を研き、壘の如き圓滿なる情を養ひ、劍の如き勇敢なる意を鍛へて以て完全なる人格を成熱せしめんことを理想とし、形式に走らず空論に屬せず、儉素自ら處し力行其の範を示す、青年及父兄は概ね其の弟子たれば、言ふ所行はれざるなく、示す所違ふなし、以て一般教導の任に當るを以て學校、家庭、社會其軌を一にし密接に連鎖するを以て、其奏効蓋し大なるものあり、慈愛、威嚴其宜しきを、得、欽仰四隣に傳はる、其の大正二年紀元節文部省選奨の光榮に浴するや、之れを機とし門下相謀り其の徳を永遠に頌せんとて一大豐碑を建て以て、校庭に飾る、偉なる哉其徳。」



### 教育家銘鑑

静岡縣沼津女子尋常小學校長  
駿東郡

### 白岩新太郎氏

人と爲り濃厚至誠、其の聲咳に接する者、陽々春光に浴する心地す、頗る同情に厚く、人の窮地にあるを見れば、已れ之に座するが如く、其の安息を祈り、其がために計ること骨肉より切なり、されば部下皆其の恩澤に浴し、其の職に安じ其の業に樂しむ、正に是れ其の仁四海に及ぶもの、現任沼津女子尋常高等小學校長白岩新太郎氏の如きは、眞乎天生の教育家と謂ふべし。

氏は元治元年四月を以て東京小石川に生る、明治十七年七月静岡縣師範學校中等師範學科を卒業し、其八月上泉村立小學校英教會訓導となり、後ち二三の學校に轉任して同二十二年八月磐田郡三川尋常小學校訓導兼校長と爲り同廿六年四月依頼本職を免ぜられ、同時に郡當局より教育功績狀を受領す、同卅四年三月沼津尋常高等小學校訓導と爲り、同年三月女子尋常高等小學校訓導兼校長となり、同四十年四月町立幼稚園長兼務を命ぜらる、現任と爲りて茲に十有四年同町女子教育の面目大に揚る、理なる哉。



氏に甚大の學殖と多年の經驗とあり、女子教育は眞に此の人の使命、されば其の訓育に其の教授に透徹せざるなく、部下また其の範に倣て技術愈進む、氏の部下に對するや毫も煩瑣なる規定を設けず、躬行範を垂るゝを以て最も策の得たるものとし、部下のみならず兒童に對しても此の方針を以て臨み、町民に對する亦然り、先づ第一家庭を改善するには主婦たる者の智徳を高むることを必要とし、屢々家庭訪問を行ひ、巧みに母姉を導く、所屬民の信賴益厚を加ふ宜べなりと謂ふべし。」

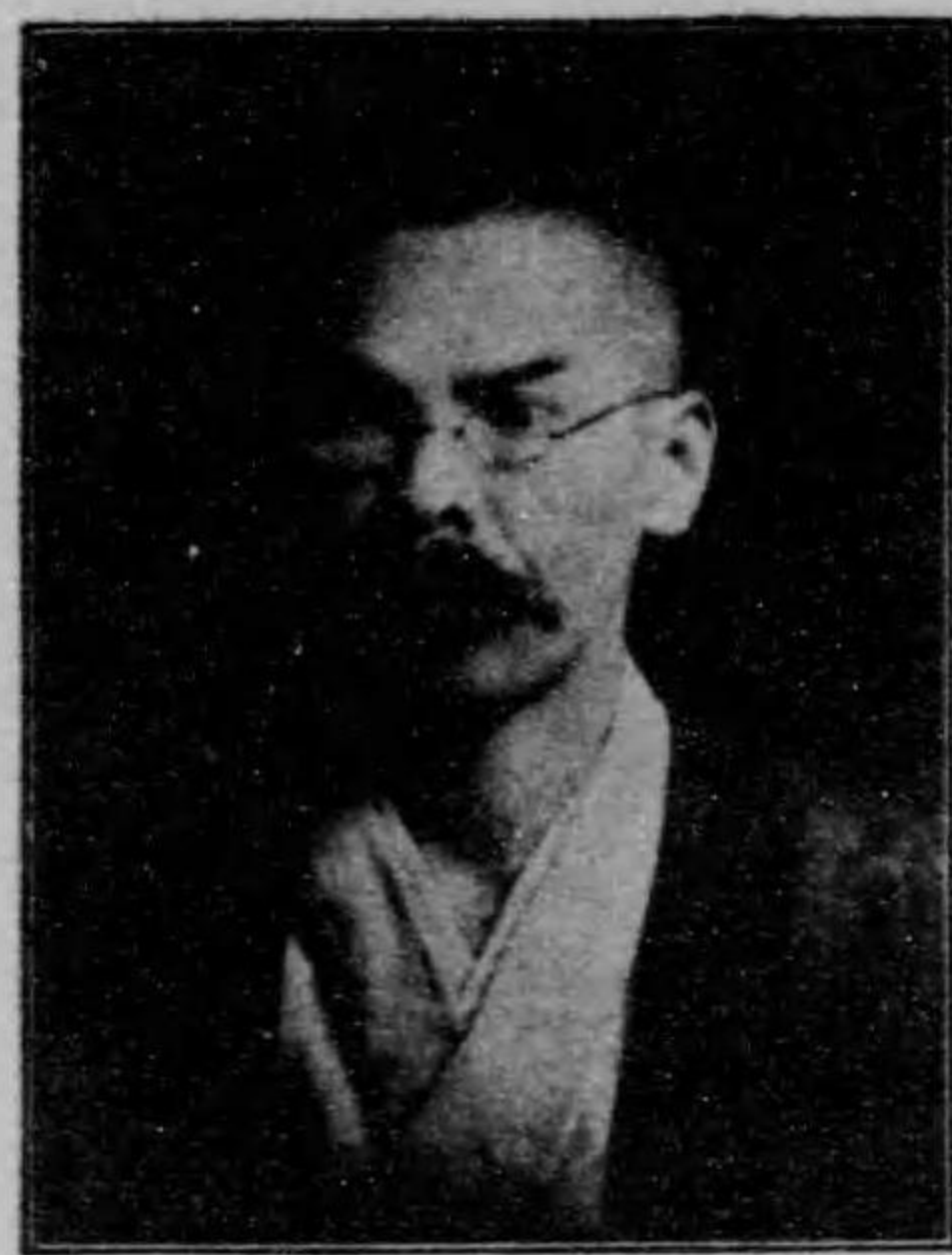
### 教育家銘鑑



愛媛縣第一尋常小學校長  
松山市

### 清水則備氏

今や國民教育は靡然として内容の充實を叫び、教育者は益々人格の修養に努め、至誠以て永遠に社會の進歩發展を計らざる可からざるの秋に際し、徒らに地位名望のため汲々たる世の潮流を脱し、屹然身を育英の業に委ね、孜々營々として三十有餘年その天職を樂める、現任松山第一尋常小學校長清水則備氏の如きは、蓋しその稀に見る所なり、國家の要望亦爰に在りとす。



氏は松山の藩士、文久三年五月を以て生る、人と爲り至誠勤勉にして怠慢を憎み、苟事にも必ず實踐躬行の徳を具ふ、不幸中學校を半途退學せしと雖も奮闘電勉明治十五年教員免許狀を受け、爾來同三十一年に至る十八年間孜々として兒童を訓へ聲望大に揚がる、次て女子教育に従ふ事二年再び職を小學校に轉じ、同三十六年松山第三より現任に就き以て今日に及ぶ、此間普通免許狀を受け、又初等教育を以て畢生の業と爲し熱心銳意一日の懈怠なく儕輩常に之に敬服すとの廉により縣教育會より表彰さる、氏又市教育會理事として畫策する事多年、現に愛媛縣教育協會幹事として銳意縣教育に貢獻しつゝあり。

至誠一貫十年如一日とは吾人の常に口にする處、然も其實行に至て難しとする處なり、況や三十有餘年間の歲月に於てをや、學校在るを知りて己が家を知らず、兒童あるを知りて己を忘るとは克く氏の人格を表せるに非ずや、氏身體健康遂に半刻の懈怠なく、誠實勤務を全ふせよとは部下に臨むの、言由來教育の効果は一朝にして得ず、氏の人格氏の勤勉以て其功績顯著たり偉なる哉。』

### 鑑銘家育教

茨城縣長岡尋常小學校長  
東茨城郡

### 部龜之介氏

孝悌にして恭謙、而かも剛毅にして不屈不撓、尊皇、敬神、崇祖の念頗る深く、至誠を以て萬事を處決す、部龜之介氏の若きは鮮なし、氏常に説いて曰く、吾人教壇上にあるは恰も勇士の戰場にあるが如く、其教鞭は即ち其劍戟なりと、又曰く吾人は幾百の愛兒の爲め大いに心身を養はざる可からずと、氏身體強健にして十數年一日の缺勤なく欣然として教壇に活躍す、氏は教育、倫理、法制、經濟の學を好み、殊に算數は得意とする所なり。



明治六年九月茨城縣東茨城郡綠岡村千波の地氏を生む、同二十八年三月同縣尋常師範學校を卒業し直ちに同縣結城郡水海道町外六ヶ村組合立高等小學校訓導に任せられ、在職二ヶ年同郡山川尋常高等小學校に轉じ、訓導より校長を兼ね、東茨城郡磯濱高等小學校訓導兼校長を経て現任となり、茲に訓導として十有九年校長として十有七年、電勉一日の如く其教鞭を振ひつゝあり。

訓練の要は教師自ら人格を崇高ならしめ、範を生徒に示すにありと、教訓、課業は自ら率先して之れを實踐し、大いに努むる處あり、則ち現任地にある僅々五ヶ年、兒童の品性大いに陶冶され、面目爲めに一新せり、又曰く教授の徹底は學校の生命たり、故に教師は常に自ら修養を怠るなく、教材を研究し、具案的、意識的に活動し、兒童との間に人格的靈化の顯はれん事を圖る、尙校下郷民の向上發展に對しても氏大いに貢獻する處あり、現任地の風紀大いに改まり、和風徐るに禾桑の上を吹くの感あり蓋し氏の力與つて効ありしと云ふべき也。』

### 鑑銘家育教



東京市鮫橋尋常小學校長

### 庄田録四郎氏

帝都下層の民、集まる所鮫橋あり、貧苦の慘狀蓋し想ひ半ばに過ぐ、東京市特殊學校を設けて之等貧窮兒等を教育する亦止むを得ざるなり、我庄田録四郎氏今や職を鮫橋小學校長に奉じ、孜々として其の學徒を導き、諄々として忠孝仁義を教へ、勤勉力行の美德涵養に努力す。



氏は舊と吉川氏、江戸淺草小島町の人、慶應三年五月を以て生る、明治三十九年入つて庄田家を繼ぐ、資性濃厚にして處事細心の注意を拂ひ、敢て漫りに輕忽ならず、明治二十一年東京府尋常師範學校を卒業し、南足立郡千壽小學校訓導に任じ、幾許もなく同校長に進む

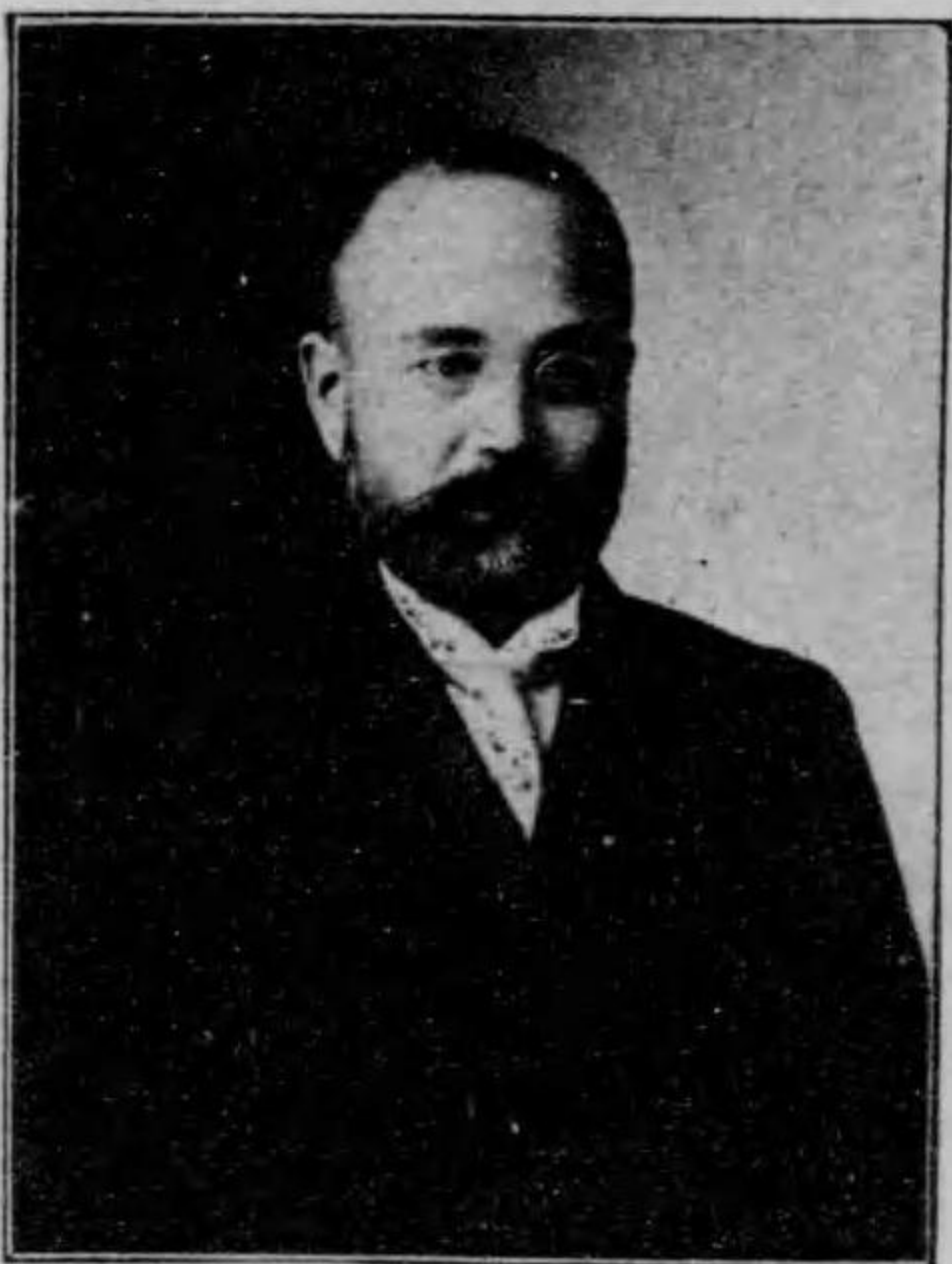
同二十三年南足立郡小學校實業科施設取調委員と爲り、獨り自己の學校の成績を擧ぐる而已ならず、郡内教育上の貢獻頗る大なりき、同二十八年轉じて廣島縣安那郡安那高等小學校長と爲り、翌年東京府下荏原郡池上村私立日蓮宗中檀林に教鞭を執り、同三十七年絶海の孤島八丈に渡り、大賀郷尋常小學校長たり、次て歸京し寶田小學校訓導と爲り京橋區第一實業補習夜學校訓導を兼ね、同四十一年現校長に就き、以て今日に至る。

### 鑑銘家育教

北海道彌生尋常小學校長  
函館區

### 島貫政治氏

北海十一州、良教員に乏しからず、然れども一長一短猶範たり得る者は甚だ尠なし、蓋し才に偏し、學に偏するの故なり、其の學識、經驗、風采、容貌、人格一つとして備はらざるなく、二十六の學級と、三十名の職員と、千八百の兒童とを有し、能く校の内外に隆々たる聲望を博しつゝあるは我島貫政治氏其人と爲す、以て氏の手腕の凡ならざるを窺ふに足らん。



氏は明治三年二月を以て陸前國柴田郡船岡村に生る、資性溫良にして頭腦明敏、善惡の批判に惑はず、利益の打算は明なり、身を處し、學校を統督する、共に其宜しきを得て、衆庶美望の標的たるもの氏の如きは稀なり、明治廿三年北海道師範學校を卒業し、直ちに室蘭尋常高等小學校長と爲り、増毛尋常高等小學校長に轉じ、北海道廳及視學等を経て、明治三十七年現任彌生尋常高等小學校と爲り、爾來勤績以て今日に至る、校務の外、函館區學務委員、函館區教育會副會長を兼攝す。

訓練、教授、管理共に職員及兒童の個性を尊重し、敢て劃一を望まず、教材及教授法は共に、實用を旨とし、迂遠を嫌ひ、兒童には徹底と充實とを要求し、形式輕浮を避けしむ、無爲にして職員を統率し、彼等の自由を尊重し、壓制せず、常に部下職員と談笑し、聊かも隔意なく、焉然一大家族の如し、然れども生來明敏なる頭腦は彼等の研究及勤務の成績に就き、深刻犀利の批判を下すを以て、彼等の畏敬する所たり、氏の風貌と相俟ちて、北海の明星たるを失はず。

### 鑑銘家育教



福島縣金透尋常小學校長  
安積郡高等小學校長

從七位 勳八等 志賀兼四郎氏

「學校は有機體にして恰も筋骨の調和と血液の順潮とによりて健全なる人體の發達を遂ぐ、骨肉たる子弟あり、衣住たる設備あり、滋養も曾ならざる教育の手段方法あり以て是等有機體に活動せんか健全なる國民の輩出期すべきなり、故に職員克く協力一致各其の本分を盡すに吝ならず、終始一貫其の目的の徹底を以て最後の實果と覺悟するに在り」とは我志賀兼四郎氏の主義なり。



氏は磐城泉の藩士安政六年十月泉藩邸木村家に生る、長じて泉藩汲深館に學ぶ、明治十年警視拔刀隊に入り西南の役に従軍戰鬪貳拾餘身の瘡を負ふ、賞勳局より賞賜あり、同十五年石川郡江持小學校訓導と爲り、爾後石川郡小高、石川、耶麻郡鹽川各校に教鞭を執り、同十九年縣下教員選抜講習に出席、期末考試により全科地方免許狀を受く後ち鹽川、竹屋、堂島、福島、平の各校長を経て、同三十一年石城郡視學に拔かれ令名大に擧り、同三十四年福島縣視學に上る、同四十年文部百圓を選奨し、尋て正八位勳八等に叙せられ、同四十五年從七位に陞叙、此年現職に就けり、此間本縣の選賞に浴する三回に及ぶ。氏や部下を統ぶる最も巧妙を極め、二十九名の教員能く一致和合し、早出晚退只管教務の擧らん事を希ふ、接踵本校を視察するもの他府縣より不絶、教授細目は特に甲乙の二種に編成し、校歌、朝會、兒童訓育の榮を作り、家庭との連絡に注意し、教育資料蒐集法として今日録、國民教育反省資料等あり、學用品の購買販賣實施等見る可く、其他地方教育界に貢獻最も多し、壯なる哉。」

鑑銘家育教

群馬縣六郷尋常小學校長  
邑樂郡高等小學校長

島田友藏氏

本村は館林町に隣接する一大村落にして部民克く親睦し教育事務に熱心に、父兄各相提携して各種の革新を計り、教育の完を期する須らく統率者の人格に依らざるべからずとなし、吾が島田友藏氏を迎へて校長と爲す、實に部民は氏の知己、氏は部民の指導、以て相計り相助く、ア、斯くの如くにして教育の實績奈如ぞ擧らざるを得ん蓋し好偶なりと謂つべし矣。



氏は館林町の人、明治四年の生、穩健の資着實の素、洋乎として長者の風あり、然れども事に臨みては是非の辨別明快にして處斷果敏、苟も世の耳目に觸れんことを念とせず、自らはとする所は是を遂行するに萬障も意とせず、孜孜として教務に執掌し教化の實績を擧ぐるに汲々たり、明治二十七年三月其の縣師範學校を卒業するや、直に館林小學校に奉職し、後ち依瀬小學校、伊奈良小學校、大箇野小學校等を経て現任校の聘に應ず、其の堅實なる企畫と、果敢なる遂行とは到る處に美名を殘せり。

管理上特記すべきことなしと雖も、教員數名眞に一家族の如く、各身を擧げて育英に努め、氏の指令の徹透眞に驚嘆に價す、尙ほ所屬民に對しては寬嚴宜きに適し、最も誠實なる指導を加へつゝ、あり、青年會は氏の統督する所にして、學校に於ける運動會、學藝會等あるに際しては、必ず會員參集し、克く母校の爲め勞を惜まず、冬季風霜烈しきに及ぶや、各勞役を供して風よけ、運動場の敷土等を自營し以て子弟の便を計ると、是れ皆氏の徳望にあらずして何ぞ。」

鑑銘家育教



秋田縣 秋田市保戸野尋常小學校長

茂又敬吉氏

道德的行爲の要素を考へ、國民性の缺點に顧み、誠實、勤儉、剛勇を選定して校訓の要綱とし、五倫五常の細目を規定して、教育の効果を收めんとす、而して之が貫徹を期す素より職員行動努力の如何に決すと雖も、亦自ら實踐躬行範を示し以て捷徑とする者、茂又敬吉氏あり。



氏は明治二十二年縣師範學校を卒業し、本校訓導拜命以來十一閱星霜、秋田市内小學校訓導又は校長として熱心教育に従事し、當時已に着實なる教育家たる世評を博せしが、同三十二年平鹿郡増田尋常高等小學校長に轉じ、益々其驥足を伸べ、郡内教育家の牛耳を採るに至れり、同三十五年秋田市明德尋常小學校長と爲り、熱心以て劃策施設する處あり、校の名聲頓に高く、獎勵金の下賜を見たり、同四十一年轉じて本市中通尋常小學校長たりしが當時小學校令改正の結果五六學年のみ收容し變則編制の止むなきに陥りしも、其の勤勉精勵と職員統御の宜しきを得たるとにより、内部紊亂の憂なく駭々實績の見る可きもの多く、殊に資性溫良品行方正亦善く修養を怠らざるを以て、一般教職員の模範たりき。

氏は教員と児童との親密及借樂を計らんが爲め中和俱樂部を設け、自學自習の習慣を養成せんとして兒童圖書館を興し、勤儉の美風涵養の一助として學用品の購買組合を設く、其他校外教授、交換教授、父兄定期授業參觀並保護者會等斯界の參考に資す可きもの多し、文部大臣、縣知事、市長及學事關係者等より讚辭又は金品を贈らるゝ事數次、又以て氏の一斑を窺ふに足らん、偉なる其器。』

教育家銘鑑

教育家銘鑑

愛媛縣 今治第二高等小學校長

勳八等 清水清視氏

何人も己を制すべきを知る、然れども時として些細の場合に己れの性情を亂り、思はず激語を發する事あり、此時に際し激語に酬ゆるに更に激語を以てせんか、双方の惡感反情に油を澆ぎ、彌々以て衝突の火の手を強ふす、反之從容自若溫和の返語を以て迎へなば、所謂柳に風、暖簾に腕押の類と一般、拍子抜けの姿に了はらんのみ、教育者の態度然かく斯の如くなる可し、我清水清視氏は眞に堪忍の人、吾人の推稱亦爰に存す。



氏は愛媛縣の人、慶應二年二月を以て生る、明治十六年初めて越智郡童蒙學校の訓導と爲り、後辭して縣師範學校に入り、同十九年中等師範學科を卒はる、直に任を越智郡習性學校に奉じ、翌年今治小學校に轉じ、其翌年轉じて兵庫縣神戸區兵庫尋常小學校訓導と爲り、同二十二年奈良縣山邊郡丹波市高等小學校長を拜し、翌年愛媛縣越智郡日吉尋常小學校訓導に就き次て同校長に進み、同三十一年宇摩郡視學に抽かる、次て山口縣吉敷郡視學、同玖珂郡視學を

經て、同四十年廣島縣加茂郡阿賀尋常高等小學校長と爲り、同四十四年現校長に任ず、曩に日露戰役の功に依り賞勳局より金員を下賜せられ、大正三年勳八等に叙し瑞寶章を授けらる。氏は溫厚英邁、深く道德學を究め道義に向つて邁進す、加かも人と争を好まず、從容自若の態度、寧ろ對手を呆然たらしむ、慈愛懇切の性は生徒教養に顯はれ、青年黨化に發し、適く所畏敬せられざるなし、從て教育の效果隆々駭々立るに之れ舉がるを見る、蓋し亦異材なる哉。』



秋田縣花輪尋常小學校長  
鹿角郡

東海林昌樹氏

理想に邁進する途あり、否な動かすべからざる軌道あり、曰く己に或は一理想を實現せば、其處を出發點として更に第二位の理想に進まざるべからず、吾人は常に進行中にあるもの、然り新進の民は滯停を欲せず、活躍に向ふ、活躍の氣なき民は畢竟亡國の民たるに外ならず、時代は益活躍を要す、次代の民は愈敏活ならざるべからず、然して之が教育の任にあるものは活躍の靈火赫んなる



者たらざるべからず、現任花輪尋常高等小學校長東海林昌樹氏の如きは即ち其人なりき。

氏は明治十一年七月を以て仙北郡四ツ原村四ツ屋に生る資性機敏にして材幹あり、事務に練達して教授に巧み爲り、特に氏の地理教授は最も得意とする所、三十三年三月縣師範學校を卒業し、直に仙北郡神宮寺高等小學校訓導と爲り八月大曲小學校に轉じ、三十四年西荒井尋常高等小學校長に榮轉す、爾來縣下諸小學校に長と爲り、四十二年四月秋田縣師範學校訓導に轉じ四十五年四月遂に現職に選任さる。

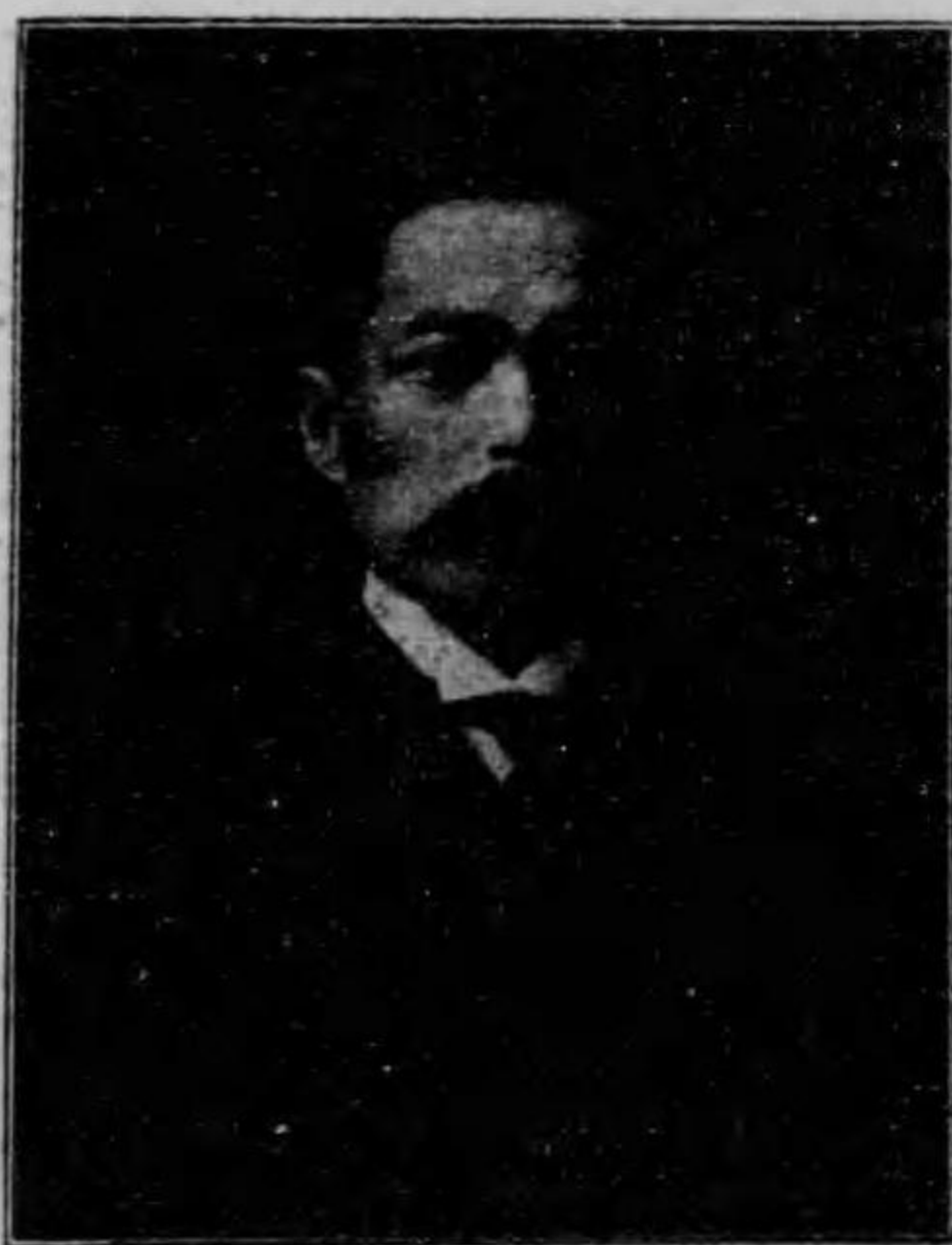
氏の教授訓練は多く言ふを要せず、兒童身神の發達に資すべき事項あらば必ず執つて之を利用し、其の間何等の躊躇なし、職員に對しては躬を以て範を示し、凡そ壇上の教師として直接指導の任を盡し、職員として各其の據る所を得しむる如きは全國三萬の小學校長中有數に屬す、氏や頭腦明晰にして理想の混亂するものなし、部下其の明に畏服し、所屬民皆其の人格を渴仰し、其の技倆を嘆美すと、氏の人格德望一郷風儀の刷新に資するのみならず、縣教育界の裨益多大なる。哉」



鑑銘家育教

宮城縣師範學校長

正七位 樋泉慶次郎氏



形式の社會國家の維持存立上必要闕くべからざるものたる今更論なし、されど物極れば弊自ら生ず、現代文明形式過重の結果は懸て虚禮と爲り空文と爲り生命なく血肉なき形骸と化せんとするにあらずや、人は此の虚飾に飽きたり世は此の形式に勞れたり、將來の社會は必ずや簡明適切單刀直入七首を提げて虎穴に入る底の人物を歓迎するなるべし、現任宮城縣師範學校長樋泉慶次郎氏は蓋し此種の主義を以て世に立たんとするの人なり。

氏は山梨縣中巨摩郡貢川村の人、明治五年八月を以て生る、活達にして而も用意綿密、簡單質素を旨とし、形式の煩累を厭ふ、頗る常識に富み、圓滿調和の才あり、明治二十六年三月山梨縣師範學校を卒業し、同三十一年三月東京高等師範學校理科を出て、其の四月群馬縣中學校分校教諭たり、同三十三年四月福島縣師範學校教諭に轉じ、同年七月奏任教諭に進み舎監を兼ね、同三十五年二月岩手縣師範學校教諭に轉じ附屬小學校主事の事務取扱たり、同四十二年秋田縣女子師範學校長に任ぜられ、大正二年三月現職に就く。

氏や東北各縣を歴任し、民情に精通し、其の長短を熟知し居るを以て、特に東北人の短所を補ひ機敏勤勉剛勇の精神を養ひ、同時に其の長所たる質素醇美の風を保持せんことを期し、其の方法に就いては、自發的修養に依らしめ、堅實なる思想と信念とを與へ、人格の權威を認めしむることに重きを置かる、教授の主義亦之に準ず、到る所信賴の厚き故あるかな。



## 教 育 家 銘 鑑

ヒ之部

栃木女子師範學校長

從六位 東 基 吉氏

一〇七六

貞操從順は蓋し婦徳の要なり、然りと雖も正邪善惡共に只命に服従するは非なり、猜疑嫉妬は女子の弊情なり、至誠坦懐、公明正大以て其本性の美を發揮せしめ、所謂矯弊助長の教育を施すは女子教育者の最も難ずる處なり、寛なれば傲り、嚴なれば萎縮す、他日の女教員須らく躬ら其弱點を悉知し、我國女徳の涵養を完からしめざる可からず、我東基吉氏常に爰に意を止め、孜々諄々能く指導誘掖を盡す、蓋し稀に見る良校長なりとす。



氏は和歌山縣の人、明治五年三月を以て生る、資性篤實温厚、勤勉力行自らを持する頗る嚴正、克く人を容れ又克く人と語る、思慮周到にして小事を忽せにせず、裁斷亦快刀の慨を爲すもの畢竟明晰なる頭腦と、圓滿なる常識の發達に由らずんばならず、明治廿七年和歌山縣師範學校を卒業し、縣下東牟婁郡新宮尋常高等小學校訓導たる事一年にして東京高等師範學校に入學し、同三十二年文科を卒はる直ちに任を岩手縣師範學校教諭兼訓導に奉じ、附屬小學校主事たり、翌年女子高等師範學校助教授に轉じ、次て三十六年同校教授に進む、在職八年去つて宮崎師範學校長を奉じ、同四十一年現職に就き、高等官五等なり、位階累進從六位たり。

氏は懇切以て部下を率ひ、熱心以て生徒を養ひ、穩健なる學說と公平なる實際とを調和して能く校風の駸奮を致すもの眞に氏の人格の然らしむる所にして、卒業生の成績亦各地に好評を博するも皆氏の感化誘導の善良なるに起因せずんばならず、令名遠近に喧洽たる宜なる哉。」



教 育 家 銘 鑑

廣島縣立廣島中學校長

從六位 弘 瀨 時 治 氏

嚴なれば萎縮し寛なれば放慢となる、干涉を多からしめば依頼心を誘起して優柔不斷の徒を生じ無干渉に過ぐれば放逸散慢の心生じて遂に悖德者を出す、教育の事夫れ難い哉、所謂寛嚴宜しきを得、中正道を誤まらず、克く其効果を善ならしめ、以て他の模範と爲り欽仰と爲り追慕と爲る、隠然斯界の重鎮たる者、之を現任廣島縣立廣島中學校長弘瀨時治氏其人と爲す。



氏は高知縣の人なり、慶應三年六月を以て生る、明治二十三年高等師範學校を卒業し、直ちに千葉縣尋常師範學校教諭に任じ、小學校教員學力檢定委員たり、翌年巖手縣尋常師範學校教諭に轉じ、或は小學校教員檢定委員と爲り、或は講習會講師と爲り、縣下教育界に貢獻する事五年、爰を以て當局屢々氏の功勞を賞す、次て愛知縣師範學校教諭に移り後附屬小學校主事を兼ね、諄々教生を指導して倦む所なし、而して奏任を以て待遇せらる、同三十三年東京府師範學校教諭に轉じ、正八位に叙せらる、同三十五年擢てられて廣島縣師範學校長に任じ、從七位に陞り高等官六等たりき、同三十九年現校長に就き、爾來勤績從六位に累進し、孜孜學徒の薰陶に盡瘁し以て今日に至れり。

氏は人と爲り極めて英邁、加ふるに溫厚の德能く内に藏せられ、人と交はりて溫情脉々、人を統ぶるは德を以てし、只管効果の擧るを思はしむ、學徒亦其愛情に慰せられ、刻々業を勵むの良風を見る、殊に父兄の信賴厚く、仰いて以て在職の永からん事を希ふや深し、德望夫れ大なる哉。」



兵庫縣立姫路中學校長

從六位 泥谷良次郎氏

人生の危險時代は正に青年期に在り、其心理狀態に於て、將た社會觸接の關係に於て、有形に無形に何ぞ教育者を勞する事の多きや、學識豊かに經驗に富み、人格崇高の教育者を待つゝの要實に愛に在り、蓋し教育効果は教師の人格奈何に存す、泥谷氏は人格の人、氏を戴く姫路中學亦多幸なる哉。氏は日向高鍋の人、明治元年九月を以て生る、明治二十四年宮崎縣師範學校を卒業し、直ちに同



校附屬小學校訓導に任じ、翌年郷里高鍋小學校長に轉じ、郷黨の子弟を教育すること二年、同二十七年東京高等師範學校文科に入り業卒へて宮崎師範に教諭たり、同三十三年高等師範學校研究科に入り翌卅四年卒業す、會々兵庫縣第二師範學校を姫路に置くに方り同校教頭に任じ、校長野口援太郎氏を補けて同校の創業に従事し、教授に訓練に將た校風の樹立に、殆んど寢食を忘れて熱誠盡力す、同校の今日ある氏の力與りて多きに居る、次て大分縣師範學校長、鹿兒島縣師範學校長、兵庫縣立第二神戸中學校長を経て大

正三年四月現校長に就き孜々教務の發展を圖る、其識見と人格の偉大とは亦稀に見る所たり。

資性廉直にして情誼に富む、往々理想に馳する傾きなきに非ざれども亦細心緻密の工夫を怠らず、開校日向淺く卒業生を出すこと二回に過ぎざれども、質素剛健の校風と成績の優良とは、漸く世に認めらる、寛厚人を待ち、坦々自ら居り徐ろに大局を制するの風あり、好んで書を読み、書架常に滿溢す、學亦多方面にして強記、到る所學徒の欽慕を享く豈に偶然ならざらんや。」



## 教 育 家 銘 鑑

朝鮮釜山中學校長

從六位  
勳六等

廣田直三郎氏

堅實なる國民養成を主眼とし、渾身の努力を以て眞率に勉勵すること、沈着剛毅にして節義を重んずべきこと、勤勞を尙び質素を旨とすべきこと、秩序を重んじ禮義を正しくすることの四綱目を定めて之が實行を期す、設立日尙淺きにも拘らず着々美果を擧げ、成績見る可きものあるは、蓋し廣田直三郎氏の功氏の熱誠夫れ偉なりと謂つべし矣。

氏は福岡縣小倉市の人、明治五年一月を以て生る、明治三十一年東京帝國大學文科史學科を卒業し、大阪府、宮城縣、滋賀縣、岡山縣の各中學校に教鞭を執りしが、日露戰役には豫備中尉として韓國駐劄軍司令部附たり、同三十一年統監府開設と共に教育事業囑託として日韓教育の基礎畫策に參する所多し、此間統監府中學校教諭を兼ね、大正二年本校開設と共に現職に就けり。

氏は清廉潔白、篤學勤勉、嚴毅方正、意志強固、頭腦明晰にして數の觀念に富む、公に嚴格にして私に懇切なる情誼あり、以愛職員皆心服す、由來本校は五學年を通じて三階段に分ち、一二學年を學校生活に入るの階梯時代とし専ら訓練と體育とに意を注ぎ、三四年を進歩時代とし之に智識上の要求を加へ、五學年を終結時代とし卒業後の目的により多少個人教育を加味し入學の目的を貫徹せる爲め家庭及本人に要求す、奢侈輕佻の殖民地的常弊を矯め、進取の氣象に富むの特長を獎め、學校訓育の四綱目を布衍して一般の家庭青年社會に要求す、又半島の史績、地理に明に踏査十三道に普し偉哉。





愛知縣市立第一高等女學校長  
名古屋

正七位 檜山友藏氏

「氓家積無くして衣服を修むるは侈國の俗なり」と、古人の言味ふ可き哉、現代我國の趨勢果して奈何、身に綾羅を纏ふ者果して積有る歟、美食を嗜む者果して餘財を保つ歟、吾人甚だ疑なき能はず、繼し積無くして衣服を修むるとも、其心果して道に近き歟、是亦吾人の惑ふ所なり、果せる哉吾人の疑惑は遂に事實に證明せらるゝを奈何せむ、歎ず可き哉現代の思潮、檜山友藏氏常に女徳を養ふ此點に留意す、校風美を成す蓋し當然のみ。



氏は茨城縣の人なり、明治五年七月を以て生る、明治二十七年山梨縣師範學校を卒業し、山梨縣東八代郡錦生尋常高等小學校訓導と爲り、後高等師範學校に學び、同三十三年其業を卒へ、任を神奈川縣立第一中學校教諭に奉じ、此年兼任の待遇を受く、同三十八年山形縣酒田高等女學校教諭と爲り、直ちに同校長に抜かる、同三十九年正八位に叙せられ、同四十二年從七位に叙し、同四十五年轉じて現校長に就き、大正二年正七位に叙せらる、其熱誠努力は行く所として、功績を印せざるなく、令聲を擧げざるなし、畢竟氏の人格偉大の致す所に由らずんばあらざるなり。

氏は資性邁俊、事理明白にして雅量に富み、勉めて新知識の吸収に勵む、身を持する恭謙質素、常に時代思潮の弊を矯めんとし、盛に勤勉眞摯の美德涵養に努力す、家庭との接觸を圖り、彼是相俟ちて學校教育の効果を完ふせんとす、陋醜既に氏に逐はる、人呼んで徳とする宜なる哉。」

鑑銘家育教

大分別府工業徒弟學校長  
縣立

從七位 平尾英臣氏

我國工業界の現状を觀察するに、隆々たる文運の進歩に伴はず、依然として徒弟の多くは無智無學に安んじ、只に機械器具の使用法を會得するに止まり、世態文化の展開に背馳するのみならず、常識の修養、徳性の涵養等に至りては實に言ふに忍びざる者あり、我が平尾英臣氏大に爰に見る所あり、頗る工業教育に興味を有し、我國工業徒弟の教育大に必要なるを感ずる已に年あり、今や別府工業徒弟學校長として名聲四隣に喧傳す、嗚呼壯なるかな。

氏は明治七年正月を以て阿波國徳島に呱呱の聲を擧ぐ、明治二十七年縣師範學校を卒業し、三好郡池田尋常小學校訓導に任せらるゝを初めと爲し、次で辻小學校訓導、白地小學校長、晝間小學校長に歴任し、當時已に氏の令名は到る所に高く、初等教育上鋭鋒顯る發したり、同三十一年工業教員養成所應用化學科へ入學、同三十四年其學科を卒るや直に廣島縣立工業徒弟學校長兼女子工藝學校長に就職す、同四十年迎へられて現職大分縣立別府工業徒弟學校長に轉任以て勤績今日に至る、爾來孜々營々として教務の發展を圖り、工業教育の直接又は間接に我邦工業界に如何なる效顯ありし歟を地方人に知了せしめたり、氏の功績愈々顯著なると同時に氏の名譽は地方人士の推稱する所と爲り、今や位階從七位に叙せられ、益々斯界に盡瘁せらる。

氏や資性溫良にして多辯を欲せず、勤勉其職に盡し敢て勞を覺えざるが如し、熱誠徒弟を教へて倦む事なし、其綿密なる思慮は以て施設經營を完ふし、其明晰なる頭腦は整頓し、其穩健なる主張は當局有志の迎ふる所と爲り、其寛容なる襟度は部下職員の悦服と爲り懇切なる指導は學徒父兄の信賴となる、由來別府の地たる工業徒弟又は遊浴四集の人を以て充たさる、從て風俗卑猥惰蕩の弊習滔々漲ると雖も、氏赴任以來言ふ所行ふ所範と爲り大に風儀の改善を見る氏の感化偉なる哉。」

鑑銘家育教



鑑銘教育家

七之部

奈良縣  
宇陀郡  
榛原高等小學校長

廣岡芳次郎氏

謹厚にして公平に、溫籍にして雅量に富む、而かも胸裡抜く可からざる凛々乎たる氣概を藏す、之れを以て廣岡芳次郎氏の天資とす、夫れ溫籍なるの士、偶々意氣に乏しく、氣概あるの士、偶々溫恭の徳を缺き易し、氏の若く溫厚、氣概併せ有せるの人は蓋し多からず、混沌たる現代に於て、育英の業に勉め、其功を修めん事、眞に斯の如き人材にあらずんば、又能はざるなり。



奈良縣宇陀郡榛原町の地、明治三年一月を以て氏を生じ氏や明治二十四年、奈良縣師範學校を卒業し、縣内宇智郡五條高等小學校訓導に任ぜられ、唐古高等小學校、萩原尋常高等小學校に訓導及び校長として歴任し、同三十四年、現校に轉じ、以來茲に十有幾星霜煩暑酷熱の日も、朔風互寒の夜も、勞筋僂骨、克く其職に勵み、孜々として怠らざること眞に源泉の滾々として寸時を捨てざるが如き也。常に實踐躬行、自ら以て學童に範たらん事を期し、以て生きたる訓練を施さん事、氏が兒童訓練上の第一主義にして、又職員をして修養を怠らしめず、其身は應て兒童の儀表たるの自覺を得せしめんとす、而して之れに對する極めて懇切にして、敢て一つの障壁を設けず、能く其意見を陳べしめ、眞の協同を圖る、茲に於て校裡、和氣藹々、宛然一家の如く、實績亦顯然として見はるゝに至る、又、主婦をして時代を解せしむるを第一方針とし、家庭教育に、性能の啓發を主眼として、青年教育に、共同一致、公德心の向上を主目と爲し社會教育に、夫々努力貢獻勞して息む事を知らざる也。」

鑑銘教育家

愛知縣  
知多郡  
郡立高等女學校長

從七位  
平山昶彦氏



封建制度廢れて郡縣政治と爲り、文明を泰西に仰ぐ事益々多く、從つて風教上の變化を來せり、殊に婦女子の思想に至りては其變潮最甚しく、寧ろ極端に惡化したりと斷言し得べき點なきにしも非ざるに至り、夫唱婦隨の美今や化して女尊男卑の歐米を夢み、徒らに華美婉麗を競ひ、婦徳の何物たるを顧みざるもの最近の趨勢にあらずや、其茲に至りし所以のものは何ぞや、教育者其人を得ざりし結果に外ならずして、社會亦其罪を分たざるを得ざるなり、平山昶彦氏憂慮之が一新を期す。

氏は熊本縣の人、元治元年十一月を以て生る、明治二十一年熊本師範學校を卒業し、任を玉名高等小學校訓導に奉じ、同二十八年校長に進む、同三十年熊本縣屬に轉じ、専ら教育行政に従ふ、同三十三年球磨郡視學と爲り、八代郡視學に移る、同三十五年遠く三重縣視學に轉じ、同三十七年三重縣屬兼視學たり、同四十年名古屋市立熱田高等女學校長に榮轉し、同四十三年現職に就く、其間教員檢定委員

教育會長等と爲り斯道に貢獻多く、本市教育界氏に因て刷新せらるゝ事不尠也。氏溫厚篤實にして、寛宏の量に富み、特に部下統御の才に長ず、生徒をして日常質素の生活に慣れ穩健なる情操を養ひ、以て地方に適切の人たらしめ、女子教育の本旨を實現せんことを期し、根本的實用的に生徒の學力養成を主眼として寛嚴宜しきを得、今や氏の徳を敬慕し、風教亦大に改まる、氏専ら重きを所屬部民の輿望に置き其好學心を鼓舞獎勵せらるゝ、人望厚き宜なる哉。」

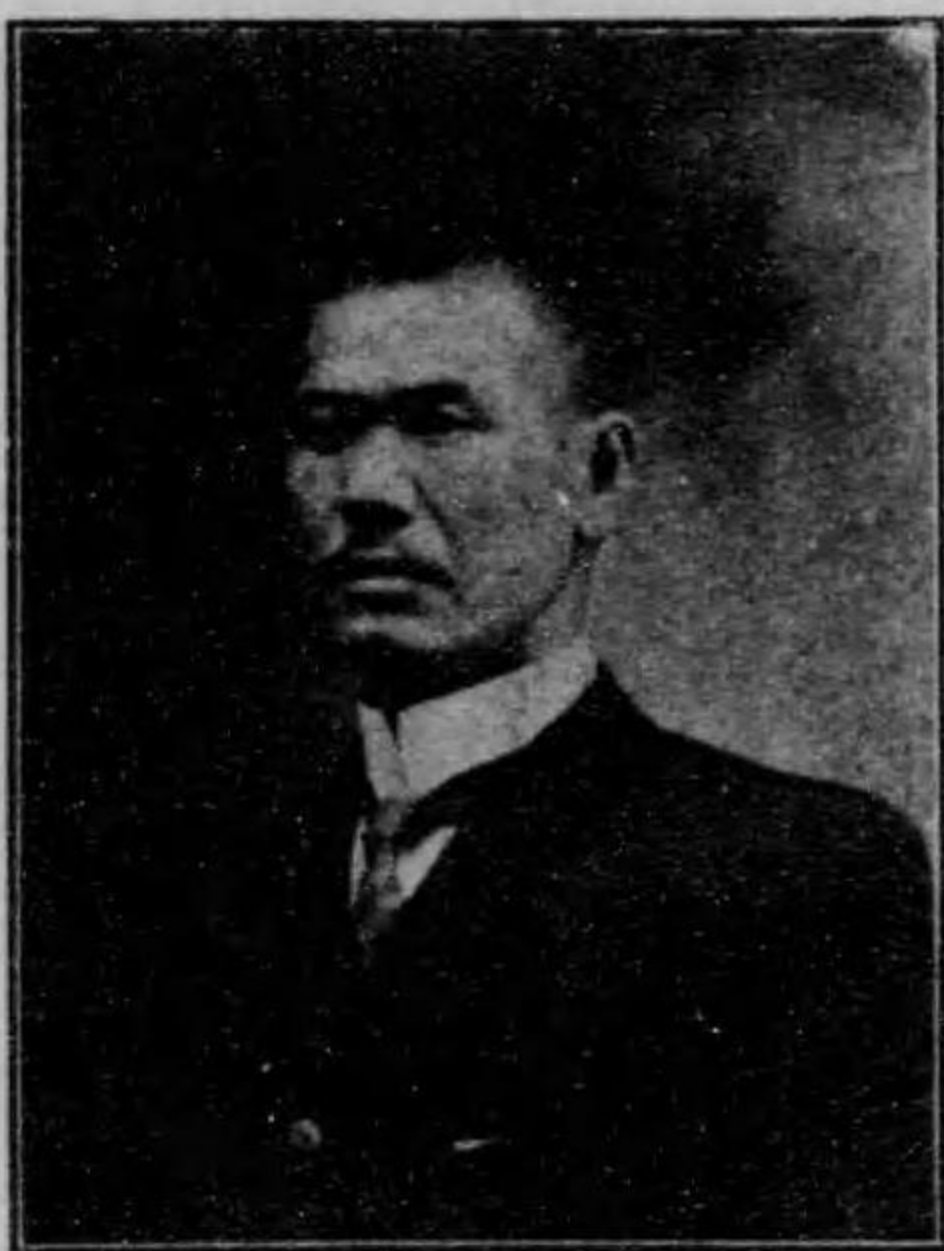
七之部



德島縣  
麻植郡立蠶業學校長

東尾 素氏

近年我國の物資頻りに外國に流出、常に輸入の超過するを見る、畢竟國交の親厚は奢侈の風を伴ひ、漫りに歐米を模倣して我國産の需應を減ぜしの結果に外ならず、然れども其輸出品の最高要地を占め、地方の活氣を増進しつつあるは、蓋し蠶糸業なりとす、我德島縣下は由來桑蠶業隆昌の地東尾素氏を聘し麻植郡立蠶業學校を治めしむ、氏の閱歷と人格亦適任なる哉。



氏は大阪府の人、明治五年一月を以て生る、明治二十四年大阪府立農學校を卒業し、後更に農商務省蠶業傳習所に學ぶ、同二十九年奈良縣技手に任じ、翌年兵庫縣飾磨郡農事試驗場助手と爲り、其翌年宮崎縣尋常中學校助教諭心得に轉じ、縣農事講習所技手を兼ね、又宮崎中學校教諭心得たり、同三十三年同縣農學校教諭に榮轉し、此年轉じて香川縣大川郡農事試驗場技手兼場長と爲り、同三十五年茨城縣北相馬郡農事巡廻教師に移り翌年職を辭す、同三十七年三重縣名賀郡農事巡廻教師と爲り、同四十三年群馬縣勢多郡農業技手兼郡農會技手を拜し、同四十四年現職に就き郡農業技手を兼ね奏任待遇を受く。

氏は資性敦厚順良、用意頗る周到にして事を處する最も綿密なり、多年實業教育に従ひ、又各地方蠶業の改良發展に盡す、其功蓋し少なからず、懇到なる交際指導は能く地方實業家の信頼を受け熱摯なる教導は學徒の尊信と風教の改善とに力大なり、常に飼蠶上に多大の注意を拂ふと同時に普通農業にも少からぬ研究を積み、地方富源に貢獻する所多し、豈偉ならずや。」

山形縣  
西田川郡立莊内染織學校長

從七位 廣井鋼之助氏

南紀の地瀧に那智あり浦に和歌あり、九里峽通じ龍門聳ゆ、其水其山秀嶺にして且つ美なり。其英傑を出し豪勇を産する故なきに非らざるなり、現任莊内染織學校長廣井鋼之助氏の如き其人たり。氏は明治元年三月十九日を以て此の地に生れ、資生沈毅然も亦機敏の才を以て能く事務に習練し、今や良校長の批評を一身に荷ふに至る蓋し異數なりと謂ふべし矣。



氏初めて東京高等工業學校を卒へしは實に明治二十一年にして、直に和歌山染工所技師に任ぜられ、次で紀州染織學校教諭となり、又韓國元山居留民役所書記に轉じ、同所居留民團會計役等を経て、明治四十一年二月山形縣西田川郡立莊内染織學校長に任ぜられ孜々奮勉當時已に令名を博す。本校は山形縣西田川郡鶴岡町家中新町にあり、有名なる内外の機織機は殆んど備はり、實に完全なる學校なり、氏は寬嚴中庸を得て生徒を訓練し、恩威並び行はれ、職員信服各其勤務に勵む。

氏は思想堅實品性善良なる徒弟を養成する點につき非常の苦心をなし。其結果として今や各地に散布就職せる卒業生は、其奉職上に於て、其自家就業上に於て、一として此の點を發揮せざるものなく、何れも實業上圓滿を以て向へらる、蓋し此の校の特長にして氏の感化力といふべきなり、氏は家庭に於いても一の老母に孝仕し、頗る圓滿に楽しく生活しつつあり、實に氏の如きは眞の教育家といふべくして、德望斯界に洽ねき所以なきにあらざる也。」



宮崎縣私立延岡女子職業學校長

廣瀨 太平氏

延陵の地山紫水明古來小京都の名あり、人情雅美教育の好適地たり、舊藩主内藤子爵墓には亮天社を設けて男子の高等普通教育を施し、今や女子の爲めに本校を起して賢婦淑女を養成す、而して廣瀨太平氏を聘して校務を總攬し、教育の全權能を委す、廣瀨氏の人格高きこと推知す可き也。氏は長野縣の人、明治四年十二月上水内郡津和村に生る、明治三十一年東京哲學館を卒業し、修身倫理教育の中等免許状を受け、滋賀宮崎の各師範學校、三重縣第二中學校等教諭を経て、同四十三年本校教頭を囑託せられ、次て校長と爲る、地の利に設備を加へたる建築は、縣立の諸校を壓せんとす、健全質實、不言實行の眞の女子を養成するを目的とし、殊に女子教育に就ては、熱心なる主張あり虚飾粉黛なく、地味親切、快活愛敬の婦人を標的とし、眞善美を理想として向上せしめつゝあり。



身長僅に五尺、然も膽大にして思慮周密、簡素樸直職に勵み、道に盡して多年一日の缺勤なし、以て面目の半面を見るに足らん、曾て宮崎師範に在るや、生徒は異口同音「一番好きな先生は廣瀨先生、一番怖い先生も廣瀨先生だ」と言ひぬ、其附屬に主事たるや、一枚は一家の如く、僚友皆骨肉の親みあり、人に接する懇篤、事を處する忠實、學深く識明に、堅固なる信仰を有し、毅然泰然たるものあり、縫ひ直しの外套、前世紀の帽子、而して和氣愉色、常に徒歩の趣味に樂み、靴の如きもジョンソンの其れに似たりと傳へらる、百花爛漫の中、一頑石の横はる感あり、豈快事ならずや。

山口縣私立下關梅光女學院長

廣津藤吉氏

重厚の性、寛洪の量を備へ、眞摯素朴なると共に、高雅温醇の風あり、以て能く人に長たるの徳を持する者、之を私立下關梅光女學院長廣津藤吉氏と爲す、篤信なる基督教信者にして、其學和洋を兼ね、加ふるに博物學に於ける専門的智識を以てす、育英者の資質備はれりと謂つ可し。氏は大分縣の人、明治四年一月を以て下毛郡中津町に生る、少壯にして長崎東山學院に學び、八年盤雪の功を積み、明治二十九年其の普通部及神學科の業を卒へ、九州傳道に従事すること五年の後、新なる使命を奉じて身を女子教育に委ね、長崎市私立梅香崎女學校に長たること十三年、大正三年四月同校の山口町光城女學院と併合し、下關市に移轉し梅光女學院と改稱せらるゝに至るや更に院長に榮轉せしものなり。



明治三十四年以來ミス、カツチと提携して舊梅香崎女學校なる多數の職員生徒を統率し、校則を改正し、此校本來の主義精神に則りつゝ、學科課程、教科用書、教授、管理を立て、實行し、幹事留川順子をして寄宿舎を整備せしめ、圖書機械標本の設備、校舎擴張の計畫を、校風を樹立せり、植物學研究の爲め、各地の山河を跋涉し、足跡九州四國關東の峻山荒海に普く摘葉標本數千は本學院に保存す、教育上の主義は基督教的教育の長所を以て、國民的教育の缺陷を補ひ、時勢に適應せる善良なる婦人を養成せんとするに在り、氏の採る處善い哉嗚呼。



廣島縣賀茂郡視學

廣井以忠氏

不偏不黨の語、簡なりと雖も情趣の味はふべきもの津々たるものあり、偏せざるは曲らざる所以なり、自己の節義を堅樹して毫も他に牽引せらるゝなきなり、黨せざるは阿らざる所以、權勢も名利も自己の照魔の鏡に照らして一顧盼をも與へざるなり、然れども是れ頑陋事體に通ぜざるを云ふに非ず、自己の尺準に律し、許すべきは許し、學ぶべきは學ぶ、唯取捨正義に外れざるにあるのみ、

現任廣島縣賀茂郡視學廣井以忠氏は不偏不黨の士、其の私の行動頗る公平なるものあり、衆を率うる須らく氏に倣ふを要す、氏夫人人格者なる哉。



氏は明治元年二月を以て安藝郡下瀬野村に生る、人と爲り磊落率直、他に接する城壁を設けず、根蒂深き所鏗々の節曲ぐべからざるものあるも、未だ曾て人と争ひしことなく、極めて圓滿を保つ、明治廿二年四月縣立尋常師範學校を卒業し、廣島雙三世羅各小學校に轉勤し、其の世羅郡小學校に在職中、明治三十七年四月擢てられて郡視學と爲り

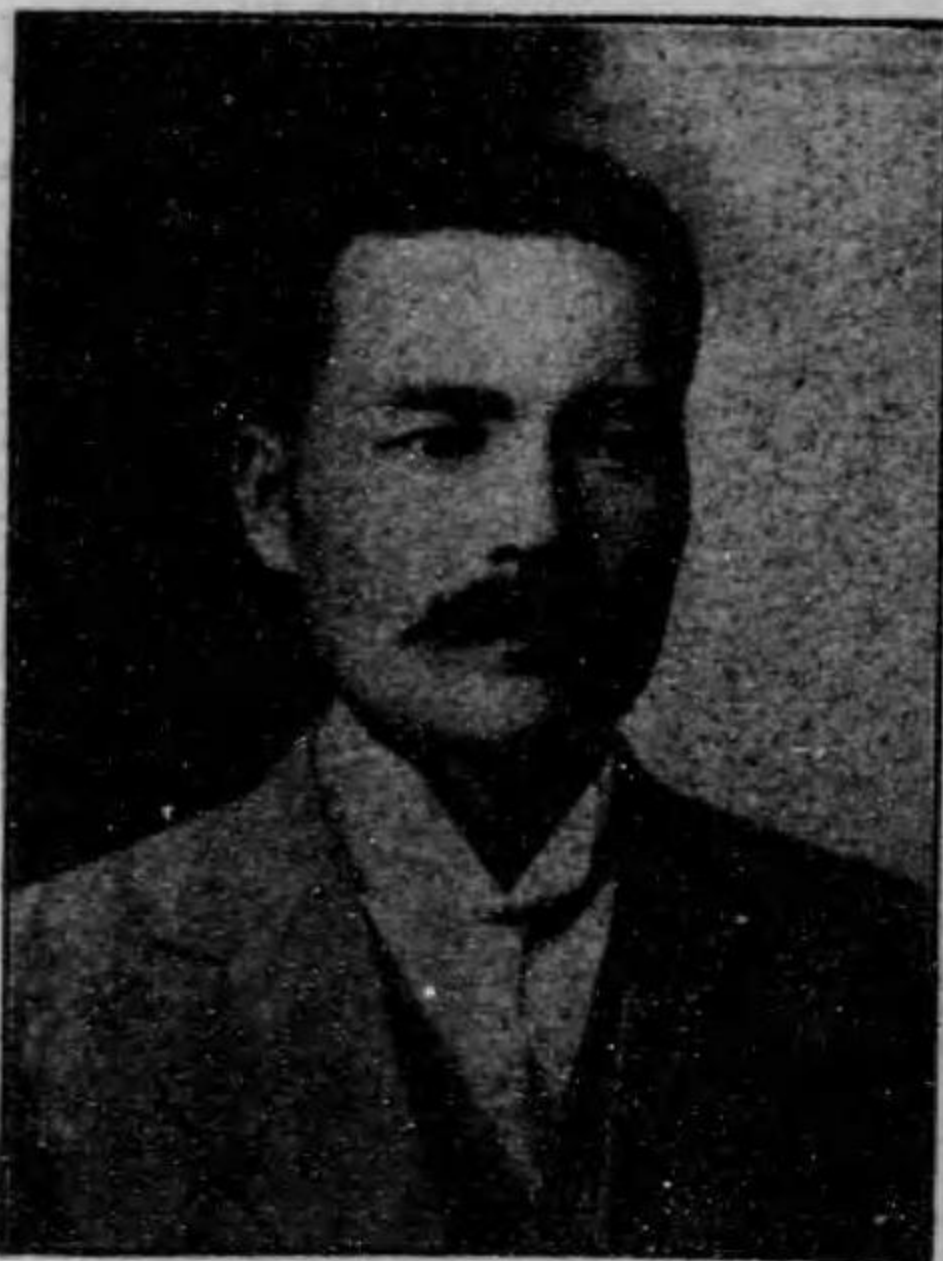
山縣郡比婆郡等に歴任し、明治四十四年十月終に現任賀茂郡視學と爲る。國民教育の義務として就學を強制せる小學教育が、其の兒童の卒業後の狀況を見るに、學力は漸次退化し、操行亦社會の惡風に薰染せられ、折角の苦心水泡に歸するものあるは否定すべからず、氏は是を憂ひ、兒童卒業後の指導、即ち青年教育の忽緒にすべからざるを認め、極力實業補習學校の設立を奨勵し、以て之が機關の完備を計りつゝあり、此人を以て視學と爲す賀茂郡豈幸ならずや。』

鑑銘家育教

奈良縣高市郡視學

東浦毅氏

節々たる彼の南山維石巖々、赫々たる師尹民具に爾を瞻る、國を有つ者以て慎まざるばあるべからず、辟すれば則ち天下の僂と爲る、衆の仰瞻する所赫々たらざるべからず、南々の節々巖々以て萬物を壓す、以て統率の功成るべし、以て事功の隆を期すべし、現任奈良縣高市郡視學東浦毅氏其の氣節の鞏堅にして操守の嚴乎たる斯界の南山を以て稱せらる。



氏は明治三年十月を以て本縣南葛城郡秋津村に生る、人と爲り濃厚篤實にして事に當る剛毅果敢、功を成す俊敏速達を以て稱あり、而も世の片々たる才子とは自ら其の撰を異にす、特に修身教育の學に興味を有し常に研鑽を怠らず

明治二十五年五月奈良縣尋常師範學校を卒業し、同月葛上郡御所高等小學校訓導を拜命し同二十八年八月高市郡尋原尋常高等小學校訓導兼校長に轉じ、着任忽々校舎の改築を企て、一面内容の改善に全力を傾注し、其の成績頗る見るべきものあり同三十一年十二月縣師範學校訓導に轉じ、同校首席訓導として勤績約十ヶ年同四十一年二月生駒郡視學に拔擢せられ、更に山邊郡視學を経て、現任に轉ぜしは大正元年十一月の事なりとす。

鑑銘家育教



鑑銘家育教

ヒ之部

岡山縣 大原高等小學校長  
英田郡

平田富太郎氏

一〇九〇

明治二十三年岡山縣尋常師範學校卒業以來、常に同一學校に奉職し、一意専心教鞭に身を委ね、只管自己の及ばざるを之れ憂ひて孜々努力するの人、之を我平田常太郎氏と爲す。

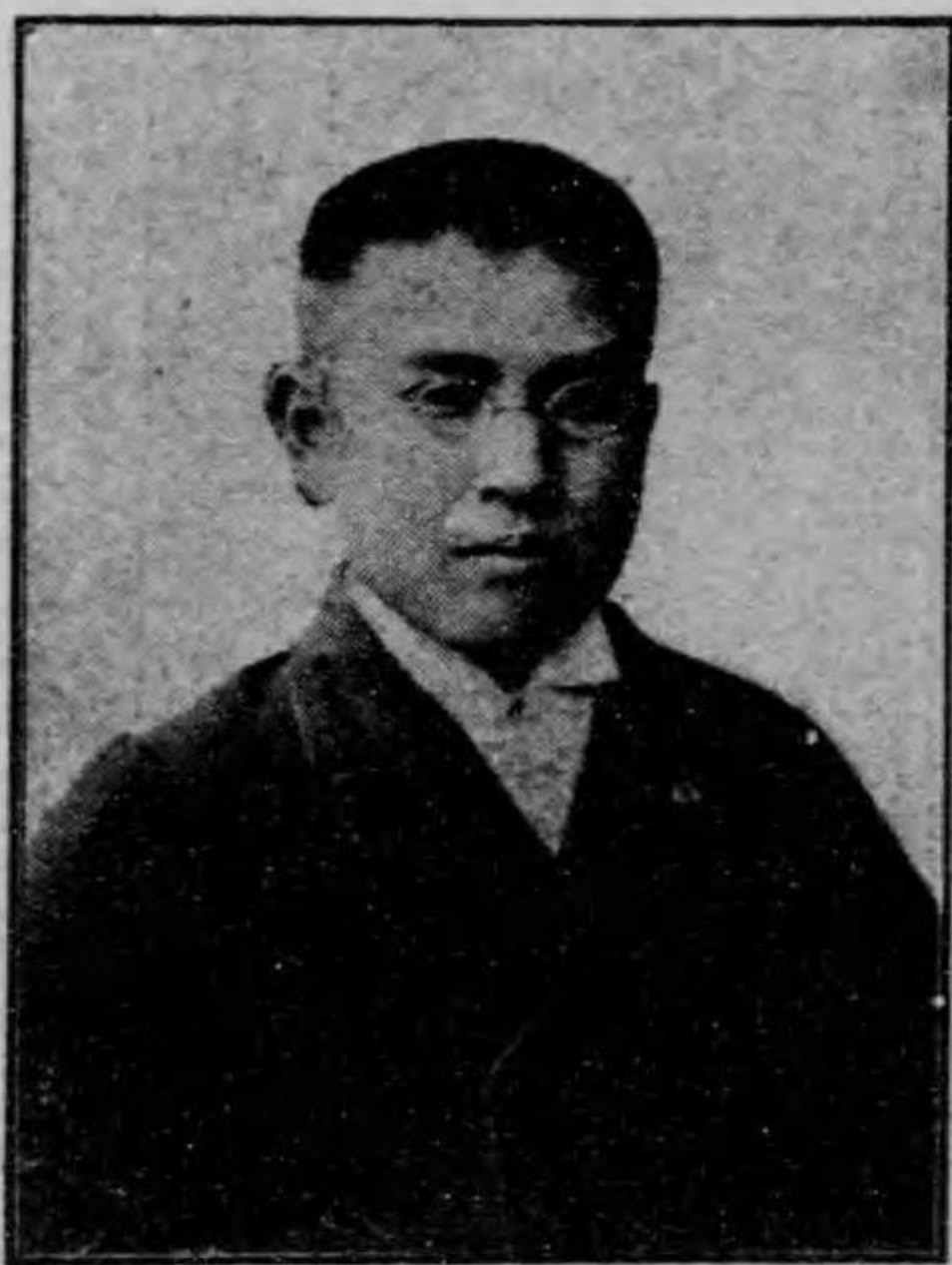


和衷協同兒童の教化に當る可く職員を統督し、互に意志の疏通を計り、寛大の徳を以て其の長所の發揮に努め活動を促す、家庭に對しては孝道本位、秋霜烈日の嚴より春風和照の内に聴かしむるより多く見せしめ、戒より傲に、自動的人物たらしむるを以てす、諸種の機會を設けて學校家庭の聯絡を圖り、青年の丁年に達せざる者は補習教育團に入らしめ、純良なる國民の涵養に努力す、其他社會風教上に貢獻する等枚舉に遑あらず、大正三年文部省氏の功績を選奨せる宜なる哉。』

鑑銘家育教

千葉縣 市川尋常小學校長  
東葛飾郡

廣瀬 涉氏



風教の事教育者而已に委するは否なり、社會と學校相提携し、主義方針を一致して始めて効果を奏すべきものとす、然れども學校を中心とし、教育者躬ら中心と爲りて改善を謀る可き責任を有する事は亦明なり、我廣瀬涉氏は此點に於て非凡なる抱負を實行しつゝある一人なりとす。

氏は茨城縣の人、明治十一年二月を以て北相馬郡高井村に生る、明治二十八年東京府立尋常中學校を卒業し、此年第一高等學校へ入り研鑽怠りなかりしが微恙漸次昂進して翌年十二月遂に退學の止むなきに至り、暗涙轉た禁ぜざるありきと云ふ、然れども霸氣滿々たる氏は、爰に育英者たらん志を起し、同三十一年松戸高等小學校雇員と爲り、奮闘黽勉以て同三十三年小學校本科正教員免許狀を受得せり、直ちに同校訓導に任せられ、翌年富勢尋常小學校長に轉じ、劃策經營する處多し、後高等科を併置し自からも順次昇進して郡内有數の地位に在りき、同四十五年現校長に就き孜々校務の刷新を圖りつゝあり。

資性慧敏機智あり、放膽なるが如くにして而かも細心緻密、克く四圍の狀勢を洞察するの明あり、部下に對する極めて懇切、其敏捷なる省察力は能く總てを未發に防ぎ常に機先を制するの長たり、快活にし又人に喜ばる、町吏有力者を操縦する獨特の技能を有し、夙に勸業と教育との連絡を唱道し、昨年教育勸業連合會を開催し、諸種展覽會、諸集會を行ひ學校中心主義に近づかしむ、蓋し木内重四郎氏西久保弘道氏其他我國有力者の熱心なる贊助ありしは、以て一新軌軸とすべき乎。』

シ之部

一〇九一







朝鮮平新義州公立尋常高等小學校長  
安北道

### 日野 順海氏

夫れ徒らに星を仰ぐの徒、足下の大石を知らず、之れに蹉跌を取る、徒らに地に俯すの徒、大空に煌く星を知らず、之れ又人物の少なき所以乎、茲に日野順海氏、頗る高遠なる理想を有し、而かも事に當りて熱心、勤勉、真に氏の若く完き人は稀なり、空想に趨りて實際に忠ならざるの徒、實事に囚はれて一つの理想なきの輩のみ滔々たる現時に當り、氏は之れ又萬綠叢中の紅一點と稱すべき也。



慶應元年三月東京市本所區小梅の地、氏を生む、氏は明治二十年神奈川縣師範學校を卒業し、直ちに同校附屬小學校訓導に任せられ、同三十三年同縣程谷尋常高等小學校長に轉任し、同三十七年同縣足柄下郡視學に、同四十年東京市横川尋常高等小學校長に轉じ、同四十二年東京市立本所第一夜學校長を兼任、同四十四年朝鮮仁川公立小學校長兼幼稚園長兼仁川公立商業專修學校長と爲り大正二年六月現校に轉任せり。

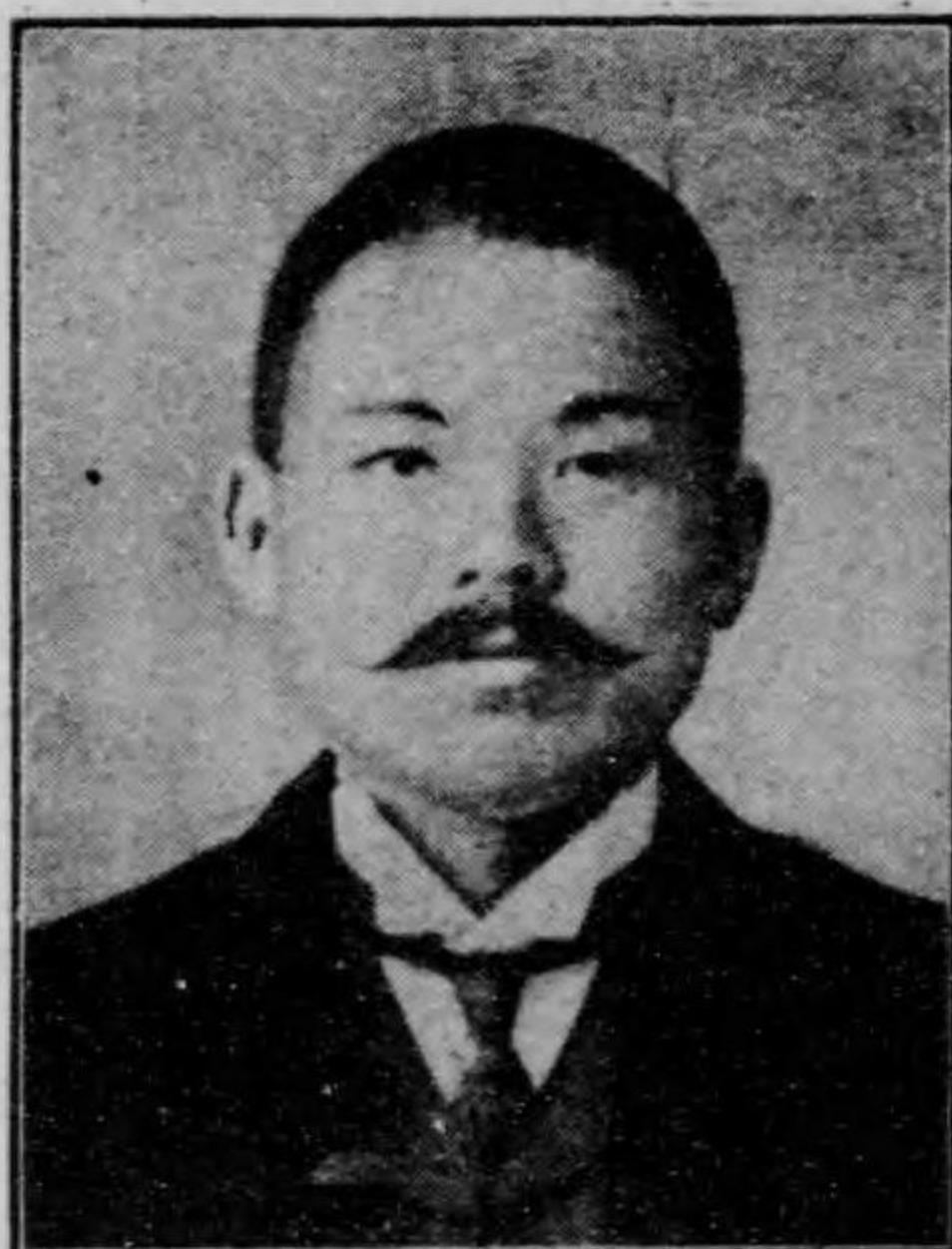
氏は我國に於ける二部教授の卒先家にして、明治三十五年、該意見及び學說、方法等に關し、其研究結果を文部省に報告し、小學校令改正のため大いに貢獻する處あり、同三十七年該教授法實施上に關し研究的意見を提示し、遂に文部大臣より感謝狀を享くるの榮を擔へり、夫れ他に習ふは必ずしも秀才たらずして之れを爲し得べし、然れども、一事業を創始的に爲すは之れ非凡なる英才たらずんば能はざる處、氏の功や又大なりと謂ふべく、而して氏が如何に理想的教育家の典型たるかを裏書きすと謂ふべきなり。」

### 鑑 銘 家 育 教

### 鑑 銘 家 育 教

宮崎縣清武尋常小學校長  
宮崎郡

### 平 林 菊 衛 氏



噫嘻、日月逾邁き、玩愒廢弛す、驕奢日に長じ、慢淫日に生じ、腐草と同じく斯盡泯滅せば、吾焉んぞ人たるを得んや、自信なく、克己なく、道心なく、節儀なく、浮誇虛榮の念に駆らるゝの輩天下を横行す、吾人何ぞ共に天を戴くを潔よしとせん、茲に平林菊衛氏あり、身に綾羅の裳なし、居に彫梁畫棟の高樓を有せず、然れども其性極めて敦厚、啻之れを質朴の化身とす、吾人華奢輕躁の徒を冷笑し去ると同時に、氏の眞摯高潔なるに與せずんば居らず、真に現時稀に見るの人格者と謂つべき也。

氏は明治八年十月を以て、宮崎縣兒湯郡木城村椎木の地に生る、同三十年三月宮崎縣師範學校卒業、同年四月縣内兒湯郡高鍋尋常小學校訓導に任せられ、同三十四年四月同郡三財尋常小學校訓導兼校長に、同三十七年四月宮崎縣師範學校訓導に、同四十四年五月現任に、同三十八年より同四十四年迄毎年教育檢定臨時委員を命ぜらる。

氏は殊に國語に興味を有し、斯道の造詣頗る深宏、郡内に於て國語に實力あるの人と云へば必ず氏を推すに至れり、且つ教授法を研鑽して、大いに其道に堪能、殊に初年兒童取扱に於ては非凡の辣腕を有し、兒童嬉々たるの裡に之れを訓育し、兼ねて今後教育を享くる者に對する、確乎完全なる基礎を作る、之れ氏の最も得意とする處にして又部下職員統御甚だ宜しきを得、校内は宛然一大家庭の如く、春風霽々たるの裡に訓練の實績を修む、眞に氏の若きは稀なるの好教育者、模範的人格と稱すべき哉。」



鑑銘家育教

ト之部

三重縣 阿山郡府中尋常小學校長

樋口奈良吉氏

一〇九六



凡そ育英に在る者、情實に拗み行を二三にするは惡むべし、又奇警の言を弄して世を瞞着せんとする所謂時代の寵兒なる者亦憎むべし、若し夫れ權門名利に馳せて自衛を之れ事とし、國家教育の精神を誤まる者、更に大に排斥せざる可からず、學問智識は敢て教育者に求めずとも得べく、技藝は師事せずとも知るべし、然れども品性の陶冶、人格の修養、意志の鍛鍊等の精神教育に至りては範を得て始めて完成すべし、教育者の人格を尊ぶ所以實に茲に在り、況んや教育は一感化事業なるに於て、正に其然るを知らん、現任府中小學校長樋口奈良吉氏は人格の人、意志の人、又以て良教育者たるを失はず。

氏は三重縣の人、明治三年五月を以て阿山郡小田村に生る、人と爲り濃厚篤實、志操堅固、頭腦明晰にして舉止端正、交はるに温情あり、導くに慈心あり、明治二十四年縣師範學校を卒業するや、直ちに郷里の小田小學校に職を奉じ、同三十二年同郡平田尋常高等小學校長に轉ず、越て同三十七年現任校長に就き、以て今日に至れり、前後二十有三年孜々教へて倦まず。

其部下を率ゆるに親切叮嚀を以てし、遇するに優待を以てす、兒童を教ゆるに我兒に對するが如く、寬嚴亦度を失はず、部民父兄は努めて學校に接近せしめ、學校教育の精神を解せしむるに力む青年には勤勉儉素の實行を以てし、社會風教の美醜は一に青年の責任なるを知らしめ、以て有終の美を傳さんと謀る、今や其德化四隣に及び、一役の欽仰する所たり、嗚呼偉なる哉。」

鑑銘家育教

ヒ之部

神奈川縣 尋常三分小學校長 久良岐郡

平田恒吉氏



我國未だ教育の方法全たからざるの時代に當り、不屈不撓の精神を發揮し小學教育を受けしのみにして、獨力研學を以て今の位置に至れる、三分小學校長平田恒吉氏の非凡人たる一斑を知り得べし、吾人は氏の意思鞏固教育的人格者たるを敬す。

氏は明治十八年初めて小學高等科教員免許狀を授與せられ、同二十五年小學校本科正教員免許狀を受領し、同三十七年文部省より普通免許狀を授けられ、大正二年教育功績規則第一條により文部大臣より選賞せられたり、而して現校訓導となりしは明治十九年にして、其後校長として教務に盡瘁今日に至る稀有なる哉。

本校は神奈川縣久良岐郡六浦莊村にあり、頗る完備せる學校にして、最近田舎に適當の手工教室をも建築し、日露戰役紀念蓄積金五百圓を有し、尋常科六學級高等科二學級五百に近き生徒を有す、氏平素生徒を訓練するに勤儉和順を主とし勇健なる氣風を以て自治心を養生し禮節を守り公德心の發達に努め、教授は自修的に教材を精選せしめ、生徒をして自動的に啓發せしむるを主義と爲す。

氏の部下を統督するや赤誠を吐露して肯て城壁を設けず、大小のこと總て職員と勤務を共にし、職員も亦一家の主の如く之を仰ぎ、互に協力一致して事に當り、村青年會、職工會等の事業にも盡力し、今や大いに其効果を修めつゝあり、是れ氏の如き天性謹直にして剛健なるの人、至誠以て所屬民の人望厚く信頼深きに非ずんば焉能く斯くの如きを得んや。」

一〇九七



廣島縣比和尋常小學校長  
比婆郡

### 平田純一氏

裁決宛も水の低きに着くが如く、果斷宛も快刀亂麻を截つが如し而かも事を處する着實、我平田純一氏の如きは其類甚だ多からず、氏且つ耐久の力に富み、中心倒れて後止むの氣慨凜乎たるものあり、思慮を竭して思ひを決し、而して行ふに敏し、真に之れ理想的育英家の天資たり、氏が功績皎々として照り氏の令聞四隣に駛す、之れ理の赴く處、數の歸する處と謂つべき乎。



慶應二年六月、廣島縣比婆郡東城町の地、此人材を生む氏や少くして郷里私立行餘館に學び、漢文學及び數學を修む、爾後獨學自修に勉むる處あり、明治二十四年遂に地方免許狀を得、同十七年より郷里なる東城尋常高等小學校に奉職して、熱誠を盡し、不斷の努力を以て其教鞭を振ひ同三十四年、同郡比和尋常高等小學校に轉任、同三十七年、再び東城尋常高等小學校長に移り、施設經營大いに盡瘁する處ありしが、同四十五年、前任地比和村民、氏を敬慕して之れを迎ふるの意切なるにより、更に該地に赴任以て現職と爲る、今や平田先生の名、一郷の老幼之れを知らざる者なきに至れり。

教師と兒童と共に實行、以て人格徳性を涵養せん事、之れ氏が理想にして又主義たり、而して現時教授が偏重し易く、爲めに理論と實際との一致を缺くの弊風あるに留意し、氏は學習上、紀律上整頓上専ら實行を期し、又該地情勢に鑑み、或は經木眞田製作に、或は稻作、造林、蠶業にすべて適切なる方法を以て眞摯的に教育を施し一日も寧處するなし、實に仰ぐべき哉。

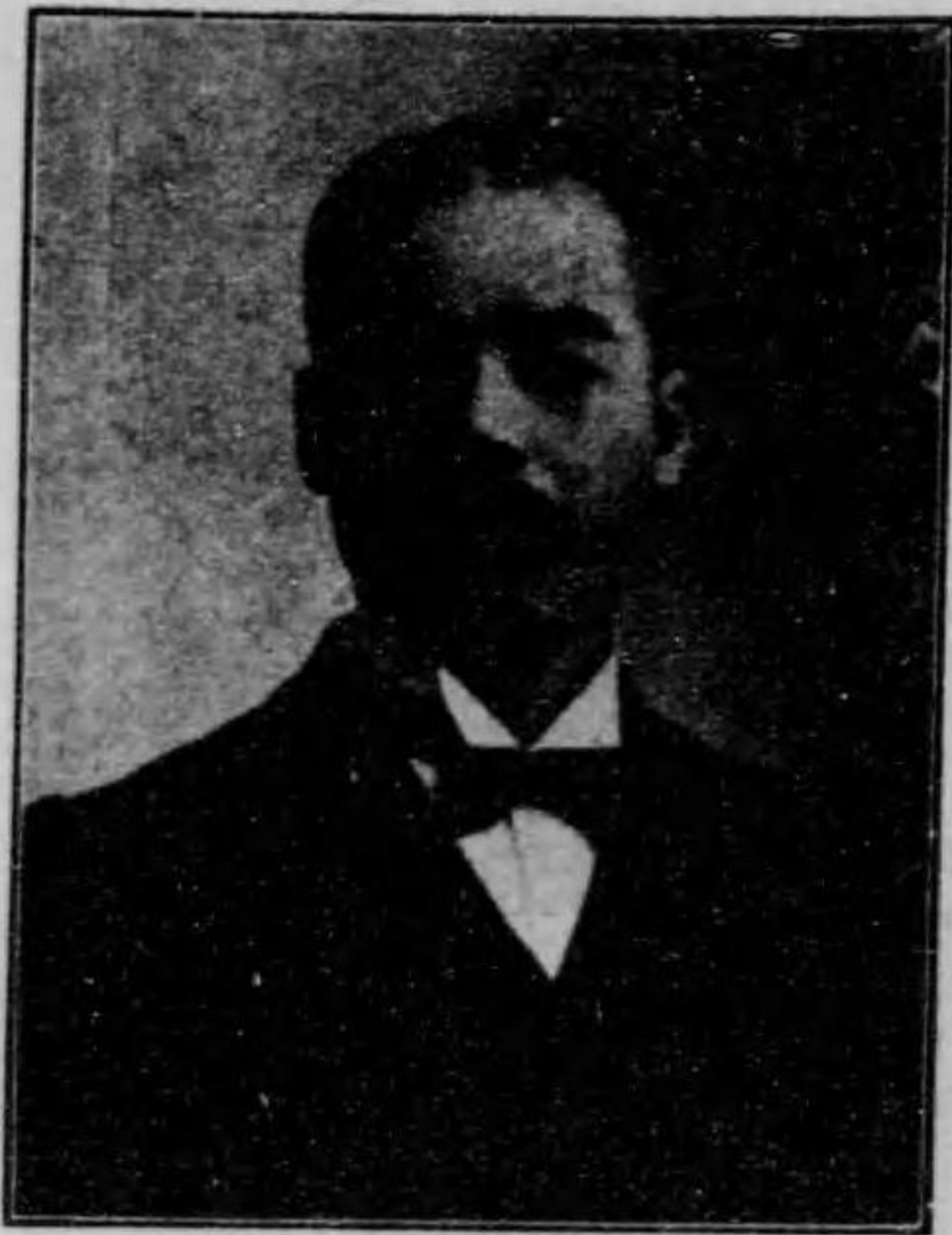
### 鑑銘家育教

### 鑑銘家育教

岐阜縣高山女子尋常小學校長  
大野郡

### 廣瀬龜之助氏

質素勤勉從順を綱領とし、自ら綿服を纏ひ敢て世の流行を追はず、靜肅高潔の婦徳を養成し、精緻の教材研究は、漫りに新學說の模倣を許さず、慎重慎議、必ず將來に向て是認し得るに非ざれば實行せず、而かも實行は徹底を期す、其用意、其識見は稀に見る所、之を廣瀬龜之助氏と爲す。



氏は元西氏本縣吉城郡河合村の人、明治七年二月に生る、資性濃厚篤實、其修養する所頗る深く博覽強記にして常識に富み、事理明白にして人格の崇高なる、實に大人物たるを失はず、明治二十八年縣師範學校を最優等を以て卒業し、直ちに高山高等小學校訓導を拜し、翌年廣瀬家の養子と爲る、爾來同校の合併分割等ありしも引續き勤績すること二十年、現任校は其分身なりとす、此間公私の選賞に接する事十數、其效績以て知る可きなり。

氏は頗る孝心深く、前諾を重んじ、謙讓の徳あり、義理を重じ慈心に富む、又曾て氏の部下たりし者、異口同音其在職中の感化薰陶を追慕し、氏の爲には敢て水火を辭せずと、以て其人格の偉大を窺ふに足らん、頭腦明晰に加ふるに熱心親切なるが故に、所屬民の信賴厚く、亦能其の輿論を傾聽し相俟つて教育の改善進歩を計る、家庭並社會の教育に對しては、甚深の注意を拂ひ、學校との連絡、通俗講演會の利用等専ら婦女の教育に盡し高等科卒業生半途退學生を以て淑徳會を組織せり、又日露戰役に際し恤兵婦人會の組織に活動し賞勳局より銀盃下賜せられたる等氏の努力指導大なり、氏の如き教育的人格者を得たるは本校否縣下の名譽なる哉。



三重縣 南牟婁郡尾呂志村學務委員

東 孫三郎氏

巨萬の財を積んで猶且自個の營利に奔走し、遂に公共慈善に貢献する事なきの世往々に之れ有り。此時に際し東孫三郎氏あり、身を學務委員の一公職に置き、只管教育の普及改善に努力する事十有七年、其他慈善の事業に斡旋する事多く、金品を寄附する事實に數十回、金銀木杯其他の賞與を受くる事實に枚擧に遑あらず、其の私財を投ずる事實に萬金を超ゆ、亦偉ならずや。



氏は本村の人、明治三年十一月を以て生る、明治二十三年三重縣尋常中學校を卒はるや、歸郷して父祖の業を襲ぎ常に公共慈善の事業に力を致し、殊に小學教育の普及發達の緊要を感じ、夙に郷黨向學心の振興に努め、村民を誘導して怠らず、明治三十年學務委員と爲り、思想益々堅く趣味彌々深く、十有七年間専心管理者及校長を輔けて就學出席の督勵、校舎の改築、基本財産の造成に努め、又社會教育に力を輸す、蓋し常人の域にあらざる也。

氏資性溫良、身を持する事嚴格、常に學校に出席して校長の相談對手と爲り、村教育發展の跡を顧みて無上の快樂と爲す、近時村民より懸會議員、郡村會議員、村長等の名譽職たる可く希望するも、學務委員以外の公職は一切固辭して受けず、之れ余の天職なりと、虛榮なく虚飾なし、曩に本校の成績優良の故を以て同校長の選奨を受けしは、全く余の力に據る、明治四十三年三重縣斯民會より表彰せられ、大正元年文部省より教育功勞者として選奨せらるゝに至る豈に偶然ならんや、氏や眞に畏敬すべきの人なる哉。」

佐賀縣 三田川尋常小學校長 神埼郡

挽地熊次郎氏

君子政を失し世道亂れ、人心崩るゝを見て獸を率ゐて人を食ふと之れ古賢の評なり、現代の道德は頹廢の極に達せり、現代の風俗は蝕害され了んぬ、夫れ相率ゐて人を相嚼むに非ざるなきか、私かに慄る古賢の評に適はん事を、茲に挽地熊次郎氏輕佻の時流に投ぜず、他に對する謙讓の徳を失はず、自ら持する廉潔の心高く、人をして自ら親愛敬仰の念を生ぜしむ、眞に稀有なる濃厚篤實の士、吾人は如斯誠實の士を我が教育界に得たるを祝し、氏が健闘を希望して止まず、愈々進んで其育英の職に盡瘁され益國家有爲の材を養成せられん事を望むや切。



氏は佐賀縣佐賀郡の産、明治五年十月兵庫村に生る、同二十七年三月同縣尋常師範學校を卒業し、同四月同縣佐賀郡兵庫村淵藤尋常小學校准訓導に、同十一月訓導に、同二十八年三月同校長を兼任し、同三十年五月兵庫尋常高等小學校訓導兼校長に轉ず、同三十二年十二月同縣青藍高等小學校訓導に、同三十三年四月同縣神埼郡芙蓉高等小學校訓導に同三十四年七月芙蓉尋常小學校訓導兼校長に同三十六年九月芙蓉高等小學校訓導兼校長に任ず、同四十一年三月普通免許状を受け同年芙蓉尋常高等小學校訓導兼校長に大正二年三月現任と爲る。誠實、勤勉、自治、自動、進取、規律、共同一致の精神を發揚するを以て其訓育要目と定め、而して其實施上に於て一時一徳に向つて全力を傾倒せしむるの方針に據り、其實踐に指導誘掖を力め、自ら之れを實行して其暗示を與へんとす、氏到る處に衆望高き所以偶然に非ざる也。」



群馬縣利根郡尋常小學校長  
利根郡薄根高等小學校長

### 廣瀬久明氏

洋々たる利根の流れも、遡源すれば水滴溪泉の集合に非らずや、或は岩角に碎け、或は斷崖を躍り、幾多辛酸苦闘を経て遂に孕風白帆の恩恵を受く、廣瀬久明氏今日の惠澤や偶然の事に非らず、星霜を更ふること四十に近く、勇猛精進の奮闘研鑽、克く功の大なるを致す、聖旨の存する所亦眞に爰に在る可く、國家國民の養成亦實に之に因らざる可からず。



氏は嘉永七年五月を以て群馬縣利根郡沼田町の産む所なり、明治九年群馬縣師範學校小學師範學科を卒業し、吾妻郡須川小學校の教員と爲り、利根郡岡谷小學校を経て師範學校附屬の訓導たること少時、後碓氷郡安中、多胡郡鐺南吉井、第九十七學區尋常高等の訓導より、多胡郡井池沼田、伊勢崎の校長を歴て、明治二十八年薄根高等小學校訓導に移り、同三十四年同校長を拜し、薄根實業補習學校校長を兼ね、同四十一年尋常科を併せ以て今日に勤績す。

氏や圭角を存せず、温厚着實只管範を躬らせん事を惟ひ苦境辛酸を意とせず、持久堅忍の志を以て部下並に學徒に臨み、克く父兄、母姉に接觸して學校家庭の聯絡に努め、青年處女を指導誘掖して堅實なる國民性を發揮せしめ、社會教化に力を竭して風教の善美を期し、徳夙に校の内外に及び、一般の仰慕する處と爲る、宜なる哉日露戰爭中の功績を文部省より賞せられ、更に文部省の選奨に浴して百五十圓を下賜せられ、大正元年奏任待遇の榮譽を受くるに至る、氏の徳や夫れ大なる哉。」

### 鑑銘家育教

愛知縣老津尋常小學校長  
渥美郡老津高等小學校長

### 彦坂利作氏

權衡ありて而る後ち物の輕重を知り、度量ありて而る後ち物に長短あるを知る、何を以て人心を度する歟、然り吾老を老として人の老に及ぼし、吾幼を幼として人の幼に及ぼす、是れ心の權度に於て、斯くてこそ始めて其恩四海を保するに足る、教育の眞髓此所に出でずんばならず、現任愛知縣渥美郡老津尋常高等小學校校長彦坂利作氏の仁慈、管内部民をして師父の禮を執らしむるもの故なしとせず、眞乎教育者の典型なりと謂つべし矣。

氏は明治三年九月を以て愛知縣老津村に生る、資性温厚にして素朴、敢て邊幅を修飾せず、加かも頭腦明晰、終始哲學的心理の研究を持續して廢せず、凡て其教授上訓練上に於ける教務は着實眞面目を以て、専ら内容の充實に努力しつゝあり、人其學校視察を望むや、曾て自分の主義を語らず只其問ふ所に從ひ回答するのみ、誠に寡言の君子と謂つべし、明治二十六年三月其縣師範學校の業を卒るや、其四月本郡豊橋高等小學校訓導と爲り、同二十九年四月現任學校長と爲る、爾來勤績二十年以て今日に及ぶ、氏の徳望高く一郷に洽ねき知るべきのみ、其間同三十九年八月老津村立農業補習學校長を兼ね、同四十四年十一月老津村立通俗圖書館長を兼ね、以て氏の敏腕にして事に當り熱誠に遂行せざれば止まざるの氣象なる知るべきなり。

氏は家庭教育の基礎教育たるに留意し、大に其の連絡に力を盡し父兄懇話會、母姉會等を開催して意思疏通を圖り、青年子女の修養を怠らず一郷風儀の改善を以て自己の責任と爲す、郷黨氏を尊敬して本村教化の神なりと、是れ氏の徳化民衆に溢れたるもの敢て讚辭にあらざるなり、宜べなり一郷中年以下は皆其薰陶に浴する者、嗚呼教育の事斯くて始めて成果の美舉と謂つべく、彼の昨西に今東に唯り名利の多きに走るの徒夢想も及ばざる所、氏の如き教育家を得たる老津校多幸なる哉。」

### 鑑銘家育教



廣島縣糸崎尋常小學校長  
御調郡

東 格 助 氏

教育は神聖にして犯すべからず、故に教育者は其人格須らく神聖ならざるべからず、教育者は以て超然的俗界に異ならざるべからず、千差萬別なる俗界事業は何れも直接名譽利録を含まざるものなし、然れども神聖なる教育事業に於ては名利の間接的にして名利を欲望する人間養成を目的とするが故に、蓋し亦之より大なる公事ある事なし、英傑之に因りて生れ大臣大將孝子節婦も皆此中に養はる、凡そ國民たる者誰か教育を受けざる者あらん而して人性善なるにも不拘、常に邪曲に奸詐に人を歴して以て自己の利益を是れ事と爲す者多き所以のもの、畢竟教育効果の完からざるに因る教育者の任や亦重い哉、現任廣島縣御調郡糸崎小學校長東格助氏深く茲に慮る所あり、以て效果の完全を望むや切に、其人格の崇高なる其感化力の偉大や、生徒校友に及びたるや知るべし。

氏は明治六年二月を以て其縣に生る、明治二十七年廣島縣尋常師範學校を卒業し、直に世羅郡世羅高等小學校訓導兼同郡東郷尋常小學校訓導に任せられ、爾來尾道尋常小學校、坂井原尋常高等小學校訓導より三原高等小學校訓導に歴任し、次て美ノ郷高等小學校長に進み、後復三原高等小學校長を経て現任學校長に就職す、以來孜々として教務の刷新を圖り、營々として教授訓練の改善に努め、所屬の融和に職員の統御に、最も其宜しきを得て以て令名一郷に噴々たり。

氏人と爲り濃厚華實、職務に熱誠にして事を處するや周到緻密に、常に躬を以て部下を率ひ、慈愛を以て兒童を教ゆ、父兄母姉に交る磊落城府なく胸襟を披きて能く思想の交換を圖る、以て學校教育の舉るを努むるのみならず、家庭教育社會教育に至る勉めて自己の責任と爲す、愛を以て到る所佳良なる成績を挙げ、校下の信頼何れも厚く、僚友亦深く氏の人格に服し感化を受くる者少からず、氏の如き模範的教育者を得たる廣島縣郡教育界の多幸夫れ大なる哉。」

鑑 銘 家 育 教

新潟  
縣立柏崎中學校長

從七位 元 田 龍 佐 氏

時流膚淺、俗陋の風天下を掩ふ、而して矯正の任にある教育界亦濁浪の捲没する所となり清鮮の氣之を見るに乏し、獨り現任新潟縣立柏崎中學校長元田龍佐氏のあるあり、以て人意を強くするに足る、其の崇高なる人格は常に大道を踐みて疑はず、其の篤實なる資性は凡て時流の取つて以て是とする權變術數を却け、一時を糊塗し俗人の喝采を得るが如きは氏の最も嫌ふ所、眞乎教育家の典型にして吾人の敬仰すべき人格者たる哉。



氏は明治九年五月を以て大分縣速見郡杵築町に生る、舊杵築の藩士、明治三十三年七月東京帝國大學文科大學哲學科を卒業し、其の八月私立眞宗大學教授に聘せられ、同三十五年六月富山縣立高岡中學校教授を囑托せられ、同九月同校教諭に任ぜらる、同年十月縣立高岡中學校奏任教諭と爲り、同三十八年十二月從七位に叙せらる、同四十三年八月新潟縣立長岡中學校長に轉じ、大正元年十月現任と爲る其經驗豊富の大を以本校を統理する教務發展期すべきのみ。

氏は生徒の訓練及び管理に付いて常に穩健中正を標的とし、極端奇矯に走るを避く、教授に於ても亦同一精神の現はるゝを見る、彼の徒に中學校を以て高等學校の豫備校と爲し、其の入學者の多きを誇るが如きは、氏の居る所に非ず、氏常に己を責むる嚴にして部下職員に對する極めて謙讓懇切なるを以て、衆皆悅服し校内一の不平を聽かず、是れ皆氏の人格の發露にして二校の風規振肅のみならず一地方の風儀刷新上、其貢獻や與つて大なりと謂つべし。」

鑑 銘 家 育 教



山口縣大津高等女學校長

森脇俊作氏



凡そ一國を治め、一家を齊ふる、必ずや整正なる秩序の上に立たざる可からず、若し夫れ序を失はんか世は暴力の支配となり、弱肉強食の淺ましき情態を現出し、一家は亂脈を來し、遂に救ふ可からざるに至らん、夫れ人は成長して一家を成すの責務を有す、子弟教育に従ふ者能く秩序の修得に注意せざる可からず、殊に一家の主婦たらんとする女子の教育に於て更に其必要なるを認む、現任山口縣大津郡立大津高等女學校長森脇俊作氏は確然たる秩序に立つの人、明治六年二月を以て山口縣吉敷郡佐山に産る、明治二十八年東京哲學館漢文科を修了し、同三十一年國學院大學を卒業す、此年任を縣立山口中學校教諭心得に奉じ、同三十三年縣立岩國中學校教諭心得に轉ず、翌年德島縣立德島中學校教諭心得に移り、同三十九年上京して東京實科學校教授、東京聖學院中學講師、明治學院講師等を歴、同四十二年現校の前身なる大津郡立大津女學校長兼教諭と爲り、大正二年奏任の待遇に進む。

氏人と爲り和平篤實、學を好み常に研鑽を斷たず、部下を信任して細綱を委ね、且つ其長所の發揮に努む、生徒に對する慈愛を專一とし、懇到なる教訓と共に化育の實大に顯はるゝを見る、父兄母姉と提携して教育の精神を誤らざらん事を期し、猶社會の惡風に感染せしめず、儉素質實、恭謙貞順の婦女たらしむるに努む、其條理に當るの説は能く人をして聽かしめ、風教の作振に預かつて力あるを致す、今や郡下斯界の明星として一般の崇敬を受く宜なる哉。」

鑑銘家育教

奈良市立奈良高等女學校長

從七位 森口奈良吉氏



一株の花一本の樹既に歴史あり、況んや一個の家に於てをや、亦何んぞ貧富貴賤を問はん、吾人は必ず父母を有し、祖父母あり、又高祖ありしなり、凡そ人として歴史を尊重せざる者なし、殊に女子の教育には歴史の觀念を養ひ、而して飽くまでも之を尊重するの絶對的觀念を附與せざる可からず、何となれば女子は嫁して夫家の歴史を更に記憶せざる可からざればなり、我森口奈良吉氏は歴史家なり、常に此等の教育を施して止まず。

氏は奈良縣の人、明治八年六月を以て生る、明治二十九年奈良縣尋常師範學校を卒業し、吉野郡三河、高見の各校を経て同三十一年母校師範の訓導と爲り後同校教諭心得を兼ね同三十三年萬國史の資格を得て、郡山中學校教諭心得に轉じ翌年同校教諭と爲る、爾來校職の外生駒郡教育會理事、尋常小學校教員講習會講師、奈良縣立戰捷紀念圖書館評議員、小學校教員乙種講習會講師を囑せられ、同四十四年郡山中學の舍監を兼ね、遂に現職に轉じ奏任待遇と爲り

縣市教育會の理事神職講習會講師を囑され師範卒業生の同窓會たる興東會に副會長たり。

氏や温厚英邁、頭腦明晰にして學に篤く、曩に萬國史科中等教員免許狀を得、次で歴史科、後地理科の免許狀を受得す、氏は儉素自ら持し、以て女子の奢侈淫靡に陥り易き弊を矯めんとす其卒業式誨告の如き懇切を極めて將來婦徳に背かざるを戒む一郷家庭と相俟つて能く其効果を收む、地方醇厚の俗主として本校に其種子あるを努む、現任日淺きも鋭鋒已に顯はる偉なる哉。」

鑑銘家育教



滋賀縣 神崎郡 立商業學校長

望月 貞氏

凡そ業の何たるを問はず、簡にして要を得るを心懸けざる可からず、一目的を以て人を訪ふや、唯其の目的を達すれば足れり、宜しく單刀直入、颯々として用談に掛り、冗言以て時を費やす可からず、諺に曰ふ下手の長談議は勉めて避くるを要す、殊に商業に従事する者は、徒らに贅言を弄して對手を苦しむるの行爲あるべからず、簡要を得るは蓋し處世の至寶と心得べし、我望月貞氏は此點に於て獨特の長所を有す。



氏は大阪府の人、文久癸亥年十一月の産、明治十六年滋賀縣中等師範學校を卒へ、河内國丹南郡西村小學校長に任じ、同十八年辭職す、翌年大阪市北區瀧川小學校訓導と爲り、同二十三年北區盈進高等小學校訓導に轉ず、同三十二年京都府立京都簡易商業學校教諭に任じ、同三十四年廣島縣立廣島商業學校教諭に轉じて生徒係長を兼ね、又廣島要塞に簿記科を教へ、同四十年滋賀縣神崎郡立神崎實業學校長に移る、即ち現校の前身なり、同四十四年奏任待遇に進められ、聲望今や縣下に洽ねく、斯界に重鎮を爲すに至れり。

氏や濃厚篤實、快活にして城壁なく、又雅量あり、夙に商業教育の普及を唱道し、一舉商業科免許狀を得て商業教育に従ひ、或は京都府教育會より研究部門實業部委員、或は廣島縣教育會より補習商業夜學校教師を託せられ貢獻甚だ力む、大阪市北區は多年の勤勞を感謝して三重銀盃及金一封を贈る、此厚遇北區に於ては氏を以て嚆矢とす、由來江州は商業隆昌の地更に氏に待つや切。」

教育家銘鑑

教育家銘鑑

熊本縣 阿蘇郡 中部高等小學校長

師井 大太氏

先王の法に則りて民を教ゆるは先王の徒なり、吾が師井大太氏、教育勅語戊申詔書の御趣旨を體し、そが徹底を主眼とし、専ら實踐を指導し、自己の反省に由りて行爲の責任を感ぜしめ、至誠にして濃厚常に自己の立場を自覺し奮勵事に當つて息まざるの習慣を養成するを以て訓練の骨子となす、ア、盛なるかな王道蕩々、斯くして四海王化に浴するを得ん。



氏は本郡坂梨村の人、明治二年十月の生、明治二十四年三月縣師範學校を卒業し、本郡南部高等小學校訓導及び校長たること十一ヶ年、飽託郡飽田南部高等小學校訓導兼校長たる二ヶ年、轉じて現任校長となり、更に大分縣立竹田中學校教諭心得と爲り舎監を兼ね、居る五年、再び現任校に歸任し、今に至つて二年、本校は校舍稍古しと雖も、諸般の設備は完成し、學級數は七にして學童數三百餘の小數と雖も、其整頓規律の嚴然たる郡内に模範たり。

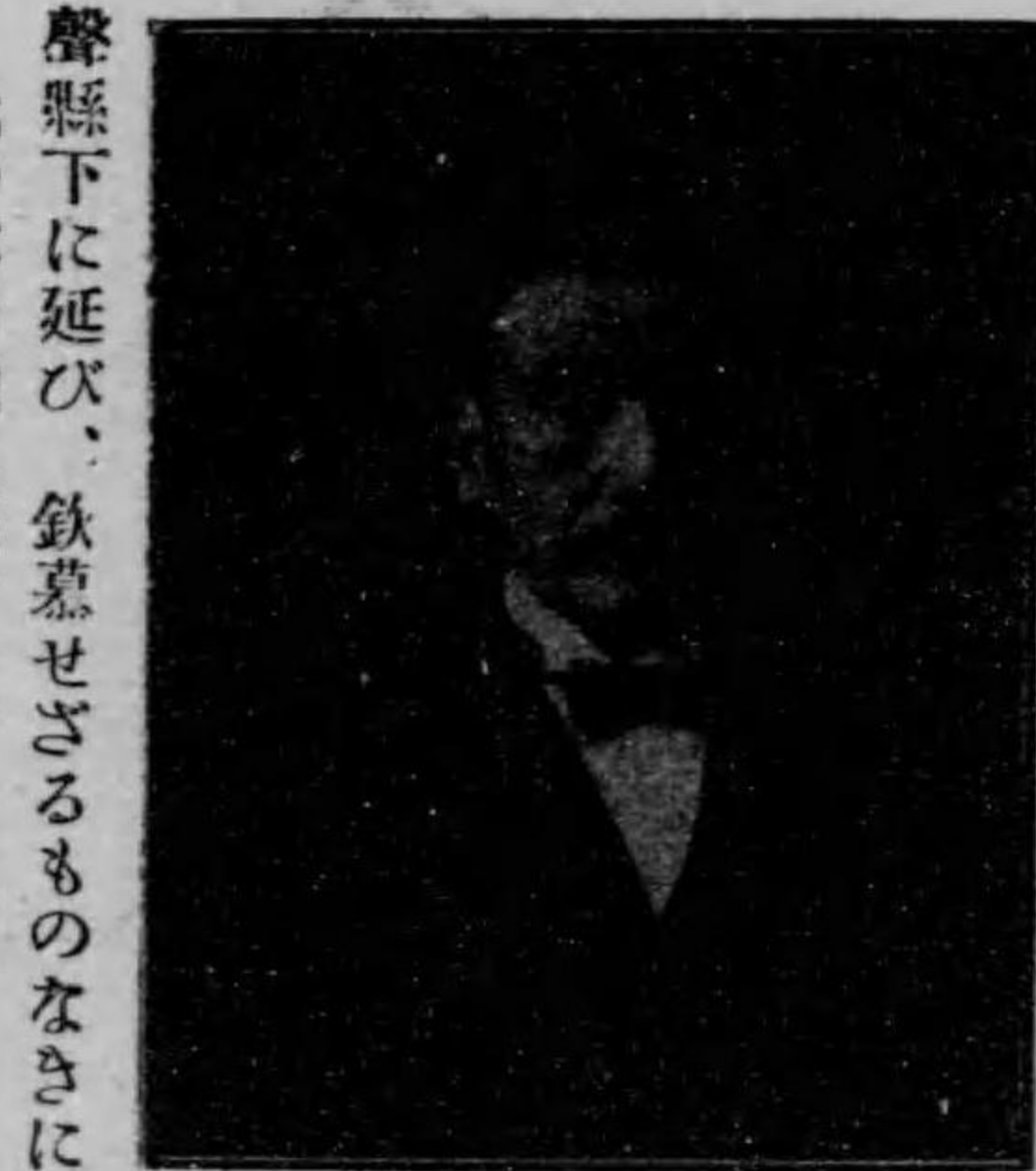
氏は確實なる補導の法を講じ、自學を奨め、以て學課を愛し實習を尙び應用を究め、兼て學問上の趣味を養ひ、制定せられたる各教科教授の要旨に適合せんことを期す、職員に對しては常に自信を以て教壇に立たしめ、多くを知りて少く教へしむ、舉動は沈着にして機敏なるべく、言語は簡明にして勢氣あるなく、時間を有効に使用し、兒童に對し常に親切ならしめ、終始一貫自己の職責を盡くして怠るなく、分掌の事務は日に整然として其の實を擧げ、同僚間は常に霽々として和樂ならしむ、氏の令名噴々縣下に高き偶然にあらざる也。」



京都府第三高等小學校長  
葛野郡

勳八等 森 市太郎氏

過大の富は其の欲す處にあらず、赫々の名譽は亦其望む所にあらず、要は只至誠其の職に盡す有るのみ、樂しみ實に此の中にあり、蓋し現任京都府葛野郡第三高等小學校長森市太郎氏の心既に固く之を誓ふ、宜なる哉三十有餘年の久しき、能く其の任に竭して國民教育に貢献す、氏や功を求めずと雖も、國家亦何んぞ之を看過せん、今や叙勳の恩褒に浴して一家一門皆悉く皇恩の懿徳に感泣す、教育者たるもの眞に斯の如くなる可し。



氏は文久二年八月を以て京都府下に生る、資性着實温厚にして城府を設けず、敢て自ら邊幅を修めず、只管兒童を教へて他念あるなし、明治十二年師範學校の教科を卒はるや、直ちに任を葛野郡西院小學校の訓導に奉じ、能く校長を輔けて降々たる校運を開き、在職五年にして同校長に昇り、營々苦酸を嘗めて一校統宰に當る事更に十有二年餘、同三十三年轉じて葛野郡第三高等小學校長に榮轉し、幾多改善施設の實を擧げて勤績する事又更に十有四歳、遂に令聲縣下に延び、欽慕せざるものなきに至る、大正三年撰ばれて勳八等に叙せらる。

教育家銘鑑

東京市石濱尋常小學校長

森 克 造氏

小學教員たるの自覺最も固く、常に學力の修養に努め、率先して各種の講習會に出席し、後進の指導誘掖に意を注ぎ、幾多學事の實際を案配して、只管校務の整理、教授の改良刷新に竭すこと殆んど寧日なく、且つ能く部下を愛撫するを以て職員協和し、兒童相睦みて霽々の氣自ら校風と爲り、人をして轉た快感を興へしむるもの、之を現任石濱尋常小學校長森克造氏と爲す。



氏は茨城縣の人、明治四年十一月笠間町に生る、夙に教育者たらんとし、東京府師範學校に入り、明治二十七年を以て其業を卒へ、府下華園尋常高等小學校訓導に任ず、翌年芝尋常高等小學校訓導に轉じ、通常時間外授業の多忙に處する數年、能く其職責を盡す、同三十七年淺草尋常高等小學校訓導に移り、次て淺草區第一商業補習學校訓導を兼ね、翌年待乳山尋常高等小學校長に榮進し、同四十年現任校に校長を兼ね、幾許もなく本職を免じて兼職專任と爲り同四十四年再び待乳山尋常小學校長を兼掌し、大正二年兼務を解き本職專任、以て今日に至る、教職に在る實に二十有餘年に達す功績擧る宜なる哉。

氏人と爲り濃厚謹直にして謙讓恪勤なり、其の教授訓練や懇切周密、殊に訓練は其の最も重きを繫ぐ所、學校を以て團欒の場とし、職員兒童を家族的關係に置き、實踐躬行之を率ゆ、故に本校が訓練上比較的困難なる事情あるに拘はらず、郁々乎として夫れ盛なるを得しも、氏の徳望高きが故也、官廳の信任益加はり、父兄擧げて其の徳を謳歌す、偶然にあらざるなり。」

教育家銘鑑



兵庫縣龍野尋常小學校長  
揖保郡龍野高等小學校長

森本新太郎氏

貝原益軒曰く「學は疑あるを貴ぶ、大疑あれば大進あり、小疑あれば小進あり、疑なければ進む能はず」と、蓋し研鑽修養は此の疑あるが爲めに貴し、我森本新太郎氏は大疑の人、大進ある宜なる哉、其施設に其經營に、必ず研究を盡し、疑を解きて而して後之を行ふ。



氏は本郡の人、明治四年四月を以て太田村に生る、人と爲り温良恭儉、加ふるに不斷の修養に由りて一段の光輝を加へ、讀書趣味又深く研究心に富み、其思想常に數歩を先んず、明治廿七年縣師範學校を卒業し、縣下小學校訓導たり、同三十年朝日高等小學校長に任じ、大に令腕を縣下に轟かせり、同四十二年揖保郡視學に擢んでられ、郡下教育の發展に盡瘁すると二年、同四十四年揖西尋常高等小學校長に轉じ、翌年更に現職に移る、大正三年町立幼稚園長を兼務し、孜々努むる所あり。

本校は児童一千名、二十五名の職員を有する大校なるも平素克く職員を統御し、児童を訓練して、校風の興振他に類を見ず、教授又地方化して色彩を發揮し、郷土資料の蒐集頗る力め、之が活用亦餘すなし、細心の注意を以て管理に従事し、近來更に校外管理に新生面を拓くを見る、寡言躬行以て職員に對し、何れも悦服其職に忠なり、所屬民に學校教育の精神を了得せしめ、幼稚園教育、子守教育、實業教育、婦人教育等に關して着手せる事項頗る多く、郡教育會主事として廣く社會教育に銳意努力すると雖も、別に新主張、特異の主張あるに非ず、氏の聲望今や縣下に噴々たる宜なる哉。」

鑑 銘 家 育 教

東京市筭尋常小學校長

森 川 澁 氏

「君子以忠信爲利、禮儀爲福、苟忠信禮儀之不在、雖祿之萬鍾、爵以侯王之貴、君子猶謂之禍與害」と、之れ王陽明が毛憲副に與へたる書中の一節にして、自ら信ずる所に安んじ、自ら安んずる所に立つものと言ふべく、正氣中心に餒えず精力外に揚る、所謂道義的剛毅の人格者爰に在り、我森川澁氏の如きは眞に名譽利祿を追はず、忠信禮儀を樂んで兒女を感化するの人、以て東京市筭尋常小學校長と爲り、以て市内教育界に錚々たる氏の令名を擧ぐ、偉なる哉氏の人格。

氏は明治六年十二月を以て東京市下谷區竹町に生る、夙に教育者たらんと志し、東京府尋常師範學校に學び、明治二十九年優等を以て其教科を卒へ、直に任ぜられて西多摩郡五日市尋常高等小學校訓導たること四年、同三十三年東京市下谷區入谷尋常高等小學校訓導に轉じ、同三十六年麻布區本村尋常小學校長に榮轉す、次て同校に高等科を併置して尙其校長たり、當時氏の功績到る所に現はる、氏の磊落たる雅量と共に令名高く、同四十年迎へられて現任校長と爲り、爾來營々として校舎の設備に教具の全きに、孜々として教務の刷新に諄々教へて勞を知らざるの人。

氏や英敏にして高潔、心裡の到徹、明晰の頭腦は以て學理の深遠道義の崇高と爲り、同情心に富み慈愛の情操は唯り兒童の敬慕と爲るのみならず、所屬父兄の信賴厚き所以と爲る、交はるに城府の設けなく常に胸襟を披瀝して餘す所なきは、當局同僚の推稱措かざる所と爲り、職員各其長所を發揮して教授上に訓練上に求めずして教育の擧る所以と爲る、氏は能く家庭教育に重を置き、學校教育の基礎は偏に家庭教育の善良なるにあるを以て、各家庭との連絡を圖り、學校教育の方針を知らしむるに努め、父兄母姉の懇談會開催に盡力し、卒業生校友會を獎勵して青年子女の修養風儀の改善に努力し、以て社會教育上貢獻する所尠からず精力主義の人なる哉。」

鑑 銘 家 育 教



高知縣 高岡郡 佐川尋常小學校長

森岡八十吉氏

凡そ身を教育界に置くもの不屈不撓の勤勉努力は勿論、自己修養を忘るべからず、躬ら品性を修め人格を崇高ならしめ、且つ學殖を豊富ならしめざるべからず、以て學童育英の場に臨み、地方文明の真相を催さしめ、以て堅實忠良なる我帝國臣民を教養せざるべからず、現任高知縣高岡郡佐川尋常小學校長森岡八十吉氏は終始修養勤勉の人格者たり模範教育者たる資質を備へ、常に遙に同儕當事者を抜き、以て地方教育界の重鎮として畏敬せらる、豈偶然ならざらんや。

慶應三年二月を以て高知縣に呱聲を擧ぐ、幼にして英俊郷黨の秀才を以て稱せらる、長じて身を教育に投ずるの志望を抱き、明治十九年小學校教員の檢定試験を経て遂に其資格を得たり、翌年高岡郡長者小學校訓導に任せられ、爾來三野、能津、桐見川の三小學校訓導を経て、同二十四年現任佐川尋常小學校の訓導と爲り、同三十三年尾川尋常小學校長に榮轉し、幾何もなく佐川高等小學校訓導に移り、同三十八年佐川學校所屬民の囑望辭し難く遂に轉じて現任學校に復り、校長の職に就く爾來孜々營々教務の刷新、職員統一の方法等改善せられたる所尠なからず。

氏や資性温厚にして勤勉、事に當て屈撓せず難に際會して愈々努力奮闘の勇あるは氏をして以て今日あらしめたる所以ならん歟、氏は教育上力を就學出席の獎勵に致し、意を教授訓練の改善に用ひ、常に克く優良の成績を擧げ而も謙讓にして多く語らず、質朴曾て邊幅を修めず終始淪らざる穩健の方針を有し易より難に小より大に、湧くが如き同情は獨り兒童の敬慕と爲るのみならず青年子女の尊敬と爲り、所屬有志の信頼と爲る、而も愈々自己の修養を怠らず以て新進の文化に一步を進みて事を努む、校務の餘暇會長又は顧問たる青年會の開催補習教育の獎勵等、多くは村民有志或は卒業生の努力に成る以て氏が徳望の如何に深厚なる歟を知るに足る、嗚呼偉なる哉氏の高徳。」

教育家銘鑑

教育家銘鑑

岡山縣 赤磐郡 佐伯尋常小學校長

森 郁 四 郎 氏

造次にも國家を思ひ、顛沛にも教育を忘れず、孜々涓々倦まざるもの、之を森郁四郎と爲す、近時我國教育界の趨勢を見るに、社會の逆流に抵抗せず、華を去り實に就くの聖旨に悖るもの、比々然らざるはなし、吾人思を此所に馳せて嘆息之を久ふすること屢なり、學術、技藝は次ぎとし、先づ求むべきは品性に在り、人格にあり、氏既に之を得たり、訓化の美宜なる哉。



氏は明治十四年八月を以て生る、資性温厚篤實にして最も研究心に富み、自己品性の陶冶に力む、明治三十五年岡山縣師範學校を卒業し、爾來小學校訓導並に校長として錚々の功あるもの、蓋し氏の如きは稀なり、其現職に就くや能く部下を統督し、教授細目を完成し、訓練の實蹟を擧ぐ其附設する幼稚園は萎微して振はざりしも、氏の奮闘に由りて遂に今日の盛況を得たり、又女學校を附設し、企畫經營宜しきに適ひ、補習教育の施設地方に冠たり、其の效績實に著大に兒童の出席、補習教育の普及に至りては、地方亦

比類なきの良好を呈せり、當局爲めに氏を賞し、與ふるに金圓を以てし、父兄母姉爲めに感謝、欽慕の意を表する一再に止まらず榮譽の至りと謂つべし。部民をして我國根本道義の本體を了悟し、家庭に於ける秩序的觀念を得せしめ、學校教育の精神を悉知し、相互提携して後進指導の任を完ふせんとす、之れ偏に己れの天職にして、只身を以て國家に酬ゆる一事ある而已の信念は、正に氏に於て之を見るべし、氏人望高く令聲噴々たる理乎。」



鑑銘家育教

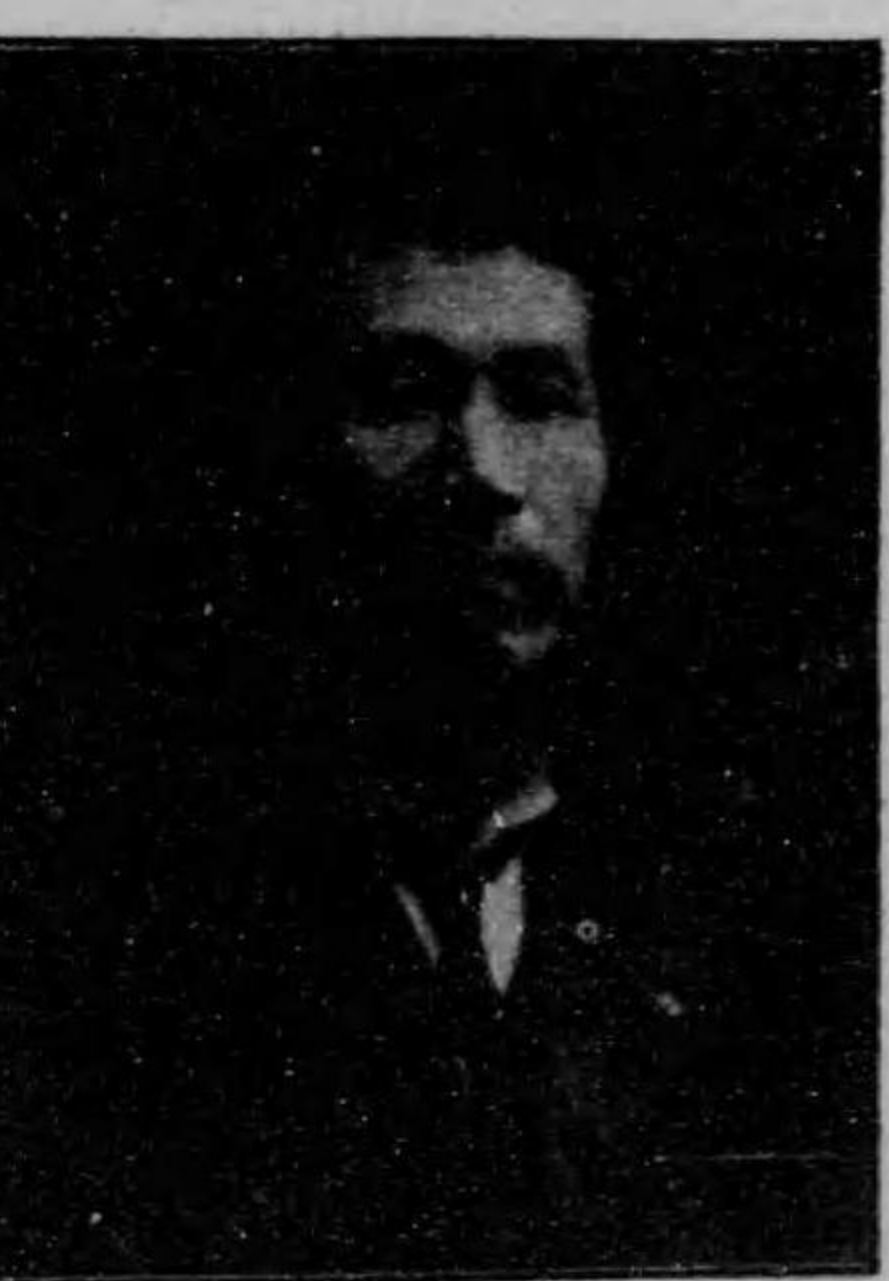
モ之部

一一六

滋賀縣高月尋常小學校長  
伊香郡

森田讓氏

滋賀の湖海平らにして百川之に集まり、更に白帆を浮べて悠々たり、何ぞ其の容なる、而かも中に幾多の魚族を遊ばせ、時に雁鴨を乗せて月を弄ぶ、教育者は宜しく斯の如き大量と、斯の如き趣味とを養ふて以て學徒を教導せざる可からず、現任滋賀縣伊香郡高月尋常高等小學校長森田讓氏は真に此の種の人、吾人氏の教績と韻々たる詩趣を聞いて欽仰措かざるもの、焉んぞ阿附諂辭を供して銘鑑に載するの愚を爲さんや。



氏は本縣の人、慶應元年三月を以て伊香郡高時村に誕聲を擧ぐ、幼にして邁俊、群童と趣きを異にす、明治十年滋賀縣師範學校に於て時の師範學科の業を卒へ、爾來教職に従事する事實に三十有七閱歲此間適く所隆々たる教績を擧げ、徳化亦四隣に及び、一般の尊崇を受く同四十三年轉じて現校長と爲る夙に普通免許狀を受け又郡教育會、縣知事等より表彰せらる事數次。

氏資性温厚篤實にして思慮綿密、人に接して圭角なく、邊福を修飾せず、宏量大清濁併せ吞み、而かも悠揚迫らず、孜孜業務に服して熱誠、勢力旺盛にして終に懈怠の狀なし、特に氏に誇る處は精勤に在り就職當時より今日に至る未だ一日の缺勤なし、寛恕部下を率ひ慈撫學童を導く或は青年處女の誘導扶掖に盡し、或は社會風教の改善に寢食を忘る、一面風流の韻趣を有し、俳句に巧みに、而して今や宗匠の域に達すと云ふ、由來教育者中徒に偏狹なる學說の研究に而已心を寄せ、風雅丹精に遠さかる者あり氏の器や大氏の量や多し。」

鑑銘家育教

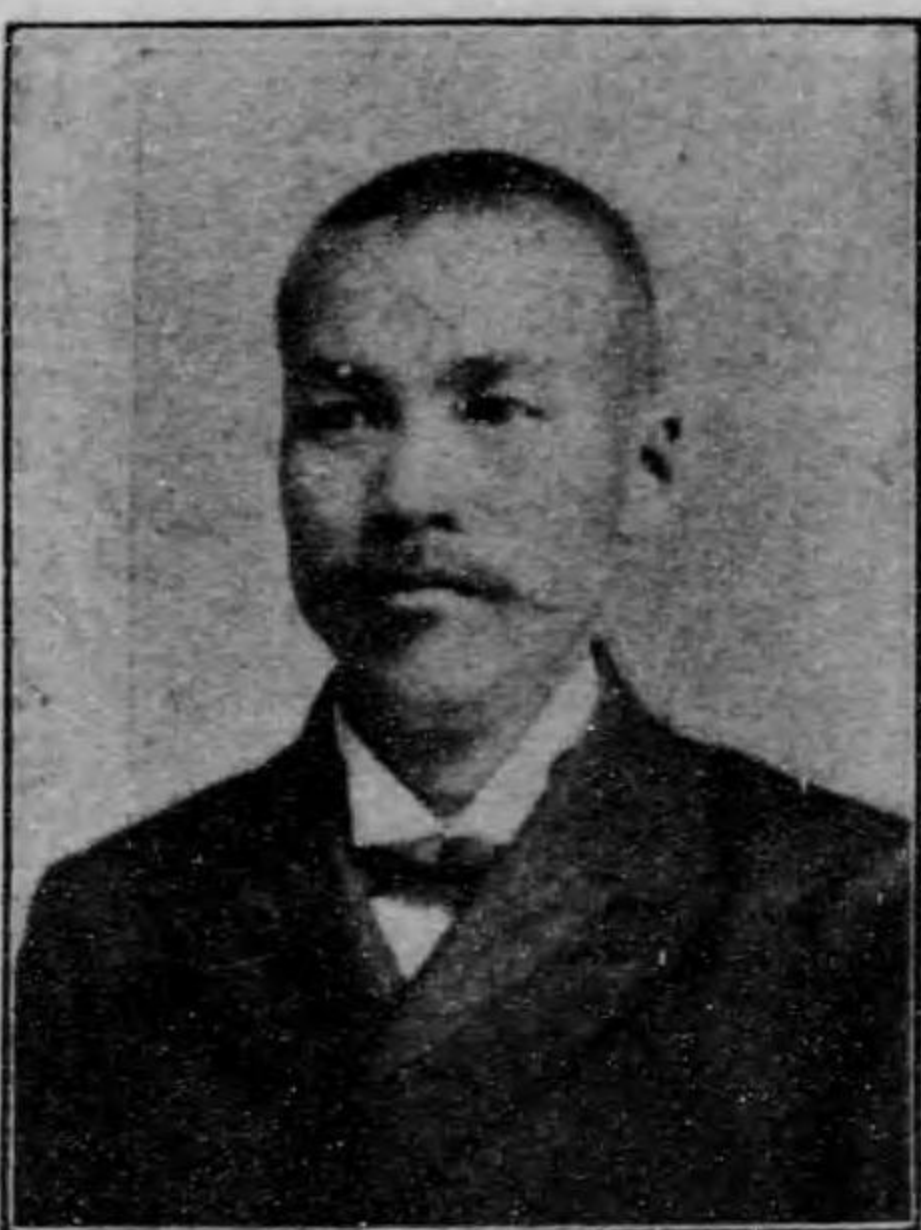
モ之部

一一七

佐賀縣嘉瀬尋常小學校長  
佐賀郡

森四郎氏

教育の實蹟を擧げんと欲せば、宜しく先づ所屬民一般の向學心を喚起し教育の趣味を味はしめ、進んで斯業の爲め直接間接の援助者たる可き覺悟を起さしむるを要す、同時に教育者は單に學校教育の任に膺る而已ならず、校下公共事業並に村の發展進歩を促進す可き事項に對しては極力援助を與へ、相互脈絡相通じて風教の善美を期せざる可からず、森四郎氏の取る處正に此點に在り。



氏は明治七年一月を以て佐賀郡西與賀村に生る、明治二十六年縣立中學校を卒業して藤津郡立教高等小學校准訓導を奉じ、同三十年佐賀郡春日高等小學校訓導と爲り、同年小城郡觀瀾尋常高等小學校に轉ず、同三十一年三養基郡書記に任じ學務課主任たり、同三十二年佐賀郡青藍高等小學校訓導を拜し、同三十五年青藍實業學校訓導を兼務す、同三十八年同郡嘉瀬尋常小學校長に就き、後高等科を併置し以て今日に至る前後十有五年、孜孜育英に従ひ、成績良好の故を以て縣知事氏に金品を賞與す。

氏は清淡其身を處し、懇到人に接し、能く衆を融化するの徳あり、誠實と同情とを以て部下に接し大に其勞を憐ふ、又虚心坦懐好んで職員の見解を聽き校内一家族の如し、家庭殊に下流社會の現狀、往々兒童に惡感化を與ふるを察して之を矯正し、青年は兒童の先輩なり、宜しく勤儉の徳を養ひ、品性を陶冶して社會の模範たる可きを訓ゆ、卒業生中成功せる實業家鶴川徳一氏獎學基金三百圓を寄附し、其利子を優良兒童の賞與費に充つ、蓋し森校長の期待を現實せし一例なりとす。」

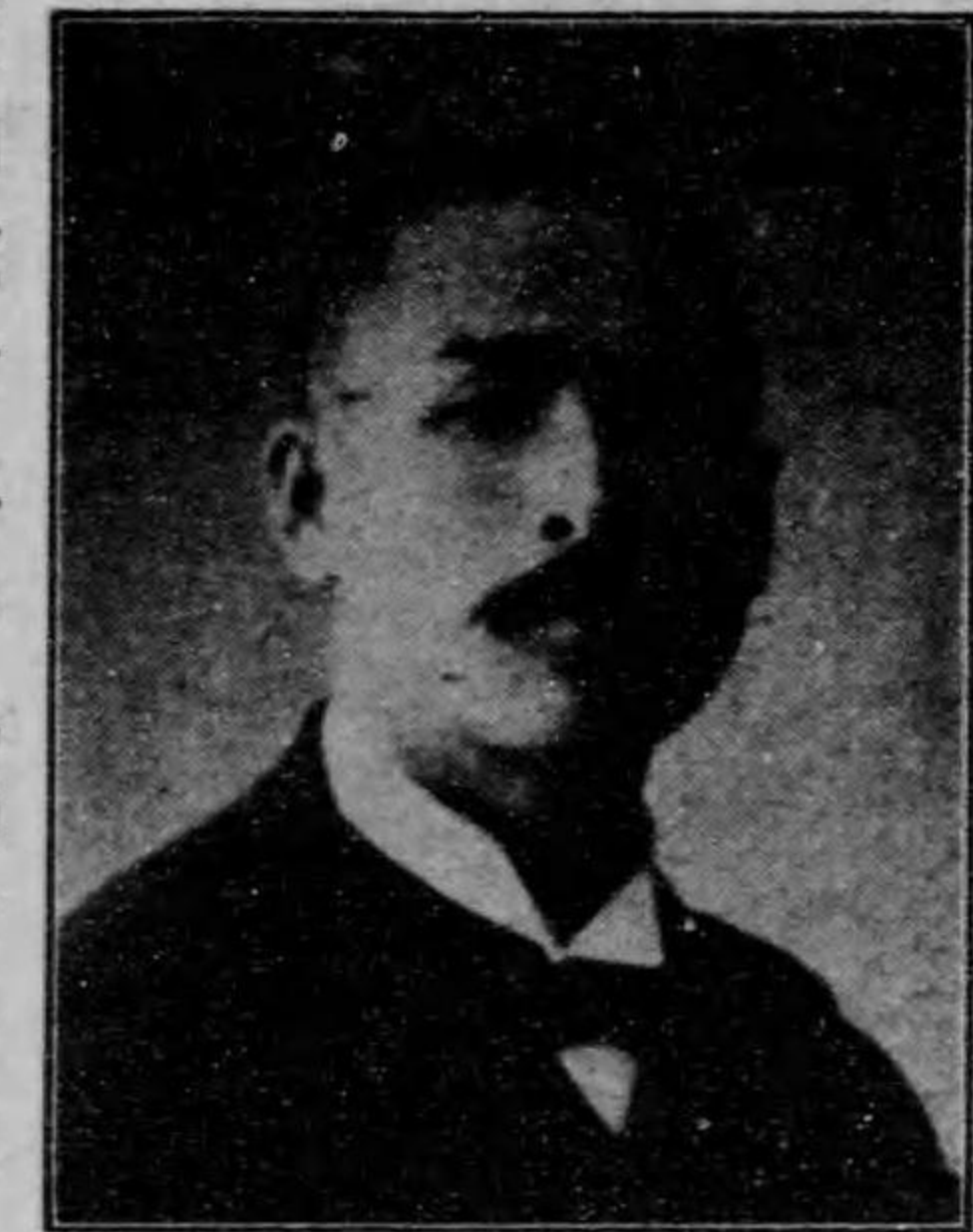


東京府平井尋常小學校長  
西多摩郡高等小學校長

### 森田幹太郎氏

山嶽重疊、急潭滾々、日原、氷川の細流を集むる多摩の川に添ひ、鬱金梅の馥郁、東都文人墨客の風雅を稱する吉野村に隣し御嶽行者の曳杖を絶たざる平井村は、其位置、其山水、共に東京府下の勝地として人口に膾炙せらる、此地の小學兒童の愛撫訓練、諄々教へて倦まざる校長森田幹太郎氏は、過去育英に従ふ事既に二十有余年、其の効績蓋し大なるものあり。

氏は慶應三年八月該村に生る、南西北の三多摩尚ほ神奈川縣管區たりし時、其の師範學校を卒業し、明治二十一年任を同縣高座郡茅ヶ崎小學校に奉じ、居る事三年乃ち二十四年西多摩郡菅生村外四ヶ村組合の現校に轉じ、平井實業補習學校長を兼攝して今日に及べり。



氏は資性溫和恭順にして能く衆心を服するの徳あり、其兒童を教ふるや、反省、謙讓、躬行實踐、奮勵、克己、體操獎勵を始め、確實なる智識を以て處世に資せしむることに力む、職員を率ゆる懇ごろに、相互修養を勵み、向上發展を期し、常に村民と接觸して斷へず融和の道を講じ、町村の發達に盡す事大なり、又通俗講和會を開き、家庭教育に資し、矯正會を開催して毎月一回職員を巡視せしめ、自治的訓練を主とし、着實剛健の氣風養成に努めて村治の鞏固を謀り、風儀の改善を促がして日本民俗特有の精神發揮に意を注ぎ、且つ時勢の進運に後れざらんとす、部下職員は勿論、父兄村民の信頼厚く、皆其徳風に化し近村の羨望する所たり、徳不孤必ず隣ありと宜なる哉、氏夫れ益々健在なれ。」

### 鑑銘家育教

香川縣木田郡瀧元尋常高等小學校長  
兼瀧元實業補習學校長

### 森田惣吉氏

醉生夢死あれば則ち止む、苟も價值ある生を營まんとせば、人各崇拜の對象なかるべからず、崇拜はやがて接近となり、接近は類似を來たす、かくて修養成り、活動生ず、而して其の對象は偶然よし神靈よし、然れども最も其の功果の直接にして感化力の甚深なるは、之を現實の人物に求むるを可とす、吾が森田惣吉氏の如き人物を指揮者と仰ぎ、敬仰す、部下職員の高風に薰化せらるゝ亦自然の理なり。



氏は明治十年六月を以て本郡瀧元村に生る、明治卅二年三月本縣師範學校を卒業し、直に木田郡古高松高等小學校訓導と爲り、同卅六年四月同校訓導兼校長に進み、同四十年三月香川縣屬に擢てられ學務課勤務たりしが、同四十一年四月再び教務に執掌し現任と爲り今に至る、氏や濃厚謹直の人始終營々として職務に忠勤を勵み、一意事功の揚がらんを之れ期し、部下を督勵して常に修養を忘れしめず、自ら研究會に長と爲り諸般の學術より、實際教務の施行に至るまで畫策試練毫も怠色なし氏の精力主義以て範と爲すに足る。

由來本村は風景の地、彼の治永の古戰場たる屋島に近し、是れぞ氏が屢利用して其の修養教授に生氣を添うるもの、社會教育また氏の歴史的事實を應用して巧みに功を奏せしもの、戸主會、婦人會、青年會、少年會、少女會、是金會、二十五夜會等の各團體は皆氏の統率の下にありて、何れも其の成績の良好なる他の推稱する所たり。」

### 鑑銘家育教



鑑銘家育教

モ之部

富山縣八尾尋常小學校長  
婦負郡八尾高等小學校長

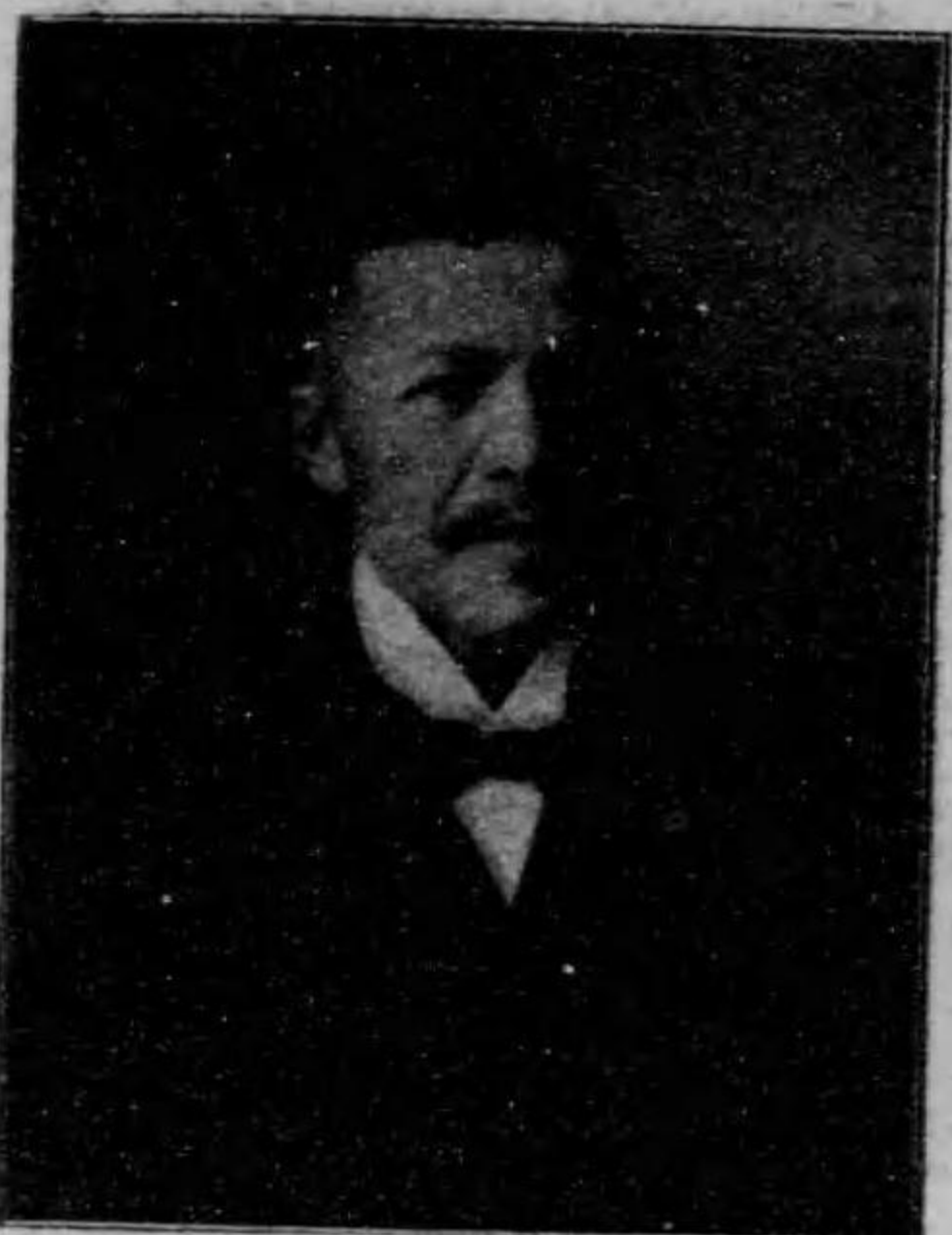
森 潤 生 氏

一一一〇

氏は慶應三年四月の産、明治二十三年富山縣師範學校を卒業し、婦負郡格致小學校訓導たる事一年にして居村千里の校長に轉じ、爾來十五年村内の教育に従事し、夙夜怠らず全身を提げて諄々教育の必要を鼓吹し、且つ社會的事業に盡瘁し、校下の尊信を一身に蒐め、教導感化の效頗る大なりき、從て教授訓練の績亦た模範と稱せらる、偉なるかな此人や。

明治三十九年六月八尾尋常高等小學校長に轉任せり、由來八尾は以前風紀頹廢し、校下の非難多かりしが、氏は極力校紀の振肅を計り、恪勤精勵職務に盡瘁すると共に常に品行を慎み、家政を治め、劇務の餘暇自己の修養を怠らず、而も確乎たる識見を有し、以て學校施設を計畫し、着々實行に努む、斯く躬ら示範して部下を率ゆるが故に、部下悦服校風の改善諸般の施設全く面目を一新せり。

氏亦社會教育に着眼し、八尾町に關する各種の事情を周密に調査し、地方的教材として常に學校教授に利用する而已ならず、青年教化の資料にも供せり、進德會を組織し自ら會長と爲り、六百の町民を網羅し、地方の風俗矯正、教育の普及改善及實業の發達に資せり、明治四十五年八尾町青年團を組織し、五百の會員あり、推されて會長たり、指導誘掖最も力む、最近四萬餘圓を投じて校舎改築を竣工す、斯の如くなるを以て縣より表彰する事二回、更に獎勵金を下賜せらる、日露戰役の功により文部省より三十金を受け、大正二年更に全國優良教育者の班に列せられ選奨に浴す、ア、壯なる哉。」



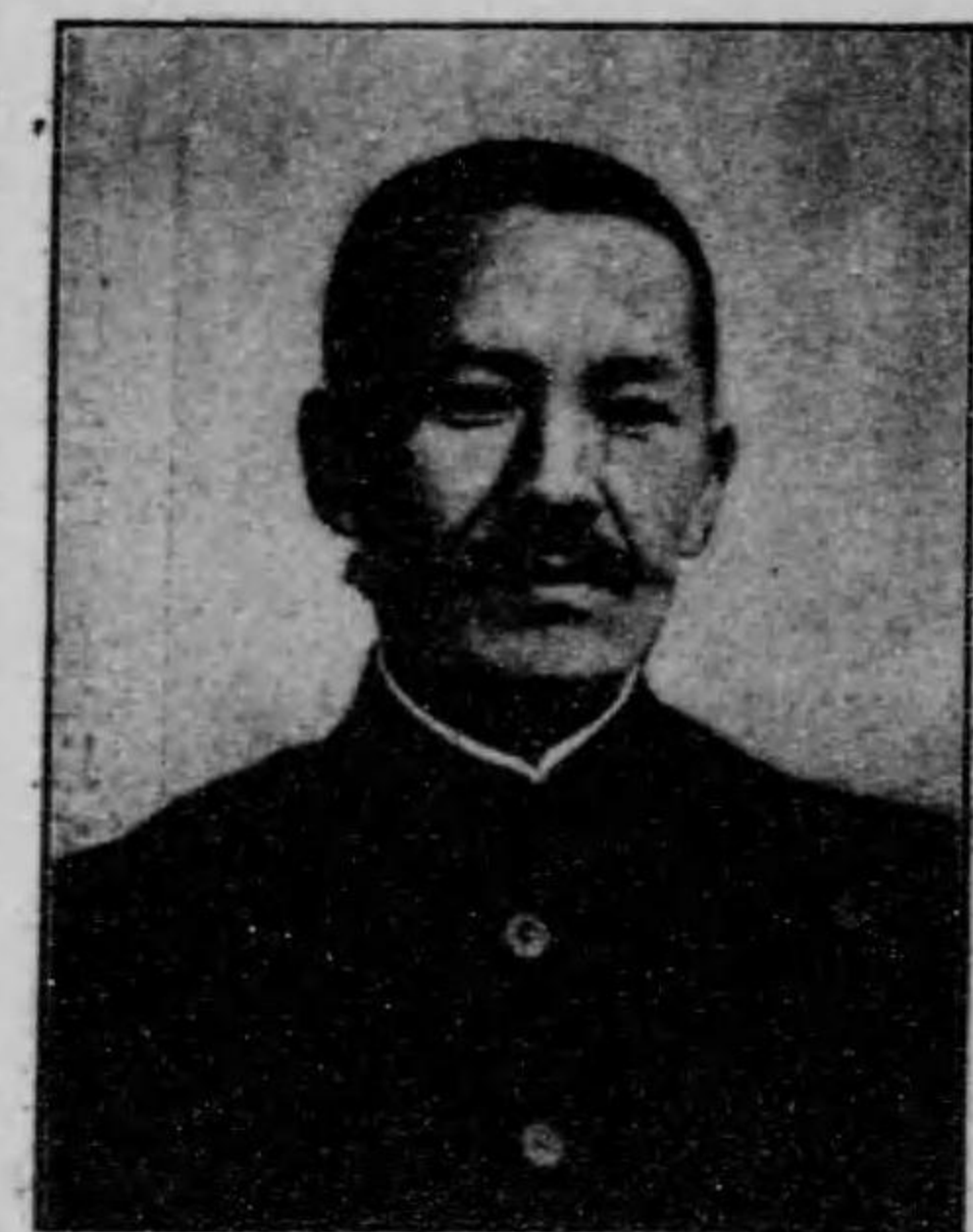
鑑銘家育教

モ之部

愛知縣下日置尋常小學校長  
名古屋市

森 山 代 助 氏

中庸の徳、清雅の質、貴に媚びず、權に阿らず、秀才を以て聞ゆる人、之れを森山代助氏とす、氏又美術を愛し、數理に長ず、其頭腦明晰にして決斷力に富み、紛議を決する真に快刀亂麻を截つが如し、思慮綿密にして必ず終りあるは氏の衆人に超絶せる所以、敢て贅言を弄せず、談笑裡亦真理を寓す、之れ氏が斯界の重鎮として四隣に令聞を馳する所以、仰ぐ可きの人士なる哉。



氏は愛知縣知多郡大野町の人、明治三年十二月を以て生る、同二十五年三月同縣尋常師範學校を卒業し、同縣知多郡樽水學校訓導に任せられ、同郡西阿野學校に轉じ、同二十六年名古屋市園町小學校訓導と爲る、同二十八年同縣海東郡津島高等小學校に移り、同三十年東京工業學校へ入學の爲め休職と爲る、同三十一年名古屋市に歸り、白川尋常小學校訓導より山口尋常小學校に轉任し、同三十六年前津尋常小學校長と爲り、第四高等小學校長を経て現校に赴任し、其熱誠なる教鞭を振ひつゝあり。

氏や教育狀況視察のため、足跡殆んど國內に及び、北は仙臺、長野、金澤より南、熊本、鹿兒島に到る迄、其倭小なる軀を提して千里を踏破したるの熱誠、真に凡夫のよく習ひ能はざる處、名古屋市、氏に依信する多々なる又故なきにあらず、且つ通俗講談會の事業に、市教育改善の先覺者として、其功績大いに見るべきものあり、氏の驍名は到る所に喧傳せられ、縣其他の當局より屢々其功績を表彰せらる、蓋し偶然の事にあらざるなり。」

一一一一



鑑銘家育教

モ之部

兵庫縣郡家尋常小學校長  
津名郡郡家高等小學校長

森川春吉氏

訓練に對しては常に實行主義を持ち、一事の命令必ず徹底を期し、規律を尊ぶの主義を第一に置き、教育勅語戊申詔書の趣旨を貫徹すべく努め、教授は必ず兒童の所有に至らしむるを以てし、整頓清潔の良習慣涵養に孜々努力する人、之を我が森川春吉氏と爲す。

氏は慶應三年正月を以て津名郡室津村に生る、身體強健、忍耐力に富み、所信貫徹の氣象に溢れ

往々嚴格に過ぐるの評を受くる事あり、進取の氣豊かに荷も取つて教育上に資すべきものは必ず放棄する事なし、明治十八年兵庫縣師範學校中等小學校を卒へ、加西郡北條小學校に職を奉じ、翌年神戸市神戸小學校訓導に任ず、同廿五年轉じて津名郡淺野高等小學校長に移り、同三十四年郡家高等小學校長に轉じ、同四十年現校長と爲る。

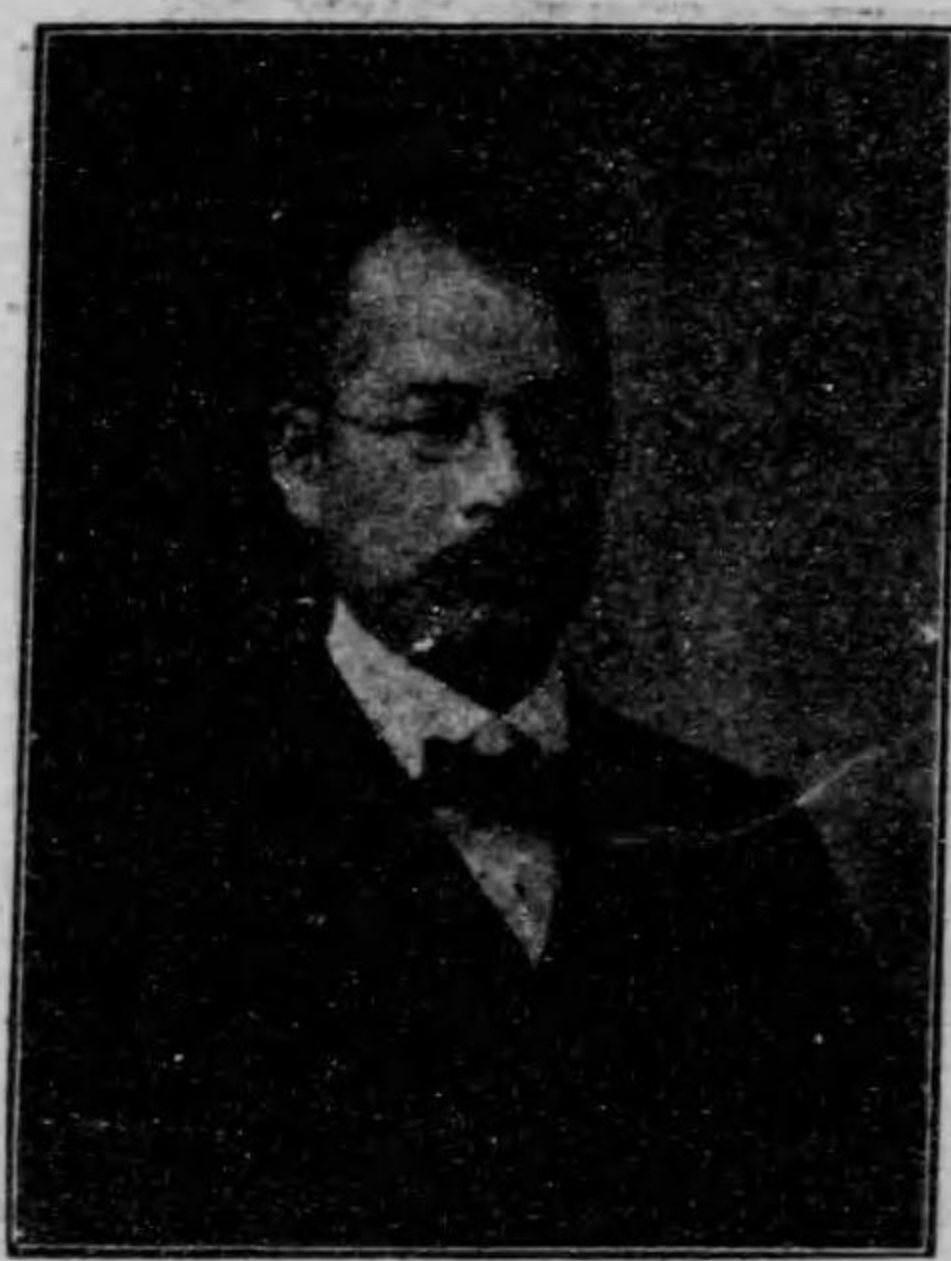
氏の職員を率ゆるや、能く其個人の能力を採知して事務分擔をなさしむる而已ならず、常に研究心を喚起し、教育上只其大方針を指示し、部下をして充分に手腕を伸張せしむると共に、又能く一身上に對する勞苦を辭せず、氏の部下にして現今校長の位置に在る者二十名を算し皆郡内有力なる者なりとす、開放主義を以て所屬民に接し、學校と部民との意志疏通を圖り圓滿の中効果を收めんとす、家庭教育、青年教育、社會教育に對しても常に能く注意し、部落講話會を開きて家庭教育を説き、青年會を起して地方風教の改善を企て、其他婦人會、尙齒會等皆社會教育缺陷の補填に資す、且つ害蟲驅除、醸造酒講習會等亦殖産興上に裨益頗る大なりとす。



岡山縣  
岡山市清輝尋常小學校長

森作太氏

夫れ、放膽に次ぐに小心を以てすべきは之れ文を作すの要、又以て人事に適應し得るの箴言たり概ね豪宕なるの士、粗笨に流れ、周到なるの人、小膽に陥る、之れ一世の通弊たり、茲に森作太氏資性剛膽にして而かも細密の質を以てす、何の鴻業か成らざるあらんや、天惠の才略は練磨の功を積みて愈々其力を顯はし、教授亦巧妙を極む、眞に得易からざるの人格者にして又現代稀に見るの好箇育英者と謂ふべきなり。



明治五年九月岡山縣上道郡光政村の地氏を生む、同二十七年三月岡山縣師範學校卒業、縣内上道郡上道高等小學校訓導に任ぜられ、同三十二年三月岡山市岡山高小學校訓導に轉任、同四十一年三月同校編制の變更により、岡山市内山下尋常高等小學校訓導に任ぜらる、同四十四年六月現職に轉じ以て今日に至る、氏が赴任當時同校が大いに改善を要するに際し特に選ばれて其職に就く、爾來氏が非凡なる辣腕は遺憾なく、其實果を齎し來り、同校へ赴任、日尙

淺きに關らず施設の改善着々舉る、今や縣下優秀の學校として愧じず氏が功又偉なる哉。氏や又所屬人民と學校との融和を期し、其能ふ限りの機會に於て之れと親善を圖る、學校に於て遊戯、運動會等の開催せらるゝや必ず其父兄母姉の參觀を促し、殊に部内高齢者に對し、謹厚なる案内状を發し、座席茶菓等に至るまで特に其待遇を厚ふし、以て懇和を圖り、一面、兒童をして老者を待つに尊敬慰安の意を盡すべき實行的觀念を與ふ、氏の模範的教育家たる惟ふべき也。

モ之部

鑑銘家育教



島根縣七日市常小學校長  
鹿足郡

森田吉太郎氏

資性温厚篤實に不屈不撓の精神を以て教育事業に當り、之を以て自己の天職と爲し曾て利達を求めず、至誠以て校務に勵精し遂行せずんば止まざるの氣概を有し、實踐躬行終始一貫を重んじ實果ある教育を施すに苦心を凝らす者之を島根縣七日市小學校長森田吉太郎氏其人と爲す。



明治元年四月島根縣鹿足郡津和野町此君子を産む、同二十年同縣美濃郡益田小學校准教員に同二十一年鹿足郡日原小學校訓導に命ぜらる、同二十四年同郡七日市小學校訓導に同三十四年遂に進て其校長と爲り今日に至る、同三十七年同郡同村實業補習學校長に兼任、其間各種の講習會に自己研究を専心せり、同四十年本縣師範學校第一種の講習科を修了し、其外讀書に趣味深く各科に涉獵して何れも其要旨を得たる所以のもの、偏に氏の自修力強く名利の念に乏しきに因る、氏が多年の功勞に因り縣郡又は文部省より金品賞狀の表彰數次、殊に明治三十二年現任校所屬村會より氏が多年教育上功勞者尠からざるを以てト

トパノ泉一部を同四十四年四月其村長より二十年勤續の祝賀紀念として銀側時計を同年十一月戸主會長より同祝賀紀念の爲め債券百圓を、同年同月同意義にて禮服一領を其青年會より何れも共に感謝を贈られたり、氏の德望益々高く一般の信頼愈々大なる知るべきのみ。  
氏は學校教育の外夙に青年教育、社會教育の必要を唱道し、東奔西走他の町村に先んじて戸主會青年會婦人會處女會修養會等を組織し、或は之が長と爲り顧問と爲り以て碎身努力曾て勞を不知。」

鑑銘家育教

鑑銘家育教

新潟縣畑野尋常小學校長  
佐渡郡

守屋泰氏

凡そ人の人たる所以は禮儀あるを以てなり、姿容正しく其色を齊へ辭令を順にするに在り、姿容正しく其色を齊へ辭令を順にして而る後禮儀備はる、古者曰く禮儀廉耻は國の四維、四維弛ぶれば國則ち亡ぶと、初等教育の要先づ禮節に嫻はしむるに在り、衷心恭敬の誠を培ふに在りと、然れども今日の教育者中多くは其當局者に叩頭百拜、所屬名譽員に阿附諂諛を盡して以て自己の位置を安全に利祿の上達を圖るに汲々たる者あり、彼等之を以て禮儀と爲すも唯り識者の嘲笑を招くに止まらず、眞面目なる兒童は之を見て禮儀の如何なるものたるを知らず、見て以て權勢に阿ねり利祿に下るは禮にして權勢ある者富有なる者は、揚々權門を張り豪奢に壯語を怪しまざるの風を爲したり爰に守屋泰氏なる者あり、慨然現時の潮流を嘆じ、禮儀の流弊を矯正する留意甚だ大なり。

氏は本郡新穂村の人、萬延元年三月を以て生る、明治十一年十一月新潟縣師範學校の業を卒へ、同縣古志郡佐渡郡内各小學校に勤續し、同二十二年六月病氣退職専ら休養に努めたるを以て健康恢復し、後ち長野縣に出で其縣下小學校訓導を奉職せしが、郷里の迎ふ所と爲り同二十二年遂に歸郷す、佐渡郡河原田、新穂、相川の各小學校長を経て同四十一年現職に就く、爾後孜々營々終始一貫以て教育に勵精し、事に當り周到緻密に施設遺漏ある事なく、德望愈々高く令聲全郡に洽ねし。氏は人と爲り篤實恭敬、勤勉にして身體強壯なり、同情心深く人に接して磊落城府を設けず、部下職員を統督する寬嚴宜しきを得て、校内靄然一致協力以て各教務の發展に盡瘁して餘念なし、一面規律整頓に兒童本位の教育を爲さしむ、氏は常に實踐躬行以て模範を垂れ、家庭教育青年教育等共に最も留意する所にして、其兒童を愛護するに忠實なるは郡内教育界の範と爲すに足る、社會教育として種々なる講演會を開催し大に所屬民人の指導に勉む、兒童父兄の信頼厚き宜なる哉。」



鑑銘家育教

北海道第二札幌中學校長

正七位 善波功氏

西に手稻の連山あり、南に藻岩の秀峰あり、一眸涯々たる石狩原野は遠く東北に展開し、豊平の清流は滾々として盡くるなく、近く官幣大社札幌神社の靈地を望み、巍然として市街の西陲に建てられたるは實に第二札幌中學校なり、其幾百の健兒を養育するの任に在りて孜々營々其職責を完ふする者、之を善波功氏其人なりとす、蓋し斯界發展上氏に待つや多し。



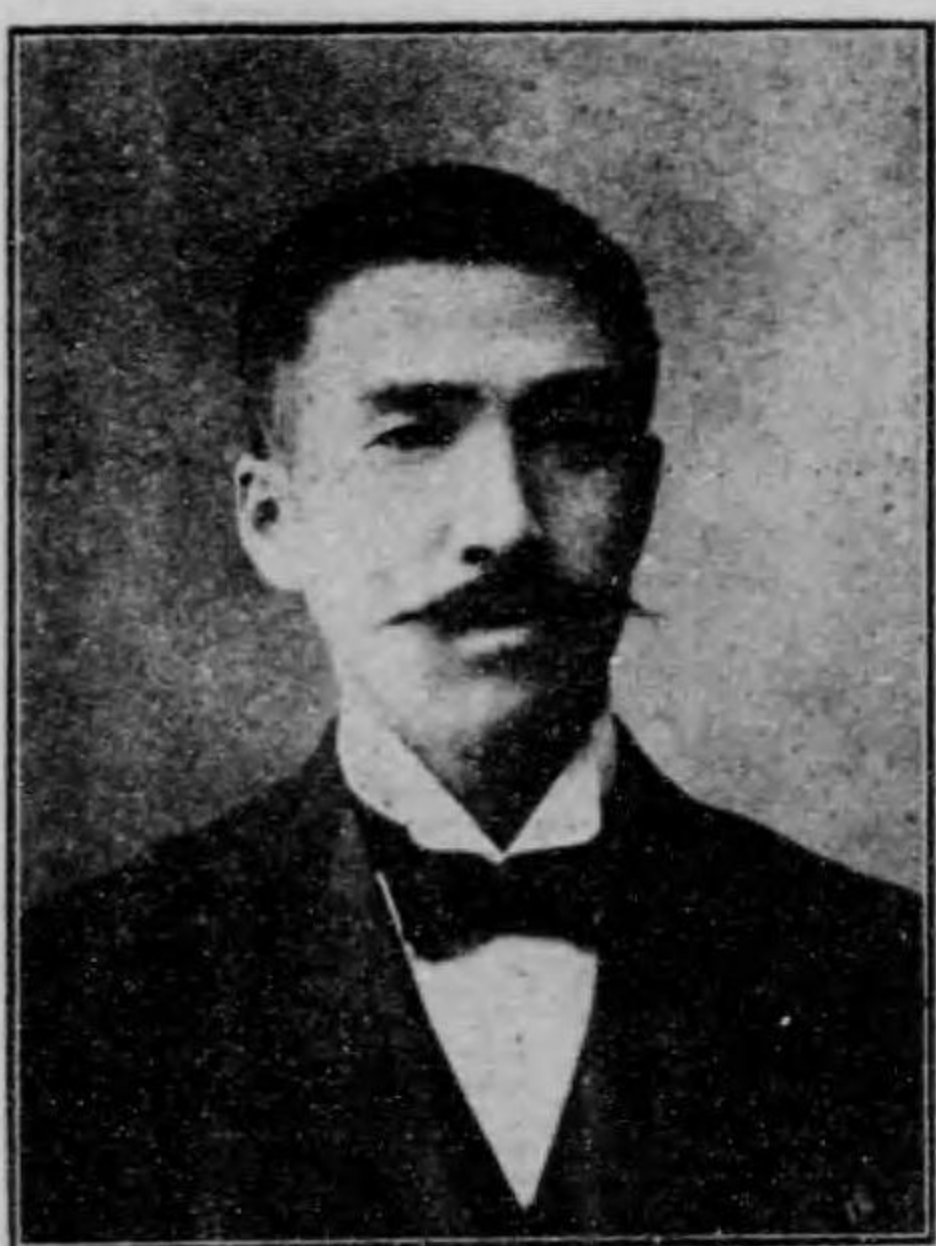
氏は明治九年十月を以て福島縣若松市馬場下に生る、資性謹直にして剛毅、頭腦明晰にして思慮周密、情操豊かにして公平無私、其事を執るや至誠を以てし、截斷頗る明らかなり、明治三十六年東京帝國大學文科大學史學科を卒業し、同三十七年北海道廳立札幌中學校教諭に任ぜられ同校教頭たり、其任に就くや、學校長を輔けて或は施設に或は經營に、若くは校紀の振肅に、渾身の精力を傾注して、能く其實績を擧げ、名聲北州に噴々たりき、由來札幌の地北海教育の中心たり、風俗敦厚にして浮佻ならず、各地より笈を負ふ者益々多く、遂に本校を増設する盛運に至れり、而して之が校長の人選は最も苦慮せし處にして、學徳兼備加ふるに經驗に富むの氏を拔擢して創業の任に當らしむ當局亦明ある哉。氏人に接して城壁なく、大度宏量克く人を容れ、頗る研究心に富み、勤務精勵、躬行實踐は以て衆の範たる可く、指導誘掖の懇切は以て子弟を感化せしむ可し、開校日尙淺く、未だ内容の完備せざる所多し、氏の熱誠努力は近く其充實を見る可し、氏の如きは蓋し鐵中の鋒々たる者歟。」

鑑銘家育教

山形縣立鶴岡高等女學校長

正七位 關原重雄氏

現代の女子風俗、華美に流れ、虚飾に陥り、貞淑を缺ぎ、從順を忘れ、三從の徳の如きは名残なく破壊し盡して、或は女權擴張をさへ喋々する者あるに至れり、此時に當り、摯實穩健なる美質を以て、崇高端嚴なる徳操を兼備し、専心女子教育に奮勵する人に、關原重雄氏あり、吾人以て意を強うするに足るべく、良妻賢母たるの婦女、其鞭下より輩出せんことを期して待つべき也。



明治五年八月羽後國飽海郡松嶺町の地氏を生む、同二十六年山形縣尋常師範學校を卒業し、同縣飽海郡鳴田尋常高等小學校、山形市第三區尋常高等小學校に其熱烈なる教鞭を振ひ、同二十九年高等師範學校に入學勤勉の効空しからず、同三十三年同校文科の業を終へ、山形縣師範學校教諭兼訓導に任ぜらる、同三十五年九月東京高等師範學校研究科に入り倫理教育の蘊奥を極め、翌年七月山形縣女子師範學校兼同縣立高等女學校教諭と爲り奏任官待遇の榮を擔ふ、同三十九年從七位に叙せられ、同四十二年十月現任となり、大正二年正七位に陞叙さる、氏尙壯年、後來斯界の發展上矚目して待つべき也。

氏や資性穎邁學を好み、才復た俊秀經學文章並び修めざるなく、機に臨み變に應ずるの智力に富む、加ふるに清節爽快、恰も明鏡玉雪の如く、玲瓏として胸襟一片の汚塵を止めず、現任以來専心内容の改良を圖り今や校規肅然各種の施設宜しきを得、職員は喜んで命を奉じ和衷協同其の職に就き、學徒は嚴父と仰ぎ慈母と慕ひ、四隣齊しく其徳を敬慕す宜べなる哉。」



仙臺市立宮城女學校長

セデー、リー、ワイドナー女史

仙臺市の中央正方形五千坪の一割に巍然たる總煉瓦造の講堂教室、木造の寄宿舎を有し、數百名の女子を收めて克く教育の成果を挙げ、内外均しく其の効績を感謝して措かざるを私立宮城女學校なりとし、而して之が統宰の任を竭す者、ワイドナー女史と爲す。

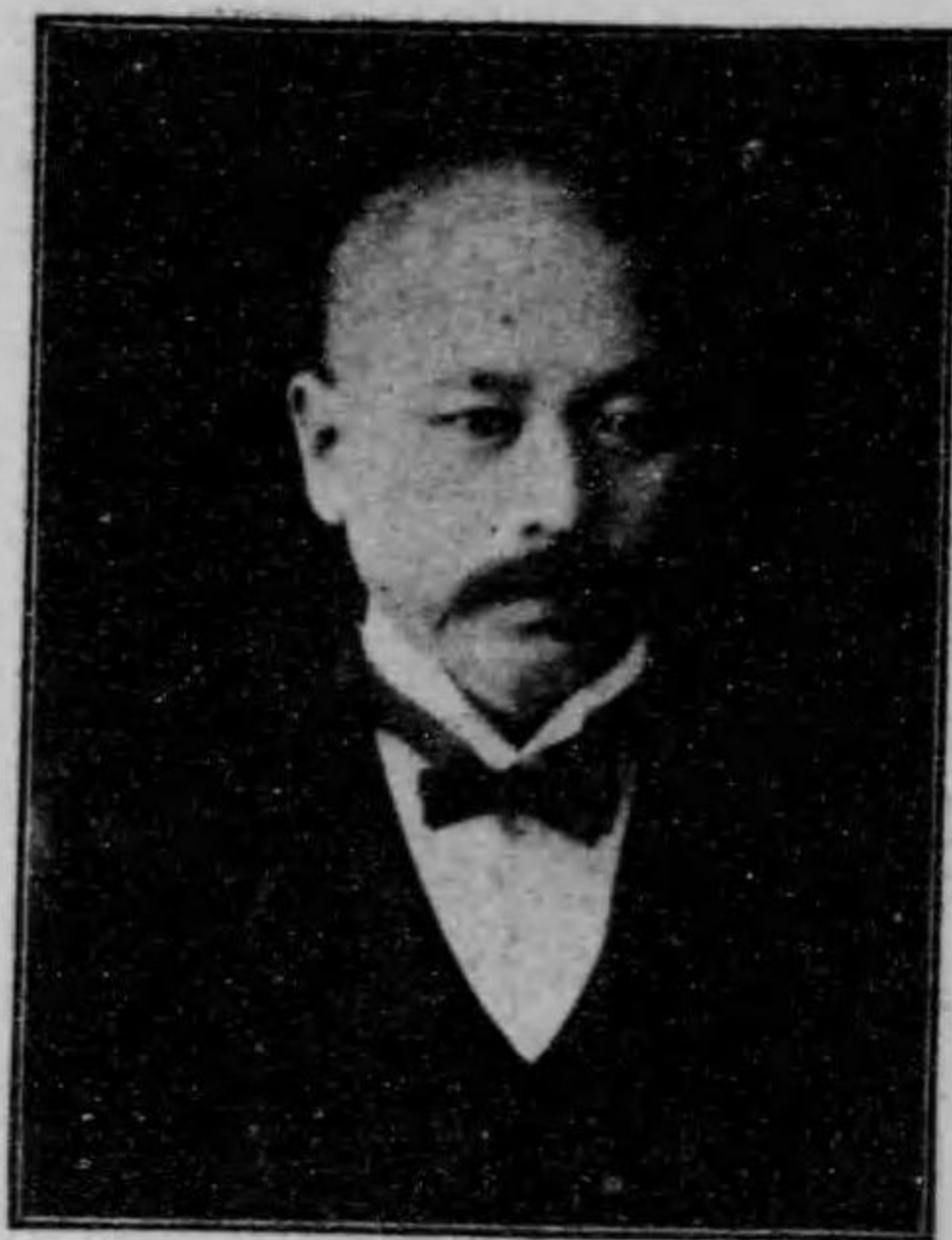


西歷千八百七十五年三月北米合衆國オハヨウ州ヲフィン市女史を誕む、其小學校を卒はるや優等州内何れの高等女學校にも無試験入學の特權を與へられ、後オハヨウ州マオントイトン及ベルビューに於て高等女學科の教育を受け、特別教師に就き數學及獨逸語を學ぶこと數年、次て郷里ハイデルブルグ大學及シカゴ市ムーデー聖書學校に遊び、後コロンビア大學に英文學、學校制度、學校管理法の講習を了はる、其高等女學校を出づるや試験を経て小學教員たる五年、千九百年外國傳道局より現校教員及宣教師として派遣せられ、千九百九年校長に撰ばる、本校に在る實に十四年の久しきに至れり。

資性温容活潑、城府を設けず、日本人を愛する事厚く從て日本の事情を解し、之を本國人に紹介するを悦とす、交際極めて廣く大臣、大將其知名の官民に知友少なからず、殊に愛憐情誼を厚く能く貧民を救助し、信仰亦頗る篤く、忠實學徒の教育に従ひ情合親子の如きを見る、又日本の國民性を尊重し、體育を重じ智育を貴び社交を獎勵し、兼て精神の訓育、靈的信仰を以て統一し、能く歸米の都度日本の鞠すべき各點講話を力む、今や仙臺市教育會名譽會員たり功績夫れ大なる哉。」

岡山縣 小田郡 矢掛高等小學校長

世良長造氏



滔々懸河の如き雄辯、閃々電光の如く、風を呼び、雲を起す英達はよく其の意氣と相表裏し加ふるに才識絶倫なる怪刀亂麻を斷つの手腕と相俟ちて完璧をなす。眞に一世の英俊、世良長造氏意氣銷沈の教育會に一異彩を放てる人格者、名聲四隣に喧傳さる、故なきに非ざる也。

氏は明治元年九月、岡山縣小田郡金浦町大字西濱なる風光明媚の地に於て生る、出生地の高等小學校を卒業以來一定の師とせる者なく、自力獨學、霜晨雪夜、勤勉に次ぐに努力を以てし、一日も寧處せず、分暑も之れを浪費するなく、精勵を重ね、自ら修養を積み、遂に檢定試験に應じて初等科、尋常科、高等科順次教員免許狀を受け、明治二十九年無試験檢定により小學校本科正教員免許狀を受け、同四十三年小學校教員普通免許狀を授與せらる、同二十六年四月訓導に任ぜられ、縣内芳野郡川上郡後月郡小田郡の各小學校に歴任し、同四十二年現任就職今日に及ぶ實に二十有餘年。

習慣は第二の天性なりと、氏の學童訓育主項たるや、常に教育勸語の聖旨に副ひ得る良習慣の養成を期し、更に兒童をして自働的にして積極的なる力強き者たらしめんとし、之れに加ふるに着實なる漸進主義を以てす、而して敬愛一致、恰も肉親の如き部下職員と共に其の完成を圖る、校風燦爛として輝き、所屬民の信頼愈々厚く當局氏を敬視し、當事者亦氏を尊敬す、教育の效果舉らずして何ぞ、氏の如く人格を得たる該縣教育界夫れ多幸なる哉。」



岡山縣 喬松 尋常 小學校長  
久米郡

關屋 鎮 二氏

資性温厚篤實、徳操堅固、而も身體健康にして精勤なる事、關屋鎮二氏の如きは稀に見る所たり、其經營施設は、妄りに世の風潮を逐はず、形式的外觀を装はず、總て實際的なるは其主義なり、愛を以て内外華麗を避け、言論亦誇大ならず、而して實際的教育の發展と訓練の統一とに至ては、其成績の擧れる事、超然群を抜くものあり、名聲天地を動かすもの蓋し偶然ならざる也。



氏は嘉永六年に生る明治十二年縣師範學校を卒業し、爾來三十六箇年間育英に従事し、終始一貫孜々倦まず、嘗て組合村に異動を生ずるや、議論百出校舎の位置一定せず、氏其間に介在し、夜を日に繼ぐの盡力、遂に現位置に確定し、其完成を見るに至らしむ、夙に學校基本財産の必要を唱へ、或は寄附に或は教育費の剩餘金繰入に、若くは日清戦捷記念林の設置等を確立し總額既に數千圓に達するに至れり氏は世未だ幻燈器を知る者なき以前、既に有志を勧誘して該器を購入し、且つ適切なる圖案を考へ、映畫を調へて屢々幻燈會を開催し、以て矯風、勸業、衛生の思想を鼓吹せり、例年農閑の時季青年夜學會を開きて補習教育を施し、又學齡兒童保護會を設立し、更に擴張して教育會を組織し、其他通俗講談會を催し、各種講習會を開く等枚舉に遑あらず、又常に研鑽自修を怠らず、時勢の進移に後れざらん事を力む、今や兒童は其徳風に懷き、父兄は信頼し、村民は頌徳會を開きて其偉績を表彰し、當局又屢々氏を薦奨し、斯界に重視せらるゝもの、眞に氏の人格の然らしむる所なりとす。

鑑 銘 家 育 教

鳥取縣 法勝寺高等小學校長  
西伯郡

精山 治三 郎氏

現校就職以來十有五年間、未だ一日の缺勤なく、一回の遲參早退なし、常に早出晚退、電燈改々只管教育事務に執掌し、以て夙に一郷の推重する所と爲り、教導感化の效力、校の内外に及ぶもの、之を精山治三郎氏と爲す、畢竟身體の健全なるに由ると雖も亦意思の強固に因せざるなし。氏は明治三年四月を以て西伯郡賀野村に生る、靜思熟慮に富み、判斷周到、觀察縝密、加ふるに



眞摯耐忍なり、明治二十五年縣師範學校を卒業し、會見郡愛勞尋常小學校長に任じ、同三十二年米子町明道尋常小學校訓導に轉ず、次て同三十三年現校に移り以て今日に至る從順、勤勉、清潔の三信條を定め、忠に名和長年、孝に瓊子内親王、至誠に二宮尊徳を配す、又尙武の氣象養成に努め、訛言方言の矯正に意を注ぐ、其他實業思想養成の爲め家庭農作、紀念學校、パテンレース、機織、染色の業を授け、深呼吸の習慣を養成す、用意周到夫れ斯の如し。

氏常に曰く『教育事業は芝居神樂の演技者が只舞臺を一時愉快ならしむるものにあらず、終始熱誠其職に盡さざる可からず』と、寸暇を讀書に勉め、新智識を收得す、至誠、勤勞、分度、推讓所謂二宮尊徳の教義を鼓吹して地方民の精神を統一し、經濟上の基礎を確め以て村自治の根帶を樹てんとす、之に關しては既に結社あり自ら幹部として銳意社運の隆昌を計る、其他青年會、婦人會、村民會等多數集會の場合を利用し、以て主義の徹底を期す、眞に氏の如きは教育者の好模範たる可く、最も敬慕すべきの人と謂つべし矣。』

鑑 銘 家 育 教



京都市日彰尋常小學校長

勳八等 關口秀範氏

明治十一年京都府師範學校を卒業し現任學校訓導と爲り、同廿年校長に進み、同廿九年小學校教員普通免許狀を下附せられ、同四十四年奏任待遇と爲る、勤績實に三十有六年、卒業生を出だすと三千に垂んとし、學區民の大半は氏の薰陶を受けたる者にして、學區會議員の如き殆ど其子弟を以て組織せらるゝに至る、其企劃經營する所一として成功せざるなきもの洵に由あるかな。



世々二條公爵家に仕へて初叙六位の家格たり、幼時繪に耽り白紙を以て問食に代ふるに至る、夙に宣長篤胤に私淑し、故冷泉爲紀伯等と神習舎を組織し、頗爾學に没頭せしが、後漢學を修め研鑽年あり、詩を善くし雪窓と號す、現に同窓奥繁三郎の設立に係る漢學研究會の幹事たり年三十始めて英語を學び刻苦六年、其間又倫理心理論の諸科に涉獵し最論理に通ず、資性純直、權威金力に屈せず意氣識見復に儕輩に卓越し、眞に斯界の重鎮たり。

明治十年師範學校生徒學業天覽の際書を御前に講じて文章軌範一部を賜はり、同三十一年學校創立三十年紀念式舉行に當り區立日彰教育會より金時計一個を受け、同三十五年小學校教育に關する賞與規則實施の劈頭に於て府知事より書籍料七十圓を下賜せられ、同四十一年卒業生の計畫に係る勳績三十年祝賀式舉行に際し紀念として公債額面二百圓紫檀の机一脚を受け、同四十四年文部大臣の選獎を蒙り同時に府知事より百五十圓の賞賜あり、大正元年勳八等に、二年京都御所御駐轡中拜謁の榮を荷へり、年齒耳從に及ぶ斯界の爲め健在なれ。

教育家銘鑑

德島縣市場尋常小學校長 阿波郡

妹尾崎太郎氏

國家道有れば以て先王の教を施くべく國家道無ければ先王の教を奉じて山澤に通る、是れ支那一流の思想にして以て吾が國體に適すべからず、今の世爲政者相率ひて奸曲を事とし臺閣の諸公或は以て國民の範とすべきなし、隨つて爲政の方針支離滅裂、昨是なるもの今は否、今否なるもの必ずしも明の否を期すべからず、政令百出、朱紫馳聘し、民其の歸趣に迷ふ、特に教育界に於て最も然りと爲す、然れども、是れあるがため世の教育家皆山澤に去るとせば果して如何、錯亂紛糾の裡能く一道の歸趣を求めて一意我が使命に盡すは眞乎教育家の面目にして吾が妹尾崎太郎氏の如きは即ち然り。



氏は本郡の人、元治元年十一月を以て生る、幼より學を好み篤實の稱郷黨に高し、明治十六年四月德島中學校卒業後碩儒岡本斯文翁に就き漢學を修め、併せて數學を研究す爾來郷黨風教改善の任に當り、現任校創立以來校長と爲りて現今に至る二十九年の久しき功績知るべき也。

氏不言の間に職員を徳化し、指揮監督其の中に在り、所屬民に對しては地方教育を中心として自治團の結核を鞏固ならしめ、時々講習會を開催して實業教育の普及を計り敢て名利を望まず、されば所屬民の氏を見る師父の如く、部下教員は敬重君父の如く、學校は恰も一家族の如くにして毎日愉快に教務を進捗せしむ、されば校内秩序の整然たるは多言を要せず、曩に縣の表彰を受け、大正三年文部に選獎せられ、更に縣より百五十金を下附せらる。偉なるかな此人や。

教育家銘鑑



神奈川縣南足柄村尋常足柄小學校長  
足柄上郡南足柄村高等足柄小學校長

### 關野光之助氏

現代の思潮、個人主義より利己主義に趨り、我利私慾一方の徒、滔々として天下に滿つ、眞に慨嘆に堪えざる處なり、此時に當り我關野光之助氏自ら誠實を盡して他の爲めに力を致すの美德を存す、眞に君子人と稱すべきなり、而して育英の業を以て自己が使命と自覺し、其絶倫なる精力を傾倒し、雄辯を振つて其職に當る、眞に誠實の化身と謂ふべく又得易からざる君子と謂つべき也。



慶應三年八月神奈川縣南足柄上郡南足柄村の地氏を生む、氏や明治二十年同縣尋常師範學校を卒業、直ちに縣内足柄上郡關本小學校訓導に任ぜられ、同三十三年尋常高等南足柄小學校訓導兼校長と爲り、爾來今日に至るまで拮据經營鞠躬如として精勤し、眞に一日も寧處せざる也、則ち同縣應より效勞不尠として賞金を得し事屢次、又文部省より效績を選奨され、賞金を授けらるゝに至れり、夫れ至誠は遂に天を撼かすべしと、豈蓋し眞理なる哉。

氏や勤勞節儉を以て主義とし、すべてに於て二宮尊徳翁を以て理想的人物と爲し、實踐躬行甚だ努めつゝあり、又部下職員に對し狼りに高壓するなく、自らの徳を以て之れを統率せん事を期せり、據つて部下職員亦自ら氏に信服し、愈々其職に忠なるに至る、夫れ茲に人の和成れる何の事業か遂行し得ざるあらんや、校紀皎として振肅し、教育の效果炳として顯はるゝに至れり、氏や更に家庭、青年、社會教育に對し、眞摯なる態度を以て之れに執筆し、貢獻せる所實に多大なり、氏を以て育英家の好典型と爲す豈過褒ならんや。

### 鑑銘家育教

### 鑑銘家育教

大阪  
府立天王寺中學校長

### 正六位 鈴木券太郎氏

我國科學の進歩著しく物質的知識の發展亦甚しく、社會の事業は競争激甚を極め優者は勝ち劣者は敗る、就職難に伴ふて生活難は益々烈しく、従つて虚榮的名利を街ふて止む時なき状態と爲り、法網以外に於て事を爲す如何なる不道徳も顧慮するの餘地なきに至りたり、識者の憂苦措かざる所のもの爰にあり、大阪府立天王寺中學校長鈴木券太郎氏大に之が矯正に努め、専ら忠實善良なる學生修養に盡瘁し、名利虚榮の人身に有害なるを教へ、道義心の人生に必須を説くや諄々倦まず。

文久三年十一月岡山縣此人を産む、氏人と爲り謹直にして一舉手も忽にせず、雙語も苟もせず、意氣極めて毅然たるの君子人、其質温良恭謙靈劔に藏するの觀あり、明治二十年文官試験局屬と爲り判任官二等たりしが、同二十三年廢局の後ち殘務取扱を命ぜらる、同三十年群馬縣尋常中學校長に任ぜられ、間もなく北海道廳立函館中學校長に轉任し、學事會々員及小學校圖書審査委員を命ぜられ、累進して從六位に陞叙せらる、同三十九年徳島縣立中學校長兼附屬圖書館長と爲り、翌年佐賀縣立佐賀中學校長に就任居る事二年にして病氣の爲め一時退職す、當時氏の教育上の功績大に擧り、録々たる氏の令名は天下教育界の推稱する所と爲る、同四十四年現職天王寺中學校長に迎へられて就任す、大正元年正六位に陞る名譽の至りならずや。

氏は操守堅く事に臨みて果決勇斷毫も回避する所なく、權門富豪に屈せず直往邁進、嗚々乎として、中等國民唯一の指導者を以て自ら任じ、終始一貫會て渝らず、部下職員に接するや寛宏洋々過罪尙之を容るゝの雅量あり、故に職員相和し一致協力奮然の中、其主義方針光々如として擧る、而して師弟の情誼森然として美はし、就職日尙淺しと雖も校規躍如として起り、嚴然たる校風牢乎として抜くべからざるものあり、氏到る所名譽を博し靡然たる敬慕一身に鍾る偉なる哉。



新潟 小千谷中學校長

正七位 杉沼友七郎氏

疲馬重荷を馱して九折の險坂を攀ぢ、氣息奄々、鞭影に驚いて奔らんとするも能はず、起たんと欲して起つ能はず、此時に於て願望長嘶悔ゆるが如く恨むが如し、亦既に遅い哉、青年血氣の勇往々此事あるを見る、三省四顧克く自己の力量を考慮して以て事を企てざる可からず、教育者は常に此無謀を敢てする者を戒しめざる可からず、我杉沼友七郎氏の如きは思慮周到、用意綿密の人、以て師たる可く以て範たる可し。



氏は青森縣弘前市の人、明治六年春三月雪尚深き北奥の地に春風幽に花蕾を撫する時、呱呱の聲を擧ぐ、第二高等學校を経て東京帝國大學文科に入り、同三十四年其哲學科を卒業す、翌年新潟縣立長岡中學校小千谷分校授業囑託と爲り、其翌年教諭に進む、同三十七年同分校獨立するや兼任教諭に任ぜられ舎監を兼ね、同四十一年同校長に榮進し爾來北魚沼郡立と爲り再び縣立に爲る、氏常に其校長たり其本校に職を奉じて既に十有二年、終始一日の如く、孜々

黽勉能く其職に竭す、當局屢其功績を賞し、正七位に陞叙せらる故ある哉。氏人と爲り濃厚、他に接する篤實、職員の指導學徒の訓育皆沸々たる赤誠の發露ならざるなし、其思慮の周緻なる、用意の周到なる施設經營一として速算あるなく管理極めて整頓し、規律嚴正校紀肅然、縣下稀に見る所なり、常に學徒能力如何に注意して指揮訓育を施す、卒業生は母校を愛するの念強く舊師を訪ふを樂しむの美風あり、父兄氏を信じ氏の徳を稱す故ありと謂つべし矣。」

教育家銘鑑

教育家銘鑑

大分 白杵中學校長

鈴木暢幸氏



知己の交感は時を問はず處を論せず、賈生が屈原を慕ひ、孟軻が孔子を慕ひ、而して孔子が周公を慕ひて吾復た夢に周公を見ずと云ふ如き、何ぞ其言の濃到深切なるや、シセロ曰く「余に對してはシビオ猶ほ生るなり、而して常に生べし」と、嗟呼宇宙茫茫唯だ知己あり以て繋ぐ所あり、知己なくんば人生は荒野のみ荆棘のみ、而して吾人は現任大分縣立白杵中學校長鈴木暢幸氏に面識なし然れども猶ほ氏を知己とし亦氏の知己たらんと欲するもの此間何等かの消息なからんや。

氏は舊米澤藩士、明治十一年正月を以て生る。山形縣米澤中學校、及第二高等學校を経て、東京帝國大學文科に入り、明治三十五年國文學科を卒業し、進んで大學院に遊ぶ餘暇、國學院大學、淨土宗高等學院、東京文學院、愛國女學校、東洋大學等に教鞭を執り、同四十年大學院の修業滿了す、其間大學在學中「文學小論」の著ありし以來、日語文典、日本大文學史等選述作十餘種の多きに及ぶ、同四十年廣島私立廣陵中學校の聘に應じて茲に該校發展の劃策に參し、大正二年現職に就く。

氏や思慮極めて圓滑穩健にして學殖や深奥富贍、而して職を奉ずる極めて熱誠忠實なり、就職日尙淺く未だ効果の全容を認むる能はずと雖も、其の恪勤其勵精一日も倦怠なく、諄々たる訓導は學業操行に反影し漸次面目を改めんとす、氏は圭角人を凌ぐの稜なく、寛厚洋々たるが故に部下悦服し學徒亦大に懐く、吾人の知己たらんと欲する、亦所以なきに非ざるなり矣。」



鑑銘家育教

元群馬中之條農業學校長

正七位 農學士 鐸木近吉氏

濁流滔々、道義地を拂つて悖戾馳聘し、又見るに堪えざる現社會に處し、獨り超然として崇高なる信念を持ち、皓々玲瓏一點の汚なく、只管我實業教育の普及と、之が實蹟に孜々營々たるもの、之を鐸木近吉氏と爲す、其獨特の識見と偉大なる人格とは亦稀に見るの器なり。



氏は福島縣の人なり、慶應二年十二月を以て郷里に生る、幼にして穎悟人呼んで神童と稱す、明治二十四年札幌農學校を卒業し、成績優等群に秀づ、學校之に學資を給して更に研究生たらしむ、後仙臺市私立東北學院の教授を囑せられ、同二十八年青森縣第二中學校教諭心得と爲り、次て教諭に任ず、同二十九年福岡縣中學校修猷館教諭に轉じ、同三十二年大阪府第二中學校教諭に移る翌年奏任待遇に進められ、益々其令材の高きを思はしむ、越て同三十四年徳島縣三好農學校長に榮轉し、同三十六年從七位に叙せらる、此年福島縣中學校長に任じ、居る事四年施設經營の見る可きもの多し、同四十年群馬縣立農業學校長に轉じ、同四十二年正七位に陞叙す、同四十五年校名を改めて縣立中之條農學校と稱す、由來中之條の地群馬縣の最大郡吾妻の一邑、蠶林の業甚だ盛にして、牧畜亦天下に知らる。

長野縣立大町中學校長

正七位 鈴木正治氏

秀麗なる山川は古來人傑を産すと謂へり、現任長野縣立大町中學校長鈴木正治氏は諏訪の人、其の山其の川が氏を偉大ならしめたるや、將た氏の天賦既に人格者たるの要素を備へたるか、吾人敢て之を問ふの要なし、然れども其品性や崇高、其人格や偉大、加ふるに深遠富瞻の學識を以て學徒教養の任に竭し、地方風教の改善に努力し、併せて國利民福の大本を説き、諄々意らざる事前後二十有餘年、氏を大なりと爲す所以爰に存す。



氏は明治三年七月の産、明治二十五年長野縣尋常師範學校を卒業し、更に進んで鵬翼を張り、高等師範學校に學び同二十九年を以て其博物科を卒はる、聘せられて石川縣尋常師範學校教諭兼訓導に任じ、小學校教員乙種檢定試験委員を命ぜらる、後教職を免ぜられて金澤育英講習所講師を囑託せらる、同三十二年當時の諏訪實科中學校現今の縣立諏訪中學校の奏任教諭に轉じ、同三十六年從七位に叙せらる翌年現校長に就き、同四十三年正七位に陞る。

氏人と爲り濃厚、篤實而かも容儀極めて端嚴、人をして愛敬の念を起さしむ、而して其職を奉ずるや極めて誠實なり、部下職員を厚遇し、慈愛以て學徒を導き、懇切叮嚀以て部民父兄に應對す、詳かに家庭の状態を査調し、以て學校教育との連絡を保たしむ、殊に地方風教の善悪は青年の良否に關する事大なるを思ひ、或は青年會、或は講話會等に講演其他の訓話を試み、只管堅實なる國民の養成に努め、進んで高等教育の志望者には懇々將來を誠飾して餘す所なし、偉哉。」

鑑銘家育教



群馬前橋高等女學校長

正七位 杉原九郎氏

近時泰西に心酔せる女子の理想界は、徒らに空中樓閣の按圖者と爲り、ベベル高塔の建築者と爲り、虚榮城中の主人と爲り、僥倖心の奴と爲り、冒險心の隸と爲り、嫉妬、猜疑、窮愁、鬱忿、怨恨、不平の窮鬼と爲る、ア、何たる状態ぞや、何んぞ孤鶴の飛んで九天の雲に入るが如く、人其の片影を見る能はず、唯だ時に清嘆の天樂の如く、碧海よく墜るを聞くの幽を想はざる、任を女子教育に奉ずるもの、心すべき所真に爰に在り、吾人は此點に於て我杉原九郎氏は女子教育に適任なるを信ず。



氏は文久三年を以て周防國徳山藩に生る、時恰も長藩甲子の變に際し、家道地に墮ち具さに辛慘を嘗めぬ、氏は赤手空拳自ら進んで自己の運命を開拓せざる可らざるの悲境に陥り、苦心慘澹漸くにして大學豫備門に入るを得たれども、之れ亦不幸中途にして廢業するの止むなきに至り、明治二十四年始めて福岡縣中學修猷館教諭と爲る、爾後、豊岡龍野中學を経て、群馬縣高崎中學に移り、續いて安中分校主任に轉じ、同四十三年現校に至る、此地自ら以て墳墓を期す、教育熱心知るべきのみ。

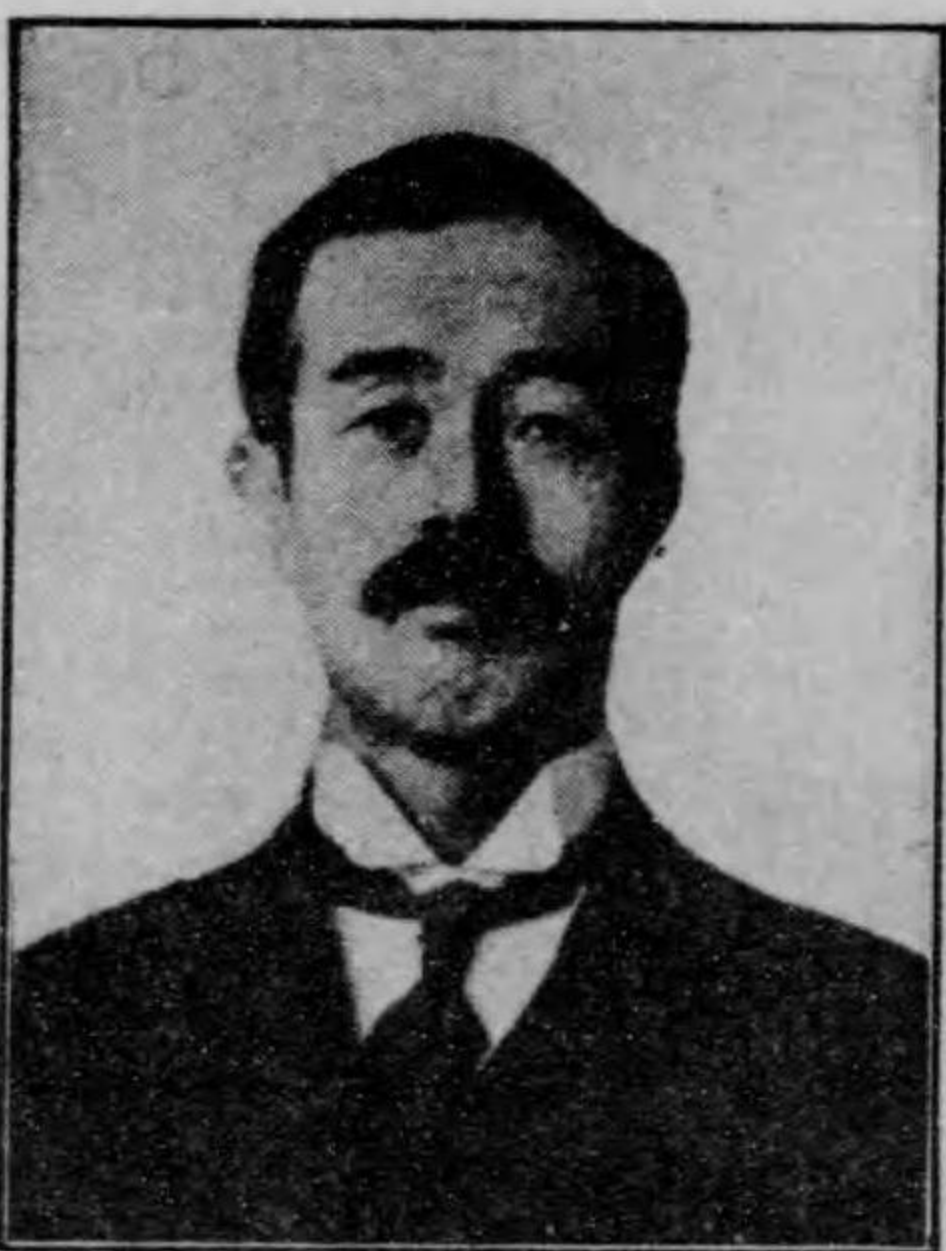
氏人と爲り眞摯誠實、交誼に厚く行くとして可ならざるはなし、常に質實儉素を以て座右の銘と爲し、虚榮を惡み浮華を戒め、奮勵努力卓然として時流の外に立ち而も些の教具なし、其現校に至るや深く自ら鑑る所あり、區々たる形式を棄て一方に力を内部の充實に努め、期年ならずして全く面目を一新す、齡漸く知命に達す理想的教育今より擧るべき時とはなりたり、氏夫れ健在なれ。」

教育家銘鑑

東京市高等女學校教頭

正七位 杉浦要太郎氏

夫れ、現代激烈極まれる活動社會に立ちて、之れに動亂さるゝなく、靜中に味ひある情操を有し、加へて威嚴犯すべからざる高格を備へ得るの婦女を薰陶せん事、眞に至難にして又刻下の急務たるなり、茲に杉浦要太郎氏、濃厚にして篤實なる天資を有し、熱誠を盡し斯業に執掌しつゝあり眞に生きたる教育の事は、氏の若き至情なる人格者にあらずんば又望み難しと謂ふべき也。



慶應元年九月奈良縣磯城郡織田村の地氏を生む、明治二十二年高等師範學校初等中學師範學科を卒業し、直ちに宮城縣尋常師範學校教諭に任ぜられ、同二十五年奈良縣尋常師範學校教諭に、同三十二年同縣高等女學校長に、同三十六年三月愛知縣立高等女學校長に、同四十年愛知縣立第二中學校長に歴任し、同四十二年正七位に叙せらるゝの榮譽を膺ひ、大正元年依願免職同二年三月現任と爲り孜々營々以て補佐の任を完うするに努力す。

凡そ利己的觀念を放れ、自己の天職を認識し、自覺し、一意以て其遂行に不斷の努力を注ぐは眞に景仰すべきの人なり、氏の若きは蓋し其一人にして夙に利慾を離れ精勵に次ぐに精勵を以てし、拮据黽勉一日も寧處するなく、分晷も徒消するなく自ら持する謹嚴他に對して寛宏、敢て城壁を設くるなし、之れ則ち氏が胸次の清廉を意味する者にして氏が品格自ら嵩高なる所以と謂つべきなり、我利に趨り、私慾に赴き、陋汚卑劣漢の滔々たる現時に於て此人格者を見る獨り學習子女の幸のみならず斯界の福亦多大なる哉。」

教育家銘鑑



新潟縣立佐渡中學校長

從七位 鈴木卓苗氏

教育家銘鑑

吉田松蔭曰く『士生此間欲爲楊柳則楊柳矣、欲爲松柏則松柏矣、排霜凌雪、枝折幹摧、寧無陽春之回哉』と、彼固より陽春の回あるを知る、排霜凌雪の苦、枝折幹摧の痛亦能く彼の知る所、而して更に辭せざる所以のものは、一點の光明を認め得たるが爲めにして眞理は最後の戰勝者なるを知れば也、希望の大切、理想の尊重眞に斯の如し、教育者は宜しく匹夫の勇を戒め、從容自若以て水火を踏み白刃を侵すの大勇を養はざる可からず。



現任新潟縣立佐渡中學校長鈴木卓苗氏は明治十二年四月を以て岩手縣稗貫郡湯口村の産る所、盛岡中學校を経て第二高等學校第一部を修め、明治三十九年を以て東京帝國大學文科哲學科を卒業す、一年志願兵として近衛第一聯隊へ入隊以前暫らく私立曹洞宗第二中學校教諭たりき、除隊後新潟縣立新發田中學校教諭に任じ、翌年舍監を兼務す、同四十五年叙從七位、大正元年同縣立村上中學校長に榮轉し大正三年現校長と爲る。

氏資性溫厚にして篤實、志操幽遠にして高潔其志夙に育英に在り、富贍なる學識を携へて教壇に立つや、孜孜諄々説き去り説き來り學徒をして倦ましめず、能く同情を以て僚友に接し、部下を遇する亦極めて厚し、其新潟縣に職を奉じて幾許ならざるに早く既に噴々たる令名を馳せ、遂に村上中學校長たり、然るに絶海の佐渡、人材を要する事切なり、重幣以て氏を迎ふる、蓋し氏に望む所大なるあるが爲めなり、佐渡の教育界今や暗夜に光を得たるが如き觀あり、氏亦偉なる哉。』

教育家銘鑑

德島縣立商業學校長

從七位 菅野修藏氏

現今商業道德地を拂ひ、動もすれば顧客を瞞着して暴利を之れ事とする者多く、商品は粗惡、價格は不廉、加ふるに一時的の辯才を弄して永遠の信用を顧ざるに至りては、實に言語同斷たり、殊に外國貿易に就て其甚敷を見る、菅野氏夙に之を憂ひ、眞正の商人たるに必要な徳望と才幹との修養に勉め、國民民福の實を擧げしむるに孜孜營々たるを見る。



氏は明治十四年二月を以て東京市本郷區森川町に生る、徳望圓滿にして特に熱烈なる同情と凜乎たる氣概とを有し年齒猶而立、能く衆人の尊崇を一身に蒐むるもの蓋し異數なりとす、明治三十七年東京高等商業學校を卒業するや、函館商業學校教諭を奉じ、勤続九年間首席として校長補佐の任を完ふし、商業教育に盡瘁し、大正二年校長に轉じ、徳島商業會議所特別議員、縣物産陳列場技藝員、縣立工業學校講師、縣學資金貸付審査員、縣教育會評議員、縣教育會圖書館部委員等を兼ね、大に一般の期待を受く。

氏は直接間接道德的情操の直觀教授を爲し、教師先づ實踐躬行し其人格の感化を與へんとし、周到なる注意と、緻密なる觀察とを以て、學理に形式を加味し實際的智識の涵養に力む、部下に對しては、赤心吐露指導の熱心と、之に協賛を求むる雅量とを有し、探長補短、精神的團結の實を擧ぐ、家庭教育は子女の個性發揮を圖り、注意して放任する主義を持し、青年道義の向上と智識の補習とは急務中の急務なるを論じ、風教上の改善を圖るの施設を講じ、専ら地方改良の中心を以て任ず、偉なる哉。』

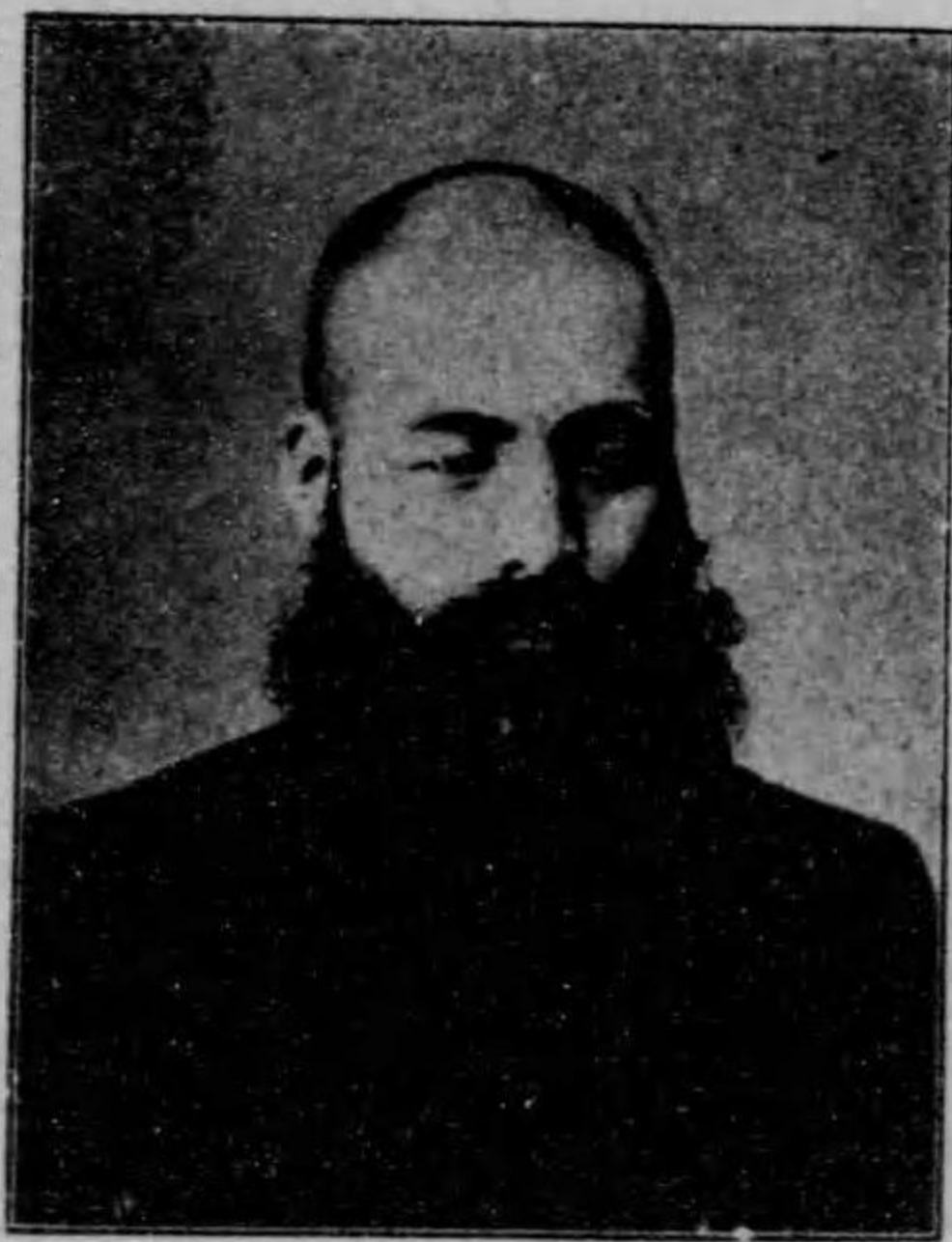


鑑銘家育教

ス之部

巖手縣 西磐井郡立西磐井實科高等女學校長 從七位 鈴木勝二郎氏

凡そ人生の事、地球表面を脱する能はず、同時に創世以來の忠實亦地球上に興廢せざるなし、地理と歴史、何んぞ密接なる關係を有するや、治亂興廢は將に海上の波浪に比すべく、研むる處其の趣味や大なり、我鈴木勝二郎氏は歴史を究め、地理を學び、以て此の活社會の狀勢を窺ひ、以て學徒教養の資となし、今や其蓄ふる處を以て我婦徳の涵養に須ふ、蓋し亦佳い哉。



氏は岩手縣の人、明治七年四月を以て其郷に生る、明治二十八年巖手縣師範學校を卒業し、東磐井郡奥玉上尋常小學校訓導、西磐井郡一關尋常高等小學校訓導を経て、同三十一年同郡山目尋常高等小學校長に榮轉す、翌年日本史料中等教員免許狀を受得し、同三十三年縣立一關中學校助教諭に任じ、其翌年更に地理科の免許狀を受領して教諭に進み、次て又歴史日本史東洋史の免許狀を得たり、同三十六年神奈川縣立第一中學校教諭に轉じ、後舍監を兼ね、同四十四年巖手縣郡立西磐井女子職業學校長に任じ、同四十二年奉任待遇と爲り、同四十四年同校廢止と共に現職に就き、累進從七位に叙せらる。

氏人と爲り英邁着實、而して内犯す可からざる威嚴を有し、片言猶忽せにせず、自重以て職責に臨み、躬行以て衆の範と爲る、氏は獨り女子教育に盡瘁する而已ならず、地方青年の指導誘掖に努め、我國固有の美德を發揮して宇内に誇るの意氣を養はんとし、延きて社會改良の實を擧げんとす、今や西磐井郡錚々の名を馳する者、氏を以て先づ指を屈す、一般の欽慕宜なる哉。」

一一四四

鑑銘家育教

和歌山 市立實科高等女學校長

須藤 丑彦氏



青年子女をして學校卒業後、風波荒き世路に當り、誘惑多き社會に立ち巍然として操を守り、一身の方向を誤まらざらしめんには青年教育機關の完美に待たざるべからず、其の機關としては、實業補習學校、青年會等種々のものを設置し、以て智徳を練磨し、其の心身の健全なる發達を擁護し更に各自適當なる宗教に依らしむるに若くはなし、現任和歌山市立實科高等女學校長須藤丑彦氏は如上の施設に付て大に盡す所なり、今又更に活動寫眞等の興行物の材料を改善して教育的たらしめ以て一般の風儀に貢がんとせらる、氏の着想や宜いかな。

氏は元治元年二月を以て本市南甚五兵衛町に生る、人と爲り廉潔にして同情の心厚く人の爲に勞を厭はず、且つ其の職務に忠實なるは、同一學校に十數年間の勤績を以て知るを得べし、明治十五年九月始めて小學校に教鞭を取り、中途和歌山縣師範學校に入學し、同十九年七月同校を卒業し爾來三十三年三月に至る十四ヶ年間、同一小學校にあつて訓導校長を勤め模範校長の令名高かりき、同三十四年四月海草郡視學に任ぜられ、同四十年十月和歌山縣視學内務部第三課學務係勤務を命ぜられ、超えて四十五年四月現任と爲る。

氏は誠心正意身を以て衆を率ひ、部下職員各自の人格を尊重し、自覺に由りて其の短を補はしめんことに努め、直接苦言を以てするなし、又生徒父兄等に對しても繁を厭はず、克く其の所信を吐露し其の方針のある所を知らしめ以て教育の徹底を期せり、氏到る所に人望高き故ある也。」

ス之部

一一四五



教育家銘鑑

又之部

栃木縣 足利郡 郡立足利高等女學校長

從七位 杉田勝太郎氏

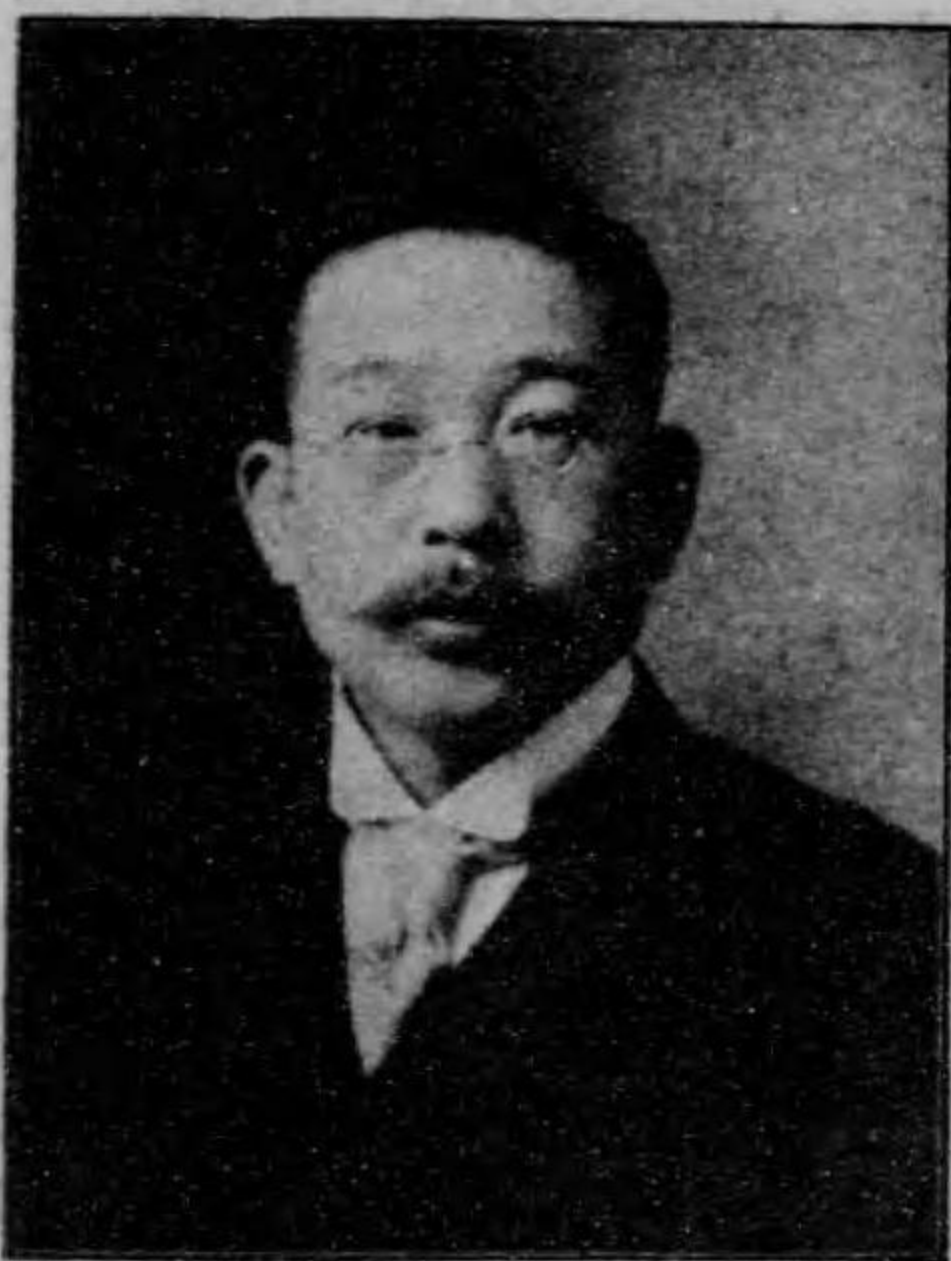
一一四六

『常ならぬ危き物は人心道の心を忘れずもがな』之れ小澤蘆庵の詠、吾人の心すべき處實に爰に在り、惡に慣れ易くして善に近より難きは人の常なり、蓋し意志薄弱の致す所、任に教育に在る者は躬ら大道に歩を運び、實踐以て範を垂るゝの覺悟なかる可からず、殊に我國女子教育に従ふものは特に女子の通弊を洞察し、賢女烈婦の言行を味はしめ、苟も道を行ふの良妻賢母を養成すべきなり

我杉田勝太郎氏は稀に見るの仁義の人、諄々訓ゆる所常に道徳に在り、意志の鍛練に在り、効果顯はる當然なり。

氏は栃木縣の人なり、明治五年十一月を以て生る、明治廿七年縣師範學校を卒業し、芳賀郡眞岡尋常高等小學校訓導に任じ、同二十九年市塙尋常高等小學校訓導に轉じ、幾何もなく校長と爲り、又水橋高等小學校訓導に移る、同三十年縣師範學校訓導と爲り、翌年教育科免許狀を受領し、同校助教諭を兼ね、同年栃木高等女學校助教諭兼師範學校訓導と爲り翌年訓導を免じ師範學校助教諭を兼務す、同卅三年師範學校助教諭専任たり、同三十四年師範學校訓導を兼ね、同三十六年國語調査資料取調委員を命ぜられ、同三十九年縣立女子師範學校助教諭に轉じ、附屬主事たり、翌年奏任に進み、同四十二年現任校助教諭に就き次で現校長に昇り致々教務の發展を圖る、同四十四年從七位に昇叙す。

資性濃厚篤實、學に篤く常に研鑽を絶たず、殊に教育學及國語漢文の造詣深く、又詩歌に堪能也、恭儉己を持ち、慈愛人に接す、一般の欽慕年と共に加はる者蓋し理なる哉。』



教育家銘鑑

又之部

兵庫縣 神戸市 私立神戸女學院長

スウザン、エー、ソール嬢

一一四七

米國最良國粹の美風を有する新英州の一なる、マツサーチエセツ州ヴェスレー大學に學びたるソール嬢は、清教徒の後裔にして敬神の念深く、溫良なる其天性を發揮して、茲に三十有餘年間、専ら本邦女子教育の率先者として斯道に盡瘁し、名聲天下に洽きもの、蓋し因なくんばあらず。嬢は西曆千八百五十八年十月を以て、米國ミシガン州ナイルスに生る、人と爲り親切にして事務に勵精し、綿密なる道理に依りて事を處断し、日常質素にして能く規律と衛生とを重んず、數學的頭腦を有し、清爽なる文學を好み、歴史に通じ又英詩を作る、千八百八十一年ヴェスレー大學を卒業し、ノルスフィールド市カールトン大學に教鞭を執り、明治十六年宣教師として我日本に渡來し、私立神戸女學院教師となり、同二十五年同院々長の職に就き、爾來勤績以て今日に至れり。



由來本院は神戸市山本通四丁目に建てられ、諏訪山の山腹、風光明媚の地に在り、嬢の勵精にして質實、且つ人に對する同情の念は、以て四百餘名の卒業生をして嚴父の如く、又た慈母の如くに慕はしむ、蓋し教育上無形偉大なる功績と見做す可きものたるは信じて疑はざる所なり、宜なる哉其主義たる、高く基督の教に在りて、其方針たる所亦斯の主義に基づき、宗教的道德心を備へ、眞に帝國の婦女たるに恥ぢざる女子を薰陶しつつあり、要するに其確乎動かす可からざる一種の信念は、遠く異國の教育に任じ、善導感化の實蹟を印したる効績は、吾人の感謝措かざる所なり、謹んで嬢の健康を祈る。』



長野縣  
上水内郡組合立北部農學校長

鈴木辰二郎氏

赫々錚々の名聲を求めず、過大の財寶を欲せず、只誠只實、其の職分を完ふせん事に汲々たるの教育者は真に尊ぶ可き哉、幽溪の草花は人の見るなきに芬芳自から發し、其の平和にして健全に、而して且つ有益なる生活に到りては、理想的の生活、或は之に庶幾しと云ふも過當にあらじ、惟ふに我鈴木辰二郎氏の如きは遂に名聞利達を思はず、實業教育を以て畢生を期し、農村の改良自治の發展に努力す、寔に幽谷草花の優に比す可し矣。



明治元年五月甲斐國北巨摩郡大草の村氏を産む、夙に教育に志し、嘗て山梨縣師範學校を卒業し、縣下初等教育に従ふ事數年、然るに切に感ずる處あり、猛然立て實業教育に身を委せんとし、明治三十三年出て、農業教員養成所に學び、翌三十四年所定の教科を卒へ、青森縣畜産學校教諭に任ず、翌年同校内に開設せる小學校教員夏期講習會講師を囑せられ、同三十六年農業科中等教員免許狀を受く、此年岩手縣膽澤郡立膽澤農學校長に轉じ、郡農事巡回教師を兼ね、同四十二年現校長に就き、同四十五年奏任を以て待遇せらる。

氏や人と爲り英邁、端嚴方正の性を有し、具さに農村の實情を調査して餘すなく、部下を率ゆるに先づ躬を以てし、和平の内各其の職分に安んぜしむ、古來農民の頑固偏見なるあり、氏之が矯正に努め、自治の發達に斡旋する處頗る多し、宜なる哉郡民皆氏の徳を謳歌し、仰慕甚だ高きものあり、卒業生亦能く地方の中堅たるに至れる、眞に氏の感化教導の完きを證するに足らん、ア、」

鑑銘家育教

鑑銘家育教

富山縣  
滑川女子尋常小學校長兼實科高等  
中新川郡女學校長

菅 秀之助氏

資性濃厚篤實にして恭虔、事に當つて熱誠忠實遂行せざれば止まざるの氣概を有し、人と交はる城府の設けなく、磊々落落として能く人を容るゝの雅量あり、同情心深くして人に對する最も親切なるを以て、到る所々屬民の信賴厚く、部下職員の信服と爲り、兒童生徒の敬慕と爲る、教育上經驗頗る高く、言行一致終始一貫を以て其人格を標榜せる者之を菅秀之助氏と爲す。

氏は慶應二年正月を以て富山縣富山市に生れ、明治十六年富山縣師範學校高等小學校の業を卒へ爾來富山縣、廣島縣、奈良縣等に於て、小學校訓導又は校長と爲り、日本赤十字社富山支部書記より富山縣高岡市書記を経て、明治三十五年三月同縣中新川郡視學に任ぜられ、同三十七年十二月同縣中新川滑川尋常高等小學校長と爲り、同四十一年四月滑川男子尋常高等小學校に轉任す、當時氏の錚々たる令名は、郡内教育界の噴々たるのみならず、縣内一般の推稱する所と爲る、大正二年四月迎へられて滑川女子尋常高等小學校長兼滑川實科高等女學校長たる、現職に任命せられ大に教務の刷新を圖り、孜々翼翼其施設に盡瘁せり、其就職日尙淺しと雖も銳鋒已に顯る。

氏は事を爲す公明正大、能く部下職員の意見論説を融和するの才氣に富み、人と談ずるや同僚朋友たり、老人たり小兒たるを問はず、其他如何なる職業の人にも能く談じ能く語り、實に萬事精通達識の士と謂つべし、是れ氏の人望高き所以ならん歟、氏の教育方法としては教授準備を第一と爲し、能く部下を信任して干渉を敢てせず、務めて技能を發揮せしめ、採長補短を爲すに過ぎず、時間の經濟、反覆練習、虛榮的修飾を遠ざけ、質朴忠實の養成を以て訓練の要旨と爲す、其家庭教育は學校教育の基礎なるに因り、其効果を完からしめんとせば、家庭教育を忽緒すべからずと爲し、母姉會を開きて其連絡を密ならしめ、青年子女の爲め敬老會を開き其修養を圖る、偉なる哉。」



鑑銘家育教

ス之部

一五〇

千葉縣安房郡視學

杉山與三郎氏

氏や元精力主義の人、奮闘努力の人、如何に執務の惹忙を極むる時と雖も、寸暇を得て楮表新書を手にし流讀一下、直に之が提要を捕へ把持逸することなし、其資質温良謹直、而も氣宇宏濶頭腦明晰創始の才に長ず、其事を爲さんとするや嚆矢定らずんば起たず、一度起てば熱摯力勉成就せんは止まず、氏教育を以て渾身の事業と爲し、其後進の誘導教育的なるを以て自己の樂しみと爲す、郡下教職員に對する總てに赤誠を披瀝して餘す所なく、談笑の間に於て氏が教育主義を説明了得せしむるを常と爲す、即ち強烈なる性情を以て正確明快なる倫理的道義的理想の努力、之れ氏が依て以て立つ主義たらずんばあらず偉なる哉此人や。

明治三年八月千葉縣君津郡平岡村此人を産む、同二十五年三月同縣師範學校の業を卒へ、君津郡中鄉村富士見尋常小學校及び平岡高等小學校に訓導たる事前後九ヶ年、同三十四年選ばれて鎌足尋常高等小學校長と爲り、翌三十五年四月轉じて香取郡小御門高等小學校長兼小御門農學校教諭の職を奉じ、勤績三年餘、次て同三十八年八月小見川尋常高等小學校長兼農工商業補習學校長たること三年、當時氏の教育界に於ける錚々たる名聲は到る所に噴々として縣下一般の推移する所と爲る、同四十一年拔擢せられて君津郡視學と爲り、氏の教育主義、温厚に潤達なる人格、情操明快なる手腕は此時に於て顯はる、後ち山武郡視學を経て大正二年三月現職に就任せり。

氏は現に教育行政を執ると雖も、其教育的理想に於ては常に直接教鞭を執る者に異ならず、其家庭教育上に青年教育上に將た又社會教育上に、其意見の豊富なる郡内教職員の指導最も宜しを得る、氏の特長たる洒落、諧謔の裡其の所信を貫徹するの妙用あり、且つ文を行る雄健演説に坐談に其話柄に富む、また其筆跡華麗にして夙に一家の風を爲す偉なりと謂つべし矣。」

鑑銘家育教

ス之部

一一五一

福島縣坂下尋常小學校長  
河沼郡

菅野 健氏

眞摯實質、熱精果斷、學識深遠、德行充溢、斯て他の尊崇を受けざるものはなけん、教育終局の目的亦將に爰に達す可し、教育者其人を求むる、正に此點に在り、百萬の言辭、千萬の文字あるも人以て徳を爲さざれば功空しからん、菅野氏は徳の人、其蹟の完きを致す故ある哉。



氏は明治十二年九月を以て本縣伊達郡石戸村に呱呱の聲を擧ぐ、志を兒童育英に立て、本縣師範學校に學び、同三十三年業卒へて、伊達郡桑折小學校訓導と爲り、研鑽自己の職責の全からんことに力め、孜孜校長を輔け、同僚と計り、營々訓へて倦まず、校紀肅然たるものありき、當局者氏を擢て、師範學校附屬小學校訓導と爲す、同四十二年須賀川第一小學校訓導に轉じ、時の校長天野景明氏を佐けて盡す處あり、同校長死去後其後を襲ふて校長を拜し、大正二年當町の招聘する所となり校長に任せられ令名噴々一郷の民望を歸す。

氏は頭腦明晰にして大勢に通じ、快活にして城府なく、赤心を他の腹中に置き、人をして直ちに其誠意に共鳴せしむ、克く洗練せる常識を以て人に接し、寛宏の襟度衆を駕馭するの徳あり、教育の學に精しく、且つ哲學、歴史の造詣深し、又體操を得意とし體育の卓識あり、訓練に關しては體育を出發點とし、大國民の品格養成に力む、家庭青年社會教育等には専ら偉人烈婦の事蹟を説話して、古來と現代との精神的交通を爲し、治めずして下を化し人争て其配に屬し、兒童の敬慕一身に集まる、偉なる哉氏の徳や。」



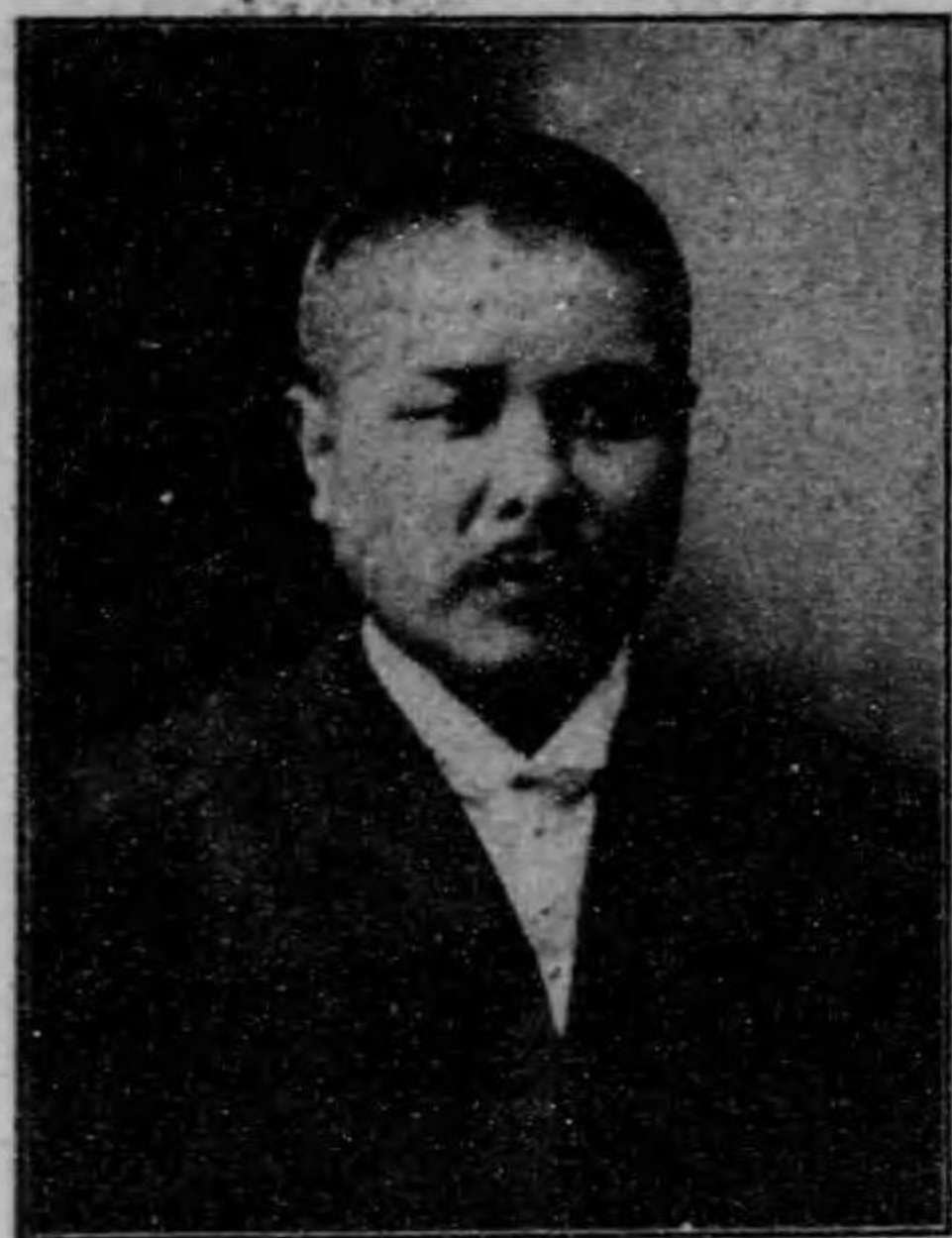
靜岡縣三島第一尋常小學校長  
田方郡

鈴木卯吉氏

豆相駿州の岐點、四圍青巒の重疊、恰かも是れ一幅の繪畫、其山水の秀美優麗なる、加ふるに近年長足の進歩を爲し、縣下有數の市街たるに至りたる三島町に於て、其卓絶せる人格と、脱凡の手腕とを以て、兒童教育に孜々營々、以て其天職を樂むもの、鈴木卯吉氏あり。

氏は慶應二年六月、本郡修善寺村に生る、剛毅英邁、誠實勤勉、歴史學に精通し文才に富む、明治二十年本縣師範學校を卒業し、佐野原、駿東、大見等の訓導を拜し、同二十二年二俣小學校長と爲り、爾後、修善寺尋常同高等、三島尋常同高等等の校長を経、同四十一年現任校長に就職す、爾來孜々營々曾て其勞を知らず、教育功勞者として本縣より表彰せられ、氏が奮闘努力克く其の成績を挙げ、大正二年本校は模範小學校として縣より表彰せらる、豈名譽の至りならずや。

教育、戊申の聖旨を奉じ、校訓級訓を制定し、二宮尊徳江川太郎左衛門の徳行鼓吹を訓練の要點と爲し、郷土地誌、生産状態を調査記憶應用の資料たらしめ、低脳兒特別教授の勵行、自治的精神の涵養に意を用ひ、毎年一月に實踐要目を定め、(假令ば大正三年一月には、常に人の美點を揚ぐるに力ひる事)職員兒童に實踐せしむ、町民と學校との接近、兒童固性の發揮及自發的活動、戊申詔書行義の配布、青年會機關雜誌「田方タイムス」の利用、恵比壽講、節分撒豆を廢し、葬禮に酒肴を用ゆるを止め、各種會合の時間勵行革新の實を挙げたるもの多し、今や町民氏の徳を欽慕せざる者無き宜へなる哉。」



江川太郎左衛門の徳行鼓吹を訓練の要點と爲し、郷土地誌、生産状態を調査記憶應用の資料たらしめ、低脳兒特別教授の勵行、自治的精神の涵養に意を用ひ、毎年一月に實踐要目を定め、(假令ば大正三年一月には、常に人の美點を揚ぐるに力ひる事)職員兒童に實踐せしむ、町民と學校との接近、兒童固性の發揮及自發的活動、戊申詔書行義の配布、青年會機關雜誌「田方タイムス」の利用、恵比壽講、節分撒豆を廢し、葬禮に酒肴を用ゆるを止め、各種會合の時間勵行革新の實を挙げたるもの多し、今や町民氏の徳を欽慕せざる者無き宜へなる哉。」

教育家銘鑑

教育家銘鑑

臺灣臺南第一公學校長

從七位 鈴木金次郎氏

曩に明治天皇御不例の報、一度臺灣に傳はるや、生徒の中には數日食を斷ちて御惱平癒を祈り、其の崩御を耳にしては謹慎喪に服し、以て鴻恩を偲びし者ありき、新領土の民をして斯の如くに黨陶して忠良の民たらしめたる鈴木金次郎氏や、眞に教化力大なりと謂つ可し。

氏は文久二年二月を以て遠江國城東郡小貫村に呱呱を擧ぐ、明治十四年靜岡縣師範學校を卒業して、縣下小學校訓導並に校長として兒童教育の任に膺り、頗る令聲の噴々たるものありき、征清の役後臺灣島我有に還り總督府を置き國語學校を設くるや、同廿九年知事の推選に依り其の講習と爲りて渡臺し、翌年業を卒へて其の國語學校教員の職務を囑託せられ、次て教諭に任じ、同四十年現校長に就き、同四十四年從七位に叙せらる。



動かし、然かも臺灣語に巧にして父兄を説く、兎漢點奴なる島民と雖も、其の徳に薰和して亦反視する者なし、常に本島の民をして我日本帝國の國體に同化せしめ、忠良なる陛下の赤子として養成すべく汲々たり又何ぞ他を顧みるの暇あらんや、由來本校は臺南市の南部、孔子廟内に建てられ、氏就職の當時八學級を容れしが、今や七學級を増し、八百の兒女を收むるに至る、住民は支那族に屬し、風俗習慣南清に同じ、然れども卒業生は皆能く内地風に化し、亦能く親睦するを見る、蓋し氏の教化に因り一般の欽仰頗る高く、地方斯界の一大恩人として重視せらる、亦宜なる哉。」



臺灣阿緱廳瀾濃公學校長

菅 虎 吉氏

『十年一日の如し』とは平凡の語なりと雖も、教育者に於て殊に其必要を認む、此不撓の意志、不屈の精神を以てして教育の實果を收め得べし、況んや人情風俗を異にせる愚昧の民を教化指導するに於てをや、我菅虎吉氏は資性濃厚君子の風あり、而かも事物に熱摯なる雨滴穿岩の概を有す、今や校下の民皇恩の忝なきを知り、瀾濃公學校の名亦高きを致す、蓋し氏の賜なりとす。



氏は明治十一年八月山形縣最上郡新庄町の産む所、明治三十二年山形縣師範學校を卒業し、最上郡有屋小學校訓導に任ぜられしが、幾程もなく臺灣總督府國語學校に學び、同三十四年現職に就く、曾て氏は精氣抑へ難く郷里に留まらざる能はず、渡臺以て新領土の教育に従はんとせしなりき、氏常に『創業難守成更難、須就難中先克己、讀書樂耕田亦樂宜從樂處可修身』を口吟す、又其操志を窺ふ可し。氏は細心にして努力、一心育英に盡瘁するの外亦他を顧みず、今や其效を顯はし全く地方教化の中心たるに至る、適切なる徳目十ヶ條を定めて其の徹底に努め、眞摯勤勉の良帝國民を養成せんとし、無味乾燥なる環境即ち人情の疎なる風俗の卑なる、教育の何物を解せざる、しかも炎熱の地に十有餘年の久しき孜々倦む事知らず、諄々諭して今日の狀態に迄土民を教化したるの功は蓋し大なるものなり、由來此地人民は二百餘年前支那廣東の移住者、滔々浮華輕薄の徒輩多き今日、安心立命意義ある生活を送る氏は眞に教育者の龜鑑たる可し、氏亦技に巧にして就中寫眞術音樂に長ず、偉なる哉。』

鑑 銘 家 育 教

名古屋第二高等小學校長

勳八等 杉本寅之助氏

近時文運益隆盛、人生々活上競争劇甚を極むるの時に當り、我教育界の大勢を見るに其教育方針の變遷乏しきは吾人の遺憾とする所なり、殊に地盤の狹隘に人口の増殖甚しき我國教育家の如きは尤に刮目以て世界的開放的に殖民的の方針を採らざるべからず、我國民の短所たる島國根情は遂に邦家の發展を妨ぐるの大なるのみ、方今我國力四周に膨脹し唯り東洋に於て覇たるに止まらず、世界に雄飛し之れが平和の主唱者たらんとす、如斯國威の發揮を助長して以て益々旺盛ならしむるは、苟も幸福を求めんとする人類の望む所にして是即ち理想的活動と謂はざるべけんや、之を援助し擴大し以て吾人の幸福を圓滿ならしめんと勉むるは、則ち教育者の任務にして大に努力せざんばあるべからざるなり、爰に大に開國主義の教育を力むる人あり杉本寅之助氏其人と爲す。

氏は名古屋市の人、安政五年を以て生る、幼時已に神童の聞え高く稍長じて身を教育界に投ぜんと志し、明治七年教員養成の學校を出て、初めて教壇に立つ以來勤績四十年、此星霜決して短きにあらず而も其一貫せる至誠は、行く所として徳望高く生徒の尊敬懷慕は益々深く、所屬民父母姉の信頼敬虔厚きを加ふるに至る、氏の名聲は赫々として縣下に喧傳せられ、其現校長に任命せられたるは明治四十二年三月なり、本校就職後は未だ永しと云ふにあらざれども、氏の感化已に市内に洽ねく、全市教育界に令名高く、現に市教育會長として貢献する所尠少ならざる也。

氏や幹軀魁偉、肉豊にして沈着壯嚴、動作頗る活潑に其事に當るや眞摯綿密、小事猶忽にせず、部下を統ぶるに親切叮嚀を極め、克く其人格に信任して干渉せず、語るに圭角なく交はるに城府を設けず、青年子女の指導誘掖には特に意を注ぎ以て風儀の改善を圖る、氏の開國殖民主義の教育主義は其青年教育に於て顯はる、大正二年多年の功勞を以て勳八等に叙せらる名譽なる哉。』

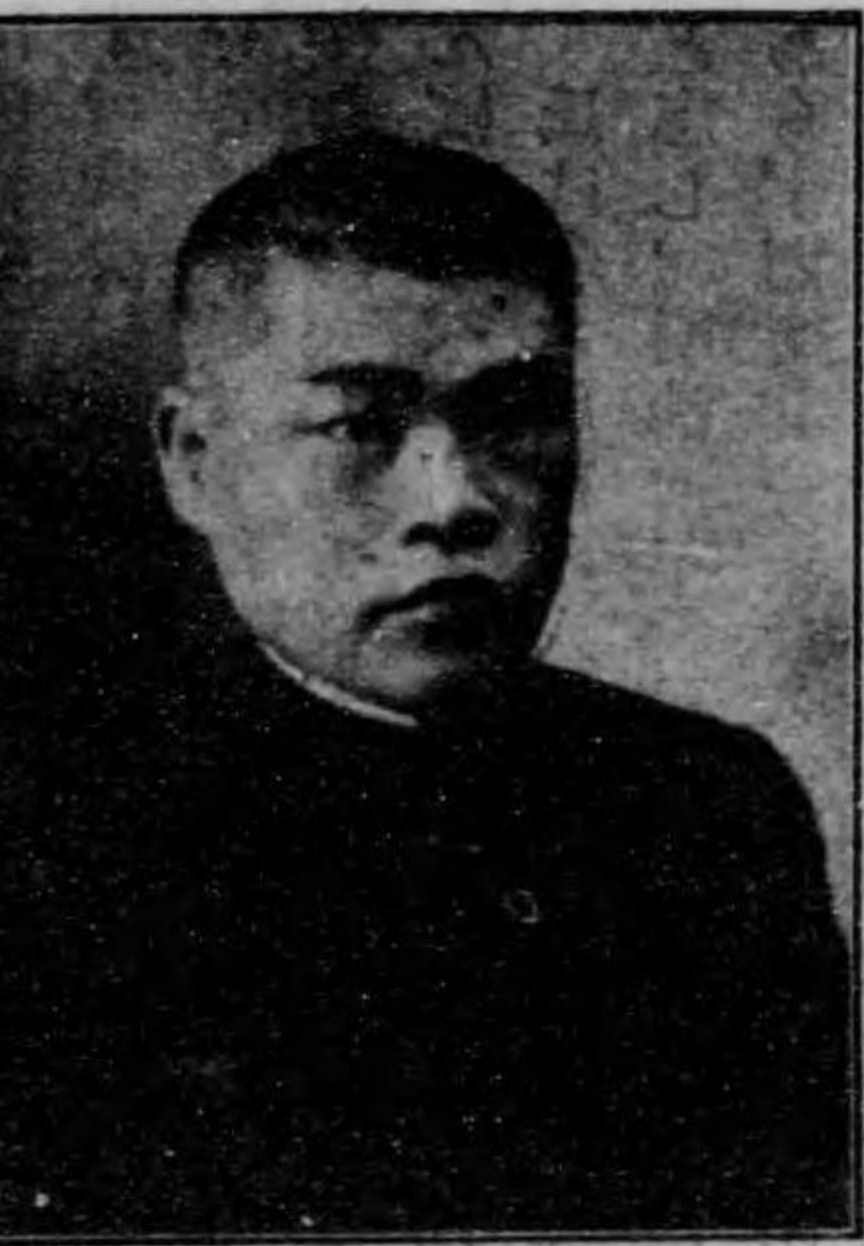
鑑 銘 家 育 教



滋賀縣 犬上郡 東甲良 尋常 小學校長

末松 欽十郎氏

「訓練は兒童をして俗に云ふガマンジョなる志氣を養成する事を本と致し居候(中略)是れ以外には何等訓練の方法も講じ居らず所謂一本鎗で御座候」(下略)とは嘗て末松氏が某郡視學に致せる回答の一節なりとす、更に「事を爲さんとする場合に頓挫失敗に届せざる意志の修養を旨と致し居候之れ克己となり忍苦と爲り艱難の多き人ほど益多望なりとの信念を得しめんと計り他日成業の曉には優に社會の困苦と戰ふて之に克つ丈の意志を養はんと自ら己に勵行して範を示し居る積りに候」と克己不撓の精神涵養、教育上の眞髓抑も此に在る哉。



氏は彦根の人明治元年三月に生る、人と爲り率直にして奇骨を有し、諧謔洒落にして愛情亦深し、明治廿六年縣師範學校を卒業し、彦根、高宮、豊郷等の訓導を奉じ、同四十五年現校長と爲る、常に一家の見識を有し、施設經營する所總て熱誠の溢るゝを見る。

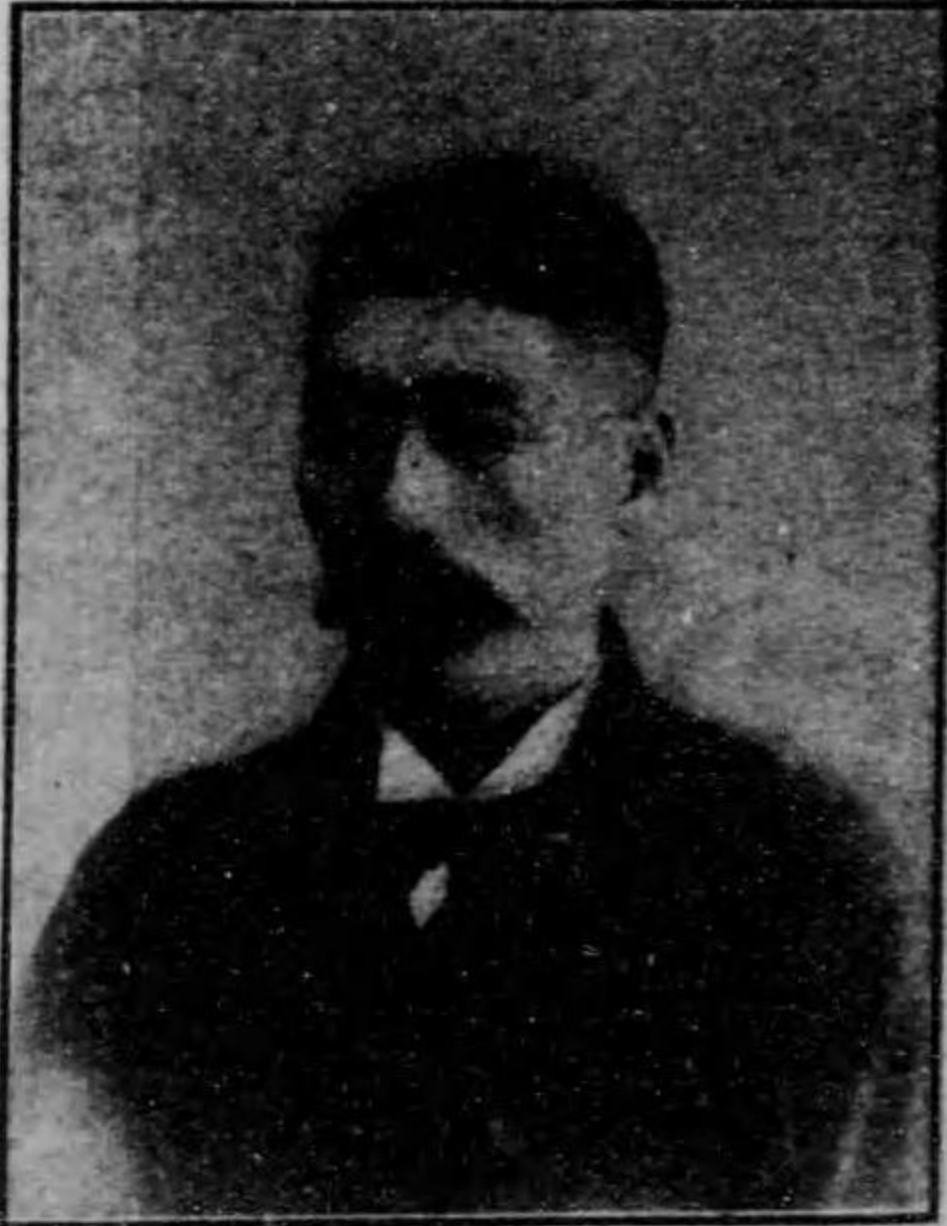
氏は個人教育に重きを措き、兒童の能不能を考へ各其長所を以て他日社會に立つが故に強ち各科の平均を望むに足らずと爲す、職員に對し無責任を憎み勤勉教て倦まず、常に人格を偉大ならしむるに力む、教育者は父母の代理なる信念を有し家庭同様呼び捨ての方針を持し、卒業後の方向等相談を受くる場合に於ては若し我子ならばと前置するを常とす、青年に對しては漸進主義を採る、一般に勤儉の美風を存す、兒童の敬慕父兄の信頼益加はる所以のもの蓋し誘掖指導の力大なるに居れり、氏の感化夫れ偉ならずや。」

鑑 銘 家 育 教

岐阜縣 小島 尋常 小學校長

鈴木 勝氏

忠孝を訓練の中樞、我國民性に對しては其長所の發揮に力め從來の缺點に顧み地方の缺陷を救済するを其目的とし、職員協力實踐躬行範を示し家庭と相聯絡して其の一致を期す、而かも一校職員を統御する常に溫和巧妙なる手段を用ひ、高壓的命令的に事を強ひず、愛を以て皆其風を欽び其徳に感化せられ、校内和氣満々たる春日の如き、蓋し校長鈴木勝氏の主義方針に出づ。



氏は明治八年本縣岩村町に生る、資性濃厚篤實讀書を好み、人に接する謙讓に沈着事を處理して毫も輕舉あるを見ず、明治三十年縣師範學校を卒へ郷里小學校の訓導と爲り翌年蛭川小學校長に榮轉し、次て師範學校訓導に任じ助教諭心得兼務たり、同三十六年以後加納尋常、加納尋常高等の校長を経て、同四十一年揖斐尋常高等小學校長に轉じ、附設町立揖斐農業商業裁縫補習學校長を兼ね、大正三年現任と爲り大に教務の刷新を圖りつゝあり。

近時西洋思想の輸入と共に、所謂ハイカラ的家庭の出現するあるも、氏は巧みに其長所を採り、以て從來の家庭に同化せんとする極めて穩當なる教育方針を施さんとし、特に母姉に對する教育法に熱心し、母の會を設けて學校との連絡を計る、青年及社會の教育は不言實行を主義とし陰に陽に改善を計畫しつゝあり、氏は文學(歴史國語)に興味を有し、常に之が攻究を怠らず蓋蓋殊に深きを見る、今や聲望遠近に延び徳化四隣に洽く、岐阜縣教育界の光華たり重鎮たる偶然にあらざるなり。」

鑑 銘 家 育 教



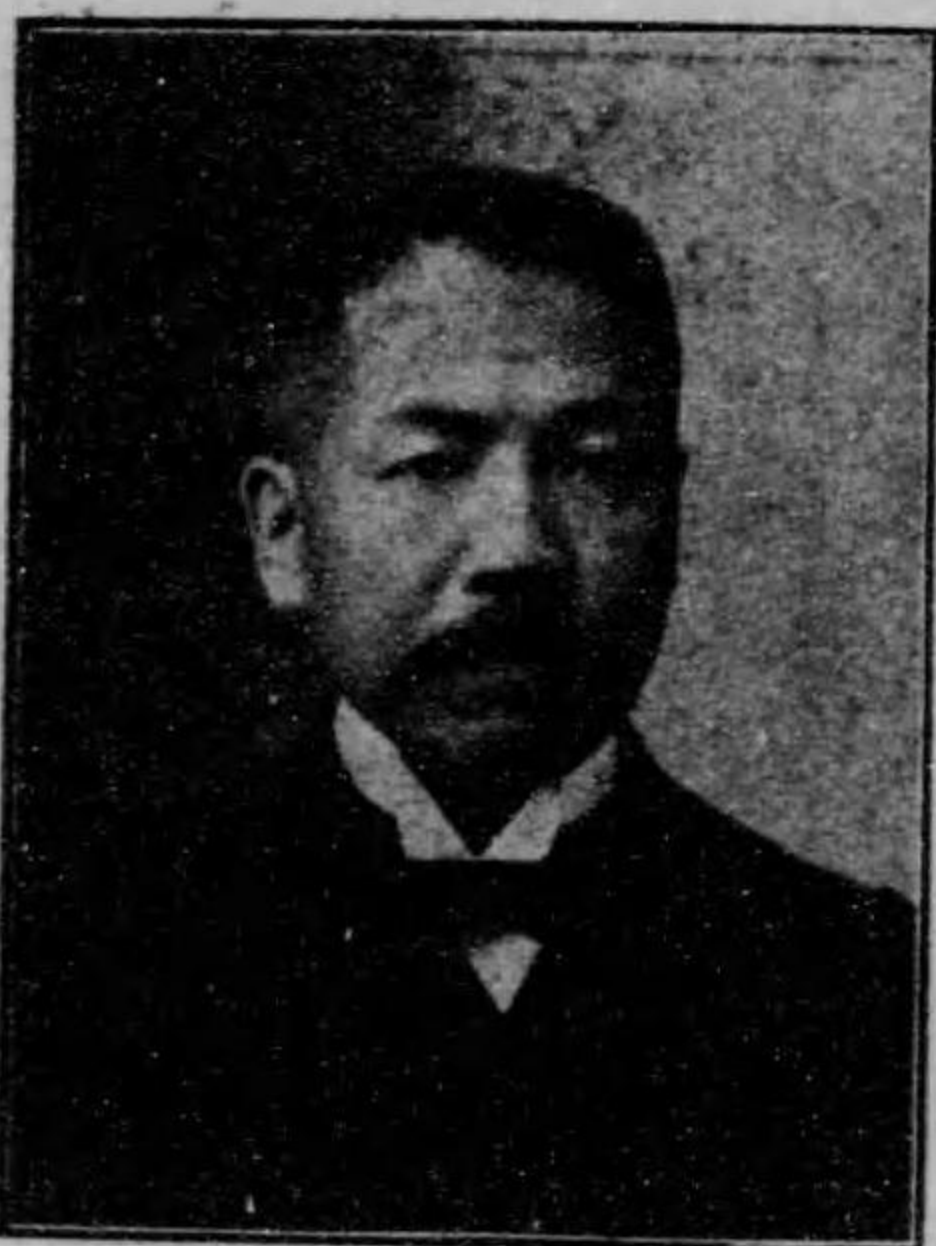
福島縣二本松第二尋常小學校長  
安達郡

須藤由一郎氏

度量寛宏にして能く人を容れ、温顔以て人に接し、敦厚以て他を待つ、我須藤由一郎氏の若きは其類多からず、氏や加ふるに勤勉の質を備へ、拮据經營、千挫不撓、奮育英の聖業を以て自己の天職と自覺し、未だ嘗て他を顧みし事あらず、夫れ名に趨り、利に赴くの俗輩のみ蠢爾たる現時に於て氏の如く専念、其天爵を怡しむるの士は蓋し鮮なし、又仰ぐ可きの育英家なる哉。

群馬縣碓氷郡磯部村の地、明治二年十二月を以て氏を生む、氏や同二十五年同縣師範學校を卒業、郡内碓氷郡安中尋常小學校訓導に任せられ、次いで安中尋常高等小學校に移り、同二十八年同郡磯部尋常高等小學校に、同四十一年福島縣師範學校教諭に榮轉、次いで同校訓導並に含監を兼ね、同四十四年十月現任に轉じ、大正三年同町立幼稚園長を兼任、經營屹々鋭鋒已に顯はる。

氏や現今初等教育の實際は、動もすれば理想に趨りて劃一に傾き、或は情實に拘泥して無主義に陥れる弊ありとし土産の生業並に氣風の長短等を參酌し、教授訓練養護に關する方針を定めて適切なる教育を施し、以て教育勅語並に戊申詔書の聖旨の貫徹に努む、氏又家庭教育に對し留意甚だ怠らず、兒童の幼時にありては極端なる干渉を避け、體育情育に重きを置き、世人動もすれば幼時より餘りに智育に偏し、早熟を喜ぶの風を矯めん事を期し、其他青年の德義振興に、社會の進歩向上に大いに貢献しつゝあり、氏今や所屬民の信頼愈々厚きを加へ、兒童の敬慕益深きに至る宜べなる哉。』



北海道札幌區豊水尋常小學校長  
札幌區

鈴木又衛氏

北海道札幌區猶未だ創業に屬し、諸種の機關整はず、教育の事亦未だ不完全なるの時、既に身を育英界に投じ、全國各府縣の移住者の子弟を教育し、幾多の困苦と闘ひ辛酸を嘗め、而かも不撓不屈能く成績を挙げ、今日噴々の名聲を十一州に馳せ得たる、現任札幌區豊水尋常高等小學校長鈴木又衛氏は眞に畏敬すべき教育者にして、邦家斯界の爲め吾人の感謝する所なりとす。



氏は元治元年十二月の産、夙に北海道に移住し、札幌區山鼻村に本籍を有す、明治十五年開拓使小學七等訓導に任じ札幌創成小學校に教鞭を執り、翌年札幌師範學校の訓導と爲り、同二十年再び創成小學校の訓導に復す、同二十九年創成尋常小學校訓導兼創成高等小學校訓導と爲り、尋常校の校長心得を経て同校長に進み、同三十四年札幌女子尋常小學校長に轉じ、同三十七年現職に就き、後札幌第二工業補習學校長を兼ね、大正三年文部省に選奨せらる。

氏は温厚篤實の君子、能く職員を信頼し、職員亦兒童を愛撫し、師弟の情濃やかにして校内の圓滿他の羨む所なり、現に二十三學級の潑刺たる意氣は全道稀に見る所なりとす、劣等兒童の補導に努め、工業補習學校は自ら教鞭を執り成績共に宜し、細目は教科、訓練、校外教授住民資料に區分し、誠實勤儉規律禮儀自治公德衛生の七徳目を校訓とす、父兄全部を以て保護者會を組織し、其他校舎の保存校具の整理、教授材料の工夫蒐集、學校園の施設、卒業生同窓會の活動等見る可きもの甚だ多し、當局屢表彰する亦宜なる哉。』



福岡縣赤間尋常小學校長  
宗像郡 薄 菊次郎氏

薄 菊次郎氏

眞の善に入り、眞の美に遊び、至誠を以て心とし、態度莊重、威あり、信あり而して深厚なる愛情を存す、薄菊次郎氏を以て其人とす、氏や活識豊富に、堪能衆に秀て、凛々乎たる蓋世の威風あり其學童に對するや寛嚴度を失せず、一度氏が薰陶を受けんか、卒業退學終生に涉り、周密なる注意と濃厚なる同情を以て之れを誘掖指導す、職員亦氏に悦服して職を勵み、努力奮闘敢て辭せず、生徒氏に信頼して、永く嚴父慈母とし之れを尊崇す、以て聲聞四方に擧る、眞に宜なりと謂ふべき哉。

氏は福岡縣の人、明治三年九月宗像郡河東村に生る、同二十五年三月、同縣尋常師範學校を卒業、三池銀水高等小學校訓導に任ぜられ、職にあること二ヶ年軍務に服し、後再び三瀬木佐木高等小學校宗像高等小學校訓導に任ぜられ同三十四年四月赤間高等小學校に轉じ、同四十三年現任と爲る、其間勉勵日も之れ足らず、奮勵に努力を重ね、其功績顯著なるの故を以て明治四十五年、特別加俸を以て表彰



さるゝに至れり尙氏は陸軍後備中尉勳六等の位階を有す、氏教育界に於て温良好適の育英家と爲り、軍事上に勇敢拔群の將校たり眞に氏の如きは稀也。

薄氏又青年教育に留意する多大にして、眞面目而も莊重なる人格を有し、困苦缺乏に耐え、進取的氣象を存し、更に質朴にして勤勉なるの士を養成せん事を期し、出來得べきの機を捉へ、出來得べきの方法を講じ以て其啓發を促す、功績大に郡縣より旌表せらるゝ數次蓋し名譽と謂つべし矣。」

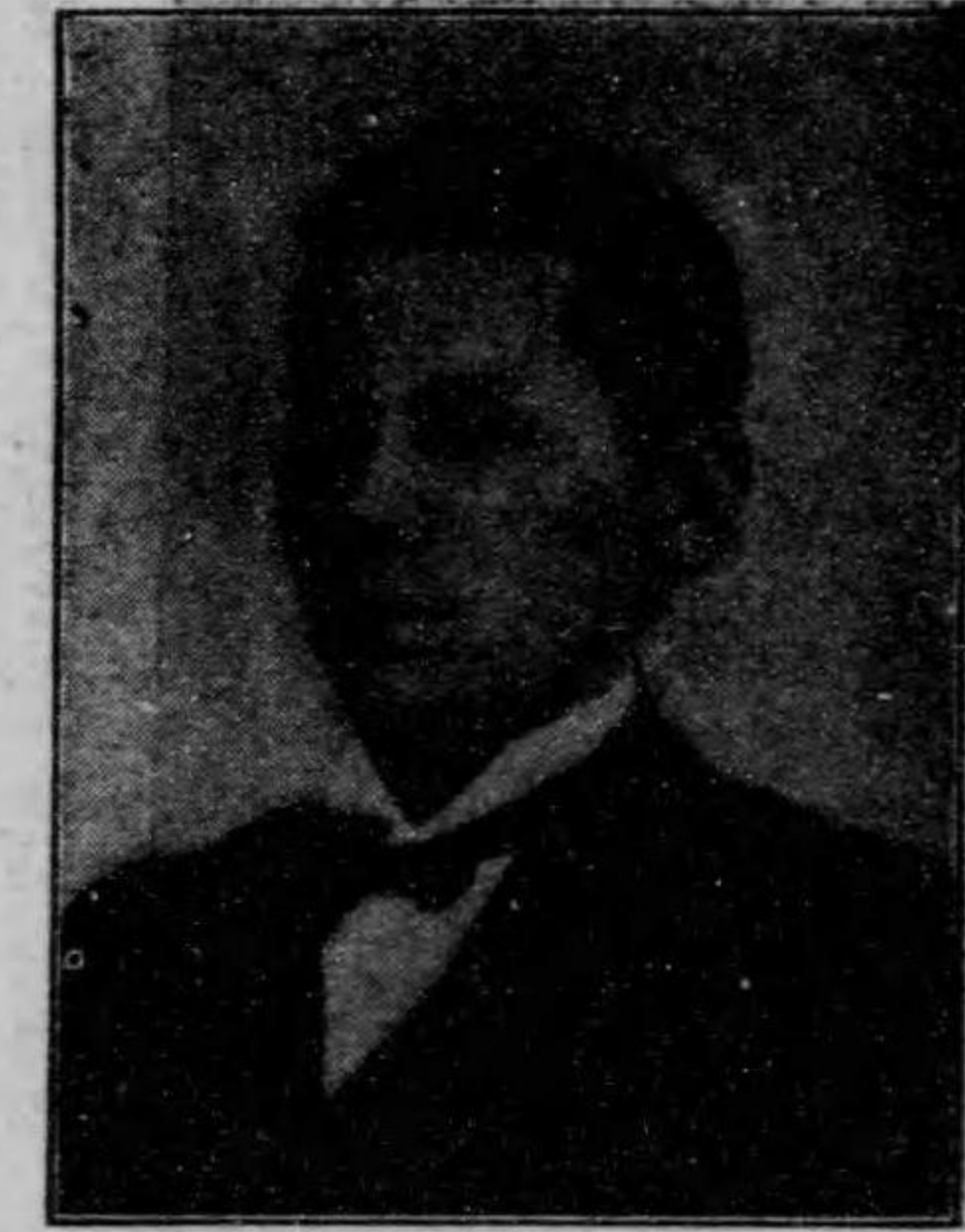
兵庫縣阿萬尋常小學校長  
三原郡 末廣又吉氏

末廣又吉氏

前後二十有餘年間、郡教育に勵精し到る所眞面目の成績を留め、質素堅實は眞に其の服務を終始一貫する所にして、時に質素に過ぐるなきやの嫌なきを保せずと雖も、近時更に圓熟を加へ、益々斯界に欽敬せられ、郡内先輩良教育者として社會の推稱を受くる者、我末廣又吉氏あり。

氏は明治二年阿萬村に生れ、長じて本庄小學校補助教員を奉職し、同廿六年縣師範學校を卒業す

爾來三原郡松帆尋常高等、三原高等、福良高等等の訓導に歴任し、同三十四年病て休職と爲り幾許もなく本庄尋常高等小學校長に就き、後山東、沼島、三原、八木等の校長を経て同四十四年現校長に任ぜらる。



氏は氣風の堅實なるに従ひ教務上に對する研究心強く、算術問題の難澁なるに向つては飽くまで之を解決せん事に苦心す、蓋し又趣味頗る高く、其他國語科の難字句を研鑽し、音樂上理科學等に於ける趣味亦淺からず、隨つて讀書を怠らず絶えず修養に勵む、學校教育の内容は几帳面を以て掩ふ可く家事科の設備亦見る可きものあり、由來氏は質實にして苟も阿らず、懇切温厚なる高潔の士、學童を始め部下職員皆其感化を受け、殊に現任地は郷里なるを以て村民の信頼厚く、又多年の經驗あり、將來の大成就の可きものあり、氏曩に一度他家に行き更に復りて分家し、而も嚴格圓滿の家庭を齊へ、相當恒産を用意し親族郷黨に對しても彼我相互に敬愛を拂ふ、又恩師知友に對する道徳的行爲を實行す、寔に氏は信頼すべき優良なる教育者にして模範的人格者なりとす。」



福岡縣 久留米市 莊島尋常小學校長

### 杉本國太郎氏

暗黒なる一室を出て、赫々たる天日を拜するが如く、風一陣、妖雲を吹き拂つて、明月冲天に皎々たるが如し、之れ杉本國太郎氏の頭腦にして明晰なること眞に驚く可きなり、則ち事を處理整頓するの力強く、秩序宜しきを得て一糸亂れず、而して自ら持する極めて謹嚴、人を容るゝ甚だ寛仁、加ふるに摯實なる天性を以てす、眞に氏の如きは斯界に寥々、晨星も亦替ならざる也。



氏は福岡縣の人、明治元年四月三井村國分村東久留米に生る、明治二十二年八月同縣師範學校を卒業し、爾來現今に至るまで一意小學教育に身を擲ち、未だ嘗て他を見し事あらず、明治三十三年十一月現任校の訓導兼校長に任ぜられ、此一校に勤績實に十有五星霜、鞅掌努力、一日も息む事なし、以て氏の人と爲りを知るべき也。

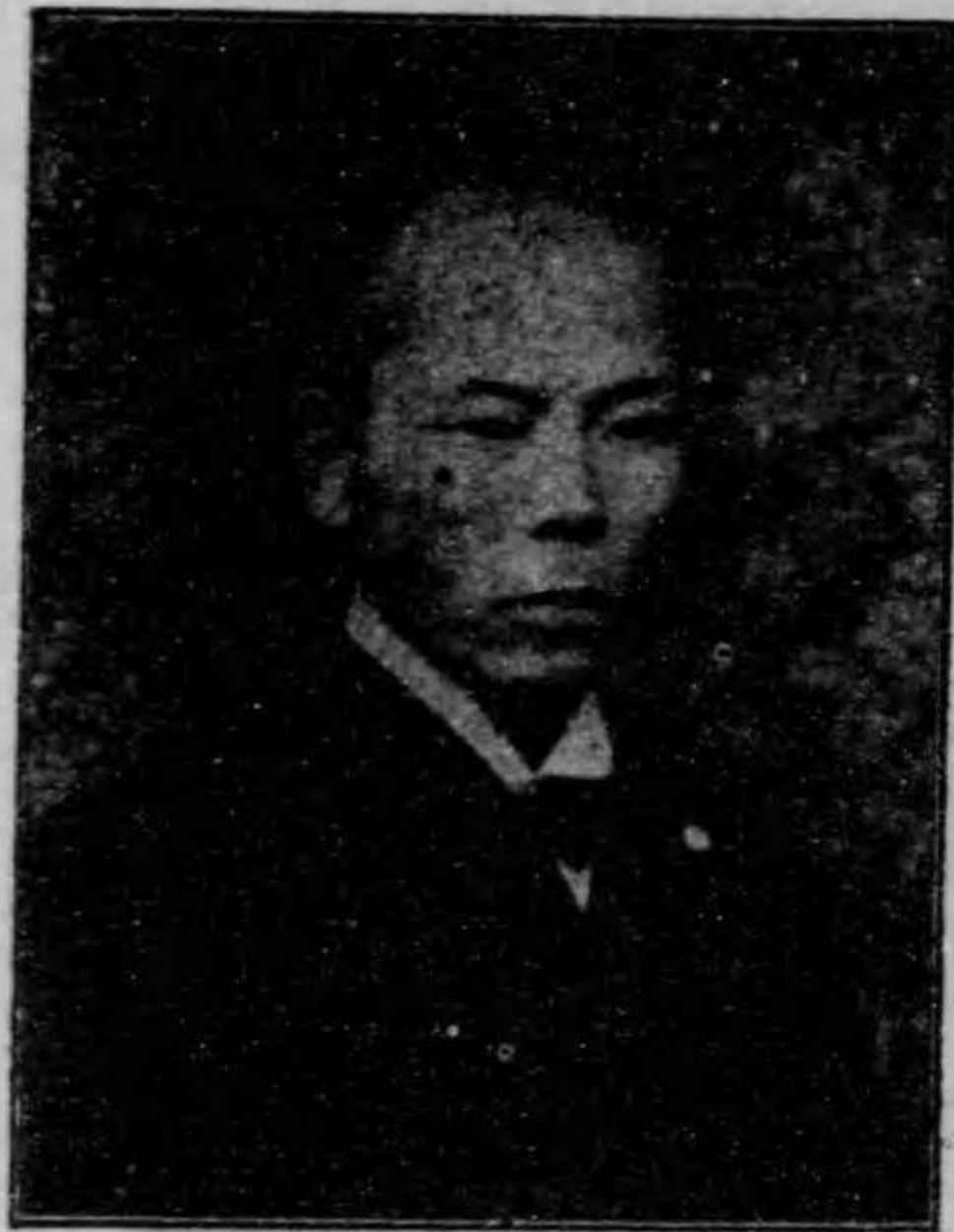
兒童數實に一千名に餘れる、地方稀有の大校に於て、一つの失敗なく、着々として其好果を産む所以、之れ校長杉本氏の非凡なる人格に據るところにして、規律正確、服從整頓の賜ものなり、又其部下職員を統御するの法、最も宜しきを得、所謂圓轉活脫、其長所を採り以て短所を補ひ、各々其個性に恰好せる事務を分擔せしむ、校内不平なく不満なく怡然として其職に勵み、協力一致唇齒相扶け輔車相依るが如し、以て訓練、教授、管理の完成を圖り、時代の要求せる活人物を養成し、國家に必須なる好箇青年の輩出に努む、人情の輕き事、鴻毛尚ほ重く、世道の薄き事紙尙厚き現代に於て如斯謹嚴眞實の士を得たる久留米市教育界又多幸なる哉。』

## 鑑 銘 家 育 教

島根縣 矢上村尋常小學校長

### 諏訪六郎太氏

我民族の國を建つるや祖先崇拜の大義による、家國の體制、忠孝の大本、一に此大義に懸る、而して子孫が父母の慈愛の保護下に崇敬の團結を爲すは、人情の自然に出づる者にして、之を推して父母の父母に溯り、子孫の子孫に及ぶ、諏訪六郎太氏は孝道を完ふせる人、國民の好模範。氏は元治元年五月を以て田所村に生る、純正潔白廉潔にして非凡の才氣あり、徳望高く部下自然に感化せらるゝの美德あり、明治十六年島根縣濱田中學校を出るや大に期する所ありしに、會々家兄の家政を破れるあり、茲に志を翻して教職に就き、給料を捧げて老母奉養の資に提供し、定省怠らざる事二十四年、八十四歳の高齡を以て母の逝ける後始めて一家を樹つ、郷黨歎賞せざるなく、縣下數校の訓導若くは校長に歴任し郡内學校職員會理事長、郡教育會理事、其他公共事業に盡瘁尠からず、明治四十五年を以て本校に轉じ現今に至る。



氏教職に在る事三十有餘年、其間社會の改善進歩に努力多分に、縣下洽く氏を賞揚して措かざる所なり、尙氏の主義方針たるや、至誠以て事に當り、實踐躬行以て指導するに在り、外觀を飾らず歩一步段階的に確實に、且つ實質を主として目的を遂行せんとす、非凡の才氣と卓絶なる徳望を以て部下を統率し、兒童を感化せらる適く所校紀張り肅然たる美風を現出する所以なきに非ず其崇高なる人格は後進の龜鑑たりと謂つ可き哉。』

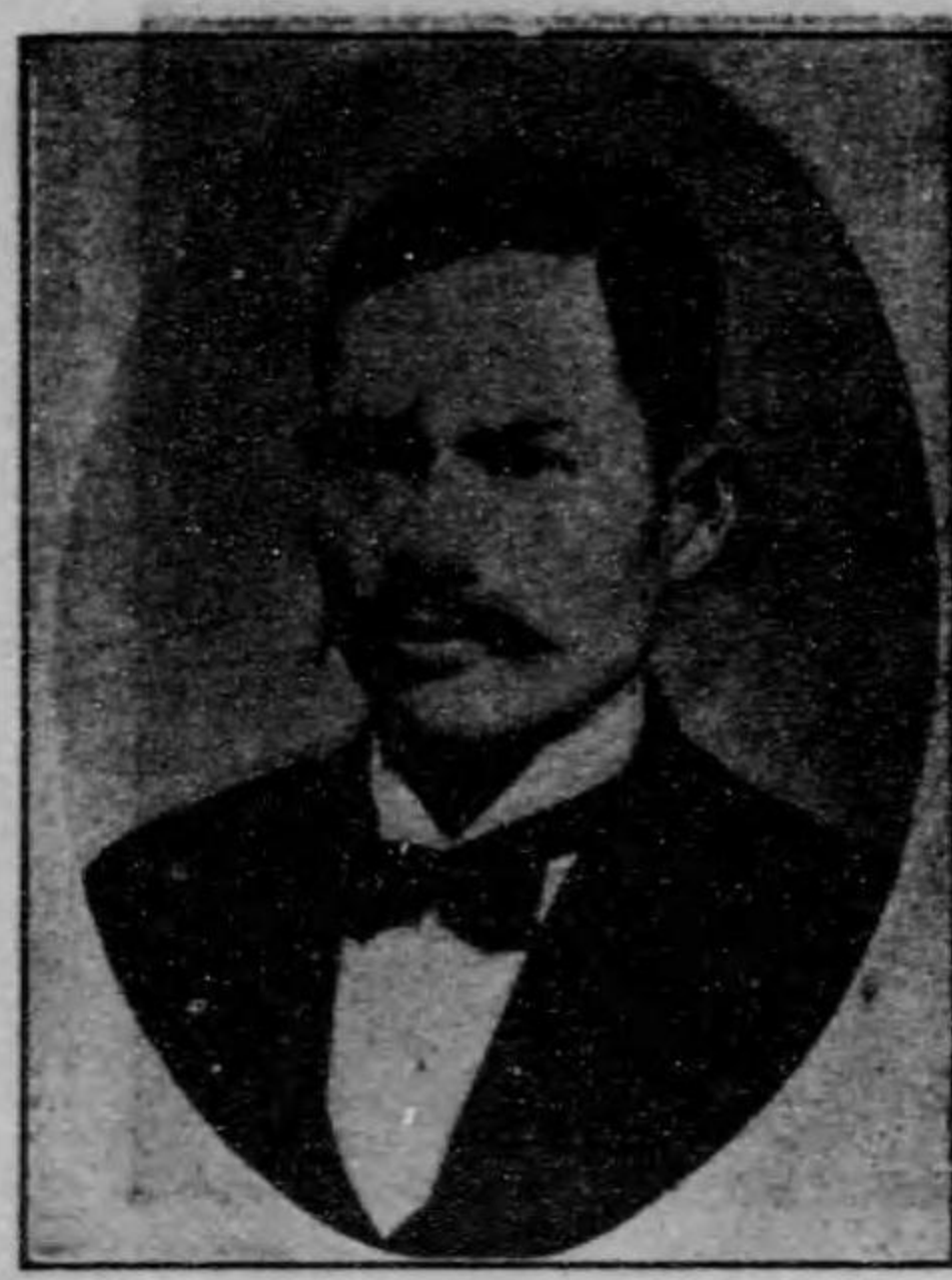
## 鑑 銘 家 育 教



愛知縣 豊橋市 狭間尋常小學校長

杉浦鎮次郎氏

我盛國の歴史を繙く者、確然たる真理の存するを見ん、之れ我國の精神、我國教の淵源、皇祖皇宗の懿徳、綿々たる皇統と共に無窮を語り、忠孝の道義方に此所に胚胎す、忠の興る所、孝の萌す所、一に祖先崇拜に在り、何んぞ好むて歐米の愛を學び、天竺の慈悲を攻むるの要あらんや、愛たり慈悲たり末葉而已、我杉浦氏の期待する主義方針忠孝の真理に在り焉。



氏は明治五年十月を以て本縣碧海郡刈谷町に生る、明治三十七年縣師範學校を卒業し、任を本校訓導に奉じて以來勤績滿二十年孜々育英に従ひ終始一貫能く其職を盡し、教績の隆々たるを見るもの、誰か敬服せざる者あらん、宜なる哉當局者の選奨ある、蓋し名譽なりと謂つ可し。

氏に教授五針あり、教授は目的の徹底を期し實力の増進を旨とすべし、教材の研究を精密にし教授に力あらしむべし、準備を怠らざると同時に結果を苟にすべからず、各科の聯絡を圖り印象を深からしむべし、教調を巧みにして求知心を喚起すべし、更に訓練規程、管理要目十三條を設く、自己は家長職員は家族の觀念を有し、時に議論百出口角泡を飛すとあるも忽にして光風霽月親密一層の度を増し、常に和氣洋々たり、家庭に對しては夫婦相和して家業を勵み、祖先を崇拜して子女教養を忽にすべからざるを説き、青年は次代の相續者たるを自覺し、溢れたる血氣を有用の方向に注がしめんとし、常に我國史に鑑み忠孝を忘る可からざるを訓め、資性溫良才幹を兼ね勤勉家を以て遠近に聲望あり、偉る哉。』

鑑 銘 家 育 教

朝鮮 京城 龍山公立尋常小學校長

鈴木總次郎氏

梅檀は双葉既に芳香馥郁たり、現任京城龍山公立尋常小學校長鈴木總次郎氏の人格に接し、誰か其の芳薰の幼時に表はれたるに感泣せざる者あらんや、人道頹廢し情氣滿々たる現代に氏の如き教育者を推稱し得るは獨り本會の榮譽たる而已ならず、我國の誇り國民の龜鑑たるにあらずや。氏は明治九年六月を以て群馬縣碓氷郡豐岡村の産む所なり、十歳にして父を亡ひ、而かも家頗る窮す、乃ち學を廢めて稼穡に力め、十二歳にして日に十里を遠しとせず青物を鬻ぎ、嘗て晝食を喫したるなく、得る所僅かに三十錢を出てす、以て母に仕へて孝、弟に對して慈、郷黨以て神明の化身と爲し同輩の畏敬する所たりき、十五歳の二月時の縣知事佐藤與三は特に金品を賜ひ、其の善行を表彰したりと云ふ、然るに氏は常に『余は未だ眞に苦しき事を知らず』と、吾人愛に至つて感涙潤袖たり。



資性堅忍勵直、己を責めて人に臨み、溫情鞠すべき能く人情の機微を捉へて部下を啓發す、度量宏寛清濁を抱擁して取捨を誤まらず、常に人格の修養に努め新刊の書冊に親しみ、教育學に至りては造詣最も深く發明する所尠ならず、加かも實地に教授するの妙技は天稟獨特の長所なりと謂ふ可し、氏は明治三十一年群馬縣師範學校の出身にして塚澤小學校長、師範學校訓導を経て、同三十六年釜山小學校に轉じ、同四十四年其校長より移りて現職に就く、諸方の集合地として社會的制裁地を拂ひ、人情紙に比し教化の難甚しきものあり、然れ共氏の熱誠は今や溢れて半島の重鎮たり、嗚呼偉なる哉。』

鑑 銘 家 育 教



鑑銘家育教

ス之部

山口縣太華尋常小學校長  
都濃郡 高等

勳八等 杉村 百家氏

一一六六

春風和らぎ百鳥飛び、百樹萬草今や一時に笑まんとす、然かも個々夫々の特色あるを見ん、百合花にして薫香を散じ、菜花の芬は董花の其れと同じからず、若し夫れ人にして人たるの道を履まず各自其の長所を發揮し、且つ何等かの貢献を社會に致すなくんば、生存の意義遂に莫らん、我杉村百家氏の學徒に臨む、常に此意を以てし、我々奮勵絶えて專日なし、壯なる哉。



氏は山口縣の人、安政六年十二月を以て生る、明治十三年縣師範學校卒業後附屬訓導に任じ、尋て吉敷郡佐山小學校訓導より同校長に進み、大に學校の成績を擧げ、縣より正續文章軌範を賞與せられ、後樺野、黒山兩尋常小學校を経て、同二十六年都濃郡鹿野尋常高等小學校長に榮轉し、能く學校の施設經營を完成し、且つ在職十有七年の久しきに亘り城下の信頼頗る厚く、縣亦三十金を賞與表彰す、同四十三年厚廩を納め、去りて現職に就き、大正三年勳八等に叙せらる、官民の厚遇蓋し大なりとす。

氏は温厚篤實、加ふるに謙讓の徳あり、部下統御の才幹に富み、從て職員能く畏敬して其の職に勵む、兒童能く愛慕して教訓を守り、校紀頗る張り校風大に興る、殊に父兄母姉に接觸して家庭との連絡を圖り、青年處女を指導誘掖して勤儉質素の美風を涵養せしめ、地方民衆を啓發して殖産業の隆昌と風紀改善に意を用ひしむ、其の教育に指染して今日に至る三十有餘年の功勳や蓋し尠からざるあり、當局氏を抽んで、叙勳の恩典に浴せしむる亦偶然にあらざる也、氏夫れ偉なる哉。」

鑑銘家育教

ス之部

德島縣 川田中尋常小學校長  
麻植郡

須那房藏氏

一一六七



資性温厚にして篤實、部下に接すること近親に於ける如く、兒童を導くこと愛兒に對するが如きもの、これを良教育家と謂ふか。否な教育家は、唯だ老牛の犢を舐むるが如き慈愛をのみ満足せずして、大體に通じ將來を洞察し、以て國家に忠良なるべき智徳を注入するに足るべき修養を積まざるべからず。如此良教育を數ふるに當りて、一指を須那房藏氏に届するは、編者の深く光榮とするところなり。

氏は德島縣の人、明治元年八月を以て阿波郡大俣村大字日開谷村に生る。明治二十四年七月同縣師範學校を卒業し阿波郡小學校に在職すること二箇年にして、現任校に轉じ爾來こゝに二十有餘年、終始一の如く勤続し、教授訓練管理のことは云ふを俟たず、校舍校具を整備し、基本財産として十町歩の學校林を造り、學校外に在りては青年の指導及社會教育をつとめ、父兄母姉懇談會、婦人會等を組織して閭里の醇化と家庭の教化とを圖る。同三十五年縣知事より賞金三十圓を受け、大正三年二月再び學校林の造營に對して五十圓を賞與せらる。

時代の經過に養成せる成績は、金錢を以て償ひ難き至寶なり、氏は多年同一校に在職せるを以て部下の職員は、多くその指導感化せる者にして、一校内は恰も一家庭の如く、氏の清廉高潔なる人格と相俟ちて、兒童は勿論地方人心に與ふる化育の力非常なるものあり。若し夫れ教授訓練等の注意周到と研究切磋とに到りては、敢て多言を要せざるなり。」



香川縣宇多津尋常小學校長  
綾歌郡末澤庸太氏

末澤庸太氏

人と爲り穩和恭虔にして敏捷に事を處するや熱誠眞摯遂行せずんば止まざるの氣概を有し、義侠と同情に豊富なるを以て到る所部下職員の悦服、兒童の敬慕兩ながら深く、對應城府を設けず能く人を容るゝを以て所屬民の信賴亦到る所に厚く、唯一郡内に於て其教化治ねきのみならず縣下教育界夙に其令名高く、實績着々として擧る者を香川縣綾歌郡末澤庸太氏其人と爲す。



氏は明治十年四月香川縣綾歌郡端岡村に生る、同三十一年三月其縣師範學校を出て其月綾歌郡國分高等小學校訓導拜命、同三十三年五月同郡坂出高等小學校に轉任、同三十五年六月鄉里端岡尋常小學校は其校長として氏を歓迎す、同三十六年六月其農業補習學校長を兼ね、同四十年六月復國分高等小學校の迎ふ所と爲つて其校長たり、同四十二年二月坂出尋常小學校長其幼稚園長及其商業補習學校長に轉任す、同四十四年十一月遂に綾歌郡視學に榮轉し、専ら郡内教務の刷新に努め功績見るべきものあり、時維れ大正二年八月中其郡内有數校たる現任地に於て校長缺員と爲り後任其人の撰擇中氏拔れて就職せり。氏其郡に生れ其郡教育に従事する前後十有八年、能く郡内事情に精通し且つ多年の經驗を以て稟賦の資性を扶助す、現任就職日尙淺きにも不拘銳鋒已に顯はる偶然ならざるなり、氏能く家庭教育に留意し、爲に家庭と聯絡を圖り種々なる會合を開催し、其青年子女の慣習風儀を改善し、社會教育の改良に努め以て斯業の完美を期す、氏未だ不惑に達せず已に此境に入る、偉なる哉。」

### 教育者の改造附待遇の改善策

教育實成會主幹 齋木織三郎述

#### 第壹章 教育は國家の基礎なり

##### (一) 眞教育と國家の關係

國家は有機的組織なるを以て、其盛衰存亡固より之あるべきものなり、之あるが故に優者は勝ち劣者は負く、變動常ならざるは即ち人生の興味あり、人間活動に興味あり欲望の生ずる所以、是れ希望激湍老の到るを忘るゝ所以なり、茲に欲望生じ希望の發揮するは競争の興起する所以、競争心の興起は以て吾人の活動と爲り身心の強壯と爲る、身心強壯に活動激湍たる者以て競争場裡の優者と爲り勝利者と爲るは自然の理數にして、時の古今洋の東西を論ぜず曾て動すべからざる眞理なり、國家の生存は個人の生存と異なるなく寸時も安泰靜止を得ず、寸時の靜止は忽ち脈絡身心に影響する

教育者の改造附待遇の改善策

生ける國家は  
靜止せず



が如く一步の油断と爲り退歩と爲るのみならず遂に救済し得ざる敗者と爲り終らん。

寸間止むなき競争場裡に立つて優勝者たるを得んと欲せば、先づ其活動をして合理的ならしめざるべからず、而して活動の合理を助長するに道義心の修養なかるべからず、道徳心修養乏しくして科學的知識の發達にのみ重きを置んか、黄金萬能の世と爲り、名利競争の社會と爲るは免るべからざる状態にして、我國今日の状態たり、獨逸は知識萬能を以て誇りと爲し、之に因て以て名利の競争に努力せり、此は獨逸教育の道義的修養を疎んじ、科學的實利主義の教育に重きを置き、是に因て世界を壓倒せんと圖りたるの結果、彼等の向ふ所には猾智あり權謀あり利益あるも、道義人道の更に尊むべきを知る者なく、寧ろ人道を無視し暴虐を以て當然の道と爲す、爲めに世界の嫌厭を招き歐洲大戦争の今日と爲りたる所以なるも、早晚人道の破壊者たる獨逸の敗戦と爲り、以て終局を告ぐる火を見るよりも明かなる事ならん。

百年前エイナの一敗に那翁の大軍伯林に入るや、國土の大半は割讓し一億三千万フランの償金を拂ひ、常備軍の制限を受けたる如き屈辱を蒙りたる、獨逸國民の心裡に潜在せる國民的精神は、勃然發起し來り就中哲學者フイヒテの熱烈なる講演と爲りて、根

柢より獨逸人心を覺醒し、國家統一の基礎を築き建てたり、於是フリードリヒ大王詔を發して曰く、我國家の物質に於て失ひたるる損失は精神に依りて恢復せざるべからずと、大に教育法の改善を圖り以て國民生活を一新し、人間は現時社會の一員として其秩序を愛し、之に服従するを要すると同時に、其の一面心的生活の永久連鎖中の一個體として、一層高尚なる社會秩序に従ふべきものなり、教育は即ち人をして其の生活を神的發現と爲し、之を尊重して神聖なるものに至らしめんを要すと爲す、換言すれば國民生活は神的生活の現實して具體的と爲りたるものと爲し、以て大に精神的教育を獎勵したり、而も千八百七十一年普佛戦争以後に至り、獨逸の教育は益科學的知識の發展に傾き、其國民教育の目的とすべきは第一愛國心の養成にあり、而して此愛國心は知識技藝の發達を圖り、只に自國の膨脹をのみ事と爲す、而も世界の何物たるを顧慮せず、遂にはフイヒテが慷慨演説の精神教育も、唯に國內に於てのみの道徳教と爲り、専ら權謀智略を以て他を擠陥するを能事と爲すに至りたり。

乍併獨逸學校教育は強制的に就學を督促し、貧富貴賤の區別なく同一學校に勉強し、現皇帝の如きもカッセル中學校に於て、一般平民と机を並べ腰掛を同ふして修業せる



が如き、貧賤者は富貴者に鑒みて其修養上益する所少なからざるのみならず、自奮向上の念を起し、自己の實力を以て漸次其位置を昇進せんと努力す、富貴者は亦競争上人後に落ちざるを努むるが故、富貴に免れ難き懶惰遊逸に陥ることを防ぐに至る、如斯獨逸教育法に貴賤貧富の別なきを以て、一般國民は勤勉努力に倦むを知らず舉國健全の氣風と爲る、今日獨逸に有名なる政治家、實業家、教育家、官吏の如き其多くは下層民より出てたり、獨逸の教育が強健なる國民を作り、敵愾心を盛ならしむるに在るは、自然其國をして富國強兵たらしむる所以と爲りたり。

健全なる元氣が健全なる身體に宿るが如く、偉大なる軍國は必ず偉大なる實業國の基礎上に建らる、獨逸の實業近年の著しきは實に驚かざるを得ず、其貿易高合計百億圓以上に達し遠く佛米を凌ぎ英に肉迫し、世界商業國の第二位を占め、其商船總數四千八百餘艘三百廿餘萬噸に及び、工業の發展近年殊に激甚を極め、其化學工業、電氣工業、製鐵製鋼造船業の如き最近十年來に於て實に數倍の盛況と爲り、先進英國をして後へに墮着たらしめ殆んど全世界を驚倒したり、如斯物質的知識的科學萬能の教育は、今や世界を敵對し得る強國とならしむ、獨逸教育法の大に採るべき所のもの少きにあらず、

獨逸科學の進歩

然れども吾人は我國教育法に於て更に大に望む所のものあり。

英國の教育は獨逸と違ひ、私立學校を基礎として發達し、最近三十年來強制的教育を行ひ續々公立學校の設立を見るも、其收容する所は私立學校に入るを得ざる生徒を收容するに止まりて、一種の貧民學校に均しく殊に英國の私立學校は何れも歴史ある學校にて、校舎の設備器具器械の完全に且つ贅澤なるを以て、一種の富豪學校と爲り、其人間を作るに於ても紳士の態度と人格の養成に重きを置き、敬虔心の涵養は最も其主力を注ぐ所にして、人間心中の現存を認め、放任して其責任を自覺せしめ、自然に自我實現の至境に達するものと爲す、其結果は高尚にして沈着、強健にして常識に富む人格者を作らんとす。

英國教育が生徒本位にして、餘りに嚴格秩序を強制せず、英人獨逸の教育を視察して曰く獨逸の教育は全々スバルタ式に學校は兵營の如しと非難す、而して英國の教育は上品に過ぎて實用に疎く、所謂實際的生活に對する適合と云ふべき點に於て遺憾なき能はず、其貧困子女も紳士淑女に似せんとする教育法にして、其弊害たる田舎の子弟が其學校を卒業するや、忽ち都會に移らんとする傾向あるは、我國教育法の現在と同

英國教育の長所

英國教育は上品に過ぎ



一にして、大に注意せずんばあるべからざるなり。

以上現時世界に冠たる英獨兩國教育に於ては、何れも其長所少なからず大に採るべき所あり、以て其長を採り短を退くるに努めざるべからず、而して之に加ふるに我國固有の精神、教育即ち大和魂の修養に於て完全するを得ば、其他は自然の革正と爲り各種腐敗を防止し得るを以て、此際我國教育方針を根帯より革新し、大に神聖的精神教育の實行を促進せずんばあるべからず、即ち從來の虚榮的教育方針を根絶せしめ、實際的に教育者をして其神聖的超越的模範を實踐躬行せしめざるべからず、教育者の人格を高尙ならしめ、以て世人を感化し得るの力を有せしめざるべからず、知識技藝は固より必要なるも道義的精神の基礎立つて後施すべきものを知らしむるを要す、心的修養なく専ら學術技藝を修得せん歟、是れ危険の甚きもの、如斯人類を有する國家は即ち亡國のみ、英獨兩國教育の長を採り、之に我國固有の精神教育を加へたる眞善完美の教育行はるゝ時は、國家の永遠に發展するは論を俟たざる也、發展振興の力を有する我國特殊的精神の修養完全を圖るは、目下の急務にして寸時の閑漫を許さず、教育の盛衰を來たすは國家の責任たりと雖も、國家の盛衰は一に繫つて教育の如何にあるや論なきのみ。

英獨教育の長を採り其短を補ふに我國固有の心的教育を加ふ

きのみ。

## (二) 精神教育と實業の關係

我國實業の發展は遅々として振はず、其原因固より資力の乏しきが爲めなるは云ふまでもなき事なりと雖も、要は實業家に道義心缺乏して一時の利益を獲得せんと欲し又は其眼界狭く自己の取引は其影響自己一人に止り、他に及ぶものにあらずとの眼界よりして、不正品の製造と爲り商取引と爲る、折角苦辛慘憺を嘗め漸く得たる取引先を、一朝不正品の製造又は取引の爲め水泡に附するは勿論、之が害を蒙りたる者は永遠の斷絶と爲るのみならず、忽ち幾百幾千の吹聴と爲るを知らず、之が爲め我が生産品の輸出は常に輸入の壓倒する所と爲る、さなきだに資力の乏しき正貨は常に流出して事業の不振愈々激しく、得意先は之を求むるが爲めに消費せる、其費を取り戻さざるに失墜又は失敗し、製作品は堆積して事業の手控へと爲り、失職者の多數を來し、不景氣は益激甚を極むるに至る。

結局一時的欲望に驅られ、自己眼前の小利に甘じ、將來永遠の大利を知らざる所爲に

道義乏しき實業家の結果



して、社會の如何と國家の利害を顧慮せず、以上の如きを爲す所以のもの、要する我實業教育の不完全に歸着するより外あらざるなり、古來我國商業取引の弊として掛引なるものあり、其秘密を守るの商略上、大體虚言を以て之を爲すを常とせり、如何なる粗製品又は偽物なりと雖も、之を正直に語る者なく之を以て精製品なりと本正物なりと、其言色眞面目に主張する場合のありたる悪弊は、自然と其一時の苦辛を忍び、何とかして取引の済む事のみを努むるに至りたり、殊に我國工業製作事業の幼稚なるより、其物品の一定せざるは品質のみならず、其形態に於ても千差萬別なる其物品に依り、人々の手工に得たるの止むを得ざる現状なるを以て、之を取引する商人も亦た其貿易上に於て掛引一片を以て、取引を結了し將來の如何を顧慮するに暇あるなし、今尙我が貿易商の多くは、之を巧みに爲すを敏腕家として賞讃せらる、換言すれば巧みに瞞着を爲し遂げたる者を好商人と稱するも、未だ將來に眞正確的取引を爲す商業家少きは、眞に遺憾の至りならずや。

今や世界に冠たる英獨二國の工業作製品の如きは、何れも大工場に於て器械機關の製作に成れるを以て、寧ろ其工銀は廉に作製品は一定不變に、且つ出品物は充分責任あ

る大會社の商標を附せるを以て、其商取引に於て別に掛引を必要とせざるは勿論、見本と異なるが如き物品なき故、一度び得たる信用は之を失墜する場合あることなく、常に發展するのみにして其販路の縮少する時あることなし、彼等の商取引は別に其賣込上權謀術數を用ゆるを要せず、掛引の心配もなく、自然得意の増加一方と爲り、商取引の盛大と爲るのみ、工業の繁榮は直に商取引の圓滿となる如斯、實業國として誇るに至るも理なきにあらざるなり。

我國實業は今尙過渡時代にして其發展遅々振はざる其因種々あり、改善すべき要點多々あるの時に當り、彼等と競争奮闘するの勞や大なるも效果の舉る小なるのみならず、失敗に終る者亦尠からざるを顧ふ時は、轉た寒心に耐へざる所以、我實業界の苦辛や今の時より甚きはあるなし、彼等の如く雄大なる工場設立より、大多數なる一定式の物品を製作する其法難事にあらずと雖も、偉大なる富力のあるに非ざれば爲す能はず、是れ即ち競争力の缺損する所以にして、近き將來には之に必勝を期し難からん、然らば止むを得ずとして現状に放棄し置んか、之れ又忍びざるの事態なり、故に益々之に刷新を加へ改良を施し、以て可成出品物の確實に一定式に、而して各製作場は物品



我國實業家の  
人格修養を怠  
るべからず

教育者の改造附待遇の改善策

一一七八

其物の上に確實責任を有し、以て其取引上苟も虚言の掛引等を爲す事なく、各實業家は自己の人格を修養し、鞏固なる意思を以て苟も良心に耻ぢざる行動を爲すに熱注するが如く、人物改造即ち精神的な人格者の實業界に輩出する事を焦眉の急務とせざるべからず、而して尙競争上物質的損失を補ひ、更に彼等の右に出んとせば、即ち大和魂の存在を以て當らざるべからず、是れ我實業界の精神教育を必要とせる所以なりと同時に、我が精神教育の効果を爰に望まざるべからず、吾人は實業教育にのみ之を望むにあらざして、普通教育に於て特に實業家の修養上精神教育を鼓吹するに努めんことを望むや切に、而して神聖なる實業發展は、神聖なる國家なれば也。

## 第二章 人間は教育力の結晶なり

### (一) 時代と精神

我邦人は古來固有に特殊的精神ありて、世界萬國に誇示する所以なり、此精神は以て世界列強の修養する能はざる所、因て以て古來外國戦争に必勝を期するが如き、士氣

我國人は精神  
修養を以て冠  
たるべし

と爲り勇敢と爲る、而して我國力の唯に東洋に覇たるのみならず、引ては歐米諸州の畏怖する所と爲る、殊に今回歐洲戦争に際し、更に一層の精神國たる事を認められたるにあらずや、而かも近時歐米の文明を吸収するに當り、科學的智識の發展に伴ひ人情愈々稀薄に黄金萬能の社會に傾んとす、其の裏面には武士道の衰頽を來し、精神修養の疎漫と爲りたる、百般の事實に於て證明を與へらる、然りと雖も今尙ほ邦人の精神鞏固は世界の認識するところにして、現に歐洲聯合國の我出兵を望むと同時に獨塊の畏怖する所たるは正に其の事實を示すに足る。

衣食足つて禮節を知るは古人の金言なりと雖も、剩餘ある財力と刺激なき人間に修養力の乏しきは古今同一たり、我國如何に殖産興業の振張に商取引の發展に苦辛するも、債務國の哀しさ經濟財政の貧弱殆ど救ふべからざる時に當り、外患更に重きを加ふる艱難は、爾を玉にする今の時なるを以て、任を教育に負ふ者須らく此時を利用し、之が救済策を講ぜざるべからず、科學的智識の補習たり經濟的に節儉力行を奨勵するは固よりなるも、是等發展術のみにて、到底近き將來に於て彼等と對抗する能はざるや明なり、唯り大に彼等に勝ち得る有力なるものあり、何ぞや精神即大和魂是なり、而し

今の時は精神

教育者の改造附待遇の改善策

一一七九



て之が修養は今の時を以て最も好機と爲す、此精神今や頗る雲りたるも、之を補習するは固性に從つて之を爲すのみならず、多方面の刺激今日の如き甚しき際に際し、以て之を施す時は其力少くして、其効果の顯著なる所以必然なればなり。

### (二) 精神と人格

近來到る所に人格説盛に、而も人格とは如何なる者歟殆ど何れの人の應對にも、稍もすれば人格云云の話題に上らざるはなし、人格の流行又盛なりと謂つべし、然れども若し精神的修養なく知識技藝の人多き現世に於て、人格者を論ずる或は其「スタイル」装麗なるを見て以て誤認する者なきにあらず、是等を以て人格者と云んか、都人士の多くは皆人格者にして、神聖なる労働者少資業者又は田舎人の如きは人格者に非ずと云はざるべからず、人あり名譽者政治家とならんと欲し、叩頭百拜戸別の訪問を耻ともせず、以て自己の推選を乞ひ、或は自稱紳士の揚々たるが如きは人格者にあらず、位は王侯を凌ぐ大官も賄賂を以て邸宅を宏壯ならしめ、出づるに車馬の塵埃以て行人を煩ませ、入つては僕婢に贅を盡す不義の富豪は人格者にあらずなり。

人格は美装者に少し

艱難苦辛と清  
廉朴野は人格  
之に與す

由來神聖の人格者の實現は、富貴と奢侈と遊惰放逸に伍せず與せず、専ら清貧者を友とし能く艱苦を忍ぶ人にして、最も能く労働を努むる人に與みし存するが故に、人格者の多くは美装の人に少なく、朴野の人一見愚なるが如き人に多きは疑ふべからざる事實枚擧に遑まらざるなり、換言すれば如何に學識高く技能精巧なりと雖も、精神なく節操なき人は人格者にあらずなり、此は只教育力の如何にあるのみ。

## 第參章 教育者は須らく神聖なるべし

### (一) 教育者と常識

教育者の科學的智識を要するや論を俟たずと雖も、諸種の科學に造詣深く研究するは到底爲し能はざる事にして、普通教育的學校の教育者は凡て斯の如き深遠なる學識を要せず、寧ろ教育上其害あるも益する所少きを知る、殊に中小學校に於ける一般教育者に於ては固より常識の圓滿に發達し具備せる人にして、其人格神聖的に模範的に感化力を有する者たるべく、教育者は常識の發達普通人に數歩を進まざるべからず、

學理深遠なる  
博士學者は教  
育者にあらず



教育者は凡ての方法に於て普遍的ならざるべからず、一方に造詣深き學者は結局圓滿に常識の發達を缺きたる人にして、教育者たる資格を缺くものなり。

古來凡ての博士を研究するに、其識見偏重にして普遍的ならず、寧ろ現實社會に普通の知識即ち常識に乏しく、單に其自己の嗜好せる學科にのみ深遠なるが故に、多くの博士は教育者たるの價值あるなし、一二の科學に蘊奥を極めたる博士學者も、世に必要なを以て尊敬すべきは固よりなりと雖も、而も圓滿なる常識を普遍的に發展せしめ、以て神聖的典型的教育者の尊敬すべきに比すべくもあらず、然るを世人の多くは奇を好むが爲め歟、學者博士の待遇教育者以上にあるは、過誤も亦甚だしと謂つべし、要するに教育者は一二の科學に深遠なるを要せず、圓滿に常識の發展具備せると同時に典型的な人格者たらざるべからざるなり。

特殊の學問あり技藝ある者は、何れも自己の嗜好に因て研究を盡し以て辛苦を嘗めたるものにして、不知不識の間に其性僻を帯びたる者なり、此の人一朝教壇の人と爲るや、自己の嗜好を他に振舞ふの嫌あるは當然の結果にして敢て怪しむに足らず、古來教授に巧みなる博士學者あるを聞かず、寧ろ深遠なる智識と幽邃なる學問とは、多く

教育者は人格と常識と尙ぶ

特殊の學者は自己の嗜好を振舞ふ

は生徒の腦裡を圖らずして注入的と爲り、以つて學徒の頭腦を五里夢中に迷はしむるに至る。

希くは後來博士學者の教壇に立ち教育者たらんと欲する者は、須らく更に師範學校に入學し、他の生徒と共に教授術の研究を爲し、之を實地に應用し得る者にあらざれば、教師たり講師たるの資格なき者と爲す事を。

## (二) 教育者と感化力

教育者は學者にあらず技術家にあらず、苟も名利を銜ふて權謀術數を用ふる事なく、終始一貫超然たる理想を腹藏し、以て俗界を教化し感化し進化しつゝある典型的人格者たらざるべからざるは前項已に之に述べたり、換言すれば感化力は教育者の本性なるが故に教育者にして感化力なき者は、佛造つて魂の入らぬと異なる事なく、如何に巧みの教授術も常識圓滿の發達も何の利益なく、却て弊害多かるべし、教育家たる者大に反省せずんばあるべからざるなり。

教育者は感化力なかるべからず